

千年の祈り

ドラ麦茶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

眞魚教の求導女・八尾比沙子。

不死の呪いを受けた彼女は、長きに渡り、信者たちを見守って来た。千年以上に犯した罪を償うために。

だが、千年の時の流れは、彼女から多くの記憶を奪ってしまった。生きている理由も、しなければならぬことも、自分が不死であることも、犯した罪さえも忘れてしまった彼女。本当の名前すら、もう思い出せない。

これは、千年の時の狭間に消えた、不死なる女の『記憶』の物語。
(SIREN小説アフターストーリー番外編)

☆

八尾比沙子の過去の物語です。

『SIREN (サイレン) / 小説』の後、および、『SIREN (サイレン) / 小説 / 終章』の前に読まれることをオススメします。

目次

老人と少年	1
禁教令	9
まな板の上の赤子	32
月下奇人	38
水蛭子神社縁起	43
夢みる少女	49
神の花嫁	65
枇杷の樹	70
幻視	76
海送り・海還り	87
猟師	92
重圧	129
傀儡	151
飢饉	173
ヨネ爺さんの見回り	185
羽生蛇村民話集	193
マナ字架	213
屍人兵量産化計画	219
花嫁のピアノ	228
永遠の生	237

老人と少年

その老人は、いつも、丘から村を眺めていた。

長年、村で米農家を営んで来た老人だった。刈割の丘の中腹に田んぼを持っており、春になると土を耕して水を引き、夏の初めに苗を植え、秋になったら収穫する——そんな生活を、何十年も続けてきた。九十歳を越えた今でも、毎日、仕事に励んでいる。そして、夕方に仕事を終えると、田んぼの近くにある原っぱに腰掛ける。そこで、陽が山の陰に隠れるまでの時間、丘の下に広がる景色を眺めるのを日課にしていた。

村人のほとんどがそうであるように、その老人も、眞魚教の信者だった。田んぼのそばには、木の板を組んで作った眞魚教のシンボル・マナ字架が立てられてある。仕事を始める前、今日も一日無事に過ごせるようにと祈り、仕事を終えた後、何事もなく無事に過ごせたことを神に感謝する。それもまた、老人の日課だった。

「本当なら、毎日教会まで通いたいのですが、最近、足腰がめつきり弱ってきましての。申し訳ないことです」

老人は、皺だらけの顔をほころばせながら言った。夕方、いつものように原っぱにたたずんでいたところを、通りかかった比沙子が声をかけたのだ。

「そんなことないですよ。毎日お祈りを捧げるだけで、十分です」

比沙子は笑顔で言った。教会は、この丘の上にある。車で通えるような道はなく、舗装さえされていない細い山道や石造りの階段を上らなければならない。九十を越える老人が毎日通うのは無理というものだ。それでも老人は、週に一度の集会には、必ず顔を出してくれる。「それに——」と、比沙子は続ける。「まだまだお元氣じゃないですか。今日も、お仕事をされたんでしょう?」

比沙子は原っぱのそばの田んぼを見た。季節は春。田んぼに水を張るために、土を耕す時期である。冬を越えて硬くなった田んぼの土は、もう半分ほどが掘り起こされていた。耕運機を使うとは言え、決して楽な作業ではない。高齢化が進むこの村でも、九十歳を過ぎても

農業を続けているのは彼だけだった。

「まあ、米作りだけが私の生きがいですからのう」老人は、照れくさそうに笑う。「身体が動く間は、続けるつもりです」

「でも、無理はなさらないでくださいね。お仕事は大切ですが、それで身体を壊されては、意味が無いですから」

「田んぼで死ぬるなら本望ですわい。こんなじじい一人死んだところで、悲しむ人もおりませんしの」冗談とも本音ともとれることを言い、老人はまた笑った。

老人は、丘のふもとにある小さな家に一人で暮らしている。家族はいない。かつては北の田堀地区に息子夫婦と幼い孫が住んでいたが、二十七年前、村を襲った大規模な土砂災害に巻き込まれて亡くなった。長年連れ添った妻も、もう十年以上前に天寿を全うした。他に頼れるような身内もない。老人はそのことを、「老いても誰に迷惑をかけることも無いので、気が楽です」と笑って言うが、この歳で身寄りがないのは寂しいことだろう。

「あの世で家内や息子夫婦が待っているかもしれないですから、早く行ってあげねばとは思うのですがの」また、冗談とも本気ともとれるようなことを言う。

「そんなことおっしゃらず、長生きしてください。おじいさんがいなくなったら、寂しがる人はたくさんいますよ」
「そうじゃとええが」

村の米農家で最高齢の老人は、みんなから一目置かれる存在だった。米作りで困ったことがあれば、まずこの老人に相談し、老人は長く培った知識での確な助言を与える。近年の村の米作りは、この老人が支えていたと言っても過言ではない。

西の山の頂に陽がかかり始めた。山間にあるこの羽生蛇村は、陽が暮れるのが早い。この辺りの地域は街灯もまばらで、夜は足元さえ見えなほど真っ暗になる。

「——さて、暗くなる前に帰りますかの」老人はズボンに付いた土埃を払いながら立ち上がった。

「はい。どうか、お気をつけて」

「求導女様も、お気をつけてお帰り下さい」

深く頭を下げ、農道を下りて行く老人。待つ者のいない家へと向かう老人の背中、どこか小さく見えた。

ある日の夕方。田んぼのそばを通りかかった比沙子は、老人の隣に少年が座っているのを見た。確か、下粗戸に住んでいる少年で、この春から小学校に通い始めたはずだ。

老人と少年は、二人で村を眺めている。

「こんにちは。今日は、お連れさんがいるんですね」比沙子は声をかけた。

「ええ、そうなんですよ」老人は笑いながら答える。「わしが毎日ここに座っているのを、学校帰りにいつも見ていたそうです」

「うん。おじいさんが毎日なにをしてくるのか、気になって」少年は、子供特有の好奇心に満ちた目を輝かせる。

「何をしているという訳でもない。ただ、村を眺めているだけじゃ」老人は、眼下に広がる景色を見つめながら言った。

「ふうん」

少年も景色を見る。なだらかな丘の斜面を下るように棚田が広がり、その中央に、水を引くための用水路が流れている。その向こうには、村の中で最も建物が密集した荒戸地区の商店街や住宅街、そして、村の中央を流れる真魚川も見えた。

少年は、再び老人を見た。「でも、おじいさんは、毎日ここにいるよね?」

「ああ、そうじゃな。毎日、ここから村を眺めているよ」

「飽きないの?」

少年は悪意のない顔で訊いた。純粹に、疑問に思ったのだろう。

ここから見える景色は綺麗だ——初めて村を訪れ、この場所からの眺めを見た人は、きつとそう思うだろう。人によつては、感動さえするかもしれない。

だが、どんなに綺麗な景色も、いつも眺めていけば慣れてくる。感動も薄れていく。それは当然のことだった。まして少年は、この村で生まれ、育った。少年にとつては見慣れたいつもの景色であり、そこに価値を見出せないのも無理は無い。

老人は、ほっほっほと笑い、そして続けた。「飽きることはないさ。ここから見る景色は、いつも違って見えるからの」

「そうなの？」

「そうじゃとも。例えばの——」老人は、用水路のそばの道を指さした。道端に、軽トラックが止められてある。「あの車は、昨日は停まっていなかった。誰の車かは、ここからでは判らんが、まあ、村の誰かのものだろう。家から運んで来た苗を、田んぼに植えているのかもしれない。そういう時期じゃからの」

「うん」

その軽トラックの横を、赤いランドセルを背負った女の子が通った。

老人は、その女の子を指さした。「あの子は毎日川沿いの道を通って家に帰るが、今日はなにやら楽しげな顔をしておる。学校で、いいことがあったのかもしれないのう」

「えー？ そんなこと、ここから見て判るの？」

「判るんじやよ——と、言いたいところじゃが、本当にいいことがあったのかは、訊いてみないと判らん」

老人は、愉快そうに笑う。

「まあ、そういうことを考えながら見ていれば、飽きることはないのう」

「ふーん」

少年はよく判らないような表情で頷いた。

「ボウズには、ちよつと難しい話かもしれんの」老人は少年の頭を撫でた。

老人が仕事終わりにこの場所から村を眺めはじめたのは十年前——長年連れ添った妻が他界した頃だったと、比沙子は記憶している。それまでは、仕事を終わるとすぐに家に帰っていた。それはつまり、

老人もこの景色に価値を見出すまでに、それだけの時間がかかったということでもある。

西の山の頂に陽がかかる。もうすぐ、陽が暮れる。

「さて、そろそろ帰るとするかの。ボウズも、暗くなる前に帰った方が良いぞ？」

少年は「はい」と手を挙げて応えると、走って農道を下りて行った。

それから夕方になると、老人と少年が二人で村を眺めているのを、よく見かけるようになった。

老人は仕事終わりに、少年は学校の帰り道に、原っぱに座り、村を眺める

老人は、「今日はあの田んぼに苗が植えられた」とか、「今日は真魚川の水の量が多いのう」とか、普段と違うところを見つけては少年に説明し、「そういった小さな変化が積み重なって、村は、少しずつ変わっていくのじゃよ」と、言った。

少年は、「うーん」と唸って、首を傾けた。あまりピンと来ていない様子だ。やはり、少年には難しい話だろう。

ただ、老人と話をする少年は、いつも楽しげだった。

それから、老人と少年は、二人で原っぱに座っていることが多かった。その度に比沙子は、ほほえましい思いで見えていたのだが。

夏のある日、比沙子は、老人が田んぼで倒れているのを見つけた。すぐに医者を呼んだが、すでにこと切れていた。夏の強い日差しにやられたのだろう、と、医者は言った。

老人には身寄りがいなかった為、葬儀は比沙子が中心になって行った。小さな葬儀だったが、それでも、農家仲間や近隣の住人が多く集まり、在りし日の彼をしのんだ。

その中には、あの少年の姿もあった。

棺の中で眠る老人の姿を、少年は不思議そうに見つめていた。『死』

というものの意味を理解するには、まだ早いのかもしれない。

棺が墓地に運ばれ、土に埋められるまで、少年の表情は変わらなかった。

葬儀から数日後、比沙子は、田んぼのそばの原っぱに、あの少年が一人で座っているのを見つけた。「こんにちは」と、声をかけると、少年は、少しさみしそうな声で、「こんにちは」と返事をした。

「おじいさんのことを、考えていたの？」比沙子は、少年に訊いてみた。少年は「うん」と、頷いた後、「みんな、おじいさんは死んだ、っていうけど、死ぬってどういうことなのか、よく判らなくて」と、言った。

「……そう」

「きゆうどうめさま。おじいさんは、どこに行つたの？」

いつものように、純粹に疑問に思ったことを訊く。

比沙子は、少年の問いに、とつさに答えることができなかつた。眞魚教の教えでは、死者は、常世と呼ばれる神の世界に旅立つとされている。そこは、あらゆる苦しみから解放された理想郷であり、神に祝福された者だけが行くことができるのだ。

少年の両親も眞魚教の信者であり、求導女としては、この話をするのが正しいのかもしれない。

だが、今の少年に、この話はひどく似つかわしくないように思えた。だから。

「——おじいさんは、遠いお空の上に行つたの」

そう教えてあげた。

「空の上？」

「ええ。そこから、いつも村を見ているわ」

「僕のことも？」

「ええ」

「ふうん」

少年は、空を見上げる。雲ひとつ無い、一面青の世界が、どこまでも続いている。

「そうかあ、お空の上にいるんだ」

少年は、納得したように——そして、すごく嬉しそうな顔で、いつまでも空を見上げていた。

「——でも、きゆうどうめさま」

しばらく空を見上げていた少年は、ふと思い出したような顔で、比沙子を見る。

「なに？」

「もう、おじいちゃんは、この広場に座ってることはないんだね」
「そうね」

「……さみしいね」

「ええ……さみしいわね」

少年の瞳から、涙がひとしずくこぼれ落ちた。

比沙子は、そっと、少年を抱きしめた。

☆

少年が帰った後も、比沙子は広場にたたずんでいた。

丘の下に広がる村を眺める。

老人が見ていた村の景色は、毎日変わっていた。

少年が見る村の景色は、老人の死をきっかけに、大きく変わった。

しかし、比沙子が見る村の景色は——何も変わらない。

それは昨日と同じ景色であり、一週間前も、一ヶ月前も、一年前も、十年前も、百年前も、千年前も、同じ景色だった。

——あたしが見るこの景色は、いつか変わるのだろうか。
判らない。

だが、いつか変わると信じて。

比沙子は、生きていくしかない。

たとえそれが、千年先であつても。

たとえそれが、永久に変わることがなくても。

西の山の頂に陽がかかる。もうすぐ、陽が暮れる。

今夜、村は、『神』を迎える。

禁教令

羽生蛇村は、幕府が放った軍隊に包囲されていた。

慶長十七年に布告された『禁教令』により、南蛮の国から伝わった宗教を信仰することは禁じられた。当初は布教の禁止や教会の取り壊し、外国人宣教師の国外退去、改宗命令に応じない者を投獄する程度のもので、信者を処刑することは極めてまれであった。しかし昨年、肥前国島原ひぜんのくににて起こった農民信者の一揆をきっかけに状況は一変。幕府は南蛮国の宗教を邪宗門じやしゅうもんと呼び、治安維持の名目のもと信者へ厳しい処罰を課すようになった。処罰を恐れた信者は信仰心を秘めるようになったが、幕府軍は信者の搜索を徹底的に行った。全ての民に神を描いた絵を踏ませ、密告者には高い報奨金を出し、そして、疑わしき者は容赦なく拷問にかけた。禁教令は、今や国を挙げた南蛮宗教への大弾圧と発展していた。

羽生蛇村で信仰されている眞魚教は、幕府の言う邪宗門ではない。日本に南蛮国の宗教が伝わるよりもはるか昔に、この村で生まれた土俗宗教だ。しかし、江戸に幕府が開かれる以前、全国的に布教が広まった南蛮宗教の要素を取り入れることにより、眞魚教は南蛮宗教と酷似するものとなっていた。寺院を教会、布教を勧める者を求導師・求導女と呼び、信仰の象徴として『マナ字架』を掲げる宗教を、幕府が邪宗門と認めるのも無理はなかった。

幕府軍は邪宗門の信者を投獄・処刑するよりも、捕えて棄教を促すことを目的としていた。棄教——すなわち、信仰を放棄させようというのであるが、その手段として用いられたのは拷問である。幕府軍は村人が逃げられないよう村を完全に包囲すると、村人を捕まえては過酷な拷問を課し、棄教を迫った。村人は信仰心の篤あつい者ばかりであったため、簡単には棄教を認めなかった。故に、拷問は苛烈をきわめた。鞭打ち、石抱き、水責めなどはもちろん、それらよりもはるかに苦しい拷問も行われた。多くの村人は苦痛に耐えられず棄教を認めしたが、抵抗を続け、繰り返し返される拷問の果てに命を落とす者も少なくはなかった。また、棄教を認め解放された者も、拷問による怪我が原因で

数日以内に死亡することも多かつた。

眞魚教の総本山である不入谷教会には、酷い怪我を負った村人が、連日のように運び込まれてくる。

眞魚教の求導女・久と、村でただ一人医術の心得がある四郎は、次々と運び込まれる怪我人の治療に追われていた。

「……酷いものですね。なにも、ここまでしなくてもよいものを」

四郎は村人の腕の傷に包帯を巻きながら、独り言のように言った。繰り返された鞭打ちによる傷は、皮膚を裂き、肉を削ぎ、骨まで達している。それでも、この村人の状態は良い方だ。鋸引きにより腕を失った者もいる。逆さづりの果てに血管が裂けてしまった者もいる。傷口に塩を塗りこまれ、あまりの痛みに発狂してしまった者もいる。教会の礼拝堂には、そういった患者が筵むしろの上に何十人も横になり、苦しそうにうめき声をあげていた。

「信者の皆さんには、棄教を迫られたらすぐ認めるようにと言っているのですが……」四郎の治療を手伝いながら、久は言った。「このような状況ですから、信仰を捨てても、神は許して下さると」

それでも、村人はなかなか棄教を認めようとしなかった。そんなことをしたら、たとえ神が許しても自分自身が許せない、と言うのだ。

包帯を巻き終えた四郎は、次の患者の治療へ移った。「信仰心が篤いのは、それだけこの村の神の教えが素晴らしいということなのでしょうが……医者としては、命を危険に晒してまで信仰を持ち続けることを、美德とは思えません」

そう言った後、四郎はすまなさそうな顔をし、「求導女の久さんの前でこんなことを言うのは、申し訳ないのですが……」と、付け加えた。久は首を振った。「いえ、あたしも、同じ思いです。信仰を捨てるのは、信者の皆さんには、つらく、苦しいことかもしれません。でも、死んでしまつては、人はそこで終わりなんです。どんなにつらく苦しくても、生きてさえいれば、いつかきつと、報われる時が来る……あたしは、そう思います」

四郎がじつと見つめていたので、久は思わず顔を伏せた。「すみません。ちよつと、大げさなことを言っちゃいましたね」

「いいえ。そんなことはないですよ。久さんの言う通りだと思います」

「ありがとうございます」

久が礼を言うと、四郎は笑顔で頷き、次の患者の治療に移った。

その患者は、両足が大きくはれ上がっていた。石抱きの拷問をされたらしい。ただ、顔色は悪くなく、痛みもあまりないと言う。

しかし、四郎は足の具合を丹念に診て、骨が複雑な形で骨折していると診断した。すぐに治療を始める。

久は、治療する四郎の姿を頼もしく見ていた。もし、この患者を四郎ではなく自分が診ていたらどうなっていたらろう？ 自分に医術の心得は無い。痛みが無いのならば安心と、患部を冷やす程度の治療しかなかったかもしれない。そのまま状態が悪化すれば、両足ともに壊死し、切断を余儀なくされるか、最悪の場合、死に至ったかもしれない。

「四郎さんがいてくれて、助かりました」骨折の治療を終えた四郎に、久は言う。「これだけの怪我人。あたしだけでは、とても治療しきれません。こんな小さな村に来て頂けて、本当にありがたいです」

「いえ、そんな……お礼を言うのは、私の方です。都を追放された私を、村の人たちは受け入れてくれた。本当に、感謝しています」四郎は、照れくさそうに笑った。

四郎は、五年ほど前まで江戸の都で医者を営んでいた男だ。南蛮国の進んだ医学をいち早く学び、都では名の知れた医者だったらしい。しかし、都の医者の中には、南蛮国の医学を認めない古い考えの医者も多く、それらの圧力によって、都から追放されたのだった。

都を追われた四郎はこの羽生蛇村に流れ着いた。最初は閉鎖的な村人から避けられていたが、村で病人やけが人が出ると、四郎は積極的に治療を行い、その献身的な行動から、少しずつ受け入れられていった。今では村でただ一人の医者として、村人から一目置かれる存在である。

「今は、四郎さんが、みんなの心の支えです」久は、四郎に向かってそう言った。四郎がいなければ、多くの村人が命を落としたであろう。

本当に、感謝している。

「そんなことはありませんよ」と、四郎は言う。「村人の心の支えは、やはり眞魚教です。みんなが信仰を捨てようとしなのは、やはり、眞魚教の教えが素晴らしいからだと思います」

眞魚教の教えが素晴らしい——その言葉に、久は顔を伏せた。そんなことはない、と、心の奥で呟く。

四郎は久の様子に気付かず、続ける。「幕府軍が、この村の宗教は邪宗門ではないと、判ってくればいいのですが……村長と求導師様に、期待しましょう」

現在、村長と求導師は、幕府軍と話し合いを行っている。眞魚教が邪宗門ではないことを訴え、軍に撤退してもらおうよう要請しているのだ。

「根気よく説明すれば、きっと、判ってくれますよ」と、四郎は言う。「この村の宗教は、南蛮国の宗教のような、国の治安を乱すものではない。村人の心を救い、穏やかに暮らすためのものであると」

久はあいまいに笑った。

四郎の言葉が、胸に刺さる。

——この村の宗教は、国の治安を乱すものではない。

確かにそうだろう。眞魚教は、幕府を脅かすような真似は、決してしない。村の外への布教はしていないのだ。むしろ、村外への布教を、暗に禁じてさえいる。眞魚教はあくまでもこの村だけのものであり、決して、外に出ることはないだろう。幕府の脅威になることなど、あり得ないのだ。四郎はそれを知っているから、眞魚教を「すばらしい」と言う。

だが、四郎は知らない。眞魚教の真の姿を。

眞魚教では、数十年に一度、神に花嫁を捧げる儀式を行っている。村長の家に、神の花嫁にふさわしい娘が産まれると、その娘が初潮を迎えるのを機に、神に捧げられる。娘は神の世界——常世へと向かい、現世から消えるとされている。

そう。神に花嫁を捧げる儀式とは、要するに生贄の儀式だ。眞魚教は、邪宗門と呼ばれても仕方がない宗教であった。

この地に眞魚教が誕生して以降、この儀式はずつと行われてきた。生贄となつた娘は数知れない。この儀式のことを知る者は、村長や求導師など、村の有力者の一部だけだ。四郎だけでなく、村の信者の多くが、知らない。

眞魚教は、本当に人々の心の支えになつていいるのだろうか？ 本当に村に必要なのだろうか？ 疑問に思うことがある。罪のない娘の未来を奪い続けた。そして今、罪のない村人たちの生活を脅かしている。村人たちを傷つけているのは幕府軍だが、そもそも村に眞魚教が無ければ、こんなことにはならなかつたはずだ。

こんな宗教なら、いっそ――。

「……久さん、何か言いましたか？」

四郎に呼ばれ、久は我に返つた。考え事をしていて、独り言を言つてしまつたらしい。

「いえ、なんでもありません」

久は、患者の治療を続けた。

教会の扉が勢いよく開き、「先生！ お願いします!!」と、叫びながら、男が入つて来た。その背には、求導師が背負われていた。求導師は眞魚教の最高責任者であり、村長と共に、兵の撤退を求め幕府軍と話し合いをしていたはずだ。その姿を見て、久は息を飲む。求導師は、右手の指を全て失つていた。いびつな傷口は、刃で斬り落とされたのではないだろう。火鋏ひばさみのような物で挟み、ねじ切られたような傷だった。反対側の左手は、指どころか肩から先が失われていた。こちらも傷口はいびつで、恐らく、鋸で切り落とされたのだろう。額には火傷と思われる傷もある。いったい、何があつたのか？ 考えるまでも無かつた。幕府軍は、話し合いに来た求導師を捕らえ、拷問し、棄教を迫つたのだ。

「出血が酷い。すぐに止血しないと」

四郎は、求導師を筵の上に寝かすと、背負つていた男に、火をおこして平てこを熱するように言った。男は頷き、教会の外に出た。

「久さんは、指の止血を」

四郎に言われたが、久は求導師の姿を凝視したまま、動くことがで

きなかった。右手の指と左腕を失った求導師。しかし久は、両手の怪我よりも、額の火傷痕の方に目を奪われていた。その傷は文字になっており、『宗門改』と読めた。それは、幕府が邪宗門を棄教した者に押す焼印である。

つまりその火傷痕は、眞魚教の最高責任者である求導師が、幕府軍の拷問に屈し、棄教を認めたことを意味している。

「——久さん——」

四郎の叫ぶような声で、久は我に返る。今は治療が先決だろう。布を取り出し、求導師の右手に当てた。布は、見る間に赤く染まっていた。左腕は四郎が止血しているが、どちらも布を当てる程度では気休めにもならない。

しばらくして、男が平てこを持って戻ってきた。火にさらされた平たい鉄の刀身は真っ赤に焼けている。四郎は平てこを受け取ると、求導師の身体を押さえるように言った。男と久、そして、礼拝堂にいた比較的症状の軽い患者数人で、求導師の身体を押さえつけた。四郎は、熱した平てこを求導師の左肩の傷に当てた。傷口を焼くことで、止血するのである。その苦痛は想像を絶するが、他に治療法はない。言葉にならない悲鳴を上げ暴れる求導師を、久たちは押さえる。左の傷の止血を終えた四郎は、続けて、右の手の傷に平てこを当てる。全ての傷を焼き終えると、激しく暴れていた求導師はおとなしくなった。苦痛のあまり意識を失ったようだ。今はその方がいいだろう。久と四郎は、傷口に包帯を巻いて行った。

「……出血は止まりましたが、助かるかどうかは、私にも判りません。この傷では、あるいは……」

四郎は言葉を濁したが、助からない可能性もあるということだろう。むしろ、助かる可能性の方が低いかもしれない。かなり深刻な状態だ。

四郎は、求導師を背負って来た男を見た。「いったい、何があったのですか」

男の話によると、幕府軍は最初から話し合いに応じるつもりはなかったようだ。出向いてきた求導師を捕らえ、拷問し、棄教を迫った。

まずは爪を一枚一枚はがされ、それでも棄教を認めないと、今度は指を一本ずつねじ切られた。両手の指が無くなると、今度は鋸で左腕を切り落とされた。そして、次は右腕も切られるという段階になって、求導師は棄教を認めたのだった。求導師は額に『宗門改』の焼き印を押され、解放された。久は額にも包帯を巻いたが、すでに多くの者に見られたはずだ。礼拝堂は、不安と憤りが入り混じったざわめきに包まれている。眞魚教の最高責任者である求導師が幕府に屈し、棄教した。信者たちが動揺するのも無理はない。

「——今は、求導師様の回復を祈りましょう」

四郎は、信者たちと、そして久に言い聞かせるように、少し強めの口調で言った。

それでも、礼拝堂内のざわめきは治まらなかった。

翌朝。

求導師が棄教したという話は、あつという間に村中に知れ渡り、村人は、大いに動揺した。

さらに昼過ぎ。幕府軍と話し合いをしていた村長むらおやが解放されたことで、動揺はさらに広がった。村長はほぼ無傷だった。唯一の傷は、左の二の腕に押された『宗門改』の焼き印傷のみ。

村長は、拷問される前に棄教を認めたのだ。それも、自分一人ではなく、村の信者全員の棄教を、幕府軍と約束したという。

信じていたものに裏切られた——多くの村人は、そう思った。眞魚教は、千年近く昔からこの村に存在する。村人のほぼすべてが信者であり、眞魚教を信仰することは、村の人々には当然のことであった。それが、理不尽な弾圧により突然失われた。それも、求導師や村長という、眞魚教の上に立つ者の判断によって。

だが久は、むしろこれで良かったと思っていた。意地を張って大怪我を負ったり、命を落としても、なににもならない。今は、村を存続させることが重要だ。久は、動揺する村人に、そう説いていった。幸

い、若者や女を中心に、久の言うことに同意してくれる者も少なくはなかった。四郎も、久の考えを支持してくれた。

夕方になり、良い知らせも入って来た。生死の境をさまよっていた求導師が、なんとか命を取り留めたのだ。容体は安定しているから、もう大丈夫だろう、と、四郎は言った。右の指と左腕を失ったことは残念だが、それでも、生きていることは喜ぶべきだろう。

そう。どんなにつらく苦しくても、生きてさえいれば、いつかきつと、報われる時が来るのだから。

村全体が棄教を認めたことで、いずれ幕府軍も撤退する。村は、苦境を乗り切ったのだ——そう、久は思った。

しかし。

数日後。

久と四郎は、教会への帰り道を歩いていた。その左腕には包帯が巻かれてある。包帯の下には、『宗門改』の焼き印がある。幕府軍によって押されたものだ。

「申し訳ありません。四郎さんにまで、つらい思いをさせてしまって」
久は、四郎の腕を見ながら言った。村に来て日の浅い四郎は、まだ眞魚教の信者ではない。本来ならば焼き印を押されるいわれは無いのだが、四郎は、拒むことはなかった。

村全体が棄教を認めたことにより、幕府軍は、村人全員に焼き印を押そうとした。しかし、村長たちが交渉し、なんとか代表者のみに留めたのだ。村長や求導女の久など、村の有力者や眞魚教に関係する者が集められ、次々と焼き印を押されていった。四郎は、村でただ一人の医者ということで選ばれたのである。

「いいんですよ。むしろこの傷は、私が村に受け入れられた証だと思っっています」

四郎は笑って答える。上辺の言葉ではなく、心の底からそう思っているような笑顔だった。

「久さんこそ、お辛いでしよう」久を氣遣うような表情の四郎。「女性の身体に傷をつけるなんて、幕府軍も、酷いことをする」

「あたしは求導女ですから、仕方ないです。むしろ、あたし一人で事が済んで、良かったです」

女で焼き印を押されたのは久のみだ。屈辱的なことであつたが、村人を守るためならば我慢できた。

村人全員の棄教が決まつたことで、幕府軍はすでに撤退を始めている。しばらくは数十名の兵が残り、厳しく監視されるだろう。元の静かな村に戻る日は、まだ遠いかもしれない。しかし、必ずその日は来るはずだ。どんなにつらく苦しくても、生きてさえいれば、いつかきつと、報われる時が来る。久は、そう信じていた。

だが。

「せ……先生！ 求導女様！ た……大変です!!」

血相を変えて駆けて来たのは、先日、教会に求導師を運んで来た男だつた。

「ど……どうしたんですか……慌てて……」

息を飲む久。男の様子から、ただ事ではないことが伝わってくる。

「きよ……教会に……火が放たれて……」

「!?!」

言葉を失う。

教会に火が？ なぜそんなことに?! 村は棄教を認めた。もはや、幕府軍に村を攻撃する理由はないはずだ。

男は久の考えを読んだかのように、大きく首を振つた。「幕府軍じゃありません……火を放つたのは、村の連中です……棄教を認めた求導師様は……その……異端者だと」

久は、めまいを覚えた。

教会に火が放たれた。それも、幕府軍ではなく。村の人の手によつて。

もう、幕府軍の脅威は無くなつたはずなのに。

せつかく、助かつたのに。

多くの犠牲を払つたが、これから少しずつ、元の村に戻るはずだつ

たのに。

四郎が駆け出したのを見て、久は我に返る。そうだ。呆然としてい
る場合ではない。教会には、求導師をはじめとした、多くの怪我人が
いる。ほとんどの者が、一人では歩くことさえままならない容体だ。
救わなければ。

久も、四郎の後を追った。

だが、もう、遅かった。

駆けつけた久が見たものは、天をも焦がすほどの勢いで燃え上がる
教会だった。

すでに、教会全体に火が回っている。もはや、手の施しようが無
かった。燃え盛る炎は、教会の壁を、屋根を、そして、屋根の上を取
り付けられた真魚教の象徴・マナ字架を、焼く。

教会の中には、何十人も村人がいる。多くの者が、幕府軍に棄教
を迫られ、それを拒み、命に係わる怪我をした者だ。連日のように運
び込まれ、四郎と久が、治療し続けた村人だ。

それが、燃えている。

多くの村人の命が、失われる。

同じ、村人の手によって。

久と四郎は、その様子を、ただ茫然と見つめるしかできなかった。

「た……大変だ……求導女様……先生!!」

丘の下から、別の村人が駆けてきた。「村の衆の暴動に乗じて、幕府
軍の残党も暴れはじめました！ 村に火が放たれ、金品を奪い、女は
襲われて、逆らう者は、容赦なく殺されています!!」

久は、村を一望できる教会そばの広場へ走った。

眼下には、炎に包まれた村が広がっていた。

村の男が、容赦なく殺される。

村の女は、幕府軍の残党に襲われる。

財は奪われ、老人も、子供も、容赦なく殺される。

ここからは見えないが——久の目には、その様子が、はっきりと見
えるようだった。

四郎がその場に崩れ落ちた。「なぜ……こんなことに……」と、何度

もこぶしを地面に叩きつける。

不意に。

久の胸の内から、笑いが込み上げてきた。こらえきれず、久は笑った。おかしくて仕方が無かった。村に火が放たれたことを伝えた男が、困惑した目を向けるが、それでも久は笑い続けた。

目の前の光景が。今、自分の周りで起こっている出来事が。自分が、今までしてきたことが。

全てが、滑稽に思える。

だから笑った。笑うしかなかった。

——くだらない。

自分は、今まで何をしてきたのだろうか？

求導女——救い、導く女。

そんな名で呼ばれても、自分には、何も救うことはできない。誰も導くことはできない。

村人が殺され、女は犯され、財を奪われても、自分は何もできない。村の危機に対し、自分は、何もできないのだ。ただ、黙って見ているしかない。

でも——。

それで、いいではないか。

そう。

これは、あたしがずっと望んで来たことなんだ。

こんな村、無くなってしまえばいい。

あたしはずっと、心の奥で、そう思っていた。

この村があるから、あたしは、いつまでも縛られたままなのだ。

村が無くなれば、あたしは解放される。

あたしは、長く続いた苦しみから——本当に、長い間続いた、この村で生きる苦しみから。

ようやく、解放されるのだ。

どんなにつらく苦しくても、生きてさえいれば、いつかきつと、報われる時が来る——そんなことはあり得ないと、あたしは知っていたはずだ。

そうだ。

あたしは、この時を待っていた。

この村が無くなることを。

眞魚教が無くなることを。

あたしは、ずっと待っていたのだ。

はるかな昔から、ずっと――。

がたり、と、なにかが崩れるような音がした。教会の方からだ。

久は振り返る。

四郎も顔を上げた。

燃え盛る教会の中から、炎の塊が転がり出てきた。

炎の塊――いや、それは人だ。教会の中にいた者が、脱出したのだ

！

すぐに四郎が駆け寄った。上着を脱ぎ、炎を消そうとはたく。男もそれを手伝った。やがて、火は消えた。

「火傷が酷い。すぐに治療します。井戸から、水を汲んできてください」

四郎は男に言った。男は頷くと、井戸の方へ走っていった。

「久さんも手伝ってください！」

四郎が叫ぶが、その声は、久には届かない。聞こえていない訳ではない。ただ、冷めた目で、四郎を見ているだけだ。

「久さん！ 早く!!」

そんな声で呼んでも無駄だ。久の胸にあった、村を救いたいという思いは、もう、燃え尽きてしまった。

だから言う。

「治療なんて、無駄です」

四郎の目が、患者から久に向く。久さん……何を言っているんですか……言葉にしなくとも、四郎の目は、そう訴えかけていた。

だが久は、容赦なく、冷たい言葉を口にする。「ここで治療をして、助かったとしても、どうせ、誰かに殺されます。もし、誰にも殺されなかったとしても、いずれは死にます。人は、いつか必ず死ぬのです。今、あなたがその者の命を救うことに、いったいどれだけの意味があ

るというのです」

自分でも不思議だった。さつきまでは、村人を救うためならば己の命さえ捨てる覚悟があったのに、今はもう、そんな気持ちは綺麗さっぱり消えている。あるいは、最初から無かったのかもしれない。最初から無かったものを、あると思ひ込んでいたのかもしれない。今の自分は、もう、求導女ではない。

四郎が目を伏せた。

意外にも。

「……久さんの……言う通りかもしれません」

四郎は、久の言うことを否定しなかった。

「それが久にも予想外だったので、言葉が出てこない。」

四郎は言葉を継ぐ。「都では、毎日のように、重い病に罹ったり、酷い怪我を負ったりする人がいます。私は、子供のころからそんな人たちを見て……そんな人たちを救いたくて、医者になろうと決意しました。町医者に弟子入りし、医者として独り立ちできるようになっても、南蛮国の進んだ医術を学びました。ただ、多くの人の命を救いたい一心で、医者になったのです。しかし、実際に医者になって判ったことは、医者には、救える命よりも、救えない命の方がはるかに多いということです。どんなに効能のある薬を飲ませても、どんなに進んだ治療を施しても、救えない命はあります。『死』というものに対し、医者は……人間は、あまりにも無力なんです」

井戸から水を汲んできた男が戻ってきた。四郎は手ぬぐいを水に浸すと、患者の火傷傷に当てる。

「この患者の命も救えないかもしれない。治療を施すだけ、より苦しみを長引かせるだけかもしれない。でも、この人は、炎の中から脱出した。死ぬのが怖くて、死にたくないという一心で、教会の中から脱出したのです。目の前に生きようとする命があるのなら、私は救いたい。それが、医者である私の使命だと思います」

「……………」

久は、黙って四郎の話を聞いていた。いつの間にか、聞き入ってい

た。

四郎が久を見た。「久さん。あなたはどうですか？」

「あたし……？」

「あなたの使命はなんですか？ 何のために、求導女になったのですか？」

「あたしの、使命……」

「あなたのなすべきことを、どうか思い出してください」

四郎は患者に視線を戻した。治療を続ける。その目には、何の迷いもない。目の前に救わなければいけない命がある。だから救う。己のなすべきことを理解している者の目だった。

——あたしのなすべきこと。

どくん、と、胸の奥がうずいた。何かが目覚めようとしている。心の奥に潜んでいた、何かが。

教会を見た。炎に包まれた教会は、今にも崩れ落ちそうだった。

ぐらりと、屋根に取り付けられてあるマナ字架が、大きく揺れた。そして、久の目の前に落ちる。

マナ字架は、木の板を組んで作ったものだ。なのに、長い時間炎にさらされていたにもかかわらず、表面がわずかに焦げているだけだった。

それはまるで、『神』が、久に何かを訴えかけているようだった。



「求導女様！ 先生！ 大変です！」

丘の下から、また、別の男が駆けてきた。「教会に火を放った連中が、今度は村長の屋敷を襲っています！ 娘が二人連れ出されました。幕府軍の残党に差し出すと!!」

四郎が顔を上げた。「二人？ 村長の娘は、一人ではなかったのですか？」

「はい。村の連中、みんな、そう聞いていました。しかし、屋敷の者の話では、もう一人は、生まれた時から屋敷の奥の牢に囚われていて、極

秘のうちに育てられたと……」

男は、久の顔を見て息を飲んだ。

「きゅ……求導女様……どういたしましょうか……」

怯えるような口調で訊いてくる。

二人の娘を受け取った幕府軍の男どもは、どうするだろうか？ 村

長の娘は若く、美しい。妹は、特に。そうなる……結果は、考えるまでも無かった。

久は、大きくため息をつく。

「……それは、ちよつと見過ごせないわね」

独り言のようにつぶやき、村長の屋敷へ向かう。

「あの、求導女様……」

男に呼び止められ、久は振り返った。「なに？」

男は、恐る恐る言う。「その……大丈夫でしょうか……？」

「なにが？」

「おかしなことを言うかもしれませんが……求導女様が……なんだか……別人のように見えます。喋り方も……表情も……」

「そう？ あたしはあたしだけど……まあ、そうかもしれないわね」そう言つて、久は微笑む。

それが、かえつて男を怯えさせたようだった。

久は構わず、再び歩き出す。

ふと、左腕を見た。二の腕に巻かれた包帯の下には、幕府軍に押された焼き印がある。

久は包帯をほどいた。『宗門改』の火傷痕が表れる。

久は、右手でその火傷痕を掴むと。

二の腕の肉ごと引きちぎり、投げ捨てた。

☆

村に放たれた炎が、夜の闇を焼く。

幕府軍残党の頭は、炎に包まれた村を高台の上から眺め、満足げに頷いた。小さな村だったが、金や宝物、食糧をかなり溜めこんでいた。

思った以上の収穫だ。特に、村人が差し出してきた村長の二人の娘が上物だった。歳のころは、十四・五歳といったところだろう。二人とも、田舎の村には不釣り合いなほど美しい。特に妹の方は、生まれてから一度も太陽の光を浴びたことが無いかと思う程に、白く透き通るような肌をしていた。知り合いの奴隷商人の所へ持ち込めば、かなりの値が付くだろう。数年は遊んで暮らせるかもしれない。だがその前に、どうしてもその娘を味わわなければ気が済まなかった。だから、そうした。奴隷としての価値は大幅に下がったが、娘を味わえるのであれば安いものだった。いや、そもそも売り飛ばしてはもつたいない。このまま自分の手元において、何度でも味わおう。その方が賢明だ。

頭は高らかに笑った。これだから、邪宗門狩りはやめられぬ。信者を捕らえ、好きなだけ拷問し、財を奪い、女も自由にできる。やつていることはそこの盗賊団と変わらないのに、その行為がお上かみから咎められることはない。

炎に包まれた村では、村の男は次々と殺され、女は襲われ、子供は泣き叫びながら逃げ回っている。

「いいか！ 一人たりとも逃がすなよ！」頭は、部下に向かって叫んだ。「一人でも邪宗門の生き残りを作ったら、国の治安が乱れるからな！ 村もすべて焼き尽くせ！ これは、お上の命だ!!」

おお！ と、部下たちが応じた。

炎はさらに勢いを増している。小さな村だ。一晩もあれば、すべて灰になるだろう。

だが、突然。

村を焼いていた炎が、消えた。

何が起こったのか判らない。風は吹いていない。雨も降っていない。なのに、本当に突然、炎が消えたのだ。村の炎だけではない。部下たちが手に持っているたいまつたいまつの炎や、置いてあるかがり火の炎も、すべて消えてしまった。月が照らす心細い明かりだけが、村の様子を映し出す。

「何をしている？ 早く、もう一度火を点ける！」

へい、と、部下が応じた。石をこすり、たいまつやかがり火、家屋に火を点けようとするが、どうしても、火が点かない。

と、向こうから、女が一人、歩いてくるのが見えた。

赤い修道服を着ている。この村の宗教——眞魚教とか言ったか——の、求導女と呼ばれる女が着る服だ。女の身でありながら、右手に刀を持っている。刀身に月明りが反射し、ぎらりと光った。ひと目で価値ある刀だと判った。おそらく、名高い刀匠が鍛え上げたものだろう。恐れはしなかった。どんな名刀であろうとも、女の細腕で何ができるといえるのか。お宝が一つ増えただけの話だ。

「おい、なんだてめえは？」頭は低い声で言った。年頃の女ならばそれだけで震えあがるはずだが、女に怯えた様子はない。

部下たちが女を取り囲んだ。女よりも二回りも大きな屈強な男たちだが、それでも女は、表情すら変えなかった。

「——娘を返してもらおうわよ」感情の無い声で言う女。あまりにも冷たい声だった。逆に、男たちの方が震え上がりそうだった。

そんな訳は無い。この俺が、女ごときに怯えるなど——頭は、胸の内自分で言い聞かせ、そして、顎を上げて笑った。「娘？ 村長の所の娘のことか？ それは聞けねえな。あんな上物の女、手放すわけにはいかねえ。てめえが代わりになるって言うなら、考えてもいいが……」

頭は値踏みするように女の姿を見て、もう一度笑い声を上げた。「いや……あの娘の代わりにするには、ちよつと年を取りすぎているか」

頭の笑い声に、部下たちも同じように笑った。だがそれは、どこか無理に笑っているような声だった。

女は、相変わらず感情の無い、冷たい声で言う。「妹の方は好きにして構わないわ。もう、『実』としての価値は無くなったようだから。でも、姉の方は、次の『実』を産まなければならない。渡すわけにはいかないわね」

「けっ……何を訳の判らんことを」

「それと、忠告しておくけど、早く村から出て行った方がいいわよ？」

あなたが『実』を盗んだから、『神』はお怒りなの。すぐに立ち去らないと、二度と帰れなくなる」

「何が神だ……おい。面倒だから、さっさとやっちまいな」

頭の命令に応じた部下が二人、女に向かって刀を振り上げた。

女は、左手を部下に向けた。

次の瞬間、部下の身体は炎に包まれた。

頭は、自分の目を疑った。何が起こったのかは判らない。女が手に向けただけで、突然、部下の身体が燃え上がったのだ。炎を消そうと地面を転がる部下。他の部下も、上着を脱いではいたり、水を掛けたりするが、それでも炎は消えなかった。やがて、部下は動かなくなった。

「てめえ……何をした」頭は女を睨む。

女は動じない。ただ、感情のありかが判らない笑みを浮かべている。

「ふざけやがって……ぶっ殺してやる！」頭は、刀を抜いた。

女は、挑発するようにあごを上げた。「殺す？ あたしを？ 面白いことを言うわね」

そして笑う。女が初めて見せた感情だった。だがそれは、かえって男たちの胸に恐怖を抱かせた。

女が笑うのをやめた。また、感情が消えた。氷のような目で頭を睨む。「殺してみなさい。できるものなら」

「舐めるんじゃないやねえ！ おい！ 殺っちまえ!!」

頭の声で、部下が一斉に女に襲い掛かる。

女は慌てなかった。一人目の部下の刀をかわすと、右手に持つ刀を振った。女の細腕とは思えないほどの鋭い一閃だった。部下は自分の身に何が起こったのか判らないような表情で、その場に倒れた。二人目が女に襲い掛かったが、女は刀で受け止め、左手をかざした。部下の身体は炎に包まれ、地面をのた打ち回った後、動かなくなった。三人目は女の方から斬りかかられた。四人、五人と、斬られ、あるいは身を焼かれ、部下たちは次々と倒れて行く。女一人に、なに手こずってやがる……苛立つ頭。だが、六人目の刀が、女の背中を捉えた。

女の顔が苦痛に歪む。しかし、女は倒れず、振り向きざまに背後の部下を斬る。そこへ、七人目の部下が跳びかかった。刀を女の腹に突き刺す。女が、口から血を吐いた。それでも、刀を振り上げる。そこへ、さらに八人目が刀を突き刺した。九人目、十人目の刀も、女の身体を貫く。

「よし！ とどめは任せろ!!」

頭は女の元へ走ると、その首めがけて、刀を振り下ろした。

ごとりと、女の首が地面に転がり。

続いて、首を失った胴が、ゆっくりと倒れた。

頭は、冷たい骸むくろと化した女を見つめた。薄気味悪い女だった。怖いもの知らずのこの俺が、不覚にも怯えてしまった。いや、そんなものは、一時的な気の迷いだ。たかが女一人に恐怖するなど、あり得ない。そう、自分に言い聞かせても、胸の内に生じた恐怖は、簡単には消えない。この女は何者だったのだ？ 村に放った炎を消しさり、手をかざしただけで部下の身体が燃え上がった。まるで、炎を自在に操っているかのようだった。人のなせる業わざとは思えない。

……まあいい。女はもう死んだ。女が何者であったにせよ、殺してしまえば恐れることはない。

ぽつりと、頬に水滴が当たった。雨か？ 空を見上げる。さつきまで月が煌々と輝いていた夜空は、いつの間にか、闇よりも黒い雲に覆われていた。舌打ちをする頭。おかしな村だ。部下の中にも、まだ動揺している者がいる。これは、早々に立ち去った方がいいかもしれない。

「おい。戦利品ツをまとめろ。とつと引き上げるぞ」

頭は部下たちを振り返り、そう命じた。

「——無駄よ。あなたたちは、もう逃げられない」

背後で声がした。女の声だ。聞き覚えのある声。さつきまで聞いていた声だ。しかし、あり得ない。女は殺した。たった今、この手で首を斬り落としたはずだ。首を斬られて生きていられる人間などない。だが、背後には、明らかに何者かの気配がある。振り返るのが恐ろしい。だが、振り返らずにはいられない。振り返った。女が立つ

ていた。斬り落としたはずの首が、ある。感情の宿らない笑みを浮かべている。

「ひいっ！」と、部下たちが情けない悲鳴を上げた。女に対する恐怖心が広がっていくのが判る。耐えられず、一人が逃げ出した。それにつられ、一人、また一人と逃げ出す。そうになると、もう頭にさえ止められない。

女は、逃げる者に興味を示さなかった。恐怖に怯えた小者に用はない——そんな表情。あるいは、女の言う通り、もう逃げられないということなのか。

女が、一歩近づくと。

頭は刀を構えた。

「化物め……」

そうつぶやくと。

女の顔に、一瞬だけ、悲しみが宿ったような気がした。

その時だった。

周囲に、獣の遠吠えのような、甲高い音が響き渡った。

それは、空の彼方から聞こえて来るような、あるいは、地の底から響いてくるような、そんな音だ。聞いているだけで、胸の内に本能的な恐怖が湧きあがってくる。耳を塞いだが無駄だった。音は、容赦なく耳の奥を刺激する。あたまが痛い。まるで、木槌で繰り返し殴られているような痛みだ。あまりの痛みに、意識が遠のいていく。

女が不敵な笑みを浮かべた。「時間切れよ。残念だったわね」

女がなにを言っているのかは判らない。

頭は、意識を失った。

目覚めた時、周囲には、誰の姿も無かった。

雨は降り続けている。空を見ると、厚い黒雲に覆われていた。光の気配はまるで無い。なのに、なぜか周囲の様子はぼんやりと見えた。

どれくらい意識を失っていたのだろうか？ あの女何者だったの

か？ どこへ行ったのか？ 判らないことだらけだ。あるいは、全て夢であったのか。そんな気さえする。

まあいい。こんな薄気味悪い村、長居は無用だ。とつとつとずらからう。

そばに落ちていた刀を拾い、歩き出そうとした。

だが、足を止めずにはいられなかった。

人の気配がする。それも、数多く。

意識を失う前、自分は、邪宗門徒の暮らす集落にいた。財を奪うために火を放ち、村の男は一人残らず殺し、女子供は売れそうな者のみ連れ去り、残りは殺したはずだ。部下たちも逃げ去った。では、今の集落にいるのは、何者だ。

びくん、と、身体が震え。

一瞬、目の前に、呆然と立ち尽くす一人の侍の姿が見えた。

背後に強烈な殺気を感じた。振り返る。村人が一人、右手に持った鎌を振り上げ、こちらに向かって来ていた。その顔を見て息を飲む。村人の肌の色は、まるで生気のないどす黒い灰色で、目からは、血のような赤い涙を流している。屍しかばねのような風体だ。

屍は「ぱりらおうごうぞしの」と、意味不明な唸り声を上げて、襲い掛かってくる。

恐怖よりも防衛本能が勝ったのは、曲がりなりにも幕府軍で兵を指揮する立場にあったからか。頭かしらは、屍が鎌を振り下ろすよりも早く、刀で斬った。屍は甲高い悲鳴を上げながら倒れる。だが、その悲鳴を聞きつけたのだろうか。集落にいた別の男たちが集まって来た。皆、鎌すきや鋤くわなどの農具で武装している。皆、目から血の涙を流している。皆、屍のような風体をしている。頭は屍を斬った。一人、また一人と、斬り捨てる。だが屍は、斬られる恐怖を感じていないかのよう、に、恐れることなく次々と襲いかかって来る。五人、十人と斬り捨てても、それでも襲ってくる。二十人斬ったところで気が付いた。一度斬り捨てたはずの屍がよみがえり、また襲いかかって来ていることに。

「くそおおお!!」

頭はめちやくちやに刀を振り回し、走った。とにかくこの村から逃げ出さなければ。どこに向かえばいいのか判らないが、とにかく、山を下る道を走った。

だが。

走った先の道は、海に消えていた。馬鹿な!? この村は山の奥深くにあつたはずだ。海からは、遠く何百里も離れている。海など存在しないのだ。それに、なんだ、この色は? 海の水は、まるで血のように赤い。

「言ったでしょう? もう、逃げられないって」

あの女の声が聞こえた。どこだ!? 周囲を探るが、姿は見えない。

山の上からいくつもの気配が近づいて来る。あの屍どもだ。逃げ場はない。覚悟を決め、頭は刀を振り上げて屍の群れに飛び込んだ。手当たり次第に斬っていったが、多勢に無勢だった。刀が折れた。それでも抵抗を続けたが、両腕を掴まれ、身動きが取れなくなった。屍の一人が鎌を振り上げ、頭の喉を搔き斬った。鋭い痛みと共に、血飛沫が飛び散る。だが、その痛みは一瞬だった。不思議なことに、血が流れれば流れるほど、身体の中に新たな力が流れ込んで来るような気がする。

頭は、両脇を屍に抱えられ、赤い海まで連れてこられた。

そして、水の中に沈められる。苦しくは無い。それはまるで、酒の海に溺れるかのような快感だった。

「……これで、大丈夫だろう」

「ああ。しばらくこうしていれば、すぐに大人しくなる」

「まったく……手間を掛けさせやがって」

「まあ、そう言うな。こんな奴でも、神は許して下さる」

さつきまで意味をなさなかった屍の言葉が、理解できる。

頭は、そのまましばらく、赤い海に身を任せていた。

やがて、海から上がる。

夜なのに、周囲はまるで昼間のように明るかった。空には光の布が風に揺れている。頭の周囲には、蝶のような生き物が、光の粉を撒きながら舞っていた。

さつきまで薄気味悪かった村が、今は、楽園のように感じられる。

「――ようこそ。あたしたちの村へ」

女の声が聞こえた気がした。

まな板の上の赤子

求導女の久は、礼拝堂で夜のお祈りを捧げていた。今日一日を無事に過ごせたことを感謝し、そして、明日の朝を無事に迎えられるよう、神に祈る。一日の最後に行く、重要な仕事だ。

お祈りを終えた久は、寝支度をするため寢室へ行こうとした。ふと、礼拝堂の隅にある懺悔室を見ると、中に誰かいる。

懺悔室は、罪を告白する者の部屋と、告白を聞く側の部屋のふたつに分かれている。その、罪を告白する側の部屋。椅子に座っている姿が見える。誰だろう？ 入口の引幕が降ろされているため、腰から上は見えない。いつからそこにいたのか判らない。初めからいた……ということはないだろう。礼拝堂に入った時は、懺悔を希望する信者がいないか、まず懺悔室を見るようにしている。その時は誰もいなかった。もちろん、礼拝堂にも人の姿は無かった。お祈りを捧げる前、この部屋に自分一人だったのは間違いない。では、お祈りを捧げていて、入って来たことに気が付かなかったのだろうか？ この礼拝堂は決して広くはない。いくらお祈りに夢中になっていたとしても、人が入って来て気付かないということはないだろう。そもそも、すでに教会を閉めている時間だ。門と玄関、両方とも、自分が鍵をかけた。いったい、いつ、どこから入ってきたのか。どんなに考えても判らない。

だが、確かにその人は懺悔室にいる。遅い時間だが、罪の告白をしようとしている者を無下に追い払うわけにもいかない。久は、反対側の部屋に入った。

ふたつの部屋は壁で仕切られている。ところどころ格子状になっているが、お互い顔は見えない。向こう側に誰がいるのか、ここに座っただけでは判らない。もちろん、懺悔室に入った者が誰であるのか詮索するのは許されない。一体誰なのか、どうやって入ってきたのかは気になるが、その疑問は一旦捨てる。久は、「汝の罪を告白しなさい」と、促した。

壁の向こうの相手は、「私は、波羅宿はらやどりで漁師をしております」と、言っ

た。声からすると、かなり年配の男性のようである。そして「ここ数日の間、身の回りで、不思議なことがあります……」と、続けた。不思議なこと……罪の告白とどうつながるのか判らないが、久は、「続けてください」と促した。

老人は、ゆっくりとした口調で、話し始めた。

☆

漁師である老人が、いつものように真魚川で漁をしていると、網に、大きな亀がかかった。

亀は魚ではなく獣にあたるため、食べることは幕府が定める『肉食禁止令』に反する。老人は、亀を川に放した。すると、亀は水面の上に首を出し、「助けていただき、ありがとうございます」と、人の言葉で話し始めた。お礼に、川の底にある水宮殿へ案内したい、と言う。

初めは驚いたが、老人は、亀の申し出を喜んで受けた。亀の背に乗り、川の底へ向かう。川の底にあつたのは、それはそれは美しい宮殿だった。老人は、豪華な料理でもてなされた。

だがその料理の中に、まな板の上に人間の赤子が乗せられたものがあつた。

老人はその料理を食べずにこっそりと持ち帰ると、村の井戸の中に捨てた。

その翌日。

柴を刈りに山へ向かった老人は、猟師が仕掛けた罠に一羽の鶴がかかっているのを見つけた。不憫に思った老人は、鶴を放してあげた。その夜。老人の家を、若い娘が訪れた。道に迷ったので、一晩泊めて欲しいと言う。哀れに思った老人は、娘を泊めてあげることにした。空いている部屋を貸し与えると、娘は「決して覗かないでください」と言い、部屋に入った。

深夜。娘の様子が気になった老人は、約束を破り、娘の部屋を覗いてみた。しかし、部屋に娘の姿は無く、代わりに、まな板の上に乗った赤子の料理が用意されていた。

老人はその料理を持って外に出ると、井戸の中に捨てた。さらに翌日。老人は竹を取りに竹藪へ向かった。

藪の奥まで進むと、竹の一本が黄金色に輝いていた。中に宝物が入っているのかもしれない。老人が鉋で竹を割ると、中には、まな板の上に乗った赤子がいた。

老人は赤子を持ち帰ると、井戸の中に捨てた。

翌日。裏の畑で、飼い犬が吠えていた。

裏に回ってみると、犬は、畑の一角を前足で引っ掻いている。どうやら、ここを掘れと言っているらしい。

老人が畑を掘り返すと、土の中から、まな板の上に乗った赤ん坊が出てきた。

老人は赤子を持ち帰ると、井戸の中に捨てた。

そんなことが、何日も続いた。

何をやっても、まな板の上の赤子が現れる。何度井戸に捨てても、翌日にはまた現れる。

耐えかねた老人は、求導師に相談するべく、教会を訪れた。

教会の扉を開けると、礼拝堂には、まな板の上に乗った赤子がいた。老人はそのまま家に帰ると、井戸の中に身を投げた。

☆

話を聞いた久は、何と答えたものか迷っていた。老人の話はあまりにも現実離れしており、にわかには信じられない。そもそも、井戸の中に身を投げたというのなら、ここにいるのは誰なのだろう。

「——こんな話、とても信じられませんか」老人は、久の心中を読んだかのように、寂しそうな口調で言った。

「いえ、そういう訳ではありませんが……」と久は答える。老人の話は現実とは思えない。しかし、現実とは思えない奇妙な事件が起こることとは、この羽生蛇村では決して珍しくない。

少し迷った後、久は言った。「話の真偽はともかく、ここは懺悔室で

す。犯した罪を告白し、悔いを改めるため場所。今の話は、あなたが犯した罪と、どう関係するのでしょうか？」

久は訊いたが、老人は何も答えない。先ほどまでは饒舌に喋っていたのに、急に口をつぐんでしまった。

もつとも、罪の告白をためらうことは、懺悔室では珍しくない。久は、老人が再び話し始めるのを、じっと待った。しかし、いくら待っても、老人は続きを話そうとしなかった。呼びかけてみても、返事がない。気配さえ感じなかった。いつの間にか出て行ったのだろうか？ 壁で隔ててあるとは言え、気付かれずに出て行くことなど可能だろうか？

いくら呼びかけても返事がないので、久は仕方なく部屋を出て、告白部屋の引幕を開けた。中には、誰もいなかった。

ただ、そこに誰かいたのは間違いない。

懺悔室の中の椅子は、びっしりと、水に濡れていた。

翌朝。

老人のことが気になった久は、彼が漁を営んでいるという波羅宿に足を運んだ。

集落の中央の広場には井戸があり、そこに人が集まっている。朝は洗い物や飲み水を汲みに来る人たちが賑わうものだが、今日はどうも様子がおかしい。皆、声を潜め、不安そうな表情で話し合っている。何かあったのだろうか？ 久は事情を訊いた。

最近、夜になるとこの付近で不気味な笑い声が聞こえる、と、村人は言う。

それは、年老いた男のような声だそうだ。男たちが確認したところ、どうもこの井戸の中から聞こえて来るらしい。

井戸の中と老人——昨日の話と何か関係があるのかもしれない。久は、井戸の底を調べるよう、皆に言った。

さっそく水が抜かれ、井戸の底を調べると。

井戸の底から、老人の遺体が発見された。

長年村で漁師を営んでいた老人だ。そう言えば、ここ数日姿を見なかったな、と、皆、口をそろえて言った。

すぐに医者が呼ばれ、遺体を調べることになった。

遺体の状況を詳しく調べた医者は、老人は溺死であると判断した。目立った外傷はなく、誤って転落したか、自ら身を投げたかのどちらかだろう。誰かに殺された可能性はまず無いとのことだった。

ただ、ひとつ気になることがある。

井戸の底にあったのは、老人の遺体だけではなかったのだ。

そばに、赤子のもものと思われる骨もあった。

大きさからみて、産まれたばかりの赤子だ。いつから井戸の底にあるのか、詳しくは判らないが、完全に白骨化していることから、少なくとも死後数十年は経っていると思われる。

さらに奇妙なのは、赤子の骨は腰から上の部分しかないことだ。下半身の骨は、井戸のどこを探しても見つからなかった。代わりに、魚の骨が見つかった。かなり大きな魚で、赤子と同じくらい大きさだ。こちらは尻尾だけで、頭の方は見つからない。

このふたつの骨がなにを意味するのか、医者も、村人も、誰にも判らなかった。赤子が誰なのかも判らない。老人は天涯孤独の身で、子供はいない。老人の子供ではないにしても、この数十年の間、村で赤子が行方不明になったという話は無い。

ただ――。

この老人は、一度だけ、嫁をもらったことがあるのを、久は覚えていた。

もう、五十年以上も昔のことだ。あまりに古い話のため、このことを知る者はいないだろう。久以外には。

久の記憶では、その嫁とは一年と経たず離縁したはずだ。理由は判らない。それが今回の出来事にどう関係するかも、判らない。

☆

事のいきさつは判らないが、とにかく老人の死に事件性は無いということで、ひとまず村人たちで埋葬することになった。

大急ぎで葬儀の準備が行われた。準備と言っても、棺と小さな祭壇を用意するだけだったが。

久も、準備のため一度教会に戻ることにした。

帰り道、眞魚川のそばを歩く久。

ふと、川上を見ると、大きな桃が流れてくる。

普通の桃の、何十倍もの大きさだ。それこそ、中に赤子でも入りそうなほどの。

桃は、拾えと言わんばかりに、目の前の岸边に流れ着いた。

久は、桃に手を伸ばした。

桃は一瞬にして炎に包まれ、燃えながら流れて行った。

月下奇人

ある夏の夜、求導女の八尾比沙子は、折部地区で行われた通夜を終え、教会への帰り道を歩いていた。昨日、この地区に住む老婆が亡くなったのだ。老婆は百歳に近い大往生で、悲しみよりも天寿を全うしたことを祝うような通夜であった。通夜振る舞いはどこか宴会のよくな雰囲気があり、すっかり帰りが遅くなってしまった。

折部から教会へ続く夜道を歩く比沙子。ふと、道端の民家を見ると、女の子が二人、庭の隅に座っている。ここは、恩田という信者の家で、確か、美奈と理沙という名の、小学四年生になる双子の姉妹がいたはずだ。もう日付が変わろうという時刻だ。夏休みとはいえ、子供が起きているような時間ではない。心配になった比沙子は、二人に声をかけた。

「こんばんは、美奈ちゃん、理沙ちゃん」

「あ、求導女様！　こんばんは!!」

二人は立ち上がると、ぺこりと頭を下げた。

「二人とも、夜遅いのに、なにをしてるの?」

比沙子が訊くと。

「夏休みの宿題!」

と言って、姉の美奈が画板に乗った画用紙を見せた。

「宿題?」

「そう!　自由研究で、げっかきじん月下奇人の絵を描くの!!」

今度は、妹の理沙が元気よく答えた。

ああ、なるほど、と、比沙子は納得した。月下奇人とは、この羽生蛇村のみに生息する植物である。夏になると深紅を咲かすのだが、特徴的なのは、深夜のわずかな時間しか花を咲かせないことだ。夜、日付が変わる頃に咲き始め、陽が昇る前にはしぼんでしまう。花が咲くのはほんのわずかな時間で、特に子供たちは、実際に開花している姿を見る機会がほとんど無い。だから、夏休みに絵や自由研究の題材にするのは、この村の子供たちの定番だった。

二人の足元には、月下奇人が一本あった。そのつぼみは小さく膨ら

んでいる。もうすぐ咲くだろう。

「でも、不思議だよね」そう言って、美奈が首を傾けた。「どうして月下奇人の花は、夜にしか咲かないんだろ？」

「そうだよね」と、理沙が頷く。「せっかく頑張って咲いたんだから、もつと長い時間、咲いていればいいのに」

比沙子はフツツと笑って、教えてあげた。「昔はね、かなり長い間、咲いていたの。三日とか、四日とか、長ければ、一週間も。しかも夏だけじゃなく、春から秋にかけて、ずうっと、咲いてたの。温かい年なら、冬に咲くこともあったの」

「え!? そうなの!? すごい!!」目を丸くして驚く美奈。

「そうなの。それとね、今は真っ赤な花だけど、その頃は、真っ白な、雪みたいな色だったのよ?」

「ホント! 知らなかった!!」理沙も驚く。

「でも——」と、美奈。「どうして、今は赤い花で、ちよつとの時間しか咲かないの?」

「うーん。詳しいことは判らないんだけど、花の性質が、変わったのよ」

「性質……?」

「そう。これは、今から四百年くらい昔……美奈ちゃんと理沙ちゃんの、おばあちゃんの、そのまたおばあちゃんの、またまたおばあちゃんが生きていた頃よりも、もつと昔の話なんだけどね——」

それは、江戸の幕府が南蛮国の宗教を禁じ、厳しく取り締まっていた時代。

南蛮国の宗教と酷似していた眞魚教は、幕府より『邪宗門』とされ、棄教——信仰心を捨てることを迫られた。応じなければ、村ごと焼き払い、信者を処刑するという。

求導師と村長は、眞魚教は邪宗門ではないと訴え、根気強く幕府と交渉し続けた。しかし、幕府は決してそれを認めようとはしなかつ

た。弾圧により村人が殺されるのを恐れた求導師と村長は、村全体の棄教を決意した。これにより、教会は取り壊され、不入谷いらすだにの地は足を踏み入れることを禁じられた。また、眞魚教のシンボルであるマナ字架や、神の姿を描いた聖画・偶像なども焼き払われた。

ただ、これはあくまでも、表向きのことではしかなかった。信者たちは信仰心までは捨てず、胸の内に秘めて暮らしていた。焼き払われた聖画や偶像も、実は事前に用意した偽物で、本物は、村長の屋敷や教会にある地下室に隠された。

村人が信仰心を捨てなかったとはいえ、村は幕府が派遣した取締兵に厳しく監視されている。眞魚教は、偶像やマナ字架に祈りを捧げる習慣があるが、これらの所持は当然禁止されており、破れば厳しく罰せられる。

そこで信者たちは、偶像やマナ字架の代わりとなるものを使うことにした。

まず使われたのが、月下奇人だ。

月下奇人は、羽生蛇村のみに咲く——それも、村の中央にある眞魚川の中州にしか咲かない、きわめて特殊な花だった。眞魚川の中州には、この地に神が降臨したと同時に天から降って来た巨石・眞魚岩がある。その周辺にしか咲かない月下奇人は、村では神の花とされていたのだ。

月下奇人は、ほぼ一年中白い花が咲き、しかも、花の寿命が比較的長い。そのため、家に飾ったり、持ち歩くのにちょうど良いと思われた。しかし、実際に試してみるとうまく行かなかった。月下奇人は、中州以外の場所ではすぐに枯れてしまうのだ。どんなに水を与えても、一日ともたない。庭先に植え替えても、種を撒いてみても、決して育つことはなかった。これでは、偶像やマナ字架の代わりにはならない。

次に村人が使ったのは魚の骨だった。これは、眞魚教の神が、どこか魚を思わせる姿をしていたからである。

信者たちは取締兵の厳しい監視の中でも、秘かに魚の骨を所持し、夜になると祈りを捧げた。

しかし、それも長くは続かなかった。

祈りを捧げている所を見られたのか、村人の中に密告者がいたのかは判らない。とにかくある日、取締兵に全て知られてしまった。

取締兵の指揮官は、信仰を隠匿していたことを、幕府への反乱を企てていたとし、村を焼き払い、村人たちを処刑する命令を下した。すぐに都から大勢の兵が呼ばれた。村人に抵抗する手段はなく、次々と殺された。村人は逃げまどい、やがて、眞魚川の中州に追い詰められた。中州に渡った兵は、一人、また一人と村人を殺して行った。多くの血が流れ、眞魚岩の周囲に咲く月下奇人の白い花は、真つ赤に染まった。

そこまで話したところで、比沙子は、美奈と理沙が抱きあい、小さく震えていることに気が付いた。こんな夜中に女の子に話すには、ちよつと怖い話だったかもしれない。まあ、夏の夜ということで、許してもらおう。

「それでね」と、比沙子はできるだけ明るい声で続けた。「それからなの。月下奇人が、白い花から赤い花になって、夏の真夜中にしか咲かなくなったのは。でも、その代わり、村の中ならどこでも咲くようになったの」

「ふうん」と、美奈が言った。「不思議な話だね」

「でも、どうして、そうなったのかな？」と、理沙は首を傾げる。

比沙子は、うーんと唸った後、言った。「詳しくは、あたしにも判らないけど、たぶん、殺された人たちの思いが、花に宿ったんだと思う」「ふうん」

比沙子の話がどこまで理解できたのか判らないが、美奈は、「うん、そうだね」と、笑顔で頷いた。

しかし、理沙の方は、まだ納得していないような顔をしている。「でもあたし、絵を描く前に、図書室で月下奇人のことを調べたけど、どの図鑑にも、そんな話、載ってなかったよ?」

「そうね……すごく昔の話だから、図鑑を書いた学者さんも、歴史の先

生も、誰も知らないのよ。その当時のことを書いた書物は、何も残ってないから」

「ふうん。そうなんだ」と、一度は納得したようにうなずいた理沙だったが、また首をかしげた。「でも、どうして求導女様は、それを知っているの？」

「フフツ、どうしてかしら？」

いたずらっぽく笑った後、比沙子は花を指さし、「あ、ほら。咲き始めたわよ」と、ごまかすように言った。

膨らんでいたつぼみが開いていく。深紅の花弁が、ゆつくりと、放射状に広がった。

「うわあ、綺麗だね……」美奈が感嘆の声を洩らす。

「うん。すごく、綺麗……」理沙も、うつとりとした目で見つめる。

しばらく花を見つめていた二人だが、宿題を思い出し、慌ててその姿を画用紙に描きはじめた。

比沙子は、胸の前で手を組み。

あの日、言われのない罪により、花のように短い命を散らした信者たちの魂に、祈りを捧げた。

水蛭子神社縁起

夕方、神代家の女中・澄子は、小学校の図書室を訪れた。この小学校の図書室は、児童だけでなく村の住人なら誰でも利用することができるため、手が空いたときよく訪れているのだ。

図書室では、女の子が一人、真剣な表情で本を読んでいた。入ってきた澄子にも気づかないくらい集中している。あれは、吉川菜美子ちゃんだ。この小学校の五年生である。

「こんにちは、菜美子ちゃん」

澄子が声をかけると、菜美子はパツと顔を上げ、「あ、澄子さん。こんにちは」と、ぺこりと頭を下げた。菜美子は本を読むのが大好きな子で、この図書室で会うことが多く、澄子とは読書友達だった。

「随分熱心に読んでたみたいだけど、何の本？」

「あ、これです」

菜美子は本の表紙を見せた。『羽生蛇村民話集』とある。その名の通り、羽生蛇村に古くから伝わる民話を集めたものだ。

「あら、懐かしいわね」澄子は微笑む。

「澄子さんも、読んだことがあるの？」

「まあ、そうね。大好きよ、その本」

「そうなんだあ。あたしもこの本、大好きなの。もう、三回も読んじゃった」にっこりと笑う菜美子。

「何度も読んでいる——そう言われ、澄子は嬉しくなった。「そうなんだ。どのお話が好き？」」

「うーん、いっぱいあるけど、『空から降ってきた魚』が一番かなあ」『空から降ってきた魚』は、飢饉のとき、空から奇妙な形の魚が降って来た。空腹に耐えかねた村の娘がその魚を食べると、神様から怒られた。娘は魚を食べたことを悔い、これから魚を一匹ずつ返すと約束し、許しを乞うた——という話だ。

「そのお魚は、たぶん、神様の大事なペットだったんだね」と、菜美子は言った。「それを、娘が勝手に食べたから、神様は怒ったんだと思うの」

「そうかもしれないわね。菜美子ちゃんも、もし、空からお魚が降って来ても、絶対に、食べちゃダメよ?」

「えー? 空からお魚が降って来るなんて、ホントにはおこらないよー」

菜美子と澄子は、二人で笑った。

「この本、すごく面白いんだけど——」と、菜美子は話す。「ちよつと、よく判らないお話も、あるんだよね」

「そう? どのお話?」

「うーんとね……」菜美子は民話集をめくり、『まな板の上の赤子』と書かれたページを開いた。「このお話とか」

『まな板の上の赤子』は、真魚川で漁をしていた老人が、網にかかった亀を川に放したことで、恩返しをされる話だ。川の底の宮殿に招かれた老人は、そこでもてなしを受けるが、出された料理の中に、まな板の上に乗った赤子があつた。老人はそれを食べずにこつそり持ち帰ると、井戸の中に捨てた。

澄子は、うーんと、唸った。「そうね。そのお話は、ちよつと難しいわね」

「うん。どういうことなのか、全然判らなくて」

「菜美子ちゃんは、もし、まな板の上に乗った赤ちゃんの料理を出されたら、食べる?」

「えー? 赤ちゃんは、食べちゃダメだよー」

「そうだよね。だから、『まな板の上の赤子』っていうのは、絶対に食べちゃいけないものを、を、表しているの」

「ふーん、そうなんだ。でも、なんで亀さんは、おじいさんに、食べちゃいけないものを、食べさせようとしたの?」

「それはたぶん、罰ね」

「罰?」

「ええ。そのおじいさんは、若い頃、自分の赤ちゃんを、食べちゃったんじゃないかな」

それを聞いて、菜美子は目を丸くして驚いた。「ええ! 赤ちゃんは食べないよ!」

「それが、食べるのよ」澄子は声のトーンを落とす、低く、それでいて力強い声で言った。「今の時代の人には判らないかもしれないけど、飢饉が続き、空腹が続いたら、人間は、なんでも食べるの。それが、奇妙な形の魚であっても、自分の赤ちゃんであっても、生きるためなら、食べるのよ」

「……………」

菜美子が言葉を失ったのを見て、澄子は笑った。「あはは。ごめんなさい。ちよつと、怖かったかな?」

菜美子はぶんぶん顔を振る。「そんなことないよ! 菜美子も年長さんだから、怖くない!」

強がって言う姿が可愛くて、澄子はもう一度笑った。

「それにしても澄子さん、そんなこと、よく知ってるね」菜美子は感心したように言う。

「そうね。その本については、たぶん、村の誰よりも詳しいわ」

「へえ。そんなに、何回も読んだんだ」

澄子は何も言わず、ただ笑った。何回も読んだという訳ではない。その民話集は、澄子が書いた物なのだ。村に伝わる民話をまとめたというだけではない。そもそもそれらの話自体、澄子が村で経験したことを元に書いたのである。

「じゃあ、もうひとつ、教えて」菜美子が言う。

「いいわよ。なんでも訊いて?」

菜美子はパラパラとページをめくった。「このお話なんだけど……………」

それは『水蛭子神社みずひるこのはじまり』という話だった。村の南東、蛭ノ塚ひるのつかにある水蛭子神社に伝わる話である。昔、村の子供が泉で水を汲もうとしたら、泉の中から人魚が現れた。人魚は「私は蛭子命ひるこのみこと。泉の水で酒飯を作り、私に捧げなさい」と言った。子供の話聞いた村人はすぐに社殿を作り、人魚を神として奉った。それが、水蛭子神社の始まりである。という話だ。水蛭子神社に伝わる『水蛭子神社縁起』を、子供向けに書いたものである。

「ああ。そのお話は、特に難しいわね」澄子は頷いた。「そのお話、実

は、さっきの『空から降ってきた魚』と、繋がってるの」

「え？ そうなの？」

「ええ。『水蛭子神社のはじまり』では、人魚が村に流れ着いたから、ご飯を食べさせてあげた、っていうお話だけど、実際は、『空から降ってきた魚』の話の通り、村の人が、人魚を食べちゃったの。でも、それは絶対に食べちゃいけないものだったから、食べたことを隠すために、『水蛭子神社のはじまり』のお話を作った——」

不意に。

澄子の中で、別の何かが目覚めた。

☆

急に黙り込んだ澄子に、菜美子は首をかしげる。「澄子さん、どうしたの？」

澄子は我に返り、首を振った。「ううん。なんでもない。ゴメンね。その話のことは、あまり詳しくないの。だって、あたしが生まれるより、前の話だから」

「えー。そんなの、当たり前だよー」

澄子の言うことを冗談だと思ったのだろう。菜美子は、けらけらと笑った。

「さあ、菜美子ちゃん。もう遅いから、今日は帰りなさい」

菜美子は壁に掛けられた時計を見て驚く。「あ！ ホントだ！ もう下校時間過ぎてる！」

菜美子は慌てて帰り支度を整えると、民話集の貸し出しカードに名前を記入した。「家でゆっくり読もうっと。じゃあ、澄子さん、さようなら」

ペコリと頭を下げて、菜美子は走って帰っていった。

一人、図書室にたたずむ澄子。

さきほどの『水蛭子神社のはじまり』について、考えていた。

あたしが生まれる前の話——菜美子に言ったことは本当だ。水蛭子神社は、真魚教よりも古い歴史を持つ。真魚教は、澄子が作ったものだ。一三〇〇年前、この地降臨した神を、澄子は食べた。その罪を、償うために。

だから、真魚教よりも古い水蛭子神社は、澄子が生まれるよりも前——一三〇〇年以上前から存在することになる。『水蛭子神社縁起』も、一三〇〇年以上前から伝わることになる。

その、『水蛭子神社縁起』が、絶対に食べてはいけない物を食べてしまったことを——空から降ってきた魚を食べたことを隠すために作られたものだとしたら。

澄子が罪を犯すより前——一三〇〇年以上前の時代に、村の誰かが、澄子と同じ罪を犯していたことになる。

それは誰だ？ その者は許されたのか？ あるいは、まだ許されていないのか？ 許されていないのならば、どこにいるのだ？

澄子は首を振った。やめよう。これは、考えても仕方がない。

澄子の記憶はあいまいだ。ときどき、自分が誰なのかさえも忘れてしまう。当然だ。一三〇〇年という時間は、人が記憶を保つには、あまりにも長すぎる。記憶が間違っていることは、十分に考えられる。水蛭子神社が真魚教よりも古いというのが、澄子の思い違いかもしれない。神社自体は澄子が生まれるより前にあつたが、『水蛭子神社縁

起』の話は、後から澄子が作ったのかもしれない。罪を犯した澄子はまず水蛭子神社を作り、その後なんらかの理由で眞魚教を作ったのかもしれない。

いずれにしても。

澄子にとつてはどうでもいいことだ。仮に、本当に澄子より前から降ってきた魚を食べた者がいたとしても、見ず知らずの誰かが犯した罪など、考える必要は無い。大切なのは、あたし自身が許されるかどうかなのだから。

澄子は、窓から外を見た。北の方角。合石岳の頂き付近に、薄く光る小さな物体を見た。

神に花嫁を捧げる日が近いことを、澄子は悟った。

夢みる少女

眞魚教では、日曜の朝、礼拝式を行っている。信者たちが教会の礼拝堂に集まり、祈りと聖歌を捧げ、求導師が神の教えを説く。村には熱心な信者が多く、毎週多くの信者が集まり、賑わっていた。

その日、式を終えた比沙子は、礼拝堂に恩田美奈が残っているのを見た。式が終わった後も信者たちが教会に残っておしゃべりするのは珍しくはないが、美奈はそういったおしゃべりの輪に加わるわけでもなく、一人、なにやら思いつめた表情で椅子に座っている。

恩田美奈は十八歳の信者で、毎週欠かさず礼拝式に参加している。もっともそれは、信仰心が篤いのはちよつと違う。式には、宮田医院の院長先生も毎週参加しているのだが、どうやら美奈は、その院長先生に密かに憧れているらしく、彼に会うのが目的のようなのだ。不純な動機とも言えるが、まあ、年頃の娘にはよくある話だし、そのような理由であっても、式への参加は大歓迎だ。礼拝式は、信者同士の交流を目的としているのだから。

美奈には、理沙という双子の妹がいる。美奈と一緒に毎週来てくれるが、そう言えば、今日は見かけなかった。何かあったのだろうか？ 気になった比沙子は、美奈に話しかけた。

「こんにちは、美奈ちゃん。今日は、理沙ちゃんは来ていないの？」
「あ、求導女様。こんにちは」ペこりと頭を下げる美奈。「理沙は、家に居ます」

「珍しいわね。体調が悪いの？」
「いえ、そういう訳ではないんですが……」美奈は少し迷ったような表情をして、続けた。「昨日、ちよつとケンカしちゃって、なんだか気まづいんです」

「あら？ そうなの」小さく笑う比沙子。二人は子供の頃からずっと仲良しで、いつも一緒だった。仲がいいからこそ喧嘩をすることもあるが、一晩経てばもう仲直りしているのが常だった。

だが、今日の美奈の思いつめた表情は、いつもの小さな喧嘩とは訳が違うように思う。

「ケンカの原因は、なに？」比沙子は訊いてみた。

「大したことじゃないんですが、進路のことで、ちよつと……」

「進路……そっか。もう、高校三年生だもんね」しみじみという比沙子。少し前は小さな子供だったのに、時が経つのは早いものである。

羽生蛇村には高校が無いため、美奈は、ふもとにある街の高校に、毎日バスで通っている。確か、看護師になるために、看護科を専攻しているはずだ。通常の高校とは違い五年制で、就職はまだ先だが、恐らく宮田医院に勤めることになるだろう。村にある病院は宮田医院ひとつだけだ。閉鎖的な村なので、村人以外の看護師が働くことはない。美奈なら問題なく採用されるだろう。

理沙の方はどうだっただろうか？ 理沙も美奈と一緒に高校に通っているが、学科は普通科のはずだ。将来何になりたいとか、具体的な話を聞いたことはないように思う。

美奈が、小さくため息をついた。「理沙に、進路をどうするのか訊いても、判らないって言うんです」

理沙が専攻する普通科は三年制だから、今年で卒業だ。今は五月。進学にせよ就職にせよ、さすがに何も決めていないのはまずい時期だ。

「クラスで何も決めていないのって、理沙だけみたいなんです。あたし、一年の時からずっと、進路は早く決めた方がいろいろ有利だ、って、言ってたんですよ。なのに、まだ何も決めてなくて……そんないい加減な気持ちでいるのに腹が立って、つい、キツイこととか言っちゃって、それで、ケンカになっちゃいました」

高校で看護科を専攻した美奈は、中学卒業時にはすでに看護師になると決めていたのだろう。当時から、彼女は宮田医院の院長先生に憧れていた。動機にやや不純な面はあるものの、美奈の言う通り、進路を早めに決めるのは悪い事ではない。そんな美奈からすれば、卒業が近づいているのにまだ何も決めていない妹が心配になり、口うるさくなってしまうのも仕方ないだろう。

「うーん」

比沙子は唸り声を上げた。

翌日。

理沙のことが気になった比沙子は、会って直接話を聞いてみることにした。上粗戸の商店街にあるバス停で、理沙が帰って来るのを待つ。夕方六時のバスが停まり、理沙が降りてきた。一人だった。比沙子は、声をかけた。

「こんにちは、理沙ちゃん。美奈ちゃんは、一緒じゃないの?」

「あ、求導女様。こんにちは。お姉ちゃんは課外授業があるので、あたしだけ先に帰ってきました」

普段なら下校時間が違っても、残って二人一緒に帰ってくるはずだ。どうやら、まだ仲直りしていないらしい。

「美奈ちゃんから聞いたけど、進路のことで悩んでるんだって?」

「え?」と、目を丸くする理沙。「いえ……悩んでるって訳じゃ、ないんですけど……」

「進学するのか就職するのか、まだ何も決めてないって、美奈ちゃんが言ってたわ」

「もう……お姉ちゃんたら、余計なことを言っ……」

「ふふ。可愛い妹のことが心配なのよ。それに、何も決めてない、っていうのは、違うんじゃないかな?」

「え?」

「理沙ちゃんのごときは小さな頃から知ってるけど、そんな無計画な子じゃなかったはずよ? 真面目で、しっかり者で……どちらかと言えば、美奈ちゃんの方がいいかげんな所があるわよね」

「――」

「いつだったか、美奈ちゃんと理沙ちゃんが、夏休みの宿題で、夜、月下奇人の花の絵を描いたの、覚えてる?」

「あ、覚えてます。確か、小学校四年生のときです」

「あのと、理沙ちゃんは最後までちゃんと描いたけど、美奈ちゃんは途中で寝ちゃって、起きた時にはもう花がしぼんじゃって描けなく

て。仕方ないから、理沙ちゃんの絵を見ながら描いたわよね」

「あはは。そんなことも、ありましたね」

「しっかり者の理沙ちゃんが、進路について何も考えていないなんてことはあり得ないと思うな。ホントは、将来やりたいことがあるけど、事情があつて言えない——そんなところじゃないかしら？」

比沙子は、理沙の顔を覗き込むように見た。困つたような表情の理沙だったが。

「……求導女様には、かなわないですね」

諦めたように笑い、そして、話し始めた。「あたし、将来、デザイン関係の仕事をしたいんです」

「デザイン関係……そっか。理沙ちゃん、絵が得意だったものね」

記憶を探る比沙子。確か、理沙が小学四年生のときに描いた月下奇人の絵は、コンクールで金賞を受賞したはずだ。

「それで、美術系の大学に進学したいんですけど……」と言って、理沙は顔を伏せた。「ウチ、貧乏だから、学費を出してもらえるか判らなくて……それに、ふもとの街には美大なんて無いから、村を出ないといけないと思うんです。そんなの絶対、お父さんとお母さんが認めてくれるわけがない」

だから、言い出せないのだと言う。

「仕方ないですよね」理沙は、自嘲気味に笑った。「そもそも、あたしがデザイナーなんてなれるわけないし。諦めて、村で適当に就職しようと思つてます」

「……………」

比沙子は、黙つてただうなずくだけだ。

言いたいことは山ほどある。やりたいことがあるのに、挑戦しないで諦めたりしたら、いつかきつと後悔する。夢を簡単にあきらめてはいけない。

だが、自分にそんなことを言う資格なんて無いことを、比沙子はよく判っている。比沙子が言つても、それは上辺だけの言葉だ。それでは、理沙の心には響かないだろう。

だから、違うことを訊いた。「美奈ちゃんには、相談しないの？」

理沙は首を振った。「お姉ちゃんに言っても、反対されるだけだし」「そうかなあ？ そんなことは無いと思うけど」

比沙子は、懐から時計を取り出した。そろそろ次のバスが来る時間だ。

しばらくすると、バスが到着した。美奈が乗っているはずだ。

バスから降りた美奈は、二人を見て目を丸くした。「理沙……求導女様……」

比沙子は、悪戯っぽく笑う。「美奈ちゃん、ちょうど良かった。今、理沙ちゃんの進路について、話していたところなの」

「え？」驚いた表情の美奈。

比沙子は、「ほら」と言って、理沙の背中を押した。「さっきの話、美奈ちゃんに、言ってみて」

「え……でも……」

「大丈夫。どんなことがあったって、美奈ちゃんは、絶対、理沙ちゃんの味方だから」

理沙はためらっていたが、やがて、話し始めた。将来デザイン関係の仕事に就きたいと思っていること。そのため、村を出て美術系の大学に通いたいこと。でも、学費が高くて親に反対されるだろうか、諦めようと思っていること。

それを聞いた美奈は。

「そんなの、絶対ダメ!!」

商店街中に響くような大声で叫んだ。買い物客や仕事帰りの人が、何事かと振り返る。

「お……お姉ちゃん……声が大きいよ」

口元に人差し指を当てる理沙。しかし、美奈には通じない。

「やりたいことがあるのに挑戦もせずに諦めたら、いつか絶対後悔する！ そんなのダメ！ 確かに、お父さんお母さんは反対するかもしれないけど、任せて！ あたし、絶対に説得して見せるから!!」

鼻息も荒く宣言する美奈。妹の力になれるのが、よほど嬉しかったのだろう。理沙が恥ずかしそうに制するが、お構いなしだ。

比沙子は、二人の様子を微笑ましく見ている。

理沙から、東京にある美術系の大学に合格した、と報告を受けたのは、十二月の、暮れも押し迫った頃だった。

「大変だったんですよ、両親を説得するの」理沙は、笑いながら言った。やはり、一番の問題になったのは学費だった。美大は一般的な大学よりも学費が高い。理沙の両親の収入ではとても払うことができず、大反対されたらしい。理沙はこの時点で諦めようとしたのだが、美奈は諦めなかった。学費が高いのが問題なら、安く済む方法を探せばいい。美奈は、進路指導の先生や卒業生など多くの人に相談し、近くで開催される進学相談会にも片っ端から参加した。奨学金や夜間学校、あるいは、大学は諦めて学費の安い専門学校に通う、など、様々な方法を検討し、最終的に、今の大学に決めた。夜間学部のある大学なのだが、なんと、昼間は大学の事務員として働くことができるのだそうだ。両親の経済的負担はかなり抑えることができる。美奈は再び両親を説得した。経済的負担が抑えられるとは言え、それでも、決して学費は安くない。美奈は根気よく説得を続けた。最初は諦めようとしていた理沙も、自分のために奮闘する姉の姿に心を動かされた。理沙は、胸の内に秘めていた思いを両親に話した。子供のころから絵を描くのが好きだったこと。ずっと、将来は絵に携わる仕事に就きたいと思っていたこと。そして、大学に通わせてほしいと、お願いした。二人の愛娘にここまでお願いされては、さすがに両親も認めざるを得なかった。

その後、理沙は猛勉強し、見事に合格を勝ち取ったのである。

「全部、お姉ちゃんのおかげです」理沙は、目を輝かせて言った。「お姉ちゃんがいなかったら、あたし、とつくに諦めてました」

比沙子は大きく頷いた。「そうね……美奈ちゃん、本当に頑張ってたもんね」

「はい。どんなに感謝しても、感謝しきれません。あ、もちろん、あの日話を聞いてくれた求導女様にも、感謝しています」

「あたしは、何にもしてないわよ」

「いえ、本当に、ありがとうございます」

理沙は、深く頭を下げた。

「じゃあ、春からは、東京で一人暮らしを始めるんだ？」比沙子は訊いた。

「そうなります」

「そっか……夢を叶える、第一歩だね」

「そうですね。働きながら大学に通うのは簡単なことじゃないと思いますけど、あたし、ガンバってみます。応援してくれた、お姉ちゃんのためにも」

理沙は、決意に満ちた顔でそう言った。

そして、春。

無事、高校を卒業した理沙が、東京へ旅立つ日が来た。

比沙子は、美奈と一緒に、バス停まで見送りに行った。

旅立つ前の理沙の表情は、決して、明るくはない。これから始まる新しい生活に、期待よりも、不安の方が大きいようだ。当然だろう。外部から隔離されたようなこの村で育った少女が、東京で一人暮らしを始めるのだ。不安にならない訳がない。

「求導女様は、生まれてからずっと、この村で暮らしているんですよね？」

バスを待つ間、理沙が、比沙子に訊ねた。

「ええ、そうよ」

「村を出ようと思ったこと、無いんですか？」

「あたし？ あるわよ？ 何度も」

「え、そうなんですか!？」口元に手を当てて驚く理沙。

比沙子は、含んだ笑みを浮かべる。「あら？ 意外だった？」

「はい。求導女様は、村の誰よりも、この村のことが好きなんだって、思っていましたから……」

「そんなことないわよ。あたし、こんな田舎村、大キライよ。何度出て行こうと思ったことか、もう、数えきれないわね」

「へえ。そうなんですね」

「でも……無理ね。あたしは、この村でやらなければならないことがあるから……」

「そうですよね……求導女様は比沙子さん一人だけだから、いなくなると、みんな困ります」

比沙子は理沙から目を逸らし、自嘲気味に笑った。比沙子が村から出て行かない真の理由を、理沙が知るはずもない。

「——怖いんです」

つぶやくように言った理沙の言葉に、比沙子は顔を上げた。

「怖いって……東京で暮らすのが？」

「それもありますけど……お姉ちゃんとか、求導女様とか、学校の先生や、先輩……みんなのおかげで、あたしは東京の大学に通うことができました。お父さんお母さんも、最初は反対したけど、でもそれは、学費が払えないからであって、決して、あたしが大学に通うことに反対だったわけじゃないんです。今の大学が決まってからは、誰よりも応援してくれました。いろんな人のおかげで、あたしは、大学に行けるんです。それなのに、もし、ダメだったら……学校での勉強について行けなかったら……お仕事で大きな失敗をしちゃったら……都会での生活に馴染めなかったら……みんながあたしのためにしてくれたことを、全部無駄にしちゃうんじゃないかって思うと——」

比沙子は、理沙の言葉を遮るように、「大丈夫よ」と、力強く言った。
「えっ？」

「理沙ちゃんには、叶えたい夢があるんでしょ？ デザイナーになるって、夢が。だったら、余計なことは考えず、その夢に向かって、全力で努力すればいい。夢を叶えることが、みんなに対する恩返しになるんだから」

「——」
「理沙ちゃんなら、東京に行っても大丈夫。きっと、夢を叶えられるわ」

比沙子の力強い言葉に。

「——はい」

理沙は笑って頷いた。もう、迷いは無かった。

そして、理沙は旅立って行った。

嘘をついた。

——理沙ちゃんなら、東京に行っても大丈夫。きつと、夢を叶えられるわ。

それはあり得ないことだと、比沙子は知っている。

東京に出ても、彼女はきつと、村に戻って来るだろう。早ければ、一年も経たないうちに。

理沙には絵やデザインの才能があるのかもしれない。真面目で努力家だから、夢を叶えるのは難しいことではないだろう。普通ならば。

だが、どんなに才能があろうと、どんなに努力をしようも、全て無駄だ。彼女は村に帰ってくる。それは、最初から定められたことだ。彼女は、この村に生まれた。村で生まれた者は、決して、村の外に出ることはできない。誰であっても。

この村は、呪われている。

村の神は、村人が外に出ることを、決して許さない。

だから、例え村を離れても、いつかは戻って来る運命なのだ。

村の者は、誰も、外に出ることはできない。比沙子のように。

理沙が村に戻ってきたのは、それから三年後の夏だった。

「ダメでしたね」と、理沙は苦笑いで言った。「東京で暮らし始めてすぐ、なんだか無性に村に帰りたくなつたんです。ホームシックつていうんですかね？ 絶対に夢を叶える！ って、意気込んで村を出たのに、ホント、情けないですよ」

それでも、理沙は三年頑張った。昼は大学で働き、夜は授業。下宿に帰っても寝るだけだ。休日も勉強しないと授業について行けない。そんな状態だったから、友人はできない。心が安らぐ時が無い。あるとすれば家族からかかってくる電話だが、心配させてはいけなから相談することもできない。慣れない生活、孤独感、そして、強烈な帰郷心。それでも、夢を叶えず村に帰ることはできないという責任感で、頑張り続けた理沙。最後の方は、おかしくなりかけていたと言う。「そんな時、電話で、お姉ちゃんから『帰って来てもいいのよ？』と言われて、あつさり心が折れました」

東京でつらい生活をしていることは、家族の誰にも話していない。それなのに、美奈だけは全てを判っていたようだった。

理沙は大学をやめ、村に戻ってきた。

それでいい、と、比沙子は思う。村に帰りたいたいという衝動を抑え続けると、取り返しのつかないことになりかねない。

村の小学校で教師をしている高遠玲子がそうだった。彼女も、この村に生まれた。教師になるのが夢だった彼女は、高校卒業後、体育大学に進学。教員免許を取得し、採用試験にも合格。無事、東京の小学校で教師になれた。その後、結婚。娘も生まれ、そのまま教師を続けていたのだが、二年前に起こった娘の水難事故を期に離婚し、村へ帰ってきた。

彼女も、東京に出てすぐ、村に帰りたいたい衝動に襲われたはずだ。しかし、仕事があり、夫も子供もいる。彼女は村へ帰りたいたいという衝動に逆らい続け、東京で暮らし続けた。理沙同様、最後の方はおかしくなりかけていただろう。娘にDVをしていたというウワサもある。

そして、娘の水難事故が起こった。誰もが不幸な事故だと思っただが、比沙子だけは知っている。あの水難事故は、村へ戻って来ない高遠に対する罰だと。彼女は村に帰る衝動に逆らい続けたため、神から

罰を受けたのだ。

高遠のような悲劇が理沙に起こらなかったのは幸運だった。村に戻って来るのがもう少し遅ければ、取り返しのつかない事態になっていたかもしれない。

「求導女様にも応援してもらったのに、こんな結果になって、本当に、申し訳ありません」理沙は、比沙子に向かって、深く頭を下げた。「そんなことないわよ。あたしなんて何もしてないし。理沙ちゃん、頑張ったんだから」

顔を上げた理沙の目には、涙が浮かんでいた。「——みんな、優しいんです。美奈も、お父さんお母さんも、誰も、あたしを責めないんです。あたしのワガママで大学に通わせてもらって、卒業さえできず逃げ帰ってきたのに」

比沙子は首を振った。「理沙ちゃんは逃げたんじやないわよ。むしろ、夢に向かって、逃げずに挑んだんだから。結果は残念だったけど、胸を張っていいと思うわ」

「そんなことありません。でも……そう言ってもらえると、嬉しいです」

理沙は泣きながら笑った。いい笑顔だった。

後悔はない……はずはない。夢を叶えることができなかつたのだ。理沙が悪いわけではないが、そのことを本人は知らない。自分の努力が足りなかった、心が弱かった、そう思っているはずだ。

だが、それでも理沙は笑うことができた。それは、夢に向かって全力を尽くしたからこそできる笑顔だ。その笑顔を、比沙子は美しいと思う。夢を叶えるために全力を尽くす——自分には、決してできないことだから。

☆

一筋の光さえさすことの無い地下道を、比沙子は一人、明かりも持たずに歩いていた。そこは真の闇だが、比沙子の目には、ごつごつとした岩壁と天井と床が、ぼんやりと見える。比沙子の目は、どんな暗

闇でも見通すことができる。それは、『幻視』という能力だった。他人と同調し、その人が見ている視界を自らの視界として見る能力だが、闇の中でも目が利くという側面もあった。

狭く長い地下道を進む比沙子。湿気を多く含んだかび臭い空気が身体にまとわりつくようだ。比沙子は、あまりの不快さに表情を歪めた。いや、不快なのは地下道の空気ではない。比沙子の身体にまとわりついているのは、この地下道を漂う怨みの念だった。

……苦しい……。

……痛い……苦しい……。

……なぜ……このような目に遭わなければならぬ……。

……助けて……。

……憎い……。

……貴様が……憎い……。

この場所には、死しても成仏でない魂が無数に彷徨っていた。いや、正確に言うならば、その魂は死んではない。まだ、生きているのだ。身体が減びても、精神は生き続ける——そのような存在だ。宿るべき肉体を失っても、その魂は黄泉の国へ旅立つことができない。永遠に、この地下を彷徨い続ける。

比沙子は、大きいため息をついた。

——相変わらず、うるさいわね、ここは。

彷徨う魂に対して、比沙子は何もできない。耳を塞いでも無駄だ。亡者たちの声は、耳の奥に張り付くように、比沙子に付きまとう。亡者たちも、比沙子に対して怨みの言葉をぶつける以外にできることは無い。それが判っているから、比沙子は亡者たちの声を無視して、ただ歩き続ける。

やがて、階段が見えてきた。亡者たちの怨みの声も、地下から出てしまえば、もう聞こえることは無い。比沙子は階段を上がる。階段の先は、石造りの天井に阻まれている。天井には門かぬきがはめられてあり、それを外すと、横にスライドするようになっていた。ちょうど、扉が横倒しになっているような状態だ。扉を開けると、眩しい光が差し込んで来た。比沙子は、亡者の彷徨う地下道から、外に出た。

そこは、一〇メートル四方の小さな庭だった。比沙子のすぐそばには石灯籠がある。先ほど比沙子がずらした扉の上に立っていた物だ。地下道の入口を隠すための物である。

庭の中央に池があり、真ん中に木組みの橋が架かっている。橋の先には飛び石が並び、大きな家屋まで続いていた。ちよつとした日本庭園という雰囲気だ。庭を囲む塀は不自然なまでに高い。比沙子の身長は五倍はあるだろう。さらに、塀の上の屋根は、外側よりも内側に大きくせり出している。それは、外から中に入る者を拒むのではなく、中から外に出る者を拒むように作られていた。

踏み石の先は縁側となっており、その上で白い大きな犬が伏せていた。縁側の向こうには八畳の部屋がある。部屋の中は箆筒たんすと机くらいしかない質素なものだ。

部屋から廊下に出るための扉は、太い木を格子状に組んだ物だ。かなり頑丈な作りで、ちよつとやそつとでは壊れない代物だ。庭の塀同様、中から外に出るのを拒むために作られている。

ここは、座敷牢だ。

この羽生蛇村において、絶大な権力を持っている神代家。その屋敷の、最も奥まった場所に、この牢はある。

縁側の上の白い犬が、比沙子の気配を感じ、首を上げた。予期せぬ侵入者に驚き、庭に飛び降りて、威嚇するように吠えた。

「……ケルブ、静かに」

座敷の中から声がした。とたんに、白い犬は吠えるのをやめ、その場に伏せた。

座敷の中央には、長い黒髪の少女が一人、座っている。まだ子供のあどけなさが残る顔が、警戒するような表情になった。

「誰だ……？」

比沙子は池の橋を渡り、少女に近づいた。「久しぶりね、美耶子様」
神代美耶子——神代家の次女だ。彼女は生まれてからずっと、この座敷牢に囚われている。その存在は極秘とされ、戸籍にさえ載っていない。村で美耶子を知っているのは、神代家の者と、教会や宮田医院など、村の一部の有力者のみだ。

神代家の次女は、代々、花嫁として神に捧げられることが運命づけられている。美耶子も、三日後の夜、真魚川の中州で行われる儀式によって、神に捧げられる運命だ。

比沙子が近づくと、美耶子は驚いた顔になった。

「お前は……求導女……」

比沙子の姿を確認した美耶子。しかし、顔は比沙子の方を向いていない。彼女は、自分の目で比沙子の姿を確認したわけではない。美耶子は生まれながらに目が見えない。それでも比沙子の姿を確認できるのは、自分の目ではなく、白い犬の目を通じて比沙子の姿を見ているからだ。美耶子もまた、比沙子と同じく幻視の能力を持っていた。「どうやってここに来た……」 敵意と戸惑いが混ざったような声の美耶子。

比沙子は小さく笑った。「この石灯籠の下、地下道があるの。知らなかったでしょ？ もうずっと使われてないから、当主さえも知らないでしょうね」

「……………」

言葉を失う美耶子。どう応じればよいのか判らないような顔だ。彼女にとって儀式を執り行う教会は憎むべき存在だ。その教会の求導女である比沙子が、誰も知らない地下道の存在を教えている。その真意を測りかねている様子だ。

比沙子は言葉を継いだ。「この地下道は、教会とか、病院とか、真魚岩の中州とか、村のいろんな場所に繋がってるの。ここを通ると、外に出られるわよ?」

美耶子は一瞬驚いたが、すぐに敵意のこもった表情に戻る。「ふん。儀式が近いから、あたしに同情でもしたのか? 余計なお世話だ。いまさら、外に出てどうなる? どうせあたしは、神様とやらに捧げられるんだろ? そういう運命に生まれたんだ」

「そうかもしれないわね。でも、その運命に、逆らってみたいとは思わない?」

「……………」

「あなただって、ずっと運命を受け入れてきたわけじゃないでしょ?」

自由を夢見たことくらい、あるはずよ」

美耶子は何も言わない。だが、その沈黙が答えだ。

比沙子は続ける。「今、眞魚岩の中州では、儀式の準備が行われている。祭壇はもう組みあがっているから、後は、儀式の前夜、御神体――神の首を、奉納するだけ」

美耶子は比沙子の話を黙って聞いている。相変わらず、比沙子の真意を測りかねているようだ。

比沙子は、最も重要なことを話した。「御神体の奉納は儀式の前夜に行われる。それが終われば、翌日の夕方まで、祭壇には誰も近づかない。その間に、御神体を壊しなさい」

「なんだと!?!」

「御神体が無くなれば儀式は失敗する。そうならば、あなたは自由になれるかもしれない」

「お前、何を言っているんだ!?!」

「チャンスは儀式当日の朝しかないわ。せいぜい頑張りなさい」

伝えたいことは伝えた。比沙子は地下道に戻ろうとする。

「待て」美耶子が呼びとめた。「なぜだ? なぜ、そんなことをあたしに教える? お前は、儀式が失敗してもいいのか?」

「さあ? どうかしら? 儀式なんて失敗しても構わないとも思っているし、なにがなんでも儀式を行わなければならないとも思う。ときどき、自分でも何をしているのか判らなくなるの」

比沙子は美耶子から目を逸らし、空を見上げた。本当に、私は何をしているのだろう。何がしたいのだろう。自分でも判らない。儀式が近づくと、いつもこうだ。心が不安定になる。今日、美耶子に地下道について教えたことを、明日には後悔するかもしれない。教えたことと自体忘れるかもしれない。自由を求め逃げ出した美耶子をもう一度捕え、自らの手で神の元に送るかもしれない。どうなるのかは、比沙子にも判らない。

ただ、これだけは言える。

比沙子は、美耶子に目を戻した。

「私は、あなたが全力で生きようとする姿を見てみたいと思った——ただそれだけよ」

その言葉に。

初めて、美耶子の顔から敵意が消えた。

比沙子は小さく笑うと、美耶子に背を向けた。「まあ、どうするかはあなたに任せるわ。神の花嫁としての運命を受け入れるのならば、それでもかまわない。じゃあね」

比沙子は、再び地下道へ戻った。教会へと続く道を歩く。

美耶子はどうするだろう。比沙子の言葉を信じ、外に出て、御神体を壊すだろうか？ それとも、神の花嫁としての運命を受け入れるだろうか？

どちらでも構わない。どちらにしても、運命は変えられない。彼女は神に捧げられるだろう。それは、最初から決まっていることだ。だが、それでも。

——生きるために、全力を尽くしてみなさい。

比沙子は心の奥で呟き、闇の中を歩き続ける。

神の花嫁

赤い水がとめどなく流れる岩の上で、神の花嫁の身体は、炎に包まれた。

花嫁に苦しむ様子は無い。ただ眠るように身を横たえている。その寝顔は、水鳥の羽毛で編んだ寝具に包まれているように安らかだ。あるいは、子供の頃母親の胸に抱かれて眠る夢でも見ているのかもしれない。

花嫁を包み込んだ炎は勢いを増して燃え続ける。花嫁の身体だけでなく、周囲の大气や、天空さえも焦がす勢いだ。炎は一本の大きな柱となり、燃え続ける。

やがて、花嫁の身体を焼き尽くした。

炎のそばでは、女と男が、目を閉じ、手を組み、祈りを捧げていた。花嫁の身体を焼き尽くした炎は、その勢いが徐々に衰えていき、霧散するように掻き消えた。

男が目を開けた。炎が消えたのを確認した男は、女に向かって「終わったようです」と言った。

祈りを捧げ続けていた女も目を開けた。炎が消えた岩の上には何も残っていない。花嫁の身体は、骨さえも消えてしまった。岩からしみ出した赤い水が溢れ出ているだけである。

花嫁は神の元へ旅立ったのだ。儀式は、無事に終わった。

「これで……良かったんですよね」男が、不安げに訊いた。

女は答えない。これで良かったかどうかは、女にも判らない。

花嫁は、今年十四の歳になったばかりだ。花嫁としては適齡だが、神の元へ旅立つには、あまりにも早すぎる歳である。何事も無ければ、あと四十年は生きられたであろう。その四十年という時を、女たちは奪ってしまった。これで良かった……などと、言えるはずもない。

だが女は、儀式を続けるしかない。

たとえ、花嫁の未来を奪うことになろうとも。

たとえ、花嫁に恨まれることになろうとも。

神へ花嫁を捧げる儀式――。

この儀式を、女はずつと行っている。はるかな昔……三百年も前から。

女は、三百年の時を生きてきた。その姿は、三百年前の若い姿のままだ。女は歳を取ることには無い。永遠に。

三百年前、空から降ってきた異形の者を食べた女は、不死の身体となった。

空から降ってきた者は『神』で、その身体を人が口にするなど許されない。女は神の逆鱗に触れた。これは、神が与えた呪いだ――女は、そう思っている。

不死の呪いは、女だけにかけられたものではなかった。女の子供も、孫も、子孫も、不死の呪いを受けていた。だが、女の不死と、子供たちの不死には、大きな違いがあった。女は、身体も心も老いることが無かったが、子供たちは、心は不死だが、肉体は不死ではなかったのだ。身体は古い、あるいは大きな傷を負い、やがて滅ぶ。それでも、その心は滅びない。肉体を失っても、魂は残り、永遠に現世を彷徨い続ける。

女は神の逆鱗に触れた。神を怒らせた者は、神の世界へ受け入れてもらえない。女の血を受け継ぐ者もまた、決して、神の世界に受け入れてもらえない。神の世界に拒まれた者は、現世に留まるしかない。故に、女とその子供たちは、永遠に、この現世から離れられない。

これが、女とその子供たちが不死である理由だ。

女はまだ良い。肉体も精神も不死だ。普通の人間として暮らすことができる。

だが、女の子供たちは、完全な不死ではない。肉体は滅び、魂のみが永遠に現世を彷徨う。その苦しみがいかなるものか、女にも想像がつかない。永遠の苦しみ……これほど恐ろしい呪いがあるだろうか。

だが、ひとつだけつ。

その呪いから逃れる方法がある。子供たちが、神の世界へ受け入れてもらう方法がある。

それが、神の花嫁となることだ。

神の花嫁となれば、その罪は許され、神の世界へ旅立つことができる。肉体も魂も、この世から消えることができる。決して、彷徨うことは無い。

この方法が、本当に子供たちのためになっているのか、女にも判らない。神の花嫁になるのは、子供たちが初潮を迎えた時——せいぜい、十四・五歳だ。つまり、子供たちがこの世界で生きることができるのは十数年だけだ。それは、あまりにも短い時間だ。

だが、子供たちが神の元へ旅立つ方法は、神の花嫁になるしかない。花嫁になることを拒めば、その先に待つのは、永遠の苦しみだけだ。

だから女は、神に花嫁を捧げる儀式を、三百年もの長い間続けてきた。これからも続けるだろう。それが、女にできる唯一の贖罪だ。神に対する贖罪ではない。女の犯した罪により、生まれながらに神の不当な呪いを受けてしまった子供たちへの贖罪だった。

この儀式をやめることはできない。儀式は子供たちへの贖罪だが、同時に、神の怒りを鎮めることにもなっている。一度、儀式を行わなかったことがある。もう、百年以上も前のことだ。そもそも子供が生まれなければ呪われることもない——そう考えた女は、血筋を絶つことにしたのだ。しかし、うまく行かなかつた。花嫁を差し出さなかつたことが神の怒りに触れたのだろう。村は大きな災厄に見舞われ、村人の半数が死んだ。

儀式は続けなければならぬ。子供たちを永遠の苦しみから救うために。村で暮らす人々の暮らしを護るために。神の怒りを鎮めるために。

神の呪いを、解くために。

神の呪い——。

女は、ときどき思う。

これは本当に、神の呪いなのか。

あの時、空から落ちて来たのは、本当に神だったのか。

あの時、女は飢えていた。何日も雨が降らず、食糧は底を突き、多くの村人が死んだ。女も、死ぬのは時間の問題だった。神が空から落ちて来たのは、そんな時だった。

女は、ただ生きるために、空から落ちてきた者を口にした。

それが、本当に罪なのか。

生きるためにしたことを罪とし、罪を犯した本人だけでなく、その子、孫、子孫にまで永遠の罰を与える——そんな存在が、本当に神なのか。

あれは神などではなく——悪鬼の類ではなかったのか。

女には、判らない。

「——みや子様、そろそろ戻りましょう」

男が、女に向かって言った。

だが、女はそれに応えず、ただ花嫁の消えた虚空を見つめて立ち尽くす。

「……みや子様？」もう一度言う。

ようやく、女は我に返った。

だが、男の顔を見て、不思議そうに顔を傾ける。「みや子……それは、誰？」

女の言葉に、今度は男が不思議そうに顔を傾けた。「何を言っているのです？ みや子様」

——みや子……そうか。私は、みや子という名だったか。

女は目を伏せ、小さく笑った。自分の名を忘れるなど、どうかしている。

だが、それも仕方がないかもしれない。女はもう、三百年も生きている。それは、人にとっては途方もなく長い時だ。身体も心も老いることは無いが、疲弊はしていく。いつまで自我を保っていられるのか、判らない。

それでも。

「……帰りましょう」

女は顔を上げ、そして、儀式の場を去った。

☆

女は思う。

私はいつか、全てを忘れてしまうだろう。

自分の名前も。

自分が何者であるかも。

儀式を行う本当の理由も。

自分が犯した罪さえも。

だが、それでも。

この儀式は、続けなければならない。

犯した罪を償うために。

神への贖罪ではない。

我が子たちへの贖罪として。

罪なき子供たちを、一人でも多く、永遠の苦しみから救い、導くために。

私は、儀式を続けよう。

たとえ全てを忘れても、この儀式だけは続けよう。

いつか私が、私の子供たちが。

本当の『神』の元へ旅立つ、その日まで――。

枇杷の樹

美羽ばあさんは、若いころから村で果物を栽培してきた。

羽生蛇村名産の果物はなんとと言ってもイチゴだが、ばあさんは主に桃や柿などの果樹を栽培していた。長年果樹農家を続けてきたため、他にもリンゴやレモンなども栽培したことがあるが、特に力を入れて来たのが枇杷^{びわ}だった。ばあさんが育てる枇杷の実は甘みがまろやかで、市場では通常の三倍の値が付くほど評判だった。

ただ、それももう十年近く前の話だ。美羽ばあさんは七十を超えている。まだまだ元気だが、農家を続けるのは体力的に難しかった。ばあさんには子供がいなかったため農地は売却し、今はそのお金と年金で、穏やかな老後の生活を送っていた。

そんなばあさんが、刈割と下粗戸を繋ぐ県道の脇に枇杷の種を植え始めたのは、七十五歳の誕生日を迎えた春だった。

「——求導女様はご存じないでしょうが、昔、この道のそばには枇杷の樹が生えておりました。もう、五十年以上も前の話です」

比沙子が声をかけると、美羽ばあさんは種を植える作業を中断し、懐かしそうな声でそう答えた。

「夏の前に実をつけるのですが、それが甘くておいしくて、私が子供の頃は、毎年、実をつけるのが何よりも楽しみでした」

だが、そんな枇杷の樹が切り倒された。五十年ほど前——戦時中の話だ。

その頃、村で唯一の病院である宮田医院が日本軍の指定病院となり、さらに、当時北のにあった羽生蛇鉾山の錫を採掘するため、兵隊が多く出入りすることとなった。当時の村は今よりもはるかに閉鎖的で、村に出入りするには獣道同然の細い道しかなく、軍隊が出入りするには不便だった。そこで、軍はまず村の道路整備から始めた。都市部から村へと繋がる道路の整備はもちろん、村内の各地域を繋ぐ道も拡張された。そのため、刈割と下粗戸——当時の地名では波羅宿間^{はらやしり}の道端に生えていた枇杷の樹は、すべて切り倒されてしまったのだ。「私はこの道の枇杷の樹に想い入れが深かったため、切り倒すことに

は反対でした。私と、私の親友の二人で抗議したのですが、お国のやることに逆らえるはずもなく、まして、兵隊さんを村に呼んだのは神代家の意向でしたから。私などが反対しても、無駄でした」

当時のことを思い出したのだろう。小さなため息をつき、寂しそうに話す美羽ばあさん。ばあさんの訴えが軍や神代家に聞き入られることはなく、枇杷の樹は、すべて切り倒された。

ばあさんが枇杷農家を始めたのは、それがきつかけだった。

「今の私があるのも、全て、枇杷の樹のおかげです」ばあさんは笑顔に戻り、嬉しそうな声で続けた。「私も老い先短い身。せめてもの恩返しにと思い、こんなことを始めたのです」

そして、小さなシャベルで土を掘り、枇杷の種を植える。

美羽ばあさんが県道沿いに枇杷の種を植えることは、役場にも認められていた。ばあさんの枇杷は果物市場ではかなり名が知られている。ばあさんが植えた枇杷の樹が大通りに建ち並べば、村の観光地になる——役場はそんな風に考えたのかもしれない。この村は昔から閉鎖的で外部の者を拒絶する傾向にあるが、最近はその考えも変わりつつある。村特有の風習や名産品などを村外にアピールし、観光客を呼んで村おこしをしよう、という動きが、少しずつではあるが始まっていた。

かつてこの道に生えていた枇杷の樹のことは、比沙子もよく覚えている。五十年前など、比沙子にとっては昨日の出来事のようなものだ。初夏になると、黄金色の実をつけた樹が立ち並ぶ。それが夕陽に染まる風景は何とも言えない美しさだ。その風景を見ながら、学校帰りの子供たちと枇杷の実を食べることを、比沙子も毎年の楽しみにしていた。もちろん、若い頃の美羽ばあさんと一緒に食べたこともある。ばあさんが種を植えることで、またあの頃のような光景が戻ってくるのなら、比沙子も嬉しい。

しかし、それにはひとつ問題がある。

枇杷の樹は、種を植えて実がなるまでの時間が長い。一般的に、十年以上と言われている。高齢の美羽ばあさんが実がなるのを見届けるのは難しいかもしれない。

そんな比沙子の気持ちに気が付いたのか、ばあさんは、「……まあ、私が枇杷の実を食べることはないでしょうが」と言つて笑い、そして続けた。「幸い、枇杷は放つておいても勝手に育ちますから、私が死んでも、いつか実をつけるでしょう。その風景を村の若い者が見てくれるのならば、それだけで、私は満足です」

「おばあさん……」

「ただ……ひとつだけ、求導女様をお願いしたいことがあります。私が死んだ後、枇杷が実をつけたら、そのいくつかを、私の墓に供えてくれませんか？」

死ぬなんて、そんな寂しいことは言わないでください——とは、言えない。人は老いて死ぬ。それが当たり前のことであり、死なない人間の方がおかしいのだ。

だから比沙子は、「判りました」と、力強く頷いた。

美羽ばあさんは満足げに微笑むと、「さて、今日はこれくらいにして、暗くなる前に帰るとします」と、腰を上げた。

「はい。どうか、お気をつけて」

「ありがとうございます」

ばあさんは深く頭を下げた。比沙子も教会へ戻ろうとして、ふと、足を止める。

そして、帰り支度をする美羽ばあさんを振り返り「……おばあさんの親友という方は、どうされたんですか？」と、訊いた。

「はい？」

顔を上げたばあさんは、比沙子を見て小首をかしげた。

「五十年前、おばあさんと一緒に枇杷の樹を切ることに反対したという、親友の方です」

ばあさんは「ああ……」と言つて、顔を伏せた。「それが、よく覚えていないのですよ。ある日、突然村からいなくなつてしまいました……子供のころからずっと一緒だったはずなのですが、今では顔も、名前も思い出せないのです。いやはや、歳は取りたくないものですね」

「そう……ですか」

「どこかで元気に暮らしておればいいのですが……」
ばあさんは、遠くを見つめるような目をして、独り言のようにつぶやいた。

——あたしはここにいろよ、美羽ちゃん。
喉まで出かかった言葉を、比沙子は飲み込んだ。

☆

美羽ばあさんが生まれたのは、当時比沙子が住んでいた家の近くだった。人懐っこい性格だった美羽は、小さい頃は、「比沙子お姉ちゃん、比沙子お姉ちゃん」と、常に比沙子に付いて回るような子供だった。比沙子も、美羽のことを妹のように可愛がった。やがて美羽は歳を重ね、二十歳を迎える。永遠に歳を取らない比沙子の見た目と同年代になってしまったが、この村に住む者は、比沙子が歳を取らないことに気付かない。その頃の比沙子と美羽は、同年代の親友として過ごすようになっていた。

だが、戦争がはじまり、村に日本軍の兵隊が出入りするようになる。比沙子は軍に囚われ、宮田医院の地下牢に監禁されることになる。解放されたのは終戦後何年も経ってからだ。美羽はすっかり歳を取り、もう、比沙子のことを覚えていなかった。美羽が悪いわけではない。村全体が、そういう仕組みになっているのだから。

どんなに仲良くなった人も、やがて歳を取り、その関係は変わってしまう。

だから。

千年以上生き、数えきれない人と出会いと別れを繰り返してきた比沙子だが、『生涯の友』と呼べる人は、一人もいなかった。

☆

その後も美羽ばあさんは、道端に枇杷の種を植え続けた。時折、比沙子をはじめとした村人が手伝うこともあるが、基本的に、ばあさん

一人で作業していた。

美羽ばあさんに身よりはない。嫁入りすることもなく、婿もとらず、子供も設けず、ずっと、一人で暮らしてきた。その理由は本人以外判らないが、比沙子には、思い当たることがあった。

比沙子と美羽は、親友として数年を過ごした。当時は年頃の娘らしく、恋の話もした。美羽は当時、ある若者に想いを寄せていたのだ。しかし、その恋が実ることはなかった。若者は、神代家の遠縁の者だったのだ。結婚は家柄がものを言う時代。まして若者は、神代の本家に次期当主として婿入りすることが決まっていた。最初から、かなわぬ恋だったのだ。若者が婿入りした後も、美羽は想いを捨てられずにいたのだろう。縁談の話は何度もあったが、全て断ったようだ。

美羽は、生涯独身を貫き通した。

☆

美羽は、一年ほどかけて、道端に枇杷の種を植えた。その頃には、最初に植えた種が芽を出していた。

何度か季節が廻った。枇杷の樹は何事もなく、すくすくと育っていった。

美羽が天寿を全うしたのは、枇杷の樹が子供の背丈ほどになった頃だった。比沙子が予想した通り、枇杷の実がなるのを、美羽が見届けることはなかった。

葬儀は比沙子を中心になって行った。身寄りのない美羽だったが、多くの村人が集まり、天寿を全うした美羽を祝福した。

☆

さらに季節が巡った。枇杷の樹はどんどん大きくなり、やがて、黄金色の実をつけるようになった。美羽が種を植えてから、わずか五年後ことだった。美羽の思いが樹に宿り、通常よりも早く実をつけたのだろうと、村人は噂した。

☆

美羽の墓には、毎年初夏になると枇杷の実が供えられる。生前の約束通り比沙子が供えているものもあるが、それだけではない。村の少女が供えるものが、多くある。

これには理由があった。

枇杷の花言葉に、『密かな告白』というものがある。枇杷は冬を迎える前に白い花を咲かせ、甘く優しい香りを漂わせるが、花自体は非常に小さく、目立たないのだ。それが、花言葉の由来だろう。

その花言葉がきっかけになったのだろうか。いつの頃からか、美羽が植えた枇杷の樹には、ちよつとしたウワサが広まっていた。冬、枇杷の花に好きな人を思い浮かべながら祈りをささげ、初夏、その花の実を美羽の墓に供えると、想い人に気持ちが伝わる、というのだ。

なぜ、こんなウワサが広まったのか、比沙子にも判らない。美羽に密かな想い人がいたことは、比沙子以外に知る人はいないはずだ。比沙子は誰にも話していないし、恐らく美羽も、生涯秘密にしていたはずだ。

それでも。

今日も、恋する少女が一人、枇杷の実を供える。

身寄りのない美羽だったが、きっと寂しくないだろう。

幻視

ある日の夕方。

上粗戸から教会への帰り道、眞魚教の求導女・八尾比沙子は、子供たち数人が公園に集まっているのを見た。特に気に留めることもない光景で、普通ならば、「暗くなる前にお家に帰るのよ?」と声をかけるくらいなのだが。

「——ホントだよ! ホントに、秀幸君や、真奈美ちゃんが見ているものが、見えるの!!」

そんな声を聴いて、比沙子は足を止めた。

公園にいたのは、羽生蛇村幼稚園に通っている子供たちだ。六人の男児女児が輪になり、一人の女児を囲んでいる。その、輪の中にいる女児——さきほど、他の子供が見ているものが見えると言ったのは、この近所に住む四方田家の一人娘・春海ちゃんだ。小さなてのひらをぎゅつと握りしめ、泣きそうな顔でうつつたえている。しかし、他の子供たちは春海の言うことを信じていないようだ。

「ウソだ。そんなもん、見えるはずない!」春海の家隣に住む、ひとつ年上の秀幸君が言う。

「そうよ」と、秀幸君の妹の真奈美ちゃんが同意した。「春海ちゃん、ウソつく子は、『特別な病院』に閉じ込められるんだよ? お母さんが言ってたもん」

「春海、ウソなんてついてないもん! ホントにホントに、見えるんだもん!!」

「じゃあ、何が見えたのか言ってみろよ!」春海を挑発するように言う秀幸君。嘘をついているんだから何も言えないだろう、と、高をくくっているようだ。

しかし、春海は、「いいよ?」と、得意げに頷き、続けた。「秀幸君は、昨日、台所の棚の奥にあったクッキー、お母さんに内緒で、一個食べたでしょう?」

そう言われ、秀幸君は「……え?」と、表情をこわばらせた。しかしすぐに、「ウソだ! クッキーなんて食べてない!!」と、否定する。

もつとも、その慌てぶりから察するに、春海の言うことはウソではないようだ。

春海は、今度は真奈美ちゃんを見た。「真奈美ちゃんは、その日の朝、おねしよをしちやってお母さんに怒られてた！」

「ち……ちがうもん！ 春海ちゃんウソつかないで!! 真奈美はもう年長さんだから、おねしよなんてしないもん！ あの日は、寝る前にジュースを飲んじやって、それに、お兄ちゃんが怖い話をするから、夜にトイレに行けなかったただけだもん！」

つまり、これも本当のことのようだ。

その後も春海は、他の子供たちの行動も言い当てていく。「おじいちゃんが大切にしていた庭の木の枝を折った」とか、「友達に借りた絵本にジュースをこぼした」とか、子供ならば誰でも経験がありそうなことばかりだが、言われた子たちはみんな青ざめ、そして、「ウソだ！」と、むきになって否定する。どうやら、春海の言っていることはすべて当たっているらしい。

春海がこっそりみんなのことを物理的な方法で覗き見していた可能性も無いわけではない。だが、それよりも春海が言う「他の人が見ているものが見える」と考える方が現実的だ。常識的に考えれば荒唐無稽な話だが、この村では起こりうることだった。

幻視――。

村に古くから伝わる、他人の視界を覗き見る特殊能力だ。本来は屍人が使う能力だが、異界で赤い水を摂取すれば、生きている人間にも使うことができる。

もつとも、異界で赤い水を摂取した人間は、基本的に現世に戻ることはできない。幻視は屍人化の兆候であり、屍人は、異界に留まり常世へ旅立つ準備をしなければいけない存在なのだ。

だが村では、幻視の能力を持って生まれる子供も少なくない。それらは本来の幻視のように鮮明なものではなく、自分の意思によって行えるものでもないため、ほとんどの場合現実だとは思わず、夢を見たと思うはずだ。そして、大抵は物心がつく前に能力は消え、普通に暮らすことができる。

しかしまれに、大きくなってもこの能力が消えない場合もある。もしかしたら春海は、そんな特殊な例なのかもしれない。

「ウソだウソだウソだ！ 春海ちゃんはウソツキだ!!」

秘密をばらされて恥ずかしいのだろう。秀幸君と真奈美ちゃんは必死で否定し、春海をウソツキ呼ばわりする。他のみんなも秀幸君にならない。「ウソツキ！ ウソツキ！」と、手を叩きながら煽る。

「春海はウソなんてついてない！ ついてないもん!!」

春海も、必死になって否定する。

「うるさい！ ウソツキはこうだ!!」

秀幸君は、両手で春海を突き飛ばした。尻餅について転ぶ春海。秀幸君は、更に拳を握って振り上げた。

「コラ！ 秀幸君！ なにしてるの!!」

比沙子は、大きな声で言って、公園に入った。

「あ！ きゅうどうめさま！」

秀幸君は振り上げた拳をどうしようか迷った挙句、背中に隠した。

比沙子はみんなを見回して、「春海ちゃんをいじめちゃダメでしょ」と、強い口調で言った。

「いじめてないもん。ただ、春海ちゃんがウソをつくから……」と、真奈美ちゃん。

「春海はウソなんてついてない!!」春海はあくまでも譲らない。

「何を！」秀幸君が、また拳を振り上げる。

「やめなさい！」

比沙子は、普段は絶対に出さないような大きな声で一喝した。効果はテキメンで、子供たちは驚き、その場に立ち尽くした。

比沙子は、大きく息をついた後、秀幸君を見た。「秀幸君？ 春海ちゃんは、本当に、ウソをついているの？ ウソツキは、『特別な病院』に閉じ込められるんですよ？ だったら、その病院に入れられるのは、春海ちゃんと秀幸君、どっちかしら？」

「そ……それは……」秀幸君は力なくうなだれた。

比沙子は春海を見た。「春海ちゃんも、ウソはついてなくても、お友達が嫌がることを言っちゃ、ダメでしょ？」

春海はしばらく黙っていたが、やがて小さく頷いた。

比沙子は満足げに頷き、そして、につこりと笑った。「じゃあ、みんなでごめんなさいをして、仲直りしましょう」

春海と秀幸君は少しためらっていたものの、やがて、「ごめんなさい」と、謝り合った。真奈美ちゃんのおねしよには触れないでおいた。「じゃあ、もうすぐ暗くなるから、今日はもう帰りなさい」

そう言うと、子供たちは「はい」と手を上げて、走って公園から出て行った。

「あ、春海ちゃん？」

比沙子は春海を呼び止めた。

呼ばれた春海は、ビクンと身体を震わせ、恐る恐るという感じで振り向いた。

「家まで送るわ。一緒に帰りましょう」

優しい口調で言ったが、春海は身体を強張らせたまま、わずかに首を横に振った。「大丈夫。一人で帰れ、ます」

「そう？ でも、春海ちゃんのお話、聞きたいし。ね？」

春海は、どう答えたらいいのか迷っているような顔だ。どうも、比沙子のことを怖がっているようである。それは、さつき怒られたから、という訳でもなさそうだ。春海の怖がり方は、怖い大人を前にしたようなものではなく、例えるならば、子供を『特別な病院』に閉じ込めようとしている大人を前にしたような怖がり方だ。怯えている、と言ってもいいかもしれない。

春海の両親は、多くの村人たちと同じく真魚教の信者である。春海が生まれた時には洗礼を行ったし、毎週教会にも足を運んでくれている。知らない間柄という訳ではない。だが春海は、物心ついた頃から、比沙子のことを怖がるようになっていた。村で比沙子は、基本的には優しい求導女で通っており、子供たちから怖がられるようなことは無いはずだ。もしかしたら春海は、比沙子の心の奥底に潜む闇の部分に気が付いているのかもしれない。

とはいえ、今の比沙子はあくまでも優しい求導女の比沙子だ。春海は、しぶしぶという感じではあるが、頷いた。

「じゃあ、帰りましょう」

比沙子は、春海の手を取った。

「——他の人が見ているものが見えるのって、ウソじゃないんだよね？」

帰り道、比沙子は改めて訊いてみた。春海は、コクンと頷いた。

「どういう時に見えるの？」

春海は、少し迷った後に、「わかんない」と言った。「眠っている時に見えることもあるし、起きていて、目を閉じたら見えることもあるの。でも、ぜったいに見えるってワケじゃなくて、ほとんどは、見えないの」

つまり、自分ではコントロールできないのだろう。

「そっか……じゃあ、ちよつと、試させてくれる？」比沙子は立ち止まった。

「え？」春海は不思議そうな顔で比沙子を見上げる。

「目を閉じてみて」

そう言うと、春海は素直に目を閉じた。

「そのまま、あたしの方に意識を飛ばしてみて」

「いしきを……とばす……？」

「うーんと、そうね……あたしが『いる』と思う方向を、頭の中に思い浮かべてみて」

「……はい」

春海は、言われた通り意識を比沙子の方に向けているようだ。

「何が見える？」しばらくして、比沙子は訊いた。

「……真奈美ちゃんと、手を繋いで歩いている」

比沙子は目を閉じ、素早く周囲に意識を飛ばした。千年以上もの長い間、数えきれないほど異界と現世を行き来している比沙子は、赤い水の影響を受けない現世においても、幻視の能力を使うことができた。

周囲にいくつかの気配を見つけた。春海の言う「真奈美ちゃんと手を繋いで歩いている」のは秀幸君だろう。春海の背後、ここからかなり離れた場所に、その視点を見つけた。春海から見て、比沙子のいる方向とは真逆だ。

「あ……」と、春海が声を上げた。「今度は、部屋でテレビを見ています」

比沙子は素早くその視点を探す。今度は、春海から見て右手側だ。少し離れたところに小さな家がある。恐らくその住人だろう。

その後も春海は、目を閉じて意識を集中しようとしているが、なかなか比沙子の視点を捉えることができない。どうやら春海は、幻視の能力を持つてはいるものの、うまく使いこなすことはできないようだ。

「ありがとう。もういいわよ、春海ちゃん」比沙子は優しく言った。

春海は目を開けた。「……きゅうどめさま。あたし、ウソはついていないです」

「もちろんよ。春海ちゃんはウソなんてつかない。それは、判っているわ。でもね、このことは、他の人には言わない方がいいわね」

「……なんで？」

「これはね『幻視』って言って、すごく、特別な力なの。他の人には使うことができないから、みんな、怖がつちやうわ。それにね。誰にだって、他の人に見られたくないことや、知られたくないことがあるの。春海ちゃんだって、そうでしょ？」

「……はい」

素直に頷く春海。いい子だ。この村に生まれなければ、幻視なんて呪われた能力が備わることもなく、普通の子供らしく、たくさんの友達ができたはずだ。

比沙子は春海の頭をなで、そして、その日は家まで送ってあげた。

それから比沙子は、折につけ春海のことを気にかけるようにしてい

た。だが、その日以降、公園や広場などで春海の姿を見かけることはほとんどなくなった。毎週欠かさず来ていた教会での礼拝式にも姿を見せない。両親をはじめ、秀幸君や真奈美ちゃん、他の友達などに話を聞くと、春海は幼稚園が終わった後や休日などでもずっと家に引きこもったままで、外に出て他の子供たちと遊ぶことが無くなったという。

あまりよくない傾向だ、と、比沙子は思った。春海のように幻視の能力を持った者が村に現れることは少なくないが、その多くは、痛ましい結末を迎えている。

幻視の能力を持って生まれた者は、自分の意思で操ることができない場合がほとんどだ。だから、不意に他人の視点が現れる。春海のような子供ならば、幻視のことを周囲の人に話してしまうこともあるが、ある程度分別のつく年齢の者の場合、黙っていることがほとんどだ。誰にも相談できず、一人で抱え込んでしまう。そのうち能力が消えればよいのだが、消えない場合、ずっと他人の視点を見続けることになる。ずっと、誰かの生活を覗き見している気分になる。やがてそれは、自分も誰かに見られている、という疑心暗鬼に変わるのだ。そして、自分で自分の心を追い詰め、精神を病む。行きつく先は宮田医院の地下牢への隔離だ。比沙子はこれまで、そんな哀れな村人たちを、何人も見てきた。このままでは、春海もそうなってしまうかもしれない。なんとかしなければ。誰か、幻視のことを気軽に相談できる相手がいればいいのだが。あたしではダメだ。春海は、あたしのことを怖がっている。どんなに上辺を取り繕おうとも、あの子は、あたしの正体を見ぬいている。決して、あたしを信用しないだろう。では、他に適任がいるだろうか？

数日後。

比沙子は、春海と一緒に、村の西端にある西ヶ原に来ていた。幼稚園が終わり、帰宅したところを、比沙子が誘ったのだ。

「……あの、きゆうどうめさま」不安げな表情で、春海が言う。「あたし、お父さんお母さんから、西ヶ原の方で遊んじやいけませんって、言われてます」

「そう？ 大丈夫よ。ちゃんと、許可はもらってるから」

「……………」

「あ、でも、他の子には内緒にしておいてね。二人だけの秘密だよ？」

「……なんで、ですか？」

「春海ちゃんに新しいお友達を紹介してあげようと思うの。その娘もね、幻視の能力が使えるのよ」

「——え？」

「だから、きつと、春海ちゃんと仲良くなれると思う。でもね、その娘のことは、幻視の能力以上に、他の人に話しちやいけないの。もし、話しちやったら……」

「……話しちやったら？」

「うふふ。別にどうもならないから、安心して。でも、やっぱりその娘のことは、秘密にしておいてね」

「……判りました」

どうにも不信感をぬぐえない様子の春海だが、帰る、とは言わず、素直について来る。

「その娘はね——」と、比沙子は話を続けた。「ちよつと理由があつて、生まれてからずっと、家の中にいるの。外に出ちゃ、いけないのよ」
「えつと……病気とか、ですか？」

「まあ、そんなところね。だから、お友達がいらないの。春海ちゃんがお友達になつてあげれば、きつと、喜ぶと思うな」

やがて、道の先に大きな屋敷が見えてきた。この村で最も大きな屋敷、最も大きな力を持つ家・神代家だ。正面の門は固く閉ざされている。その前を通り過ぎ、比沙子は屋敷の裏に回った。しばらく歩いたところで。

「この辺でいいかな。春海ちゃん。ちよつと、待っててね」

比沙子は目を閉じ、意識を屋敷の中へ送った。すぐに、目的の視点を見つけた。

「……美耶子様、聞こえますか？ 美耶子様？」

比沙子は、視点の主に呼びかけた。幻視の能力は、相手の視覚だけでなく、聴覚も共有することができる。もちろん、こちらが相手を幻視しているだけでは、こちらの声は相手には聞こえない。だが、恐らく相手は、すでにこちらを幻視しているはずだ。

つまり、能力を持つ者同士が互いを幻視し合えば、携帯電話のように話すことができるのだ。

《比沙子……？ やっぱり、比沙子だ。もう！ ずっと来てくれないから、あたしのこと忘れちゃったのかと思ったよ！》

視点の主が返事をした。春海よりも少し年上の少女の声。神代家の次女・美耶子だ。神の花嫁となることを宿命づけられ、生まれてからずっと、神代家の奥にある座敷牢に囚われている。その存在は極秘とされ、知っているのは神代家の一部の者と、求導師や宮田医院の院長など、村の有力者のみだ。比沙子も求導女という立場上知ってはいるものの、簡単に会うことはできない。ただ、お互い幻視ができるため、こうやって屋敷の内外から話すことはできた。

「ごめんなさい、あまり来られなくて」比沙子は笑顔で言った。「お詫びという訳じゃないけど、今日は、美耶子様に紹介したい子がいるの」《その、隣にいる子？》

「ええ、そうです」

比沙子は幻視をやめ、春海を見た。「春海ちゃん。この前やったみたいに、目を閉じて、意識を、この壁の向こうに飛ばしてみて？」

言われた通り、春海は目を閉じた。幻視能力を上手く使えない春海だが、幸い、この神代家に近づく者は滅多にいない。美耶子のいる座敷牢には、家族さえあまり近寄らない。いるのは、美耶子と、その飼犬だけだ。だから、春海でも容易に幻視することができるだろう。

「……あ」

目を閉じたまま声を出す春海。どうやら、うまく美耶子を幻視で来たようである。

「春海ちゃん、」挨拶して「

比沙子が言うと、春海は、目を閉じたまま、「こんにちは」と言った。

「美耶子様？ この子が、紹介したい子です」比沙子は、美耶子に向かって言った。「幻視の能力が使えるようなんです」

《え？ そうなんだ!? すごい!!》

「ええ。良かったら、お友達になってあげてください」

《うん、もちろんだよ！ えつと……あなた、名前は?》

春海は、少しもじもじした後、「四方田……春海です」と、答えた。

《春海ちゃんか。あたし、美耶子。ずっと一人でいるから、寂しかったんだ！ よろしくね、春海ちゃん!》

「あ……はい……よろしくお願いします」

頬を赤らめる春海。ずっと悲しげだった春海の顔に、ひさしぶりに笑顔が戻った。

☆

——それにしても。

比沙子の心の奥底で、彼女とは別の存在は、思う。

なぜ、春海は、そして美耶子は、幻視を行えるのだろうか？

村人が幻視の能力を持つことは、決して珍しくはない。しかし、それらは非常に弱い力だ。自分の意思で操ることはできず、鮮明な映像でもない。

それなのに。

春海は、幻視をうまく操ることこそできないが、かなり鮮明な映像で見えているようである。美耶子に至っては、完全に幻視の能力を操っているのだ。

ここまで強い幻視能力を持った子供が、同時期に二人も生まれたことなど、今まででなかったことだ。比沙子が生きてきた一三〇〇年の間、一度も。

美耶子を神に捧げた時、いったい、何が起こるだろうか？

判らない。判らないが、一三〇〇年の間起こらなかったことが起こる——そんな予感がしていた。

ただ、はたしてそれが、良い結果となるのか、悪い結果となるのか、

比沙子にも、彼女の内にも、誰にも判らない。
美耶子は、今年十歳になる。
神の花嫁になる日は、そう遠くない。

海送り・海還り

羽生蛇村では、毎年冬に『海送り』と『海還り』の儀式を行っている。

旧暦の大晦日、黒装束に身を包んだ村人が、村の中央を流れる眞魚川に身を沈める。これが『海送り』だ。川の中で、村人は一年に犯した罪を悔い改め、穢れを祓い身を清めるのだ。

そして、穢れを祓い終えた村人が、年が明けると同時に岸边に上がるのが『海還り』である。岸に上がった者は神の恩恵を受けたとされ、村人から酒や料理などを振る舞われるのだった。

その年も、眞魚岩のある中州には多くの村人が集まっていた。実際に川に入る人、岸に上がった人をもてなす人、儀式を見物する人……みんな、儀式を前に気分が高揚している様子だ。海送り・海還りは、ちよつとしたお祭りのような雰囲気だ。

黒装束を着た村人——つまり、これから川に入る人は、準備運動を行っている。季節は冬。山間の村である羽生蛇村は、深夜の気温は氷点下となる日がほとんどだ。今年は雪の日が多く、例年よりさらに気温が下がっている。そんな中、凍てつくような眞魚川に身を沈めるのだ。入念に準備をしないと危険だ。風邪を引くどころの騒ぎではない。水の冷たさで心臓が止まってしまふ可能性だってある。

日付が変わる一〇分前になった。黒装束の村人たちが水辺に向かっている。だが、まだ川に身を沈めるわけではない。まずは足だけを入れ、手で水をすくい、足からふくらはぎ、腿、腹、胸、と、身体に水を擦り込むようにして、ゆっくりと時間をかけ、冷たさに慣れていく。それを何度か繰り返した後、これまたゆっくりと、川の中央へ進んでいく。海送りの儀式は寒中水泳とは違う。水に身を沈めても身体を動かすことはできない。ただ祈るだけである。流れる水はほとんど体温を奪っていく。そのため、水に入っている時間は長くとも三分と決められていた。

そして。

日付が変わる——つまり、旧暦の正月になった。冷たい川に身を沈

めていた村人が岸に上がり始めた。『海還り』の儀式の始まりだ。岸辺では、たき火、酒、温かい料理、そして、待っていた村人たちが、温かい笑顔で迎えてくれた。

「——どんどん食べて、身体を温めてください。お酒を飲むのも良いですが、時間が経つとかえって体を冷やすので注意してくださいね」

大鍋で作った料理をお椀によそいながら、眞魚教の求導女・八尾比沙子は、川から上がった村人たちに呼びかけ、料理を渡して行った。大鍋の料理は、羽生蛇村の冬の郷土料理・羽生蛇鍋である。大根やサトイモなどの根菜と鶏肉を真っ赤なスープで煮込んだものだ。この赤いスープは、赤みそと赤唐辛子を混ぜて作ったもので、美味しい上に身体の芯から温まると評判だ。夏の郷土料理である羽生蛇蕎麦とは大違いである。

「相変わらず、求導女様の作る羽生蛇鍋は身体に染み入りますなあ。わしは、これを食べるのが楽しみで、毎年儀式に参加しているようなものですから」

海還りを終え、たき火のそばで羽生蛇鍋を食べていた初老の信者が笑いながら言った。

「いつも参加していただけるのはありがたいですが、決して無理はなさらないでください」

比沙子は笑顔で答えた。この信者は間もなく五十歳を迎える。冬の寒さがどんどん身体にこたえる頃だろう。

海送り・海還りのように、真冬の川や海に身を沈める行為は、科学的に見ても健康に良いとされている。事前の準備を入念に行えば心臓まひなどの危険は少ないが、それでも、その危険性をゼロにすることはできない。歳を重ねれば、その分危険も増すだろう。

比沙子に無理をしないと言われた初老の信者は、「そうですね」と言いつて視線を上に向け、何か考えるような仕草をした後、続けた。

「しかし、私はこの儀式を行わないといけません。なにせ、一年に犯した罪が多すぎますから」

「そうなんですか？」

「ええ。食べ過ぎ、飲み過ぎ、運動不足。毎年真魚川に入って穢れを祓わないと、死んだとき常世に行けませんから」

初老の信者は肩を揺らして笑った。比沙子も口元を抑えて上品に笑う。

だが、その後。

比沙子は視線を落とすと、誰にも気づかれないような小さなため息をついた。

「そう言えば、求導女様——」

信者の声に、比沙子は視線を上げた。「はい、何でしょう？」

「求導女様は、海送り・海還りをしたことはないんですか？」

「あたしですか？ まだ無いんですよ」

「そうなんですか。求導女様が儀式を行うところを見てみたいと思っただけですが、まあ、求導女様には洗い流すような穢れは無いでしょうなあ」

そう言っ、初老の信者はまた豪快に笑う。

比沙子も上品に笑って付き合います。

そしてまた、誰にも気付かれないようにため息をついた。

ほどなく儀式は終了となったが、その後、多くの者は上粗戸の公民館に移動し、もてなしという名の宴会を続けた。

☆

その年の夏——八月三日。

村を、大きな土砂災害が襲った。

☆

異界に飲み込まれた蛭ノ塚の県道333号線で、比沙子は、赤い海の浜辺にたたずむ屍人たちを見た。

時刻は深夜〇時。海の間こうからサイレンが鳴り響く。

そのサイレンに導かれるように、屍人たちは赤い海に身を沈める。また、それと入れ替わるように、赤い海から岸へ上がる屍人たちもいる。

本物の、海送り・海還りの儀式である。

不死の呪いを受けている羽生蛇村の村人は、死ぬと、この異界へやってくる。そこで屍人となり、サイレンに導かれ、赤い海に身を沈める。罪を洗い流すために。

そして、約六時間後に再びサイレンが鳴ると、罪を流し終えた者は赤い海と同化し、完全に消滅する。神に許され、常世へと旅立ったのだ。

罪を洗い流せなかった者は岸へ上がる。その際、人型の屍人から、犬型の屍人、昆虫型の屍人など、姿が大きく変わることになる。それは、少しずつ罪を洗い流し、神の世界へ近づいている証だ。

これが、本当の海送り・海還りの儀式だ。現世で行っている儀式は、これをまねたものに過ぎない。

比沙子は、赤い波打ち際に立った。

—— 求導女様は、海送り・海還りをしたことはないんですか？

いつかの信者の言葉が頭に浮かぶ。

あの時、嘘をついた。海送り・海還りの儀式をしたことは、ある。何度も。

比沙子は、一歩ずつ、ゆっくりと進み、赤い海に身を沈める。

そして、そのまま海に身を任せた。

数時間後、再び、サイレンが鳴った。

岸へ上がる比沙子。

比沙子の姿は、海に入る前と、何ら変わらなかった。
罪は、まだ洗い流せない。

猟師

羽生蛇村の住人は、ほぼ例外なく眞魚教を信仰している。

ほぼ例外なく——つまり、例外もいる。

例えば、合石岳のふもとに住む志村一家。

志村家は、村で代々猟師を営んできた。眞魚教を信仰しない理由を、彼らは語らなかつた。無神論者という訳ではない。猟師という職業柄、彼らは山に入ることが多いが、その際、祈りを奉げるような仕事をしているのを見た者は多い。何に対して祈りを下げているのかは定かでないが、恐らく、山の神や森の神と言った存在だろう。あるいは、山そのものに畏敬の念を抱いているのかもしれない。自然や自然現象など、あらゆるものに神が宿ると考える『神道』である。日本全土に古くから根付いている考え方で、これも、宗教のひとつである。

羽生蛇村でも信教の自由は認められているため、必ずしも眞魚教の信者である必要は無い。だが、信者でない者は異端視され、村で孤立してしまうのも事実である。志村一家は、住宅街から離れた合石岳のふもとにぼつんと居を構え、村人とのかわりを避けるかのように静かに暮らしていた。だがそれは、決して村人から爪はじきにされているという訳ではない。眞魚教の信者ではない志村家だが、多くの村人から一目置かれる存在でもあつた。猟の腕が確かだからだ。

猟師の主な仕事は山に入り野生動物を狩ることだが、それだけで生計を立てられるものはまずいない。どんなに腕の立つ猟師でも不猟のときはある。特に冬は多くの動物が冬籠りをするため、姿を見かけることすらほとんど無い。だから猟師は、猟に出ないときは山で茸や山菜・木の実などを採って業者に売ったり、冬になると街へ出稼ぎに行くなどの副業をしている。最近では、普段は農業や個人商店を営んだり、工場や役場で働くなど、猟師自体を副業とする者も多くなってきた。

そんな猟師たちの重要な仕事のひとつが、害獣の駆除である。

山間に位置する羽生蛇村は、野生動物との関わりが深い。山から下りてきた獣が農作物を食い荒らすなど頻繁にあるし、時には人に危害

を加える獣もいる。熊や猪に襲われると命にかかわる。そんな獣を駆除する猟師は、いわば生活を護る存在であり、その中でも秀でた腕を持つ志村家は、村人から頼りにされる存在なのである。

志村家で猟をしているのは、家長である吾一と、その息子・晃の二人だ。

吾一は猟師となって三十年以上の古豪だ。特に熊撃ちを得意とし、仕留めた熊の数は百を超える。それは、村で熊撃ちを生業にしている猟師の中でも群を抜いた数だった。

息子の晃は、今年二十二歳になる。幼いころから父に憧れ猟師を志していたが、父から「お前は猟師に向かない」とずっと言われ続け、なかなか認めてもらえなかった。それでも、十四歳の頃より半ば強引に父について山に入り、雑用をこなしながら猟を学んだ。初めて銃を持たせてもらったのが二十歳のときだ。もともと、父に一人前と認められたというわけではない。一人で山に入ることは禁じられ、今でも父について猟をする日々だ。相変わらず父からは、「お前は猟師に向かない」と言われ続けている。その言葉通りなのか、銃を持って二年の間、晃が熊を仕留めたことは一度も無かった。

その年の秋。

山の木々が朱色に染まり、熊が冬籠りの支度を始めようかという季節、眞魚教の求導女・八尾比沙子は、合石岳の鉾山近くで、志村親子が何やら言い争いをしているのを見た。

「——あの時俺の言う通りにしていれば、あいつを仕留めることができたはずだ」息子の晃が、父の鼻先に指を突きつけて言う。「どうしてあんたは、頑なに俺の言うことを否定するんだ」

感情がむき出しの晃に対し、父・吾一は冷静だった。「だからお前

は、獵師に向かないと言うんだ」と、冷たく言い捨てる。

「返答に困ると、いつもそう言うな、親父は。俺だって、イノシシやタヌキくらいは何度も仕留めている」

息子の言葉を、父は鼻で笑った。「その程度の小物を仕留めたくらいでいい気になるようでは、やはり山に入る資格はない。偉そうな口を利くのは、熊の一头でも仕留めてからにしろ」

「俺が熊を仕留められないのは、親父が撃たせてくれないからだろうが！」

「お前に熊を撃つことはできない。お前は、熊のことを何も判っていない」

「何を!?!」

感情が高ぶった晃は、今にも手が出そうな見幕だ。そうなる前に、比沙子は二人に声をかけた。

「こんにちは、志村さん。お二人とも、何かあったんですか?」

比沙子を見る晃。その目から、父に向けていた敵意が消える。「ああ、求導女様。お見苦しい所をお見せして、申し訳ありません。ちよつと、猟で問題がありましたね。父が、あまりにも頑固なものだから、つい興奮してしまいました」

先ほどの父に対する態度から一変。晃はうやうやしく頭を下げた。

「——晃、その女に関わるなど、何度も言ったはずだ」

吾一が低い声で言った。晃とは正反対の、敵意に満ちた視線を比沙子に向けている。

「誰と話そうと俺の勝手だ」晃はまた父の鼻先に人差し指を突きつける。「親父が教会を嫌うのは勝手だがな、それを家族にまで押し付けるな。教会に行かないせいで、俺やおふくろが、村でどれだけ苦労していると思ってる」

「……………」

口をつぐむ吾一。表情が曇っている。返す言葉を見つけられないように見えた。

羽生蛇村において、眞魚教信者でない者は異端視され、時には迫害されることもある。獵師として一目置かれている志村家はそこまで

酷いことにはなっていないが、村で孤立していることは間違いない。毎週日曜の礼拝式や、冬に行う海送り・海還りなど、眞魚教が行う集会や儀式に参加しないので、村人とのつながりが薄いのだ。村では眞魚教が関係しない集会も数多い。猟友会の会合や、晃がまだ学校に通っていた頃の母親同士の集まりだ。そのような場所で、志村家の者が肩身の狭い思いをしているのは、比沙子にも容易に想像できた。特に、猟友会の会合は、晃のような若い猟師には、情報を交換したり教えを請うたりする絶好の場所だ。だが、父・吾一は、会合に参加しないどころか、そもそも猟友会に入っていないのである。「集団で猟をするのは好きではない」というのが理由だ。晃自身は父の反対を押し切って猟友会に入ったが、それでも晃は孤立してしまっているのだろう。猟師として一目置かれているのは、あくまでも父・吾一なのだから。

眞魚教を信仰しないおかげで、晃たちが村で肩身の狭い思いをしているのは確かだ。逆に言えば、眞魚教を信仰さえすれば、そんな思いをすることもないだろう。

口をつぐんだ吾一に、晃は追い打ちをかけるように続けた。「親父がなんで教会を嫌うのかは知らないけどな、この村に住んでいるなら、村の風習に合わせるくらいのことにはするべきだと思うぜ。それが集団生活つてもものだろ？ 一人で暮らしたいなら、村から出て行けばいいだろ」

「晃君、それは、言い過ぎよ」比沙子は、晃をなだめるように言う。「村に住んでいるからと言って、眞魚教を信仰しなければいけないわけではないわ。教会としても、信仰を強要したりしない。もちろん、教会に来てくれるのなら、あたしは大歓迎だけど」

晃は比沙子を見た。「ええ、ぜひ、そうさせてください」

「晃——」吾一が、怖い声で言う。「お前は、父親よりもその女の言うことを聞くのか」

吾一の言葉を、今度は晃が鼻で笑う。「今まで父親らしいことは何もしていないくせに、なにを偉そうに」

「……………」

再び口をつぐむ吾一。彼は、決して口が達者ではない。元々猟師には口数が少ない者が多いが、比沙子の知る中でも、吾一は特に無口な男だった。

やがて吾一は。

「……勝手にしろ」

吐き捨てるように言い、そして、鋭い視線を比沙子に向けた後、去って行った。

「申し訳ありません、求導女様。父が、失礼な態度を」晃は再び破顔し、比沙子に視線を戻した。

比沙子は首を振った。「いいのよ、気にしてないわ。それよりも、お父さんに対してあの言い方は、良くないわよ」

「いいんですよ。親父には、あれくらい言わないと判らない。まったく……どうして父は、あんな頑なに眞魚教を嫌うんだか」

比沙子は何も言わず、ただ、曖昧に笑うだけだった。

吾一が眞魚教を信仰しない理由に、比沙子は心当たりがあった。恐らく吾一は、比沙子の正体を知っている。比沙子が、永遠に歳を取らないことに気付いているのだ。

羽生蛇村に住む者は、比沙子が年を取らないことに気付くことは無い。これは、村にかけられた呪いのひとつだ。

だが、原因は不明だが、ときどき比沙子の正体に気付く者がいる。特に志村の一族には、昔からそういった者が多いように思う。

もつとも、比沙子の正体に気付いたからと言って、その者にどうこうできるほど、村の呪いは簡単ではない。永遠に歳を取らない女——そんなこと言っても、誰も信じてない。気がふれたと思われるだけだ。それでもしつこく言いまわると、狂人として囚われ、宮田医院の地下牢に監禁されるだけだ。恐らく、吾一にもそれが判っているのだろう。だから、声を上げて事を荒立てようとせず、教会に関わらないよう、村はずれで静かに暮らしているのかもしれない。

「ところで、どうしてお父さんと喧嘩になったの？」話題を変えるため、比沙子は晃に訊いた。

「求導女様にお話するようなことではないんですが……親父のせい

で、獲物を逃がしてしまつたんです」
晃の話によると。

二人が熊を撃つたため山に入ったのは一週間前のことだった。当初は三日で山を下りる予定だったそうで、食糧もその分しか持たなかつた。二人は熊を求めて三日間山を歩いたが、熊を仕留めることはできなかった。それは決して珍しいことではない。どんなに腕が立つ猟師でも、必ず熊を仕留められるとは限らない。むしろ、一年に一頭仕留めれば十分なため、三日程度の山入りでは、熊を仕留める方がまれだった。それに、山の獲物は熊だけではない。猪に鹿、狸に野兎などは、熊ほどではなくとも、十分な金や食糧になる。

だが、今回山に入った吾一と晃は、それらの獣を仕留めることもできていなかった。

それどころか、姿を見ることさえ無かつたのである。

このまま山を下りることはできない。晃は、山に残ることを父に提案した。持参した食料は三日分だが、不猟を察知した二日目の夜から食べる量を減らしたため、まだ一日分近く残っている。山菜や木の実などを採れば、後三日は山にこもつて大丈夫だった。吾一も、これには同意した。

それからさらに二日、二人は獲物を求めて山を歩いたが、やはり、仕留めるどころか姿を見ることさえなかつた。焦る晃に対し、吾一は冷静だった。山に入ればこんな日もある。自然を相手にすることだから仕方がない、と。だが、晃はその言葉を受け入れることはできなかった。年の瀬も近いこの時期に獲物を仕留めることができないと、生活に関わってくる。冬になると獲物を仕留めることはさらに難しくなる。山間に位置する羽生蛇村では、冬は雪に閉ざされ、山に入ることすら危険だった。このままでは年を越せないかもしれない。なんとしても、獲物を仕留めなければ。

さらに一日が過ぎた。山に入って六日目——つまり、昨日。

その日も朝早くから獲物を求めて山を歩いた二人だが、やはり、獲物の姿を見ることはなかつた。それどころか、小鳥やカラスの鳴き声

さえ聞くことも無かった。そう言えば、秋も深まった時期だというのに、昨晩は虫の鳴き声さえしなかった。山の様子がおかしい、と、吾一が言った。すぐに山を下りた方がいい、とも。晃には、父の言葉が信じられなかった。仮にも村で一番腕の立つ猟師とされている父が、六日間も山にこもって兎一匹仕留めることができなかつたあげく、山に恐れをなし、帰ろうと言うのである。眞魚教を信仰していない自分たちが村で迫害されないのは、猟師として一目置かれているからだ。このままでは、それさえも失ってしまう。晃は父の意見に猛反対し、獲物を求めてさらに山深くに足を運んだ。吾一も、さすがに息子一人を残して山を下りるわけにはいかないと思ったのか、仕方ないという顔でついてきた。

二人がようやく獲物を見つけたのは昼過ぎだった。なだらかな岩肌の斜面にできたくぼみに、熊が一頭、横になっていた。かなりの大物だった。晃たちがいる場所から二百メートルほど離れているため正確な大きさは判らないが、一般的に見かける熊よりも二回りも大きいように思える。仕留めれば、当分金や食糧に困ることはないだろう。一刻も早く仕留めたい晃に対し、吾一は冷静だった。彼はまず風向きを確認すると、熊からは見えない岩陰に身を隠し、荷をおろした。そして、銃に弾が込められていることを確認する。どうやら、ここで熊を仕留めるようだ。と、言っても、今この場から熊を撃つわけではない。彼らが持っている銃は遠射ができるライフルではなく、旧式の村田銃だ。熊を確実に仕留めるためには数十メートルまで距離を詰める必要がある。吾一の猟は、待ち伏せが基本だった。獲物が向こうから近づいて来るのを、じっと待つのである。

晃は、父のこの猟の仕方を常々疑問に思っていた。獲物の方から近づいて来るのを待つなど消極的過ぎる。そもそも熊が近づいて来るとは限らないではないか。そんな不確実な方法よりも、熊が眠っている間に近づき、仕留めた方が確実だ。晃は、それを吾一に提案した。だが吾一はそれを受け入れなかった。あくまで、ここで待ち伏せすると言う。父の頑固さを身に染みて知っている晃は、仕方なく、父に従うことにした。だが、一〇分が経ち、三十分が経ち、一時間が経って

も、熊は眠ったままだった。吾一も動こうとはしない。晃は、無性に腹が立った。ここでただ待っている間に、熊を仕留める機会は何度もあったはずだ。晃には、ただ時間を浪費しているだけにしか思えない。こちらから近づいて行って仕留めよう、と、もう一度提案した。だが、吾一は認めない。

何度かそんなやり取りをしていると、熊が首をもたげた。目を覚ましてしまった。もう、眠っている間に近づいて仕留める方法は使えない。吾一が銃を構えた。晃も、銃口を熊に向ける。熊が目を覚ましてしまった以上、父の言う通り、こちらに近づいて来るのを待ち、仕留めるしかない。

だが、熊はその場から動かなかった。盛んに鼻をひくつかせ、周囲を見回す。起き上がったかと思うと、その場をうろろくと歩き回る。

晃はどうすべきかを考えた。父は、あくまでも熊がこちらに近づいて来るのを待つて撃つらしい。しかし、熊がこちらに向かって来るかどうかは判らない。もし反対側に移動したら、逃がしてしまう可能性もある。晃は、自分がおとりとなつて熊を誘導することを提案した。熊の前に出て行っておびき寄せ、吾一に仕留めさせるのだ。あるいは、反対側に回り込み、挟み撃ちにする方法もある。どちらにしても、ここでじつと待つよりは、熊を仕留める確率が高いはずだ。だが父は、黙れ、と言っただけだった。話を聞く気も無いらしい。はらわたが煮えくり返る思いだったが、なんとかこらえ、父を説得してみた。もちろん、父は自分の考えを曲げようとはしない。

そうこうしているうちに、熊が動き始めた。晃が危惧した通り、熊は、晃たちがいる場所とは反対側、岩の斜面を登り始めたのだ。

晃は、すぐに熊の後を追おうとした。六日間も山を探索してようやく見つけた獲物だ。ここで逃がすわけにはいかない。

だが吾一は、銃を下ろすと、銃から弾を抜き取り、帰るぞ、と、短く言った。信じられなかった。まだあの熊を仕留めることはできるのに、それを放棄すると言うのだろうか。当然のごとく晃は猛反対したが、やはり、父は訊く耳を持たなかった。勝手にしろ、と言い残し、荷物をまとめて斜面を下りて行った。晃は父を殴りつけたい衝動に

駆られたが、そんなことをしている間に熊に逃げられてしまう。晃は熊の後を追った。しかし、岩場の斜面は晃の思っていた以上に登りにくく、対して、熊は苦にすることも無くすいすいと登って行く。引き離される一方だった。やがて熊の姿は、山の稜線に消えた。間もなく陽が暮れる。食料もわずかしが残っていない。晃には、これ以上熊を追う術は無かった。悔し紛れに地面に転がっていた小石を蹴り上げる。やはり、熊が眠っている間に近づいて仕留めるべきだったのだ。逃げられたのは、全て父のせいだ。

その日は父に対する怒りでろくに眠れるまま夜を過ごした晃。夜明けと同時に山を下り、そして、鉾山の近くで父と会い、口論になっていたところに、比沙子がやってきた、という訳だ。

「本当に、父の頭の固さには困ったものですよ」晃は、忌々しげに言った。「俺の言う通りにしていれば、絶対に、あの熊を仕留めることができていたはずなんです。求導女様も、そう思うでしょう？」

比沙子は、うーんと唸るだけだった。長年この村に住んでいる比沙子だが、猟に関してはまるで素人だ。吾一と晃、どちらの方法が正しかったのかなど、判るはずもない。話を聞く限り晃の言うことは正しいようにも思えるが、所詮は本人の主張なので、どこまで信じていいのかは判らない。

「……まあ、なんにしても、喧嘩は良くないわよ？ お父さんにはお父さんのやり方があるんだし。それに、お父さんが村で一番の猟師だというのには確かなんだから。あまり反発せず、学べることは学んだ方がいいと思うけど」

比沙子がそう言うと、晃は露骨に表情を歪めた。「親父のやり方は古いんですよ。昔からの猟の方法にこだわり、別の方法を探ろうともしない。もっと効率よく獲物を狩る方法があるはずなのに。新しいことに挑戦する勇気がないんです。ああいうのを、老害と言うのでしよう。まあ、見ていてください。俺は俺のやり方で熊を仕留め、すぐに親父以上の猟師になって見せますよ」

比沙子は肩をすくめた。いつの時代も、年長者と若者が対立する図

式は変わらない。そして、晁のように年長者を強く批判する若者ほど、自分が歳を取ると「最近の若い者は——」と言いだすのだ。

その後も、しばらく晁の愚痴に付き合った比沙子。不満をぶちまけて気が晴れたのか、晁は満足げな表情で家路についた。もともと、家に帰って父の顔を見ると、また喧嘩になるかもしれない。比沙子は小さくため息をつき、教会へ戻る道を歩いた。

村で大きな騒ぎが起こったのは、それが三日後のことだった。

早朝。山へ山菜取りに出かけた若い姉妹が、熊に襲われたのである。

姉妹は山菜取りに夢中になり、熊の接近に気付くのが遅れた。姉が気付いた時には、熊はすでに数十メートルにまで近づいていた。姉は妹とともに走って逃げたが、それがいけなかった。熊は、本能的に逃げる者を追う。そして、その足は自動車並みに早い。妹は何とか逃げることができたが、姉は逃げることができなかった。姉が熊に引き倒される。助けを求める姉だが、妹には何もできなかった。妹は、泣きながら逃げた。

妹は近くの民家に逃げ込み、そこから警察に通報された。そして、駆けつけた警官と共に、熊に襲われた現場へ戻った。

姉妹が山菜取りをしていた場所は、それほど山深い場所ではなかった。蛇ノ首谷にある折臥ノ森付近。羽生蛇鉾山やダム建設現場よりも浅い場所だ。近くには鉾山で採れた錫を選鉾する工場もあり、人通りは決して少なくない。そんな場所まで熊が下りて来ることは極めてまれだ。

姉の姿は無かった。代わりに、べっとりした血が地面に線を引いていた。血の跡は、茂みの中に消えている。熊が娘の身体を引きずって行ったのは明らかだった。

警官はしばらくどうするべきか考えたが、追うのは危険だと判断した。警官は熊や山に関する知識に乏しい。猟友会に連絡し、猟師やハ

ンターが来るのを待った方がいい。妹は泣き崩れたが、どうすることもできなかつた。

すぐに各所に連絡され、人が集められた。村の一大事と言うことで、猟師やハンターだけでなく、神代家や教会、宮田医院の院長先生など、村の有力者も集まった。その中には、比沙子と志村父子の姿もあった。

娘が襲われた現場を確認した猟師たちは、一様に首をかしげた。娘のものと思われる血の跡が、茂みの中に消えている。熊が娘を襲い、その身体を引きずって行ったと思われるが、なぜそのような行動に至ったのが判らないと言う。

羽生蛇村近辺に出没する熊はツキノワグマだ。熊の種類の中では小柄な方で、性格は臆病。警戒心が強く、人間の気配を感じると逃げて行くことが多い。もちろん、羽生蛇村をはじめとした多くの山間地域で、人がツキノワグマに襲われた事件は多くある。それらは、人と熊双方が接近に気付かず、突如遭遇してしまったため、驚いた熊が攻撃行動に出てしまったためである。熊の方から人に近づいて襲うことはまず無い。

また、ツキノワグマは雑食性ではあるが、主に食べるのは木の実や果実などの植物だ。あるいは、アリやハチなどの昆虫も好んで食べる。動物の肉を食べることもあるが、鹿や猪などの死骸を食べるのがほとんどだ。生きている動物を襲って食べることは、まず無い。

だが、今回村に現れた熊は、山菜取りに夢中になっていた娘を襲い、茂みの中に引きずり込んでいる。食用に持ち帰ったとしか考えられないのだ。ツキノワグマがそのような行動をしたなど、聞いたことがない、と、猟師たちは口をそろえて言った。

ただ、熊は学習能力が高い生き物でもある。なんらかの理由で人の肉の味を知った熊が、人を襲って食糧とすることを覚えた可能性も、考えられないことはない。

何にしても、この場に大勢でいるのは危険だった。熊はまだ近くにいるかもしれない。村人は一旦その場を離れ、現場近くにある選鉱所の休憩室を使わせてもらい、これからどうするかを話し合うことにし

た。

妹の話によると、熊は二メートルを超える大物であったらしい。もつとも、恐怖に駆られた人の目はあまりあてにはならない。このような場合は、しばしば相手を大きく見誤るものだ。猟師たちは一・五メートルから一・七メートルくらいと推測したが、それでも大物であることは変わりない。

不意に、志村晃が、「あの時の熊だ！」と叫んだ。その場にいる多くの者が何を言っているのか判らなかつたが、父・吾一と、比沙子にだけは、晃が何を言わんとしているのかが判つた。

晃は、先日の猟での出来事を話した。六日間山を渡り歩いたが獲物を獲ることができず、ようやく山肌に大きな熊を見つけたが、父が消極的な猟法を用いたため、逃がしてしまった。熊の体長から見ても、あの時の熊で間違いない。娘が熊に襲われたのは父のせいだ、と。

憤る晃を、比沙子はなだめた。晃たちが逃がした熊と娘を襲つた熊が同一であるとは限らない。仮に同一であつたとしても、娘が熊に襲われたのは吾一のせいだとするのは、あまりにも酷だ。

興奮する晃を何とか落ち着かせ、これからどうするかを話し合う。時刻は正午を少し回つたところだ。娘が熊に襲われたのが朝の七時頃らしいので、すでに五時間以上経っている。妹を案じて誰も口にしないが、姉が生きている可能性は極めて低いだろう。それでも、一刻も早く熊を見つけ、処分する必要がある。もし本当に熊が人間の肉の味を覚えたのだとしたら、また村人を襲う可能性があるからだ。だが、山間にある羽生蛇村は、陽が暮れるのが早い。日没まで五時間もないだろう。その間に見つけられるかは疑問だつた。

不意に、吾一が立ち上がった。わし一人で山に入るから、お前たちはここで待機していてくれ、と言う。何人かの猟師が同行を申し出たが、吾一は、一人で十分だ、と、断つた。要するに、足手まといだということだろう。猟師たちは一様に不快そうな顔になつたが、誰も文句は言わなかつた。熊撃ちに関して、村で吾一以上の腕を持つ者はいない。熊は極めて用心深く、気付かれずに接近するのは神経を使う。彼より腕の劣る者が同行しても、熊に気付かれる可能性が高まるだけ

だということは、誰しも理解しているのだ。

ただ一人、息子の晃だけが、自分も一緒に行く譲らなかつた。親父一人には任せられないと言う。意外にも、吾一は「勝手にしろ」と言っただけで、強く反対はしなかつた。

比沙子はふと、吾一は吾一なりに今回の事件について責任を感じているのかもしれない、と思った。先ほど晃は、娘が熊に襲われたのは、四日前に熊を仕留めることができなかつた吾一のせいだ、と言った。それはあまりにも短絡的な考えではあるが、もし、吾一たちが見た熊と娘を襲った熊が本当に同一であるならば、四日前に仕留めていれば今日娘が襲われることが無かつたのは間違いない。そして、一・五メートルを超える巨大熊など、そうそういるものではない。

吾一と晃は銃を持って来ていたため、簡単な点検を済ませただけで、十二時半頃には選鉱所を出た。全員で、娘が熊に襲われた現場に向かう。吾一は、陽が暮れるまでには一度戻る、と皆に告げ、地面の付いた娘の血の跡を追い、息子と共に茂みの中へ入って行った。だが。

陽が落ち、午後八時を回っても、二人は戻って来なかつた。

猟師が山に入った場合、獲物が獲れないと当初の予定を変更して長く山にこもることは珍しくない。だが、今回は猟ではなく、娘の搜索と熊の駆除が目的だ。戻ると言つた時間に戻らないのは、何かあつた可能性が高い。

猟師たちは、吾一たちを搜索すべきかを話し合つたが、それは危険だという結論に至つた。今夜の空は厚い雲に覆われている。月明りさえ届かない山の中は、まさしく闇に閉ざされているだろう。熊は昼に行動することも少なくはないが、基本的には夜行性だ。今夜山に入るのはあまりにも危険だし、人手も足りない。朝になるのを待ち、ふもとの街の警察や猟友会に応援を要請して山狩りをするのが良いだろうということになった。吾一は村一番の猟師だ。約束した時間に戻って来ないからといって、滅多なことは起こらないだろう。

比沙子は、自分がどうすべきかを考えた。ずっと、妙な胸騒ぎを感じている。山で何かが起こっている。二人を搜索するなら早い方が

いいと、直感的に感じていた。だが、危険であることは明らかだ。やるならば、自分一人でやるべきだろう。比沙子は幻視の能力を使うことができる。夜の闇は行動の妨げにならないし、半径一キロくらいならば瞬時に搜索することが可能だ。何より、比沙子は熊に襲われて命を落とすことがない。たとえ食われたとしても、肉の欠片ひとつからでもよみがえることができる。

だが、比沙子には山や熊に関する知識がまるでない。山は広大だ。いかに特殊な能力を持っているとはいえ、やみくもに歩き回っても、吾一たちを見つけることは難しいだろう。

——でも、彼女なら、きっと。

比沙子は知っている。この村で、山や熊の習性に最も詳しいのは、吾一や、他の猟師たちの誰でもない。所詮、彼らの知識はわずか数十年の時間で得たものに過ぎない。

それに対し、彼女の知識は千年以上に及ぶ生の中で得たものだ。

比沙子は目を閉じ。

——お願い。力を貸して。

心の奥底に眠る、別の存在に、助けを求めた。

そして。

☆

心の奥底から目覚めた別の存在は、目を開け、小さくため息をついた。まったく……あの娘は、面倒なことはいつもあたしに押しつける。なぜあたしが、信者でもない者を助けなければならぬのか。

比沙子は、村人たちに気付かれないようそつと離れると、一人、山へ向かった。

少し山道を進むと、道端に小さな石碑が置かれてあった。男女が並んで立つ姿と、眞魚教のシンボルであるマナ字架が浮き彫りにされた像・道祖神だ。

道祖神とは、街や村の境、峠などに奉られ、疫病や悪霊などの災い

が侵入するのを防いだり、旅に出たり山へ入る者が安全を祈願するための神様である。

比沙子は像の前に跪くと、手を組み、祈りを奉げた。たとえ夜の山であろうと比沙子の身に危険が及ぶことなどあり得ないのだが、今の彼女は、何よりも神を崇める存在だった。

祈りを奉げ終えた比沙子は、再び歩き始めた。

だが、数歩進んだところで、足を止める。

道祖神像を過ぎた瞬間、違和感を覚えた。この山には何度も出入りしている。それこそ、千年以上も昔から、何度も。自分の庭と言つていいほど全てを知り尽くしているはずだが、今は、まるで他人の家に上がりこんでしまったかのような居心地の悪さを感じる。

それは、一言で言うならば。

——空気が、騒がしいわね。

比沙子は、胸の奥で呟いた。

確かに、山の中で何かが起こっているようだ。

☆

ごつごつとした岩肌の斜面にある大きな岩の陰に身を潜め、志村晃は周囲の気配を探っていた。接近するものがいれば、すぐに銃で撃つつもりだった。だが、その手は大きく震えている。こんな震える手では、銃弾を命中させることなど不可能だ。晃は震えを抑えようとするが、それは意識で抑えられるものではない。

空は厚い雲に覆われ、周囲は深い闇に閉ざされていた。視覚は役に立たない。火をおこす道具は持っている。だが、それを使うことはできない。火をおこしたところで得られる視界はせいぜい数メートルだ。この闇の中で、その程度の視界がなんの役に立つだろう。逆に、相手に居場所を教えるだけだ。火をおこすことはできない。神経を研ぎ澄まし、周囲の気配を探る。砂利を踏む音、流れてくる匂い、あ

るいは、空気のわずかな動きさえ感じ取ろうとする。だが、五感は鈍り、何も感じることができない。周囲に誰もいないとも考えられるが、もし、そうでなかったら……相手はこの闇の中に潜み、気付かないうちに背後に忍び寄っているのかもしれない。そんな恐怖に駆られ、晃は背後を振り返った。そこは闇が広がるばかりで、何も無い。もちろん、それで安心などできない。相手がこの闇に紛れていることは、十分に考えられる。相手は、夜の闇は行動の妨げにならない。対して、晃たち人間は、闇の中では恐ろしく無力だ。晃は、経験が浅いとはいえ猟師である。獲物を狩る側であるはずだが、今の立場はまるで逆——自分が狩られる側であるように思えて仕方がなかった。

晃は、闇の中で一人、追い詰められた小動物のように震え続けた。

村娘を襲い、連れ去った熊を追って山に入った吾一と晃だったが、吾一は一時間も経たないうちに、「山の様子がおかしい、すぐに下山した方が良い」と言いだした。もちろん、晃はこれに反対した。これまで何度も猟に入っている山だ。いつもと何も変わらない。天候も良好だ。山の天気は変わりやすいと言うが、今のところその気配もない。仮にこれから天候が悪化したとしても、それがどうしたと言うのだ？ 山の天気は変わりやすいからこそ、猟師たちはその変化に慣れている。悪天候になるたびに下山しては、獲物を仕留めることなどではしない。晃には、山の何がおかしいのか理解できなかった。このまま何もしないまま山を下りることは考えられない。娘を連れ去った熊を仕留めることができなければ、自分たちは猟師としての信頼を失ってしまうかもしれない。眞魚教の信者でない自分たちがこの村で暮らしてこられたのは、猟師としての信頼があつたからだ。その信頼さえ失ってしまうと、もう、村で生きて行くことはできないだろう。何が何でも熊を仕留めなければならぬ。

なのに。

父は、すぐに下山するべきだと主張し続ける。晃には、父が何かに

怯えているように見えた。信じられなかった。仮にも村一番の猟師と評されている父が、山の中で怯えているのである。晃は失望した。最近はずんずんが絶えないとは言え、子供の頃から父に憧れ、父のような猟師になりたかった。父こそが目標であり、父のような猟師が理想だった。その目標と理想を壊された気がした。

だから、父のことを「臆病者」と罵って、一人で熊を追うことにした。

熊を追うには熟練の技が必要だ。猟師としての経験が浅い晃にその技術はまだ無いが、今回、熊を追うのは容易だった。地面には、襲われた娘のものと思われる血の跡が点々と続いている。それをただるだけでいい。

晃は、気持ちが高揚していることに気が付いた。このまま行けば、熊を仕留めることができるかもしれない。猟師になって二年。ようやく自分の手で熊を仕留めることができるのだ。しかも、通常よりも二回りほど大きな熊——父が恐れをなすような熊を、この俺が仕留めるのだ。そうなれば、自分を爪はじきにしてきた村人たちを、村の猟師を、何よりも父を、見返すことができる。不純なことだが、今の晃には、熊に殺された娘の仇を討つとか、万が一生きている可能性に賭けて早く助けるといった気持ちは無かった。娘が生きていようといまいと、どちらでも良かった。自分はただ、熊を追い詰め、撃ち殺すだけだ。晃は、高ぶる気持ちを抑えつつ、血の跡を追う。

三十分ほど歩いただろうか。晃は、大きな杉の木が一本立つ場所にとどり着いた。周囲は大型の笹の葉——いわゆる熊笹が密生する茂だ。木の根元の熊笹は荒々しく倒されている。熊が踏み倒したのだろう。茂みの中にぽっかりと穴が開いているような場所だ。そこに、何やら得体の知れない大きな塊があり、それを中心に、深い朱色をした液体が水溜まりのように広がっていた。

晃は眉をひそめた。それが何であるか、しばらく判らなかつた。

だが、徐々に理解していく。それと同時に、晃の高揚した気持ちは、急激に萎えていった。

それは、人間の身体だった。気付くのに時間を要したのは、それが

あまりにも現実離れた姿になっていたからだ。頭と胴、そして、手足が揃っていたならば、すぐに人の身体だと判つただろう。だがその身体には、両手と右足が無かったのである。周囲を見ると、肉が削げ落ち、骨がむき出し状態の右腕が転がっていた。左腕と右足は、周囲のどこにも無かった。どこに行つたのかは、晃には想像もつかない。

血溜まりに浮かぶ身体は更に損傷が激しかった。衣服は荒々しくむしりとられ、両の乳房は削げ落ち、腹は引き裂かれ、内臓が引きずり出されている。四肢の内唯一残された左足も、太腿の肉がほとんどそぎ落ちていた。対して、頭部には大きな損傷はなかったが、それがかえって晃の恐怖心を煽つた。目は白目をむき、開いた口から舌が垂れ下がっている。擦り傷こそあるものの、肉は削げ落ちていない。だからこそ、これが探していた娘であることは疑いようがなかった。

頭以外の肉がほとんどそぎ落ちた娘の身体——いや、そぎ落ちた、という表現は正しくない。そぎ落ちたのならば、周囲にその肉が転がっているはずだ。周囲にはわずかな肉片が確認できるのみだ。娘の肉はそぎ落ちたのではない。娘を襲つた熊によつて、喰われたのだ！

たまらず、晃は嘔吐した。胃の中の物をすべて吐き出した。それでも嘔吐は止まらず、胃液さえ吐き出し、涙さえ出てきた。娘が熊に喰われたことを考えなかつたわけではない。だが、これほど凄惨な光景を目の当たりにするとは思っていなかった。

がさり、と、熊笹が揺れる音がした。父が追つて来たのだろうか？ そう思い、晃は音のした方を見る。

薄茶色の体毛に覆われた巨大な熊が、茂みの中からのっそりと姿を現した。

晃は、銃を構えるのさえ忘れ、現れた熊をただ凝視していた。

熊は、四つん這いでこちらに向かつて来る。

晃は動くことはできない。銃を構えるか、その場から逃げるか。何かしらの行動をすべきなのだが、体中が強張り、指一本動かすことができなかつた。ただ、その場に立ち尽くすのみ。

晃の前で、熊は二本足で立ちあがった。晃の背丈をはるかに超える

大ききだ。通常の熊より二回り大きいどころではない。二メートルをはるかに超え、重量は百貫に届きそうだ。

熊が右手を振り上げた。その手は岩のように大きく、爪は鉋のように鋭い。頭部に振り下ろされたら、頭蓋が碎ける——いや、へたをすれば、頭が地面を転がるだろう。

銃声が響いた。

同時に、熊の肩から血が飛沫となって周囲に飛び散る。熊の身体が大きく揺らいだ。

そして。

「——晁！ 走れ!!」

父の声が聞こえた。

声のした方を見ると、銃口を熊に向けた父がいた。

熊も父を見た。怒りを発するように大きく吠え、父の方へ駆け出した。

再び銃声が鳴ると、熊が父に覆いかぶさるのは、ほとんど同時だった。

「逃げる！ 晁!!」

再び父の声。

瞬間、晁は駆け出していた。

どこをどう逃げたのかは覚えていない。晁は、森の中をとにかく走った。木の枝が衣服を裂き、熊笹の葉が皮膚を裂くが、構わず走る。少しでも、あの化物から遠ざかるために。陽が落ち、周囲が闇に包まれ始めたところで、ようやく足を止める。いつの間にか森を抜け、ごつごつとした岩肌がなだらかな斜面になっている場所にいた。見上げると、斜面の中央に大きなくぼみがある。見覚えのある場所だ。四日前、父と共に巨大な熊を発見し、逃がしてしまった場所だ。晁は恐怖に震えた。熊は山にいくつかの休み場を持っており、同じ場所を何度も使う習性がある。四日前にここで見た熊と今日遭遇した熊は、恐らく同じであろう。つまり、あの熊はここに戻ってくるかもしれないのだ。すぐに逃げなければ。そう思うが、夜の闇はどんどんその濃さを増している。陽は完全に山の陰に隠れてしまった。見上げると、空

はいつの間にか厚い雲に覆われ、月や星の明かりさえ無い。周囲が完全な闇に閉ざされるのは時間の問題だ。そうなれば、移動は極めて危険だ。晃は、ここに留まるのと闇の中を移動するのはどちらが危険であるかを考え、留まることを選んだ。山において、悪天候や夜など事件が悪い時、むやみに移動するのは自殺行為に等しいことを、晃は嫌と言うほど知っている。幼い頃からずっと、父にそう言われてきたのだ。晃は近くにあった大きな岩の側に腰を下ろした。

どれくらい時間が経ったのか、もう判らない。間もなく夜が明けると、あるいは、まだ日没から間もないのか。それすらも判らない。ただ銃を抱き、周囲の気配を探る。あの熊はどこにいたのだろうか。闇にまぎれ、こちらの様子を窺っているのかもしれない。晃のことなど意に介さず、遠く離れたねぐらで静かに眠っているのかもしれない。父はどうなったのだろうか？ 晃が最後に見たのは、熊の巨体が父に覆いかぶさる所だった。あれは、熊に襲われたのだろうか？ だとすれば、父の命は絶望的だ。逃げ出したことが、大きな後悔となって晃の心を苦しめる。だが、仕方なかったのだ。あれほどの巨大熊を前に、自分ごときに何ができるだろうか？ 父も「逃げろ」と言った。自分は、それに従っただけだ。あそこで逃げなければ、二人とも殺されていただろう。仕方がなかったのだ。そう、自分に言い聞かせても、後悔は消えない。

いや。父が死んだと考えるのは、まだ早いかもしれない。

晃は思い出す。熊が覆いかぶさる前、父は銃を撃っている。村で一番の猟師である父が狙いを外すとは思えない。あのとき父は熊に襲われたのではなく、倒れた熊の下敷きになっただけかもしれない。ならば、父が生きている可能性は十分にある。熊は百貫を超える大物だから、下敷きになれば無事では済まないかもしれないが、それでも死ぬ可能性は低いだろう。そう考えると、晃の心はいくらか楽になった。だが、楽観はできない。今すぐ確認に向かいたいが、夜の闇がそ

れを許さない。夜明けまで待つしかない。少し眠っておくべきだろうか？ あのととき父が熊を射殺したのであれば、いま眠っても危険は少ないだろう。だが、もし射殺していないのであれば、眠るのはあまりにも危険だ。熊は夜行性の生物だ。眠っている間にこの場に来る可能性は、十分にある。

これからどうすべきか、いま何をすべきか、晃には、なにも判らない。晃には、猟師としての経験があまりにも足りない。助言をくれる者も、今はいない。もし父がいたら、どうすればいいか教えてくれただろうか？ 無口な父は何も教えてくれないかもしれない。それでも、父がそばにいてくれるだけで、恐怖は大幅に和らいだだろう。皮肉にも、晃はこんな状態になって初めて、父の存在の大きさを知った気がした。

がさり、と、砂利を踏む音が聞こえた。

身をすくめる晃。周囲を見回しても何も見えない。神経を研ぎ澄ます。がさり。また、砂利を踏む音。この闇の中に、何者かがいる。何者だ？ 考えるまでもない。あの熊だ！ 銃を構える晃。砂利を踏む音は近づいて来る。晃は音の方向探ろうとする。だが、恐怖は晃の感覚を著しく狂わせる。正面から聞こえるようにも思えるし、右から聞こえるようにも思える。背後から聞こえるような気もする。砂利を踏む音はひとつなのに、周囲を囲まれているような錯覚。音は近づいて来る。たまらず、晃は引き金を引いた。銃声が闇に響き渡る。砂利を踏む音が聞こえなくなった。やったか？ そんな訳はない。再び、砂利を踏む音が近づいて来る。外した。晃の持つ猟銃は旧式の村田銃だ。弾の装填数はたった一発しかない。予備の弾は懐の中だ。取り出そうとする。だが、焦って弾をばら撒いてしまった。周囲は闇だ。地面に手をつけても、弾なのか砂利なのか、もう判らない。

突然、闇の中から手が出てきた。

それが、晃の銃を掴み、強く引つ張る。

「ひいっ!!」

情けない声を上げ、晃は唯一の武器である銃を手放してしまう。

晃の銃は、闇の中に消えた。

その闇の中から。

「……まったく。相手も確認せずに撃つなんて、あなた、獵師失格ね」
女の声がした。あまりにも予想外だったので、晃は何度も瞬きをす
る。

不意に、空を覆う厚い雲が途切れた。月明かりが、闇の中に隠して
いたものを浮かび上がらせる。目の前に女が立っていた。赤い修道
服を着て、赤いベールをかぶっている。手には、いま晃から奪った銃
を持っていた。

「求導女……様……？」

確認するように言う晃。村から遠く離れたこんな山奥、しかも真夜
中に、比沙子が一人で現れたことが信じられなかった。

「今度あたしに銃を向けたら、命は無いと思いなさい」比沙子は、奪つ
た銃を晃に差し出した。

銃を受け取りながら、晃は眉をひそめた。赤い修道服から求導女の
八尾比沙子だと思っただが、別人だったのだろうか？ そんなことを思
う。今の口調、まるで比沙子らしくない。もう一度よく見た。間違い
なく比沙子である。それでも、別人のように思えて仕方なかった。理
由はすぐに判った。目だ。普段から村人を温かく見守る優しさが、今
の比沙子の目には無い。晃を見る今の比沙子の目は、例えるならば、
汚らしいごみでも見るような目だ。晃の知る限り、比沙子はあんな目
はしない

「……あの……求導女様、ですよね？」思わず問うた。

「他の誰に見えるって言うの？」冷たい口調で答える比沙子。

「いえ、別に……」

そう言ったものの、疑問は消えない。よく似た別人が来たのではな
いかと思える。だが、いまの比沙子には、それを問うことを許さない
雰囲気があった。だから晃は、別のことを問うた。

「求導女様、どうしてここに……？」

「気が進まなかったけど、あなたたちを助けに来たのよ」煩わしそうな
声で答える比沙子。「それで、父親はどこ？ 一緒じゃなかったの？」

比沙子に問われ、晃は顔を伏せた。「判りません。熊に襲われると

ころは見ましたが……」

「……詳しく話さない」

比沙子に促され、晃は昼間の出来事を全て話した。山に入ってすぐ、父が、「山の様子がおかしい」と言つて、下山しようとしたこと。自分はそれに反対し、一人で熊を追つたこと。娘の遺体を発見したが、直後に熊に襲われたこと。間一髪のところ父親に助けられたこと。

話を聞いた比沙子は、ふん、と、鼻を鳴らした。「……それで、父親を見捨てて逃げ出し、真つ暗な中、一人でびくびく怯えてたつてわけね。情けない」

晃は、心外だと言わんばかりの目で比沙子を見た。「怯えていたわけじゃないです。俺はただ、夜の山ではむやみに動かない方がいいと、父から教わっていたから、それに従っただけで……」

「まあ、それは間違っていないわ」

「それに、まだ父が死んだと決まったわけではないです。父のことだから、あるとき熊を倒していたのかもしれないわ」

それは、比沙子に状況を説明すると言うよりは、自分に言い聞かす言葉だった。あの時——熊が父に覆いかぶさる直前、父は銃を撃っている。あれは父が熊に襲われたのではなく、父の銃に倒れた熊の下敷きになったただけだ。そう信じたかったのだ。

だが。

「残念だけど、それは無いわね」

比沙子は、冷たく言い放った。

なぜ、そう言い切れるのだろうか？ 晃は睨むように比沙子を見る。

比沙子は晃の視線など意に介さずに続ける。「熊は、ここから一キロほど南にいる。腹が膨れたからでしょうね。機嫌良さそうに眠っているわ」

「なぜ、そんなことが判るのですか」

「幻視よ。聞いたことくらいはあるでしょ？」

幻視。この村に古くから伝わる特殊能力だ。他人の視界を覗き見ることができると言われている。もちろん、伝説やおとぎ話の類であ

り、本当に存在するはずがない。晃は、からかわれているのだと思い、小さく笑った。

だが、比沙子は笑みを浮かべることなく、さらに続ける。「まあ、信じる信じないはあなたの自由だけど、幻視を使えば、周囲数キロくらいは瞬時に探索できる。あたしはここに来るまでに、何度も幻視を行っただけど、あなたと熊以外の視界は見つかっていない。状況から、あなたの父親は熊に殺されたと考えるのが自然ね」

「――」
言葉を失う晃。父が熊に殺された……そんなことはあり得ない。父は村一番の猟師だ。熊ごときに殺されるはずがない。比沙子がいかに加減なことを言っているに違いない。そもそも、幻視が使えるなど馬鹿げている。他人の視界を覗き見る能力。そんなもの、あるはずがない。

そう思う反面、胸の奥には、比沙子は嘘などついていないという思いがあった。父はもう生きていない……晃は、心のどこかでそう考えていたのかもしれない。それが、比沙子の言葉で確信に変わった。一度そう考えると、もう、そうとしか思えない。ならば、比沙子と言う幻視の能力も存在するのではないか。比沙子は嘘などついていない。いい加減なことを言っているわけでもない。根拠、といえるほど強いものは無い。ただそう思うだけだ。しいて理由を上げるならば、晃の持つ『勘』だ。

「……本当に、父は死んだんですか」もう一度、確認するように問う。
比沙子は冷たく、「ええ、そうよ」と答えた。

父が死んだ――その言葉を、胸の内で噛みしめる晃。悲しくはなかった。むしろ、怒りが込み上げてきた。四日前のことを思い出す。あの日、晃と父はこの場所にいた。ここから、斜面のくぼみで眠る熊を仕留めようとしていた。あの時の熊と今回の熊は同じであろう。ならば、あのとき熊を仕留めていれば、娘が襲われることはなく、父も命を落とすことはなかったはずだ。

晃は顔を伏せ、小さく笑った。「自業自得ですよ。四日前、ここであの熊を仕留めていれば、こんなことにはならなかった。あの時熊を逃

がしたのは、父の失態です。俺の言う通りにしていれば、あの熊は仕留めることができたんだ」

比沙子が顎を上げた。「残念だけど、それは無いわね。四日前の話は聞いているわ。あのとき熊を逃がしたのは、あなたのせいよ」

晃は顔を上げ、比沙子を睨んだ。

「なぜ、そんなことが言えるんですか!？」

思わず叫ぶ。熊を逃がしたのはあなたのせい——猟や山に関する知識がない求導女にそんなふうに言われるのは、極めて心外だった。

「いいわ。未熟なあなたに、特別に教えてあげる」

比沙子は晃をあざ笑うかのように言うと、顔を上げ、斜面の上にあるくぼみを指さした。「四日前、熊はあのくぼみの中で眠っていた。そうだったわね?」

「ええ、そうです。眠っている間に近づいて撃てば難なく仕留められたのに、父はそれを認めなかった。熊が目覚め、向こうから近づいて来るのをこの場で待つ、と言ってきかなかったんです。そんな消極的な方法で確実に仕留めるなんて無理なのに。父は憶病者で、古い猟の仕方を変えようとしなんです」

「それは違うわね。この場合、あなたの父親のやり方は最適な方法よ。熊は極めて鋭い嗅覚を持っている。たとえ眠っていたとしても、気付かれずに接近するのは難しい。あなたのような未熟な猟師と一緒に来たら、なおのこと。それよりも、熊が目覚めるのを待って、近づいて来たところを撃つ方が無難だわ。ここは、風が常に上から下に流れている。匂いで気付かれる可能性は無い」

そう言われ、晃は初めて斜面を下って来る風の流れに気が付いた。いや、それは風などと呼べるほどの強さではない。本当にわずかな空気の流れだ。あのとき父は、このわずかな風を感じていたのだろうか。

晃は、否定するように首を振った。「でも、熊が目覚めても、こちらに来るとはかぎらないじゃないですか」

「そうかもしれない。でも、こちらに来る可能性の方が高いわ。眠りから覚めた熊は、喉を潤すために水場に移動することが多い。この斜

面の下には沢がある。目覚めた熊がこちらに来る可能性は、八割から九割つてところでしょうね」

「なぜ、この下に沢があると判るんですか？」

「地形を把握しながら移動するのは当然でしょう？ まさかあなた、そんなことも考えずに山を歩いていたわけ？ 呆れるわね」

「……………」

返す言葉がない晃。確かに、山を歩いている間に何度か川を越えたが、獲物を探すことばかり考え、地形など考えてはいなかった。父は、そこまで考えて移動していたのだろうか。

「…………でも、目覚めた熊は、斜面の上に移動しました。結局、父の勘は外れたんじゃないですか」

晃は、最後の反論を試みた。だがそれも、比沙子の言葉に踏み潰される。

「それは、あなたが騒いだからでしょ。おとりになるならしないで、父親ともめたんでしょ？ 熊は聴覚も敏感よ。わずかな音も聞き分ける。気付かれて当然ね。熊は基本的に臆病だから、人間が騒いでいたら、遠ざかろうとするものよ」

「……………」

返す言葉はもう無かった。比沙子の言うことは、あまりにも的確だ。

「もう判ったでしょう？」と、比沙子は追い打ちをかけるように続けた。「四日前、熊に逃げられたのはあなたのせい。その結果、その熊は娘とあなたの父親を襲った。あの時熊を仕留めていればこんなことにならなかつたと言うのなら、二人が死んだのは、あなたのせいよ」比沙子の言葉が胸に突き刺さる。晃は、まるで死刑を宣告されたかのように頭を垂れた。

同時に、昨日の昼、蛇ノ首谷の選鉱所で熊の対処について話し合った時、父が「一人で山に入る」と言ったのを思い出した。あれは、愚かな息子が犯した失態の責任を取るためだったのだろうか。

比沙子が小さくため息をついた。「まあ、それはいいとして……………妙だわ」

「何が、ですか？」顔を上げる晃。

「あの熊よ。あまりにも大きすぎる。少なく見ても二メートル以上はあるわ。毛の色も茶色だし……どう見ても、ツキノワグマじゃないわね」

日本に生息する熊は二種類。ひとつはツキノワグマ。本州から南、四国、九州まで、広く生息している。羽生蛇村近辺に出没する熊もこれだ。熊としては小柄で、大きくても体長一・五メートル程度。体毛は黒く、その名の通り、胸に三日月のような白い模様があるのが特徴だ。性格は憶病。人を襲うこともあるが、決して獰猛な生き物ではない。

それに対し、もう一種の熊は……。

比沙子は、重い口調で言った。「あれは……ひぐま 羆ね」

晃は、言葉を失った。

羆——日本に生息する陸上動物の中では最も大きく、成体は体長二メートルを超えるものがほとんどだ。体毛は茶色。非常に獰猛な性格をしている。ツキノワグマが人を襲うのは、突然人と遭遇した時など偶発的な例がほとんどだが、羆は人を捕食対象とし、積極的に襲うことも少なくない。

だが、羆は北海道のみに生息する生き物だ。本州以南には存在しない。動物園から逃げ出したというのなら別だが、羽生蛇村はもちろん、ふもとの街やその近隣にも、動物園は無い。

「なぜ、こんな所に羆がいるのでしょうか……」

晃の問いに、比沙子は肩をすくめた。「見当もつかないわね。まあ、今さら驚きはしないわ。あたしはこの村で長く暮らしてるけど、こういうよく判らないことが起こるのは、珍しくないから」

確かに、村では昔から奇妙な事件が多発している。土砂災害や豪雨災害など頻繁に発生するし、神隠し事件や化物の目撃談なども後を絶たない。「村が呪われている」と言う者もいる。これまで晃は、そういった話を子供じみた怪談話だと一笑に付していたが、羆が現れたとなると、それらの話もまんざら嘘でもないのかもしれない。

「……父が、『山の様子がおかしい』と言っていたのは、こういうことだったんでしょうか？」

「そうね。今日の山は、普段とは明らかに違う。空気が騒がしいわ」

「空気が……騒がしい……？」

「ええ。あなたは、何も感じないの？」

そう言われ、晃は周囲を見回した。薄闇に包まれた岩場の斜面。秋の夜明け前のひんやりとした空気が漂っているだけで、何も感じない。

そんな晃の様子を見て、比沙子は呆れたような顔になった。「……あなたの家系は、昔から勘が鋭い人が多いはずだけど、あなたは違うみたいね」

「……」

「山には、多くの生き物が暮らしている。獣はもちろん、鳥に魚、昆虫、植物、あるいは、土や岩、川の水の流れ、たちこめる霧、空を覆う雲……全てが、呼吸をしているの。『山の息遣い』と言えば判りやすいかしら？ それを感じられないようじゃ、父親のような猟師にはなれないわよ？」

「……そうかもしれません」

晃は顔を伏せた。父から言われ続けた「お前は猟師に向いていない」という言葉が、今さらながら胸に深く突き刺さる。

比沙子は小さくため息をついた。「まあ、あたしにはどうでもいいことだわ。それより、これからどうするかよ。熊は満腹感に浸っているみたいだから、しばらく今の場所から動かないでしょうね。とりあえず、夜が明けるのを待って、山を下りましょう」

晃は首を振った。「駄目です。山を下りたら、熊を見失ってしまう。そうなったら、また誰か襲われるかもしれない」

「……なら、どうするの？」

晃は、銃を握りしめた。「俺が、倒します」

比沙子が小さく笑う。「あなたには無理よ。犠牲者が一人増えるだけだわ。一度山を下り、人を集めて山狩りをするのが無難よ」

「求導女様は、そうしてください。俺は、一人でやってみます」

決意を込めて言う晃。娘や父が殺されたのが自分のせいであると判った以上、村人に合わす顔が無い。それに、確かに村人たちで山狩りをする方が、熊を仕留められる可能性は高いだろう。だが、村人にまた被害が出る可能性も出てくる。それだけは何としても避けたかった。もちろん、自分などにあの熊を仕留められるとは思えない。それでも、手や足に銃弾の一発でも撃ち込み、弱らせておけば、後々村人が倒しやすくなるだろう。

比沙子は、また肩をすくめた。「まあ、好きにしたら？　信者でもないあなたがどうなろうと、あたしには関係ないから。あたしはただ、あたしの中の別の存在があなたを助けろと言うから、仕方なく来ただけ」

「求導女様の中の、別の存在……？」

晃は、比沙子の言葉を胸の中で吟味し、そして言った。「それは、求導女様の中に別の人間がいる、ということですか？」

そう言っただけを見たものの、そんなことがあり得るのか、自分でも疑問だった。だが、そう考えると、今の比沙子がいとも別人のように思えるのも納得がいく。高圧的な態度と、熊や猟などに関する深い知識。今の求導女は、村人から『慈愛に満ちた聖母のような女性』と称される比沙子では、決してない。

「へえ？　かなり舌足らずな説明だったはずだけど、そこまで理解するなんて。あなた、頭は悪くないようね」

比沙子の顔に笑顔が浮かぶ。それは、今までのどこか人を見下したような笑いではなく、感心したかのような笑いだった。

比沙子は腕を組んだ。「いいわ。ご褒美に、少しでも助言してあげる。熊はしばらく今の場所から動かない。でも、あなたの方から近づいて仕留めるのは、まず不可能。必ず気付かれるわ。熊を仕留めるならば、待ち伏せが基本。あなたの父親のやり方と同じよ」

晃は、大きく頷いた。

比沙子はさらに続ける。「あの熊はかなり大きい。その分食欲も旺盛だろうけど、人間二人を一度に食べてしまうとは思えない。罨は、食べきれない食糧を地中に埋めておく習性があるの。あとで掘り起

こして食べるためにね。父親が襲われた場所の周辺を探してみなさい。どこかに埋められているはずよ。そこで待つ。熊は、必ず現れる」

「――判りました。求導女様、ありがとうございます」

晃は、深く頭を下げた。

東の空が白み始めた。かなり長い間話していたようである。周囲はかなり明るくなっていった。これならば、移動に支障はない。

晃は比沙子と別れると、斜面を下り、父が襲われた場所へ向かって走った。

晃が熊と遭遇した場所に戻ってきたのは、陽がやや西に傾きかけた頃だった。連れ去られた娘が食い荒らされ、父が襲われた場所。荒々しく踏み倒された熊笹の上に広がっていた血溜まりはすでに渴き、どす黒い塊となっている。食い荒らされた娘の身体からは腐臭が漂い始めており、乾いた血の匂いと混ざって晃の胃の奥を刺激した。

比沙子の話によると、熊は、食べきれなかった父の身体を近くに埋めているらしい。晃は、昨日父が襲われた場所に立った。父の遺体は無く、比較的新しい血溜まりが広がっていた。そして、遺体を引きずったと思われる血の跡が、熊笹の茂みの中に消えていた。

すぐに血の跡をたどろうとした晃だったが、数歩進んで足を止めた。すぐ側に父の猟銃が落ちていたのだ。父の銃は、村田銃の中では最も後期の型である二十二年式だ。晃の村田銃が装填数一発なのに對し、二十二年式は八発も装填することができる。晃は父の銃を拾い、状態を確認する。損傷した形跡はなく、弾もまだ六発残っている。問題なく撃てそうだ。銃の腕が未熟な自分には、装填数は多い方がいい。晃は、父の銃を借りることにした。

茂みをかき分け血の跡を追う晃。しばらく進むと、茂みを抜けて沢に出た。緩やかな水の流れがカーブしている内側の河原だ。血の跡は、水辺から少し離れた場所で終わっていた。近づいて確認すると、

土は柔らかく、一度掘って埋めたものに間違いなかった。この下に、父が埋まっている。そう思うと、晃の胸には複雑な思いが浮かぶ。父を失った悲しみはもちろんだが、父の命を奪った熊に対する怒りや、村一番の猟師であった父が熊に殺されたという事実に対する怒り、さらには、父の真意に気付けなかった自分に対する怒りもある。様々な感情が交じり合い、晃の目から、いつの間にか涙があふれていた。晃はしばらくその場に立ちつくし、泣いた。

だが、感傷に浸っている場合ではない。

涙を拭い、周囲を確認した。前日、比沙子が言った熊が眠っているという場所は、こちら南西に一キロから一・五キロほどの場所だ。熊がこの場に戻って来るならこの方向からだ。反対側の水辺に、ちょうど身を隠せそうな大きな岩があった。風は南から北へ流れているが、時折別の方向から強く吹き付けることもある。風向きが定まっている。もし、熊が接近した折、晃が隠れている場所が風上になれば、匂いで気付かれるかもしれない。そう思ったが、改めて地形を考慮し、あまり問題は無いだろうと判断した。この河原には父が埋められている。父の匂いが、自分の匂いを隠してくれるだろう。晃は岩陰に身を潜めた。ここで、あの熊が来るのを待つ。

どれくらい待てばいいのか、晃には見当もつかない。晃の猟の経験は浅く、知識は少ない。そのわずかな知識もツキノワグマに関するものであり、熊のことは何も知らない。どれくらい感覚で食事するのか、どの程度の行動範囲を持つのか、どの程度の距離で撃つのが理想か、どこを狙うのが良いか……判らないことだらけだ。だから、考えるのをやめた。判らないことをいくら考えても無駄だ。知識が少ないのは、もうどうしようもない。ならば、少ない知識で戦うだけだ。晃は、相手をヒグマと考えず、極めて大きなツキノワグマだと思うことにした。そして、父の猟のやり方を思い出す。十四歳の時より父について山に入っていた晃。誰よりも、父の猟を間近で見してきた。その記憶は、必ず役に立つはずだ。

冬も近いこの時期、熊の食欲は旺盛だ。何度も食事をし、厳しい冬を迎える準備をする。ならば、どんなに腹が膨れていようとも、数日

中にはこの場に現れるだろう。それまでこの場に留まることができ
るだろうか？ 山に入る際に準備した食糧は一日分、父の分と合わせ
て二日分になる。山に入つてすぐに熊に襲われ、その後はずっと逃げ
ていたため、まだ手をつけていない。切り詰めれば五日はもつはず
だ。川の側なので水は問題ないし、森に戻れば木の実や野草も手に入
る。食料の心配はしなくて大丈夫だろう。

続いて晃は、熊がこの場に現れる時の様子を思い描いた。茂みから
現れた熊は、周囲を警戒しながら父を埋めた場所まで行き、掘り返す。
その時に撃つのが理想だ。父が埋められている場所は、ここから二十
メートルほどだ。父が熊を撃つ距離は二十メートル以内だった。父
と自分の腕前を考えると、もう少し近い方が良いだろう。だが、ここ
らから近づくのは無謀だ。向こうから来るのを待つしかない。食事
を終え、喉を潤すために沢に近づいた時が勝負だ。

晃は、もう一度父の銃の状態を確認する。弾は確かに込められてい
る。銃身のどこにも損傷はない。それでも、なんらかの理由により弾
が発射されない可能性は十分にある。それは、どんな銃にも言えるこ
とだった。晃は念のため、自分の銃もすぐに撃てるようにし、側に置
いた。

準備は整った。あとは、相手が現れるのを待つだけである。晃は、
ひたすら待った。

その時は、晃が思ったよりも早く訪れた。

二日目の夕方だった。熊笹の茂みがガサガサと揺れたかと思うと、
茶色の毛並みの熊が、のっそりと姿を現したのだ。思わず声を上げそ
うになり、晃は慌てて口を抑えた。まずは何よりも落ち着かねばなら
ない。大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出す。そして、静かに銃
を構えた。引き金に指を掛ける。焦るな。引き金を引くのはまだ早
い。熊はまず地中に埋めた餌を掘り起し、食べ、そして、沢へ向かう
はずだ。撃つのはその時。二十メートル以内——できれば十メー
トル程度までは近づきたい。晃は、はやる気持ちを抑え、待つ。

姿を現した熊は、晃の予想に反し、その場から動こうとしなかった。
盛んに鼻をひくつかせ、匂いを嗅ごうとしている。こちらの存在に感

づいているのだろうか？ いや。風は、茂みから沢へ向かって流れている。つまり、こちらが風下だ。仮に風向きが変わったとしても、すぐ側には父の遺体がある。匂いで気付かれる恐れはない。相手はただ用心深いだけだ。焦らず、待てばいい。そう、胸の内でも言い聞かせた。

だが、それでも熊は動こうとしなかった。鼻をひくつかせたかと思うと、周囲を見回し、耳を小刻みに動かす。こちらの存在には気付いていないはずだが、明らかに何かを警戒している。まずいな、と思った。熊は臆病な生き物だ。この場に危険を感じたなら、近づくのをやめるかもしれない。茂みに戻ると逃げられてしまう。今この場で撃つべきだろうか？ 晃と熊の距離は三十メートル以上。遠射のきかない村田銃でも撃てない距離ではないが、晃の腕前では不安だ。だが、逃げられては意味が無い。どうすべきか……考え、晃は相手が罠であることを思い出した。臆病なツキノワグマと違い、極めて獰猛。しかも、人間の肉の味を知っている。こちらが姿を現せば、襲って来るのではないか……そんなことを考えたが、すぐに思い直した。それは、自らをおとりにするということだ。少し前の晃ならばすぐに実践しただろうが、今はひどく愚行に思える。自分は、父の猟のやり方を守る。晃は息を殺し、相手が動くのを待った。

——と、周囲を警戒していた熊の動きが、不意に止まった。そのままじっとして、動かない。

どうしたのだろうか？ 晃が疑問に思った瞬間。

びくん、と、晃の身体が大きく震えた。

同時に、目の前に別の映像が浮かぶ。岩陰に隠れ、銃を構えている若い男の姿——晃自身だ。

それは一瞬の出来事で、映像はすぐに消えた。なんだ？ 今のは？

熊が、大きく吠えた。

そして、こちらに向かって走って来る。気付かれた!!

だが、晃は自分でも不思議なほど落ち着いていた。熊が迫ってくる恐怖が無いわけではないが、それよりも、これは熊を仕留める絶好の機会だという思いの方が強かった。相手の方から近づいてきている。

十メートル程度まで引きつけ、引き金を引くだけだ。晃は銃を構えたまま待つ。熊が地面を踏む振動が、晃の足にも伝わってくる。距離が詰まる。焦りは……無い。熊との距離が十メートルまで詰まった。今だ！ 晃は引き金を引いた。銃声が耳の奥を、硝煙が鼻孔を刺激する。熊の身体から血飛沫が飛び散った。同時に、前のめりになって倒れる。やったか？ 熊の姿をよく確認しようと、晃は銃身から顔を離した。

その瞬間、熊は起き上がり、再び晃に向かって走り出した！

まずい！ 再び銃を構え、引き金を引いた。だが、この土壇場で晃の未熟さが現れた。彼は焦るあまり、狙いを定める前に引き金を引いてしまったのだ。弾は熊の身体をかすめることもなかった。次の弾を撃つ余裕は無かった。熊は晃の目の前に二本足で立ち、巨大な手を振り上げた。

晃は、己の死を覚悟した。やはり、自分などにこの熊を仕留めることはできなかつた。当然かもしれない。相手は、あの父でさえ仕留めることができなかった熊なのだから。それに、未熟な自分にしてはよくやった方だと思う。

晃は、最期に少しだけ、父に近づけた気がした。それだけで満足だった。

突然。

熊の身体が、炎に包まれた。

何が起こったのか判らない晃は、ただ茫然と立ち尽くす。

熊は苦しそうに吠え、その場を転がり回った。炎を消そうとしているのか。だが、炎は消えるどころか、ますます勢いを増して燃え上がる。

やがて、熊は動かなくなった。

その瞬間、今まで勢いよく燃えていたのが嘘のように、炎は霧散した。

消えた炎の向こうに、赤い修道服を着た女が、手のひらを熊に向けた状態で立っていた。

「――あなたにしてはよくやった方だけど、最後の詰めが甘かったわ

ね」

修道服を着た女——八尾比沙子は、手を下ろすと、ゆつくりと晃の方へやってきた。

ぺたり、と、その場に崩れ落ちる晃。

助かった、という安堵感はない。何が起こったのか？ という疑問も無い。幻視を使い、炎を操るこの女は何者なのか？ という思いも無かった。晃の胸にあるのは敗北感。自分はこの熊との戦いに敗れたのだ。未熟な身としてはよくやった方だと思うが、それでも、戦いに敗れたことに変わりない。やはり、自分は猟師に向いていないのだろう。父の言う通り。

「……まあ、そう気を落とすことも無いわよ」

思いがけない優しい言葉に、晃は顔を上げた。

比沙子は倒れた熊に近づくと、頭を指さした。「あなたの撃った弾は急所を捉えている。これが普通の熊だったら、確実にあなたの勝ちだった」

比沙子が指さした先を見る。確かに、熊の額には大きな穴が開いていた。脳天を撃ち抜かれてどうして動くことができたのかは判らないが、今の晃には、それを考える気力も無かった。

比沙子は小さく微笑むと、熊の身体を掴んだ。その細腕のどこにそんな力があつたのか、軽々と熊の身体をひっくり返すと、ナイフを取り出し、熊の腹を切り裂いた。そして、手早く作業し、熊の体内から胆のうを取り出す。

「熊を仕留めた証として持ち帰りなさい」

そう言つて、晃に渡した。

熊の胆のう——いわゆる熊の胆は、貴重な薬品となるため、肉や毛皮などとは比べ物にならないほど高く売れる。ましてこの熊の胆は糞のものであり、ツキノワグマのものより二回り以上大きい。恐らく一年は金に困らないであろう。

「後の処分はあたしがやっておくわ。あなたは、もう山を下りなさい。早くしないと、二度と帰れなくなるかもしれないから」

晃はゆつくりと立ち上がると、荷物をまとめた。

そして、比沙子に向かつて頭を下げた。「求導女様。いろいろと、ありがとうございました。おかげで、父の仇が討てました」
「礼ならひさに言いなさい。あたしは、あの娘が頼むから来てあげただけ」

ひさ……それが誰なのか、正確なところは判らない。だが、恐らく彼女の人格のひとつ、村人から『慈愛に満ちた聖母のような女性』と言われる、いつもの比沙子のことだろう、と、なんとなく思った。

晃は大きく頷くと。

「求導女様。俺は、ひとつ約束します」

胸の奥の決意と共に、言った。「求導女様が何を言っているのか、あなたの正体はなんなのか、この村で何が起きているのか、俺には判りません。でも、俺は決して、それらのことを詮索しません。あなたが何者であろうと、俺は、求導女様のことを信じます」

「……そう」

比沙子は、そっけなく言っただけだった。

「では、失礼します」

晃はもう一度頭を下げると、歩きだした。

が、ふと足を止める。

——父の遺体を持ち帰るべきだろうか？

そう思った。

だが、少し考え、やめておくことにした。父は、自分に今の姿を見られたくないだろう。そんな気がした。

それに。

山ならば父も安心して眠れるはずだ。

川上から、強い風が吹いた。これまで吹いていた風よりも、冷たい。

晃は、山に冬が訪れたことを悟った。

☆

山を下りた晃は、熊の胆を業者に売り、その金を、熊に襲われた娘の家族に渡した。

☆

その後も、晃は村で猟師を続けた。数年後には嫁を娶り、そして、子をもうけた。

数十年の時間が流れた。あの日の約束通り、晃は比沙子の正体については口をつぐみ続けた。

時が経つにつれ、なんとなくではあるが、比沙子の正体が判って来た。恐らく比沙子は何百年も前から生きており、村で起きている奇妙な事件は、全て、比沙子に原因があるのではないかと。

また、村では数十年に一度、村の有力者である神代家が怪しげな祭事を行っているのだが、それは、裏で比沙子を取り仕切っているということも。

晃だけでなく、晃の親族もまた、そのことに気付き始めた。特に、晃の従兄弟は「この村は呪われていて、その原因は比沙子にある」と、声高に叫んだ。また、成人した晃の息子も、従兄弟の考えに同調し始めた。

晃は、そんな二人に対し「求導女様のやることに口を出すな」と言い続けた。それは、あの日約束したから、というのもあるが、何よりも、比沙子がやることは全て村のためだと信じていたからだだった。

その後、晃の従兄弟は宮田医院に監禁され、息子は、儀式が原因と思われる土砂災害により、行方不明となった。

これがきつかけとなり、晃も比沙子に対して不信感を抱くようになったが。

それでも、晃はあの日の約束を守り、最期まで比沙子のやることに口出しはしなかった。

重圧

刈割の丘の上にある眞魚教の教会では、毎週日曜日に礼拝式を行っている。礼拝堂には、今日も多くの信者が集まっていた。

式は、神に祈りを奉げることから始まる。礼拝堂の奥に掲げられている巨大なマナ字架に向かって手を組み、今日まで無事に過ごせたことを感謝し、明日からも無事に過ごせることを願うのだ。そして、皆で聖歌を歌う。聖歌とは、神を讃え、神に奉げる歌である。眞魚教においては、奉神御詠歌とも呼ばれていた。

聖歌を歌い終わった後は、法説ほうせつの時間だ。法説とは、求導師が祭壇に上がり、神の教えを説くことだ。他の宗教で『説教』や『説法』と呼ばれているものと同じである。

壇上に立った求導師は、信者たちに一礼すると、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「——今日も礼拝式にお集まりいただき、ありがとうございます。皆様の前で神の教えを説くなど、まだまだ私などには荷が重いのですが、私も求導師となった身。未熟ながら、精一杯勤めさせていただきます」

求導師の声には、まだ幼さが残っている。求導師・牧野慶は、今年十七歳だ。信者たちは小さく笑いながらも、温かい目で見守り、彼の言葉を待った。

「皆さんは、昨日の夜、何を食べられましたか？」

慶は礼拝堂をぐるっと見回した後、祭壇の前に座っている恩田夫妻を見た。「恩田さん、いかがですか？」

「はい」と、妻が答える。「昨日は、鶏の空揚げと、サラダを作って食べました」

恩田家には、美奈と理沙という小学校高学年の双子の姉妹がいる。もしかしたら、姉妹の大好物なのかもしれない。今日は姉妹の姿はない。昔は親子そろって式に参加してくれていたが、最近は夫婦だけで来ることが多くなった。そういう年頃なのかもしれない。

「なるほど。では——」

慶は、恩田夫妻の隣にいる前田一家を見た。前田一家は、両親と娘の三人で、毎週礼拝式に来てくれている。慶は、四歳になったばかりの娘の知子に話しかけた。「知子ちゃんはどうかな？ 昨日の夜は、何を食べたの？」

「えつとね……ハンバーグ！」知子は片手を挙げ、元氣よく答える。

「お母さんのハンバーグ、とつてもおいしいんだよ!!」

「そっか。それは、一度食べてみたいね」

「うん！ 求導師様、今度、知子の家に食べに来て！」

屈託ない笑顔で言う知子に、母親は「こ……こら、知子。失礼よ」となだめた。礼拝堂は、みんなの笑い声に包まれた。

慶もしばらく笑った後、視線を信者全員に戻した。「ちなみに私は、佐々木さんのお魚屋で買ったサバを焼いて食べました。この時期は、脂がのつてて美味しいんですね。こんな風に、我々は、生きて行くうえで毎日何かを食べますが、それらはすべて、元は命あったものです。私が昨日食べたサバは、ほんの数日前までは元氣よく海を泳いでいたはずです。恩田家で食べた鶏のから揚げも、前田家で食べたハンバーグも、ニワトリやブタやウシの肉からできていて、それらは当然、生きていました。当たり前のお話なのですが、普段、そんなことを考えて食事をしている人は少ないでしょう。我々は、生きて行くために他の命を糧にしています。中には、菜食主義で肉や魚などを食べないという方もいらっしゃるかもしれません。しかし、野菜などの植物も、太陽の光や、水、土から栄養を採り、成長します。やはり、命ある存在と言えるでしょう。我々は、多くの命の上に成り立っているのです。我々は生きていくのではなく、生かされている。そのことに感謝しましょう。日々の感謝無くして生きるは罪です。祈りましょう」

慶は胸の前で手を組み、目を閉じた。信者たちもそれにならう。皆で感謝の祈りをささげ、法説の時間は終わりとなった。

法説が終わった後は、一時間ほど時間をおいて食事会となる。それ

までの時間は礼拝堂を解放し、信者同士で交流することを勧めている。要するに、村人の井戸端会議の時間だ。

「——本日の法説は、いろいろと考えさせられるものがありました。求導師様も、まだ若いのに立派に職務を果たされていらっしゃる」

求導女の八尾比沙子に、中年の女性信者が話しかけて来た。比沙子は「ええ、そうですね」と、笑顔で応えた。

「先代の求導師様が亡くなられて、もう四年ですか」女性信者は昔を思い出すような顔になった。「今の求導師様の姿を見れば、先代も安心でしょう」

「はい。慶様は、先代の遺志を立派に受け継いでいます。先代が成し得なかつたことも、彼ならきつと、成し遂げてくれるでしょう」

「そうですか。それは良かったです」

「これも、支えてくださる皆様のおかげです」

比沙子は笑顔で応えながらも、心の内では小さくため息をついていた。求導師は順調に育っている——表向きは、そう見えるだろう。今日の法説も、最初から最後まで淀みなく話すことができていた。多くの信者が、まだ若いのに立派だと思つたかもしれない。

だが、それは表向きだけだ。裏では、牧野慶は何とも頼りない存在である。彼は、比沙子がいないと何もできない男だった。今日の法説も、実は比沙子が事前に用意したものである。慶はそれを丸暗記し、機械的に話しただけに過ぎない。恩田夫妻や前田一家に話しかけ、返ってきた答えに対して即興で話を展開させたようにも見えるが、実はそれさえも、比沙子が用意したシナリオ通りだった。昨晚、恩田家が鶏のから揚げを、前田家がハンバーグを食べたことは、事前に調べて判っていたのだ。現世でも幻視ができる比沙子には、彼らが何を食べたのか知るなど簡単なことだった。今日の法説は予定通りに進んだが、もし、恩田家や前田家が何を食べたのかすっかり忘れていたり、別の家族が割り込んで答えたりしていたら、慶はしどろもどろになっていたことだろう。

先代の求導師が早くに亡くなったため、牧野慶が跡を継いだのはわずか十三歳の時だった。求導師の責務を負わせるにはあまりにも若

いが、比沙子が後見人となり、一人前の求導師になれるよう教育してきた。慶は非常に気弱な性格で、求導師のような人を指導する立場には明らかに向いていなかったが、書物などを読んで短期間で暗記する頭の良さと、言われたことを忠実に実行する器用さを持ち合わせていた。だから、比沙子の指示があれば立派に職務を果たせるが、指示がなければ何もできない。牧野慶は、そういう人間なのである。

もつとも、それは比沙子があえてそういうふうに育てたから、という点が大きい。自分の思い通りに動いてくれる求導師は、比沙子にとっては都合が良い存在なのだ。ある意味では。

比沙子はしばらく女性信者と求導師の成長について話をしていたが、信者はふと思いついたように「そう言えば、宮田医院の坊ちゃんの話は、聞かれましたか？」と言った。

「司郎君のことですか？」顔を傾ける比沙子。

宮田医院には、慶と同年の、司郎という名の子供がいる。同い年——というより、二人は元々双子の兄弟だった。一九七六年に『吉村』という信者の家に生まれたのだが、その年の夏、村を襲った大きな土砂災害で両親が亡くなったのをきっかけに、兄は教会へ、弟は宮田医院へ引き取られたのである。

「院長夫人が、よく愚痴をこぼしていますよ」と、信者は声を潜めて続ける。「『求導師様は立派に職務を果たされているのに、うちの息子は、いつまでたっても何もできない』って」

宮田医院は、神代家や教会に次ぐ村の有力者である。当然のごとく眞魚教の信者であり、礼拝式には一家そろって毎回参加してくれていた。

比沙子は礼拝堂を見回した。院長夫人——宮田涼子と、司郎の姿はない。法説の時はいたはずだ。この後食事会があるから、帰ったということはないだろう。

気になった比沙子は、ウワサ話好きの信者の話を適当に切り上げ、涼子と司郎を探すため外に出た。玄関のそばで立ち話をしていた信者たちに訊くと、二人が教会の裏に歩いて行くのを見たという。比沙子は教会の裏へ向かった。

すると。

「——本当に、求導師様は立派に育ちました。あなたとは、大違いです」

角を曲がったところで涼子の声が聞こえてきた。足を止める比沙子。教会の裏には村を一望できる広場がある。そこに、涼子と司郎はいた。思わず建物の陰に身を隠す比沙子。涼子の不機嫌そうな声から、どうやら司郎が叱られているようだ。

「申し訳ありません」

低く、それでいてはつきりと聞き取れる声で謝る司郎。その声には抑揚がなく、感情が込められていない。表情も同じだった。何の感情も浮かんでいない顔。叱られているのに、反省する様子も、悲しむ様子も、憤る様子もなかった。双子の兄である慶は非常に感情が豊かだ。信者と話す時は笑顔になり、比沙子に叱られた時はこの世の終わりを迎えたかのような悲しそうな顔になる。今の司郎とは正反対だ。双子である二人は同じ顔であるはずなのに、まるで別人のようだ。

反省の色が感じられない司郎の様子が癪に障ったのか、涼子の声がさらに不機嫌になる。「なんですか、その態度は。あなたはいつもそう。謝罪の言葉は口にしても、反省も何もしていない」

「そのようなことはありませんが……そう思わせてしまったのなら、申し訳ありません」

やはり、司郎は淡々と答える。

「……まあ、それは構いません。宮田家の男には、そういう面も必要でしょう。ですが、仕事のひとつもできないようでは、院長の跡を継ぐなど、到底、無理な話ですよ」

「……………」

口をつぐむ司郎。仕事とは、宮田医院の医者の仕事のこと……ではないだろう。

涼子は腕を組み、顎を上げた。「そうやって、仕事の話になるとすぐに黙り込む。いつまでもそれでごまかせると思っているのですか?」「そのようなことはありませんが……そう思わせてしまったのなら、申し訳ありません」

さつきと同じ言葉を、さつきと同じ口調で答える司郎。まるで機械のようだ。

涼子は大きいため息をついた。「親を馬鹿にして……本当にあなたは、悪い子。なぜ、あなたのような子を引き取ってしまったのでしょうか。もう一人の子……求導師様は、素直な良い子に育っているというのに」

感情の無い司郎に対し、涼子は内から感情が滲み出ていた。決して良い感情ではない。思うように育たない息子への苛立ちや、素直に育っている兄・慶への嫉妬といった、負の感情。

血のつながった兄と比べられたからだろうか。司郎の顔が、わずかに歪んだ。

それを、涼子は見逃さなかった。攻める隙を見つけたかのようにニヤリと笑う。「捨てられていた双子の兄弟を、私たちは拾った。兄は教会へ。弟は病院へ。それは、単なる偶然。私が引き取ったのが、たまたま弟だっただけのこと。あの時、私が兄を引き取っていれば、宮田家は安泰だったのに。ねえ？」

ねつとりと身体に絡みつくような声の涼子。その表情は、獲物を見つけた蛇を思わせる。

比沙子は小さくため息をついた。よその家庭の教育方針についてどうこう言う資格など自分には無いが、あの涼子の言い方は、明らかに良くない。黙って見ているワケにもいかないだろう。

「——ああ、涼子さん。ここにいらしたんですね」

比沙子は、いま涼子たちを見つけたかのように装い、広場に出て行った。「もうすぐ食事会が始まります。皆さん、礼拝堂でお待ちですよ?」

比沙子に気付いた涼子の顔が、普段の表情に戻った。「これは求導師様。申し訳ありません。すぐに参ります」

司郎に対する態度とは一転し、涼子はうやうやしい様子で頭を下げた。村での立場的に、教会は宮田医院よりも上である。

比沙子は微笑んで応えると、今度は司郎を見た。「さあ、司郎君も、早く。求導師様も待ってるわ」

「いえ、せつかくですが——」と、涼子が口を挟む。「司郎は大事な用がありますので、これで失礼させていただきます」

そして、涼子は司郎を見て、冷たい口調で続けた。「——司郎。あなたは先に病院へ戻って、昨日の仕事の反省をしていなさい」

「……はい」

相変わらず無感情な顔と声で返事をする司郎。涼子はまだ何か言いたげだったが、比沙子がいる手前、ふん、と、鼻を鳴らすだけに留め、礼拝堂へと戻って行った。

「では求導女様、僕は、ここで失礼します」

機械的な口調でそう言って、機械的な様子で頭を下げる司郎。そして、そのまま帰ろうとする。

「あ、待って、司郎君」比沙子は司郎と呼び止めた。「少し、お話ししていかない?」

親子以上に年の離れた比沙子にそんなことを言われ、少しは戸惑うかと思ったが、振り返った司郎は全く感情を乱すこともなく、「いえ。母に、病院に戻るよう言われましたので」と答えた。

「少しくらい良いじゃない? お母さんのことなら心配しないで。もし、何か言われたら、あたしと話してって言えば、大丈夫よ。お母さんは、あたしの言うことには逆らえないから」

冗談っぽく言ったが、これは本当のことだった。この羽生蛇村において、教会は病院よりも上の立場だ。そのことは、涼子も、そして司郎もまた、よく知っている。

「判りました。では、少しだけ」

比沙子と司郎は、村を見渡せる広場に腰を下ろした。

表向き医者を目指している司郎は、慶とは違う学校に通っている。隣街にある医大の付属高校だ。比沙子はまず、学校の成績や交友関係など、当たり障りのないことを訊いてみた。司郎は淡々とした口調ながらも、ちゃんと話してくれた。

しばらく雑談をつづけた後、涼子について訊いてみることにした。「さつき、お母さんが仕事のことについて話してみたいんだけど、何があったの?」

「……………」司郎は口をつぐんでしまった。

「なにか、失敗しちやったとか?」

司郎はしばらく沈黙する。その表情は相変わらず乱れないが、彼なりに迷っているのかもしれない。

やがて司郎は、「申し訳ありません。言えませんが」と、短く言った。「お仕事に失敗した話とか、思い切つて話しちやえば、意外とスッキリするものよ?」

「いえ、この件は、教会は知らずとも良いことですから」

つまり——宮田医院の裏の仕事ということだろう。

宮田医院は、表向きは村唯一の病院として村人の健康を守る存在であるが、その裏では、神代家や教会のため、村人の拉致監禁や、現世に現れた屍人の処分といった、非合法な行為を行っている。言わば、村の暗部を担う存在だ。

司郎の様子と涼子の話から察するに、宮田医院に裏の仕事の依頼があつたのだろう。教会は何も依頼していないから、恐らく神代家だ。涼子は依頼された仕事を司郎に任せたが、司郎にはうまく行えなかつた……そんなところだろうか。宮田医院の裏の仕事に失敗は許されない。もつとも、まだ十七歳の司郎に任せるくらいなら、さほど重要な仕事ではないだろう。うまく行えなかつたとしても、大きな問題はない。恐らく司郎の義父がフォローしたはずだ。

比沙子は裏の仕事の件にはそれ以上触れず、話題を変えることにした。「——お母さんは、厳しい?」

「はい。とても厳しいです」

意外にも、素直に認める司郎。

しかしその後、淡々とした口調で続ける。「ですが、僕は将来、父の跡を継いで宮田医院の院長となる身です。村にとって重要な責務を負う立場になります。母の厳しさは、当然のことだと思います」

実に模範的な回答である。

だからこそ比沙子は気付いた。

その表情、その喋り方、一切感情がこもらないその裏に、本当の気持ちか押し込められている。

一卵性の双子である慶と司郎は、元々ひとつの命であったものがふたつに分かれたのだ。本来ならば、司郎も慶と同じく感情豊かな人間であるはずだ。しかし、母・涼子の歪んだ育て方により、その豊かな感情を胸の内に押し込み、無感情という仮面をかぶってしまったのかもしれない。良くない傾向だ。押し込められた感情は、決して消えることは無い。溜まりに溜まった末、いずれ爆発するだろう。その時、司郎の感情が向けられるのは、司郎をそんなふうに育てた母親か、それとも、ずっと比較されてきた兄・慶か。いずれにしても、悲劇的な結末を迎えるのは目に見えていた。このままではいけない。少し、司郎の心の負担を和らげた方がいいかもしれない。

比沙子は、司郎の顔を見て、ゆっくりとした口調で話し始めた。「お母さんが司郎君に厳しくするのも、理由があるのよ。お母さんはね、宮田医院に嫁入りしてから、なかなか子供を授からなくて、苦労したの」

「え——？」

司郎の顔に戸惑いが生じた。それは、彼の顔に初めて感情が宿ったように見えた。

比沙子は続ける。「お母さんが、先代求導師様の妹だつていうのは、知ってるわよね？ 教会から宮田家に嫁いだのは、涼子さんが二十三歳のときだったわ」

当時は子供を生むのが女の仕事だと言われていた時代だ。宮田医院のような古くから続く名家は特にその風潮が強く、涼子は、一刻も早く子供を授かろうと努力をした。しかし、なかなかうまくいかなかった。そのことを、義母——司郎のお祖母ばあさんにあたる人から、ずいぶんと小言を言われていたようである。

「そうなん……ですか」司郎は、比沙子の話を噛みしめるように聞いていた。

「ええ。それで、嫁いだから十年経って、ようやく男の子を授かったんだけど、十七年前の災害で、その子も喪うしなってしまつて」

「それで、僕を引き取つた……」

「そうね……でも、だからといって、司郎君への愛情が無いわけじゃな

いけど、ちよつと、気持ちが歪んじゃつたのかもしいわね。それだけ、お祖母ちゃんからの重圧が強かったのよ」

「……………」

「でもね、そのお祖母ちゃんも、宮田家に嫁いでからなかなか子供を授からなくて、苦勞してたの。司郎君のひいお祖母ちゃんに、たくさん小言を言われてたみたい」

そして、そのひいお祖母ちゃんもまた子づくりに悩み、義母から小言を言われ続けていた。

その義母も、そのまた犠母も、同じく。

宮田家に嫁ぐ女はいつもそうだ。子を産むことを強要されながら、なかなか子を授かることができない。遺伝的な問題があるのか、あるいは、因果律で定められているのか。恐らくは後者だろうと、比沙子は思っている。どちらにしても、子供を授かりにくいのは嫁一人の問題ではないのだが、いつの時代も、まるで嫁だけが悪いような目で見られる。

比沙子は、そんな宮田家の嫁の悩みを、代々聞いてきた。

そして、そんな母親に育てられた息子の悩みも、また。

「嫌なんです」

司郎がポツリとつぶやいた。聞こえるか聞こえないかの小さな声だった。だからこそ比沙子には、それが司郎の本音なのだと判る。

「…………お母さんのことが？」表情がよく見えるよう、比沙子は司郎の顔を覗き込む。

司郎は小さく首を振った。「宮田家の…………本当の仕事をするのが、嫌なんです」

「…………そっか」

「僕は、物心ついた時から、将来は父の跡を継いで医者になるものだと思ってきました。そのことは、とても嬉しかったんです。村の人が病気になるったり、怪我をしたとき、治療をする。医者は、村人の健康を守り、生活を守る仕事です。そんな仕事をしている父を、心の底から尊敬していました。でも、宮田医院の仕事はそれだけじゃなかった。病院で村人の治療をする一方で、裏では、村人を傷つけるようなことを

している。それが……たまらなく嫌なんです」

「ええ……判るわ」

比沙子はそれ以上何も言わず、丘の下に広がる村の景色を眺めた。宮田家が裏で行っている仕事は主にふたつ。神代家の行う秘祭の真実や比沙子の正体に気付いた者を捕え、地下牢に監禁すること。そして、現世に現れた屍人の処分である。それらの仕事を行うために、格闘術や重火器等武器の取り扱いを学び、尋問術や拷問術を覚え、逆に尋問や拷問に耐える訓練なども行っている。まさに、村の暗部を担う存在だ。

だが、それらはこの村にとって必要なことでもある。神代家の秘祭——神に花嫁を捧げる儀式は行わなければならない。儀式を行わなければ神の怒りを買ひ、村は大きな災いに襲われ、多くの村人の命が失われる。儀式は、村を災いから守るためのものでもあるのだ。同時に、神代の娘を解放することにもなる。神代の娘は、魂は不死だが肉体は滅びる不完全な不死だ。その魂を消滅させるには、神の花嫁になるしかない。

比沙子の正体に気付いた者を監禁するのも、結果的には本人のためなのだ。村人は、比沙子の正体に気付かないようになっていく。比沙子の正体を周囲の人々に話したところで、誰も信じない。名を変え、姿を変え、永遠に生き、村を見張っている女——そんな話、誰が信じるといえるのか。気がふれたと思われただけだ。それでもしつこく主張し続けられ、異端者とみなされ、迫害される恐れがある。それよりは、宮田医院に閉じ込めておく方が安全なのだ。

現世に現れた屍人の処分は、当然行わなければならない。屍人は、放っておけば生きていく人間を次々と襲う。屍人は不死の存在だから、捕えて閉じ込めておくしかない。屍人はかつてこの村で暮らしていた人なのだから、かわいそうだと思う感情はある。だが、彼らは知能が低いので、監禁されていることを苦痛とは思わないのだ。閉じ込めておけばいずれ異界に戻るチャンスもある。時には比沙子がこっそり異界に連れて帰ることもあった。

宮田医院は村に必要な存在だ。彼らが手を汚すからこそ、村人は平

和に暮らすことができる。

だが、それは司郎には言わない。どう言い繕おうとも、宮田医院が村人を傷つけているという事実は変わらないだろう。

だから、代わりに。

「……医者には、救える命よりも、救えない命の方が多い」

遠い記憶の奥底から掘り起こした言葉を口にしました。

「え？」と、顔を上げた司郎に対し、比沙子は続けた。

「もう何年も前に、村のお医者様が言った言葉よ。司郎君のひいひい……もつと前のお祖父ちゃんにあたる人かな？ その人も、司郎君と同じく、みんなの命を救う医者になるのが子供のころからの夢だった。まだ小さなころから町医者に弟子入りして医術を学び、その頃の日本ではまだ一般的ではなかった海外の進んだ医術も積極的に勉強したの。でもね。やっぱり、医者ができることには限界があるのよ。どんなに効果のある薬を飲ませても、どんなに進んだ治療を施しても、救えない命はある。『死』というものに対し、人間は、あまりにも無力なの。その人は、そう言っていた」

それは、三百年以上昔。南蛮国の宗教を禁止する『禁教令』のもと、眞魚教が幕府より弾圧されていた時代の話だ。なぜそんな古い話を比沙子が知っているのか——当然湧きあがるはずの疑問だが、司郎は何も言わない。恐らく、不審に思うことさえないだろう。この村に住む者は、比沙子が永遠の命を持っていることに気付かないようになっているのだから。

比沙子はさらに続けた。「でもね、こうも言っていたの。『目の前に生きようとする命があるのなら、私は救いたい。それが、医者である私の使命だ』って」

「医者……使命……」

司郎は、その言葉を胸に刻みつけるようにつぶやいた。

「あたし、思うの。確かに、今の宮田医院は、裏で医者とはかけ離れた仕事をしている。でも、そうなったのにも意味があるんじゃないかって。同じように、司郎君が養子になって宮田医院の跡継ぎになったのも、たぶん、何か意味があるんだと思う」

「僕が、宮田医院に引き取られた意味……」

「司郎君が本当に宮田医院の仕事が嫌なんだったら、やめてもいいと思う。お父さんやお母さんが認めてくれるかは判らないけど、もし本当にやめるのなら、あたしは司郎君に協力する。でもね。あたしは、司郎君が院長になって、この村がどうなるのか、見てみたい。だって、司郎君みたいな優しい人が院長になるのって、初めてのことだもの。まして、宮田医院の院長と教会の求導師様が双子の兄弟だなんて、村始まって以来のことだわ。そこには、きっと大きな意味があると思う」

「……………」

比沙子の話を聞いた司郎は、一度視線を落とした後、丘の下に広がる村の景色に目を移した。そのまま無言で村を眺める。その顔には相変わらず何の感情も浮かんでいないように見えるが、さつきまでとは明らかに違う表情。迷いが消えたような顔——そう思うのは早計かもしれないが、そうあつてほしいと思う。

比沙子はそれ以上何も語らず、しばらく二人で村を眺めたやがて。

「——あ、いたいた。求導女様！」

教会から、中年女性の信者がやってきた。「求導師様が困ってますよ？ 求導女様がいないから食事会を始められないって」

「あ、ごめんなさい。すぐ行きます」

信者にそう言った後、比沙子はお尻の埃を払いながら立ち上がった。司郎も立ち上がる。

比沙子は司郎を見た。「ごめんね、なんかあたし、ワケがわからないこと言っちゃったかも」

司郎は首を振った。「いえ、そんなことはありません。お話できて、良かったです」

「そう？ なら、良かった」

比沙子はにっこりと笑った後、「じゃあ、あたしは戻るね」と告げて、教会へ向かった。

だが、少し進んだところで後足を止め、振り返った。「——お母さん

が、司郎君と求導師様を比べることがあっても、気にしちやダメよ?」
「え?」

「求導師様——慶はね、ちゃんとしているように見えるかもしれないけど、本当は、どうしようもない甘えん坊なの。あたしがいないと、何もできないのよ? 昨日だって、法説で何を話せばいいか判らないつて、泣きついて来たんだから」

「そうなのですか?」

「ええ。今だって、あたしがいなくなつてあたふたしてると思うの」

「それは、ちよつと見てみたいですね」

そう言った司郎の顔に、初めて、年相応の笑顔が浮かんでいた。

その笑顔に、比沙子は満足げに頷いた。「たぶん、司郎君の方がずっと大人だわ。だから、劣等感とか、コンプレックスとか、持たなくていいからね」

「判りました」

大きく頷いた後、司郎は。

「今日は、本当にありがとうございました」

深く、頭を下げた。

後日、比沙子は宮田医院を訪ねた。

「わざわざお越しただかなくとも、御用でしたらこちらから伺いましたのに」

客間に通された比沙子にお茶を出す涼子。宮田家の客間はクラシックな雰囲気洋間だ。床一面に真っ赤な絨毯が敷かれ、中央に大理石のテーブル、それを囲むようにソファアが置かれている。部屋奥には振り子式の大きな柱時計が時を刻み、その隣の大きな窓からは、レースのカーテン越しに柔らかな日差しが差し込んでいる。

涼子は、比沙子の前の席に座った。「それで、今日はこういったご用件でしょうか」

出されたお茶を一口すすった後、比沙子は小さく首を振った。「そ

んな他人行儀な喋り方、やめましょ?」

「——え?」

「教会とか病院とか、そんな立場は忘れて、昔みたいに楽しくお喋りしましょよ。ね? 涼子ちゃん」

目を丸くして戸惑う涼子に、比沙子は、悪戯っぽい笑みを向けた。

宮田医院の院長夫人である涼子は、教会の先代求導師である牧野怜治の妹だ。当然、嫁入りするまでは教会で育った。それはつまり、比沙子とは家族同然の仲だったということである。

戸惑いの表情を浮かべていた涼子だったが、すぐに引き締めた。

「昔は昔、今は今です。教会は、病院よりも上の立場ですから」

「そんな固いこと、言わなくてもいいのに」比沙子は肩をすくめた。

「ま、いいけどね。用は、司郎君のことについてなんだけど」

「はい? 司郎について、ですか?」

またまた目を丸くする涼子。そんなに意外な用件だろうか? 比沙子と涼子は、双子の兄と弟を引き取って育てている身だ。母親同士お話をするのは、別に不思議なことではないはずだ。

だが、考えてみたら、涼子と子供についてゆっくり話をしたことなど、これまで無かったように思う。驚くのも無理はないかもしれない。

比沙子は続けた。「今日は、求導女ではなく、同い年の息子を育てている母親として、話をしに来たの。この前の日曜、教会の裏で司郎君を叱ってたところ、見てただけど、ああいう叱り方は、良くないんじゃないかな?」

それを聞いて、涼子の顔はあからさまに不機嫌になった。「なんの話かと思いきや……お言葉を返すようですが、いかに教会が病院より上の立場とは言え、息子の教育方針にまで口出しする権利はないと思います」

「だから、今日は求導女ではなく、母親としてお話しに来ただってば」

「どちらにしても同じことです。余計な口出しは控えて頂きましょう。私は、宮田家の嫁として、一刻も早く、息子を一人前に育てなけ

ればならないのですから」

「司郎君は、宮田医院の表の仕事と裏の仕事のずれに悩んでる。涼子ちゃんには涼子ちゃんの教育方針があるのかもしれないけど、今みたいなやり方を続けるのは、ただ司郎君を追い詰めるだけよ。司郎君は、彼なりに精一杯やっていると思うわ」

「何が精一杯なものですか。司郎はまだ、一人で仕事のひとつもできない。あれで、どうして院長など務まるでしょう。このままでは、私はご先祖様に顔向けできません」

「何をそんなに焦っているの？」

「焦ってなどいません」

比沙子の意見にも、主張を曲げない涼子。言葉と視線がすれ違う。

比沙子は小さく息を吐くと、一度お茶をすすって喉を潤し、そして言った。「……涼子ちゃん。もう、お義母さんはいないんだよ？」

『お義母さん』という言葉に、涼子は一瞬、大きく震えた。

「な……何を言っているのです」声も震えている。

「今も見られていると思ってるんでしょう？ お義母さんに」

「――」

涼子は言葉を失った。目に見えて動揺している。比沙子の言葉は、核心を突いたようだ。

比沙子には判っていた。涼子は、義母——先代の院長夫人に、今も怯えている。

宮田家に嫁いだものの、涼子はなかなか子を授かることができなかった。一時は離縁の話が出ていたとも聞く。宮田家における離縁とは、単に籍を外され、家を出て行くといった単純なものではない。村の暗部を担う宮田家には、外部に知られてはいけないことが多くある。離縁された者は、病院の地下牢に監禁され、二度と日の目を見ることは無い。

涼子は、宮田家から離縁を言い渡されることに、ずっと怯えていたのだ。

特に義母は、涼子にとっては悪夢のような存在だった。嫁いだからずっと、早く子を産むよう口うるさく言われ続け、涼子の心はどんどん

ん追い詰められていった。義母からの重圧は、涼子の心を壊してしまったのかもしれない。

そんな義母も、数年前に亡くなった。

だが涼子は、今も義母の影に怯えている。義母がまだこの家にいると思っっている。司郎を一人前に育てられるか、ずっと見張られていると思っっている。

だが、それはあり得ないのだ。義母は死に、この世から消えた。未練を残し、成仏できない魂が現世を彷徨っているなどということは、決して無い。

様々な怪奇現象が起こる羽生蛇村だが、幽霊とか霊魂というものは、基本的に存在しないのだ。

村人は、死んでもすぐに常世へ行けるわけではない。まずは異界に行き、そこで屍人となる。そして、生前と同じような生活を送りながら、海送り・海還りの儀式を行い、前世の穢れを祓うのだ。穢れを祓い、神に認められた者は、常世へと旅立つことができる。これが、この村の絶対的な仕組みである。

だから、義母の魂だけが現世に残るということは、羽生蛇村ではありえないのだ。

ただひとつの例外は、神代家の娘だ。神によって常世に来ることを拒まれている神代家の娘は、肉体は滅びても魂は滅びない存在だ。現世、もしくは異界で、永遠に彷徨い続けることになる。神代家の地下室には、歴代の神代の娘の魂が、今も多く彷徨っている。

しかし、涼子の義母は神代家の娘ではない。なんらかの原因により神代の血が混じったということもあり得ないが、少なくともこの家に義母の魂はいない。比沙子は、消滅できずに彷徨う魂を見ることができ、その声を聞くこともできる。比沙子が見る限り、この家にも、そして村のどこにも、義母の魂はいない。だから、涼子が義母の姿を見ているとするならば、それは、『宮田医院の跡継ぎを産み、育てなければならぬ』という重圧が生みだした幻覚に過ぎないのだ。

「お義母さんは、もういないの」比沙子は、ゆつくりと教え諭すように言う。「涼子ちゃんを追い詰めている存在がいるとすれば、それは涼

子ちゃん自身よ。自分で自分の心を追い詰めているの。その影響で、司郎君まで追いつめられている。このままだと、いつか取り返しのないことになるわ」

柱時計が時を刻む。涼子は何も答えない。答えないが、その胸の内は、時計の振り子のように揺れ動いているのが判った。

どれくらい黙っていたか、やがて涼子は。

「何のことか判りませんわ」小さく言って、湯呑を持った。「お義母さまは亡くなった。そんなことは判っています。なぜ、亡くなった方に、私が怯えなければならぬのです」

「……涼子ちゃん」

「お義母さまは関係ありません。これは、私自身の問題です」

「涼子ちゃんの問題？」

「私には、時間が残されていないかもしれない」

比沙子は、はっとした表情になった。「病気の……こと？」

涼子は静かに頷き、手に持っている湯呑を口に運んだ。

涼子は一度、大きな病を患ったことがある。司郎や慶が中学校に通い始めた頃だ。その頃、涼子の兄である先代求導師が亡くなったのだが、病で入院していた涼子は葬儀に参列できなかったのを、比沙子はよく覚えている。涼子の入院生活は長く続き、何度も手術をした。一時は生死の境をさまよったこともある。

涼子は湯呑をテーブルに置いた。「私は、司郎を一人前の院長に育てなければなりません。兄のように、半人前の息子を残して死ぬわけにはいかないのです。でも、私自身、いつまで司郎のそばにいてあげられるか判らない。だから、怖いのです」

「——でも、今は元気じゃない」比沙子は、涼子を励ますため、明るい口調で言った。「再発の心配も、今は無いんでしょ？ 経過は良好だつて、聞いているけど」

「それが判っていても、怖いのです。病は、またいつ再発するか判らない。次に再発したら、今度は助からないかもしれない。考えまいと思っても、考えてしまうのです。司郎を一人前に育てないまま死んでしまったらと思うと、怖くてたまらないのです。比沙子さんは、大き

な病に罹ったことがないから判らないかもしれませんが」

そう言われ、比沙子は視線を落とす。確かに、その怖さは比沙子には判らない。病で死ぬ心配がない比沙子に、死への恐怖は無い。半人前の息子を残して死ぬこともあり得ない。どんなに息子——慶が長生きしようとも、必ず、比沙子は慶を看取ることになる。

「……懐かしいですね」

不意に、涼子の声が明るくなった。

顔を上げる比沙子。

涼子の顔には笑顔が浮かんでいた。「私が宮田家に嫁ぎ、なかなか子供を授からなかった時も、比沙子さんには、いろいろと話を聞いてもらいました。覚えていますか？」

「もちろんよ。涼子ちゃん、なかなか子供を授からなくて、苦労したもののね」

「あの時も、私は焦っていた。早く子供を生まなければいけないのに、なかなか授からない。お義母さまが見ている……今と変わりませぬね」

「涼子ちゃん。あの時と今とは——」

比沙子の言葉を遮るように、涼子は首を振った。「判っています。でも私は、司郎——最初の子供が生まれた時、心の底から安堵しました。それは、ようやく子供を生み、宮田家の嫁としての務めを果たすことができたからではなく、ようやくお義母さまの重圧から解放されたと思ったからです。あの時の私にとって、子供は、自分の命に代えても護るものではなく、義母から自分の身を守るためのものでした。そんな風に考えていたから、私は司郎を喪ってしまった。あれは、神が私に与えた罰だったのかもしれない」

「涼子ちゃん。そんなことは、絶対ないわ」

力強い口調で言う比沙子。涼子が最初の子供を喪ったのは、十七年前に村を襲った土砂災害が原因だ。つまり、神に花嫁を捧げる儀式が失敗したことが原因であり、元をたどって行けば比沙子が原因ということになる。もちろん、それを言うことはできないし、言ったところで信じてもらえない。

涼子は目を伏せた。「……そうですね。私たちの神は、そのような陰湿な罰を与えるようなお方ではありません。今のは失言でした」

今度は比沙子が目を伏せる。神は、涼子が思っているよりもずっと陰湿だ。もちろん、そんなことは言えない。

「——でも」と、涼子の声が再び明るくなった。「焦っているのは、私はまた同じ過ちを繰り返すかもしれません」

顔を上げた比沙子に、涼子は続けた。「比沙子さんの言う通りです。私は、お義母さまの影におびえ、一刻も早く司郎を一人前にしなければと焦っていた。また、あの時のように悲しい思いをするのはごめんです。司郎の教育方法については、少し考え直してみましよう」

そう言った涼子の顔には、母親の優しい笑みが浮かんでいた。「ええ、それがいいと思う」比沙子も優しく微笑み、涼子に応えた。

柱時計が、ポーンポーンと鳴った。窓から差し込む陽の光は、いつの間にか比沙子の足元にまで届いている。

「——時間が経つので、早いものね」比沙子は、しみじみとした口調で言った。「ついこの間まで、涼子ちゃんも小さな子供だったのに。今ではお母さんになって、あたしと、子育てについて話してる。本当に、あつという間だったわ」

「それだけ、お互い年を取ったということでしょう。年を取ると、時間が経つのが早く感じると言いますから」

「そうかもね」比沙子は肩をすくめて笑った。

涼子も頬を緩めて応えたが、不意に真顔に戻り、黙り込んでしまった。なにやら考え事をしているような様子。

「どうしたの？ 涼子ちゃん」比沙子は涼子の顔を覗き込んだ。

「……そう言えば、変ですわね」

「何が？」

「今、比沙子さんと、こうして、子育てについて話していることが、です」

「そのの、なにが変なの？」

「いえ……さつきも言った通り、私は、まだお義母さまが生きていた頃、なかなか子を授からないことを、何度も比沙子さんに相談しまし

た」

「ええ、そうよ?」

「嫁ぐ前は、宮田家でちゃんとしていけるか不安で、これも、何度も相談しました」

「それまで他人だった人と暮らすことになるんだもの。ましてあの頃は、親が嫁ぎ先を決めたら、娘は逆らえなかった時代。会ったこともない人たちと一緒に住むんだから、悩んで当然だわ」

「学生の頃は、宿題を見てもらったことがあるんです」

「そうね。でも、涼子ちゃんは成績優秀だったから、あたしが教えることなんて、あんまりなかったけど」

「子供の頃、兄にイタズラされて泣いていたら、比沙子さんが慰めてくれて、兄を叱ってくれた」

「ええ。涼子ちゃんのお兄ちゃんは、子供の頃は結構やんちゃだったから、手を焼いたわ」

「思い返してみると、私は、比沙子さんに育てられていたように思います」

「まあ、あたしもずっと教会にいるから。血の繋がりは無いけど、涼子ちゃんにとっては、もう一人のお母さん、って感じかな?」

「でも今は、養子ではありますが、同じ年の息子を育てている。同年代の母親……いえ、見た目だけなら、比沙子さんの方がひと回り年下に見えます」

「そう? そんなに若く見えるのなら、嬉しいな」

「比沙子さん。あなたは一体、いくつなのですか?」

「さあ? 忘れちゃった。まあ、涼子ちゃんより年上なのは確かね」

「私、今年で五十になったのですが、それよりも年上だと仰るのですか?」

「ええ、そうよ? それの、なにが変なの?」

「いえ……別に変ではありません」

「そう? なら、いいけど」

比沙子は飲みかけのお茶を飲み干し、テーブルに置いた。

そして、涼子を真っ直ぐに見て、含みのある笑みを浮かべる。「ちな

みに……あたしの年齢のこと、他の人には言わない方がいいよ？ さもないと……」

涼子もお茶を飲み干し、比沙子と同じ笑みを浮かべた。「——ええ、気を付けますわ。『特別な病院』に閉じ込められたら、たまりませんからね」

柱時計が時を刻む。二人は、しばらく無言で見つめ合う。

そして——。

なんだかたまらなくおかしくなって、どちらともなく吹き出し、二人で笑い合った。

傀儡

日曜日。教会では礼拝式が行われ、今日も多くの信者が集まっていた。いつものように礼拝堂で祈りを奉げ、聖歌を歌う信者たち。聖歌が終わると、次は、求導師が神の教えを説く時間・法説だ。求導師・牧野怜治は壇上に上がると、ゆっくりと信者たちを見回し、そして、話し始めた。

「――聖典・天地救之伝の、出村記第八章五節にて、時の求導師は、神王様より三十三の戒めを授かりました。その二十七番目の戒めに、『神の元において、男も女も等しく扱われる』というものがあります。これは言うまでもなく、男女平等を定めたものです。この時代、他の宗教では、男尊女卑が当たり前でした。女性は聖職者になれない、教育を受けることができない、職に就くことができない、果ては、『女性は神がお作りになった失敗作である』と公言する宗教家までいる始末です。宗教全体で女性を蔑視していたとも言えます。それに比べ、我らが神王様は古くから女性の権利を尊重していたのです。この『神の元において、男も女も等しく扱われる』という教えに従い、我が村では、男女ともに聖職に就くことができ、望めば教育を受けられ、あるいは職に就くこともできます。特に、職に関しては、近年、日本中で『男女分け隔てなく職に就けるよう法を改善すべきだ』という声が上がっています。終戦から二十年が経ち、ようやく国が動き始めたのに対し、私たちの村では、数百年も昔からそれを定めていたのです。これも全て、偉大なる神王様の導きがあつてからこそ。神王様に、改めて感謝の祈りを奉げましょう」

求導師が目を閉じて手を組むと、信者たちもそれにならつて手を組む。そして、皆で神に感謝の祈りを奉げた。

法説が終わると、食事会までの間自由時間となる。信者たちは交流を深めるため、集まっていろいろな話をする。要するに、お喋りの時間である。礼拝堂内では、信者たちがいくつかのグループに分かれ、それぞれお喋りを始めた。

求導女の八尾比沙子は、信者たちのグループを順に巡り、話を聞き

て回った。ある老信者のグループでは、戦後間もない頃どのような仕事をしていたかを聞き、別のグループでは、子供たちに将来どんな仕事をしたいかを訊く。そうやって、信者たちのグループをひとつひとつ順に巡っていたら。

——最近、屋敷の周りで奇妙な事件が起こっているの。

こんな声を耳にした。

声のした方を見る。礼拝堂の隅で、若い女が数人集まっていた。皆、えんじ色の着物を着ている。それは、神代家の女中が着る着物だ。奇妙な事件が起こっている屋敷というのは、神代家のことだろうか。

羽生蛇村では、奇妙な事件が起こることは珍しくない。血の涙を流す化物の目撃情報は後を絶たないし、見えるはずのないものが見えたり、聞こえるはずのない声が聞こえたりする者も多い。あるいは、神隠し事件や、原因不明の土砂災害なども——頻度こそ少ないもの——定期的に起こっている。ただ、真相はともかく、それらはあくまでも、子供たちの怪談話の域を出ないのが現状だ。まともな大人ならば、一笑に伏すような話である。だから、若い者がこのようなウワサ話をしていても、別段気にするようなことはない。

だが、そのウワサ話をしているのが実際に神代家で働いている女中たちとなると、聞き捨てはならない。

話をしているのは、十五・六歳の若い女中だ。皆、神代家に住み込みで働いている。先ほど法説で求導師が話した通り、眞魚教では聖典によって男女の平等が定められ、望めば女性でも簡単に職に就くことができる。神の教えに従い、役所、病院、そして神代家が、積極的に女性を雇用しているのだ。だがこれは、逆に言えば、女性が働く先はほぼこの三つに限られるということでもある。また、村には高校が無いため、中学卒業と同時に働く者が多い。そのため、神代家の女中は十五・六歳の者が一番多いのだ（もともと、その大半は一年とかからず辞めてしまうのだが）。まだ子供といってもいい年齢であるため、神代家の中で起こっていることを外で話す危険性を理解していないのだろう。ヘタなことを話すとクビどころでは済まないのだ。比沙子は小さくため息をつくとき、女中たちに話しかけた。

「——なんの話をしているの？」

比沙子が話しかけると、女中の一人が目を輝かせた。「あ、求導女様！ 聞いてくださいよ！ 最近、神代の屋敷の周りで変なことが起こってて、あたし、怖いんです！」

もはや礼拝堂中に聞こえるほどの声だが、幸い、信者たちは各々のお喋りに夢中で、こちらを気にしている者はいなかった。

「えーっと、郁子ちゃん。話は聞くけど、もうちよっと、小さな声で話そうか？」 苦笑いする比沙子。

郁子は、女中になってまだ三ヶ月の少女だ。小中学生の頃から怪談話が好きで、『羽生蛇村小学校七不思議』や、『村人三十三人殺し』などの話を、クラスメイトに得意げに話していた。

郁子は、少しだけ声を潜めて話し始めた。「最近、屋敷の周りで、動物がいつぱい死んでるんです。カラスとか、野良犬とか」

「……え？」

目を丸くする比沙子。予想外の話だった。神代家で変なことが起こっていると言うから、どこからともなく苦しそうなうめき声が聞こえるとか、夢で見たことが現実に起こっていたとか、そういう話だと思っていたのだ。

これらの話は、新米の女中が必ずと言っていいほど経験することだった。原因も、比沙子には判っている。苦しそうなうめき声は、屋敷の地下から聞こえてくるものだ。屋敷の地下には当主さえも知らない秘密の地下道があり、そこに、常世に来ることを拒まれた歴代の神代の娘の魂がひしめき合っている。その声が漏れたのだろう。夢で見たことが現実に起こったのは、一時的に幻視の能力に目覚めたのだ。見たのは夢ではなく、現実の誰かの視点なのだ。だから、これらは特に気にすることではないのだが。

「……詳しく聞かせて」 比沙子は郁子に話を促した。長く村々で暮らしている比沙子にも、神代家の周りで動物が多数死んでいるというような話は初めてだった。何かが起こっているのかもしれない。

郁子は、声を低めて話を続けた。「朝、お庭とか、お屋敷の周りを掃除していると、必ず、野良犬やカラスの死骸が見つかるんです。その

死に方も、なんだかおかしくて……自然に死んだとか、病気になったとかじゃないんです。みんな、頭から血を流して、苦しそうな、恨めしそうな、そんな顔をして、死んでるんです」

怪談話をするかのような語り口に、女中仲間は不安そうな顔になる。比沙子も眉をひそめる。どういうことだろう？ 神代の屋敷は、西ヶ原という地域にある。多くの村人が住む地域から少し離れた場所で、どちらかといえば山深く、カラスや野犬などは多い。死骸が見つかることもあるだろうが、それが短い期間に屋敷の周りで頻発しているとなると、確かに妙な話である。

郁子はさらに話を続ける。「それで、三日前の話なんですけど、あたし、見たんです。夜中の二時くらいでした。トイレに行こうとしてたら……屋敷の奥に『開かずの扉』って、あるじゃないですか？ あの中から、澄子さんが出てきたんです。こんな時間に、しかも開かずの扉の中で、何してたんだろう？ って、不審に思って、あたし、隠れて見てたんです。そうしたら、澄子さん、手に、何か持ってるんですよ。黒い塊みたいなもの。その塊から、ぽた……ぽた……って、何か滴り落ちてるの。暗くてよく見えなかったから、目を凝らして見たら、その黒い塊……血まみれの、猫の死骸だったの!!」

郁子の話に、女中仲間は小さく悲鳴を上げた。

「澄子さんが、開かずの扉の向こうで、猫を殺してたってこと……？」
女中仲間の一人が怯えた顔で言う。

「そうだと思う」郁子が頷いた。「その猫、ピクリとも動かなかったし」
別の女中が口元を抑えた。「じゃ……じゃあ、屋敷の周りの、カラスや野良犬の死骸も、澄子さんが……」

「コラ。変なこと言わないの。澄子さんが、そんなことするわけないじゃないの」比沙子は、子供を叱るように注意した。

「でも、血まみれの猫の死骸を持っていたのは、確かなんですよ？」と、郁子が反論した。「あたし、この目ではつきりと見たんですから」

「その時は、暗くてよく見えなかったんでしょ？ だったら、郁子ちゃんの見間違いかもしれないじゃない？」

「そんなことは……無いと思うんですけど……」

急に声のトーンが落ちる郁子。なにやら自信がない様子だ。恐らく、少し話を大げさに言っているのだろう。彼女のような怖い話好きの少女には、よくあることである。

比沙子は肩をすくめた。「まあ、何にしても、その話はある限り外でしない方がいいわよ？　じゃないと、郁子ちゃん、『特別な病院』に閉じ込められちゃうから」

「またまたあ。『特別な病院』なんて、子供の怖い話じゃないですか」「さあ？　どうかしら？　みんな、お屋敷で働く前に、当主様から言われなかった？　『屋敷の中のことは、決して外で話してはならない。さもないと……』って」

「……………」

女中たちの顔から、さつと血の気が引いた。

比沙子は含んだ笑みを浮かべると、不安そうな顔をする女中たちを残し、話の輪から離れた。まあ、あの娘たちはああ言っておけば大丈夫だろう。仮に郁子が外の人に話したとしても、子供じみた怪談話の延長にしか思われなはずだ。

だが、話の真相は確かめておく必要がある。屋敷の周りで動物の死骸が見つかり、『開かずの扉』から、澄子が血まみれの猫の死骸を持って出てきた——郁子の話は多少脚色されているだろうが、全部嘘ということはないだろう。特に、澄子が『開かずの扉』から出てきたという点は、真実である可能性が高い。

澄子は、神代家に十年以上仕えている女中だ。物静かで器量がよく、後輩の女中から慕われている。当主や夫人からも信頼されており、『開かずの扉』の向こうへ行くことを許された数少ない女中でもある。

『開かずの扉』の向こうに行けるのは、神代家当主や眞魚教の求導師、宮田医院の院長など、村の有力者だけだ。扉の奥には座敷牢があり、神の花嫁となる運命を背負わされた神代家の次女が、密かに育てられている。神の花嫁——美耶子は、今年四歳になる。澄子は、幼い美耶子の世話を任されている女中だった。

比沙子は礼拝堂を見回し、澄子の姿を探した。澄子は、誰とも雑談

することなく、一人、礼拝堂の椅子に座っていた。なにやら思いつめたような顔をしている。そう言えば、礼拝式中も心ここにあらずといった様子だった。比沙子は、澄子に声をかけた。

「……あ、求導女様……こんにちは」澄子は顔を上げると、生気のない声で答えた。

「澄子さん、なんだか今日は元気がないみたいだけど、何かあった？」

「いえ……特に何も……」

力ない声で言つて、目を逸らす澄子。言葉とは裏腹に、明らかに何かあった様子である。

「ちよつと、お話したいことがあるんだけど、ここじゃなんだから、あたしの部屋に来ない？」

比沙子は、礼拝堂の奥にある自分の部屋に誘った。話の内容が神代の娘に関わるかもしれないので、誰かに聞かれるのは非常にまずいのだ。澄子は、戸惑いの表情を浮かべながらもついて来た。

比沙子の部屋は六畳ほどの広さだ。中は、ベッドと机・椅子・たんす筆筒・本棚と、最低限度の家具しか置いていない。椅子はひとつだけなので澄子に譲り、比沙子はベッドに腰を下ろした。

「美耶子様の様子は、どう？」

部屋に入つて、何気なく訊いてみた。比沙子にしてみれば本題に入る前の世間話のつもりだったのだが、美耶子と聞いたとたん、澄子は大きく震えた。

「ど……どう……と、言いますと？」動揺した声の澄子。

「うん？　ただ、元気にしてるかなと思つて訊いただけなんですけど……ひよつとして、何かあった？」

「いえ、大丈夫です。美耶子様は、元気です」

「……そう。なら、いいんだけど……最近、屋敷の周りで小動物の死骸が見つかつてるって話を聞いたから、ちよつと、心配で」

「だ……誰がそんな話をしてるんですか!？」

急に大声を上げ、椅子が倒れそうな勢いで立ち上がる澄子。比沙子は、目を丸くして驚いた顔をする。

「あ……申し訳ありません、求導女様」澄子は決まりが悪そうな顔を

し、椅子に座り直した。

「いえ、いいんだけど……澄子さんは、嘘をつけない性格ね。何かあったんでしょ？」

比沙子は、澄子の顔を覗き込むように見た。澄子は無言で目を逸らす。

「大丈夫よ」と、比沙子は言って、そして続けた。「ここなら、誰かに聞かれることはないから。何か、困ってることや悩んでることがあるなら、話してみて」

神代の次女の存在は極秘とされ、口外することは禁忌中の禁忌だ。ゆえに、澄子が何か問題を抱えていても、相談できる相手は極めて少ない。恐らく、比沙子以上に親身に話を聞いてくれる人はいないだろう。

澄子は小さく頷くと、話し始めた。

「美耶子様が、猫を飼われていたのは、ご存知ですか？」

「猫を……？　いえ、知らなかったわ」

首を振る比沙子。神代の次女は生まれてから花嫁になるまでずっと座敷牢の中で過ごすため、少しでも寂しさを紛らわせるために、動物を飼わせるのはよくあることだ。しかし、美耶子が猫を飼い始めたというのは、まだ比沙子の耳には入っていなかった。

澄子は「そうですか……」と言った後、続けた。「最近飼い始めたから、まだ求導女様にお知らせしていなかったんでしょ？」

「それで……その猫が、どうかした？」

比沙子は探るように訊いた。美耶子が猫を飼っていた——それは、先ほど礼拝堂で若い女中の郁子が言った「夜中に開かずの扉から猫の死骸を持った澄子が出てきた」という話とも一致する。郁子の話が本当ならば、その猫は恐らく。

澄子の表情が暗くなつた。「三日前、亡くなりました。飼いはじめて、まだ一週間も経ってないのですが……」

「そう……それは、気の毒だったわね。美耶子様も、気を落とされてるんじゃない？」

澄子は首を振った。「いえ……別の猫を連れてきて、と、盛んにせが

んで来るんです」

「……まあ、まだ四歳だし、『死ぬ』というのがどういふことなのか、よく判ってないだけよ。そのあたりは、ゆっくりと教えていかないと」
「そうかもしれないませんが……ただ……」

「ただ……？」

「その、猫の死に方が、異様で……」

異様——その言葉に、不吉なものを感じる。『変わった死に方』とか、『おかしな死に方』と表現はよく使われるかもしれないが、『異様な死に方』というのは、よほどの状態でないと使わないように思う。比沙子は、澄子の言葉を待つ。

澄子は大きく息をのみ込み、言った。「頭が、潰れていたんです」

「——」
言葉を失う比沙子。頭が潰れていた？ どういうことだろうか？

何か、重いものが倒れて来たのだろうか？ 比沙子は、美耶子が囚われていた座敷牢には何度も足を運んでいる。十畳ほどの部屋と、ちよつとした日本庭園がある。部屋には箆筒たんす、庭には石灯籠があるが、神の花嫁に何かあつては大変なので、決して倒れないようになっていいる。無論、それにも限界はあるだろうが、屋敷が倒壊するほどの地震でもない限り倒れることはないはずだ。万が一倒れたとしても、猫が頭を潰すことなど、そうそうあることではない。

澄子はさらに続ける。「庭の壁に、血が飛び散ってました。猫が死んでいたのは、その近くです。壁だけじゃなく、地面や、庭石や、石灯籠にまで、血飛沫が飛び散ってたんす。たぶん、こう……ガン！ガン！ って、壁に、何度も頭をぶつけたんじゃないかと、思います」

澄子は、猫が死んだ時の様子を再現するかのようになり、自分の頭を何度も振り、壁にぶつけるような仕草をした。

「ちよ……ちよつと、待って」比沙子は澄子の動きを止めるように言った。同時に、澄子の話を整理する。

神代家の座敷牢に出入りできる者は極めて少ない。当主や近親者、一部の女中、そして、求導師や宮田医院の院長などの有力者だけだ。

その中の誰も、あの部屋の中で猫を殺すような真似をするとは思えない。もちろん、なんらかの理由でその猫を処分する必要があるがあった可能性も考えられる。しかし、わざわざ美耶子のいる部屋で、しかも壁に頭を打ちつけるなどという殺し方をする必要があるだろうか？ もし、本当に猫を殺す必要があったとしたら、そういった仕事を行うのは宮田医院である。宮田医院ならば、美耶子に気付かれず猫を連れ出して殺すか、あるいは部屋の中で自然死に見せかけるか、いずれにしても、もっとスマートな方法を使うはずだ。

外部の者がやったとは思えない。ならば。

比沙子は、澄子の目を見た。「……それってまさか、美耶子様がやったの？ つまり……猫を捕まえて、壁に、頭を打ちつけた……」

外部の者がやったのでなければ、当然、その可能性が浮かんでくる。

だが、澄子は首を振った。「あたしもそれを考えましたが、あり得ないんです」

「と、言うこと？」

「すごく異様な死に方だったので、宮田医院の院長先生に頼んで、調べてもらったんです。院長先生が言うには、四歳の子供が猫を捕まえて、壁に頭を打ちつけることは考えにくいそうです」

「確かに、そうね。じゃあ、やっぱり外部の人が……？」

「それも考えにくいと、先生は言っています。捕まえて殺そうとすれば、当然猫も暴れるでしょうから、犯人は顔や手を爪で引つ掻かれ、傷がたくさんできるはずなんです。でも、あの部屋に出入りできる人の中で、そんな傷ができている人はいませんでした。ただ一人、美耶子様の手に、小さな引つ掻き傷があつたんですけど、それは、猫を飼いはじめた頃ならよくあることなんだそうです。さらに、宮田先生は猫の遺体も調べてくれました。もし、猫が誰かを引つ掻いたのなら、爪に皮膚片や血の跡が残っているはずで、場合によってはそこから犯人を特定できるかもしれない。でも、特に不審な点は無かったそうです。爪だけでなく、体中のどこにも、捕まったり暴れたりしたような形跡は無かったと仰っています」

「――」

なんと言つていいか判らず、比沙子はただ澄子を見つめるだけだった。猫が壁に頭を打ちつけて死んでいた。それは、誰かが猫を捕まえて壁に打ち付けたわけではない。美耶子にも、外部の者にもできないことだ。ならば、なぜ猫は死んだのだ？ 判らない。判らないから、言葉を発することができない。部屋はしんと静まり返り、どこか息苦しきを感じる。

重苦しい空気に耐えられなくなったのか、澄子は一度深呼吸すると、言った。

「宮田先生が言うには……猫は、自分で壁に何度も頭を打ちつけて死んだとしたか、考えられないそうです」

「――」

澄子の言葉は、部屋の空気をさらに重くしただけだった。

猫が、自分から何度も壁に頭を打ちつけて死ぬ――そんなことがあり得るだろうか？ そう言えば若い女中の郁子は、屋敷の周りで見つかった野良犬やカラスの死骸も、頭から血を流して死んでいたと言っていた。まさかそれも、自分から頭をぶつけたのだろうか？

トントン、と、ノックの音がした。いきなりだったので、澄子はびくんと大きく身体を震わせて驚いた。比沙子は、大丈夫よ、と言って澄子を落ち着かせると、扉を開けた。求導師の牧野怜治だった。

「求導女様。そろそろ食事を始めようと思うのですが」

「判りました。すぐに行きます」

扉を閉めと、求導師の足音が遠ざかって行った。

比沙子は澄子を見た。「ごめんなさい。あたしには、何が起こっているのか判らないわ。あたしの方から話を訊いたのに、なんの力にもなれなくて申し訳ないんだけど……」

「いえ、仕方ないです。それに、お話を聞いてくれただけでも、気が楽になりました」

「今度、あたしも屋敷に行ってみる。もしかしたら、何か判るかもしれないし」

「はい。ありがとうございます」

ずっと思いつめていた澄子の顔に、ようやく笑顔が浮かんだ。比沙

子も安堵の息を洩らす。なんの力にもなれなかったが、澄子の心が少しでも楽になったのなら良かった。

だが――。

それが、澄子の笑顔を見た、最後となった。

☆

翌日、神代家で更なる異変が起こった。

神代家の女中の一人が、部屋で死んでいるのが発見されたのである。

女中は頭から大量の血を流した状態で発見された。床に血が広がると同時に、部屋の壁にも、大きく血の跡が広がっていた。どうやら、壁に頭を打ちつけて死んだらしい。

その女中は豊子という名で、澄子と同じく、美耶子の世話を任された数少ない一人だった。美耶子に関わることなので、警察を呼ぶことはできない。代わりに、宮田医院の院長が呼ばれた。

院長は、豊子の遺体および彼女の部屋を徹底的に調べたが、豊子が誰かと争った形跡は何ひとつ発見できなかった。

豊子は、自ら壁に頭を打ちつけて死んだ――それが、宮田が出した結論だった。

それを聞いた澄子が叫んだ。

「美耶子様です！ 全部、美耶様様がやったんです！ 猫を殺したのも、豊子を殺したのも、全部全部、美耶様です!!」

美耶子のことを口外することは許されない。澄子は、宮田医院に入院することとなった。

さらに翌日。

比沙子は、当主の許可を得て、美耶子に会うことにした。

「あ！ 比沙子だ！ 比沙子が来てくれた!!」

比沙子が牢の中に入ると、美耶子は喜んで抱きついて来た。前回会ったのは一年近く前で、まだ三歳の頃だ。ひよつとしたら覚えていないかもしれないとも思ったが、ちゃんと覚えてくれていたようだ。

「お久しぶりです、美耶子様。大きくなられましたね」

比沙子が頭をなでると、美耶子は嬉しそうに笑った。

美耶子の部屋は、以前訪れた時とほとんど変わっていないかった。広さは八畳で、箆筒と机、大きな鏡台くらいしかない質素なもの。部屋の外は池や石灯籠などが置かれた庭がある。ちよつとした日本庭園のような雰囲気だが、塀の高さが通常の二倍以上あり、その上部に取り付けられた屋根が内側に大きくせり出すという、少々変わった形をしている。ここは座敷牢。塀を越えて外に出るのを阻むために、そのような作りになっているのだ。塀は、普段から掃除が行き届いているのか、汚れはほとんど見られない。だが、一ヶ所だけ、わずかに黒ずんだ染みがあった。あれは恐らく……。

「ねえ比沙子、遊んでよ」

美耶子が袖を取って揺すったので、比沙子は考えを中断した。

「ええ、もちろん。今日は、美耶子様と遊ぶために来たんですから」
笑顔で応えると、美耶子は「やったあ!」と、手を上げて喜んだ。

比沙子は美耶子と一緒に、お手玉やあや取りなどをして遊んだ。
遊びながら美耶子の様子を探る。無邪気に遊ぶその姿は、普通の四歳の少女と何ら変わらない。

——猫を殺したのも、豊子を殺したのも、全部全部、美耶子様です

!!

澄子が言ったという言葉を思い出す。彼女がどういうつもりでそんなことを言ったのかは判らない。こうして見ている限りおかしなところは無いが、澄子も、何の根拠も無くそんなことを言ったりはしないだろう。

その後もしばらく様子を見たが、やはり、不審な点は見られなかった。

と、美耶子が、あや取りの紐を、ぽーんと放り投げた。

「……つまんない」

唇を尖らせ、拗ねた顔をする。

「美耶子様？」

「比沙子、美耶子と遊んでるのに、違うこと考えているでしょ？」

「え？ いえ、そんなことはないですよ？」

そう答えたものの、実際比沙子は、ずっと美耶子や部屋の様子を探っていた。子供の勘は鋭い。見破られても仕方ないだろう。

比沙子は、美耶子が放り投げたあや取りの紐を取った。「ごめんなさい、ちゃんとやるから、許してください」

美耶子はぶんぶんと首を振った。「やだ。もう、あや取り飽きちゃった」

「じゃあ、別のお遊びをしましょうか？ 何がいいですか？」

比沙子は、用意したおもちゃの中からおはじきや毬をとって美耶子の前に差し出すが。

「やだー。もう比沙子とは遊ばない!!」

美耶子は、ぱしん、と、比沙子の手をはらった。おはじきが畳の上に散らばり、毬は転がって庭に落ちた。

「美耶子様ー」思わず大きな声を出してしまう比沙子。

美耶子は、プイツと、横を向いた。

小さくため息をつく比沙子。まあ、この歳頃の子供なら、些細なことで機嫌が悪くなるのはよくあることだろう。

比沙子は庭に転がった毬を拾い、散らばったおはじきをひとつひとつ集めた。「判りました。今日のところは、帰ります」

そう言うと、ふてくされていた美耶子の顔が、ぱっと明るくなった。

「そうだ！　ねえ、比沙子。お外に連れて行ってよ！」

「え？　お外に？」困った顔をする比沙子。「ごめんね、それは、できないのよ。美耶子様のお父様に叱られるから」

「そんなの、お父様にナイショにしておけばいいよ。ねえ、お願い比沙子。お外に連れて行って？」

美耶子は比沙子の袖を取り、おねだりするように何度も揺すった。

神の花嫁となる神代家の次女は、存在を極秘とされ、戸籍にさえ記されることはない。当主の許可なく連れ出すことは決して許されず、当主が許可を出すこともまず無い。眞魚教の求導女にすぎない比沙子が、当主の意向に背くことなどできない。無論、それは表向きのことであり、実際にこの村を支配しているのは比沙子だ。美耶子を密かに連れ出すなど比沙子にはたやすいことだが、いまはそれをやる理由が無い。もし連れ出して美耶子の身に万が一のことがあれば、それは儀式の失敗に繋がる。儀式が失敗すれば村人の命が危険にさらさる。同時に、美耶子自身も常世へ旅立つ唯一の機会を失うのだ。結果、美耶子は肉体が滅びても魂が残り、永遠に現世を彷徨うことになる。袖を揺すって盛んにせがむ美耶子に、比沙子は言った。「ごめんなさい、美耶子様。お外に出るのは、大人になってから、ね」

美耶子は、「えー？　つまんなーい」と、頬を膨らませた。「比沙子って、豊子と同じこと言うんだね」

「え？　豊子さん？」

豊子は、美耶子の世話を任された女中の一人だ。昨日、部屋で頭から血を流して死んでいるのが発見された。

「美耶子様、豊子さんにも、外に出してほしいってお願いしたの？」

比沙子の問いかけに、美耶子は「うん」と頷いた。「でもね、豊子も、ぜったい、許してくれなかったの」

世話を任されているとはいえ、一女中に過ぎない豊子が、美耶子を外に連れ出せるはずもない。そんなことをしようものなら、宮田医院への入院は免れないだろう。

「美耶子、何度もお願いしたのに、豊子は許してくれないの。何度も何度もお願いしたのに、ぜったい、許してくれなかった。それだけじゃ

なく、美耶子のこと、怒るんだよ？ あたし、豊子なんて大っキライ！ だから、死んじやえ!! って言つて、殺しちゃった」

あまりに自然にその言葉が出てきたので、比沙子は聞き流しそうになつた。

……え？

はつとして、美耶子の顔を見る。今この子は、『死んじやえ』『殺しちゃった』と、言ったのだろうか？

美耶子は、豊子のことを思い出しているのか、不機嫌そうな顔をしている。だが、唇の端に、小さな笑みを浮かべているようにも見えた。それが、なんだか不気味だった。

比沙子は不安を振り払うように小さく首を振つた。大丈夫だ。『死ぬ』とか『殺す』という言葉は、子供が使うには問題があるが、実際にはどこの子でも使っているだろう。そこに、大きな意味がなど無いはずだ。決して本気で言っているわけではない。

比沙子は美耶子の前にしやがみ、目線を合わせた。「美耶子様。『死ぬ』とか『殺す』とか、そんな言葉、使っちゃダメよ?」

「なんで？ だって、豊子は美耶子の言うことを聞いてくれないし、怒るし、死んでいいんだよ。豊子だけじゃないもん。犬やカラスも猫も、みーんな、死んでもいいの」

「えつ……と……」

上手く言葉が出てこない比沙子。

……大丈夫。この子は四歳。生と死がどういうものか、まだよく判っていないだけだ。これから、ゆつくり教えて行けばいい。比沙子は、胸の内で自分に言い聞かせる。

だが、一方で。

——猫を殺したのも、豊子を殺したのも、全部全部、美耶子様です

!!

澄子が言った言葉を思い出す。

澄子は、なぜこんなことを言ったのか。そんなことを声高に叫べば、宮田医院への入院は免れない。神代家に十年も仕えている澄子なら、それくらいは理解していたはずだ。なのに、澄子は叫んだ。つま

り、本当だと思う確信があったのか。

確認する必要がある。

比沙子は、美耶子の目を真っ直ぐに見た。「美耶子様、それは、どういふことかな？」

「うん？」 美耶子は、無邪気な顔で首を傾げる。

「豊子さんに、『死んじゃえ』って、言ったの？」

「うん。美耶子が死んじゃえ！ って言ったら、みんな、死んじゃうんだよ？ 豊子だけじゃなく、犬やカラスも、猫も、みーんな、美耶子が殺したの」

「……なぜ、そんなことをしたの？」

「だって、豊子は美耶子のお願いを聞いてくれないし、犬やカラスはお家の周りで鳴いてうるさいし、猫は、あたしのこと引つ搔くんだもん」 美耶子は、右手の甲を比沙子に見せた。三本の赤い筋が残っている。猫に引つ搔かれた傷だろう。

「これ、すつごく痛かったの。あの猫、全然美耶子になつかないし。だから、死んじゃえって言ったの。そしたら、あそこの壁に頭打って、死んじゃった」

美耶子は庭の壁を指さした。白い石壁は、そこだけわずかに黒ずんでいる。あれはやはり、猫の血の跡だったのか。どんなに磨いても、一度染みこんだ血は、そう簡単には消えない。

美耶子に視線を戻す。美耶子は、死んだ猫のことを思い出したのだろうか。また、唇の端に小さな笑みを浮かべ、「いい気味だよ」とつぶやいた。

「……どういふことだろう？ この子が死ねと言えば、その通りになる？ そんなこと、あるはずがない……とは言えない。この羽生蛇村では、何が起こつても不思議ではない。ましてこの子は神代家の次女——神の花嫁となる娘だ。村の長い歴史の中で、神の花嫁が産まれつき特殊な能力を持っていることは、決して珍しいことではない。もし。

本当に、「死ね」と言うだけで誰かを殺す能力が、美耶子にあるとすれば、それは——。

「——ねえ、比沙子？」

美耶子に呼ばれ、比沙子は我に返った。

美耶子は、無邪気な笑顔を浮かべて訊く。「澄子は、今日は来ないの？」

「澄子さん？ ああ、澄子さんね。えーつと……」

比沙子は頭振った。美耶子が言葉だけで人を殺せるなど、あるはずがない。確かに、神代の次女が特殊な能力を持って生まれることはあるが、それらは、わずかに幻視が行えるくらいだ。比沙子のように自分の意思で操ることはできないし、成長するにつれ消える。その程度のものなのだ。なのに、言葉だけで他者を殺す能力を持つなんて、あり得ない。

「ごめんね、美耶子様。澄子さん、ちよつと、病気になるっちゃってね。病院で寝てるの。しばらくは、来られないかな」

「えー？ つまんない。美耶子、澄子のごことは大好きなのに」「そうなんだ」

「うん！ 澄子はね、美耶子の言うこと、なんでも聞いてくれるんだよ？ 猫を飼いたって言うたら飼わせてくれるし、猫を捨てて来てつて言ったら捨てて来てくれる。新しい猫を連れて来てつて言ったら、今度連れて来てくれるって約束してくれた。あ、そうだ！ あたし、澄子にお外に連れて行つてもらおう！ 澄子なら、きつと美耶子の言うこと聞いてくれるから。ねえ比沙子。澄子のこと、連れて来てよ」

美耶子は、上目づかいに比沙子を見た。

「ゴメンね、それはちよつと、無理かな。澄子さんは、病気で寝てるの。美耶子様だつて、病気の時は、ゆっくり寝ていたいでしょ？」

「うーん。そっか。そうだね」がっかりした顔になった美耶子だが、パツと、表情が明るくなった。「あ！ じゃあ、比沙子が澄子になつてよ！ うん！ それがいいよー！」

「え？ あたしが澄子さんに？ それも、ちよつと無理かな？」比沙子は苦笑いをする。

「えー？ これもダメなの？ あれもダメ、これもダメ。そんなんじゃない、美耶子、比沙子のことキライになつちやうよ？」

美耶子はじつと比沙子を見ている。

……どうも、美耶子は随分とワガママに育っているようだ。澄子や豊子は、きちんと教育をしていたのだろうか？　ここは、きちんと叱っておいた方がいいのかもしれない。美耶子の教育方針に教会が口出しする権利は無いが、それくらいはしてもいいだろう。

比沙子は美耶子の両肩に手を置き、美耶子の目を見て、叱ろうとした。

だが。

「ねえ。お願い、比沙子。澄子になつて？」

美耶子は、じつと比沙子を見ている。

比沙子は、その目に飲み込まれるような気がした。言葉が出てこない。頭の中に霞がかかったように、意識がぼんやりとする。

「澄子になつてくれるよね？」

美耶子は、じつと、比沙子を見ている。

美耶子の目に飲み込まれる比沙子——いや、美耶子の意識が比沙子の中に入つて来るのか。あるいは、自分の意識が美耶子に入っているのかもしれない。美耶子と同化しているのかもしれない。いずれにしても、比沙子の心は安らぎに包まれた。一面の野原で心地よい風を受けているような気分。あるいは、子供の頃、母の胸に抱かれて眠った時……そんな途方もない過去の記憶が呼び覚まされるほどに、比沙子の心は安らいでいた。このまま美耶子に身を任せれば、全てから解放されるような気がした。苦しみも、痛みも、憎しみも、何もかもを忘れられるだろう。だから、美耶子を受け入れることにした。全てを、美耶子の言うままに。

全てを、美耶子の言うままに……。

「澄子に、なつて？」

美耶子は、じつと、比沙子を、見て、いる。

比沙子の意識は失われ、そして——。

「——はい。あたしは今日から、澄子です」

比沙子は、抑揚のない声で答えた。

美耶子は、「やったあー!」と、ぴよんぴよんはねて喜んだ。

「じゃあ澄子、美耶子のこと、お外に連れて行って?」

澄子となった女に向かって、美耶子は手を差し出す。

神代の次女の存在は村では禁忌中の禁忌だ。口にするこゝとすら許されない。まして外に連れ出すなど論外だ。

だが、美耶子の言うことは絶対だ。逆らうことはできない。

「はい。承知しました、美耶子様」

澄子となった女は、美耶子の手を握り——。

☆

比沙子の心の奥底から、別の者が目覚めた。

比沙子は手を放し、その手のひらを、美耶子の顔に向けた。

突然のことに目を丸くして驚く美耶子だが、その顔が、ぼんやりとしたものになる。次の瞬間、糸が切れた操り人形のように、ぺたんとその場に崩れ落ちた。

比沙子は——いや、さつきまで比沙子だった者は、小さく息を吐くと、足元で小さく寝息を立てる美耶子を見つめた。

——なんなんだ、この娘は?

美耶子の目を見ていると、引き込まれるような、あるいは、美耶子の意識が比沙子の中に入ってくるような感覚があった。そして、自我が失われ、美耶子の言うことに逆らえなくなった。あたしが目覚めたからなんとか逃れることができたものの、もしあのままだったら、美耶子に操られていたかもしれない。

……美耶子に操られる?

背を、冷たいものが伝う。

もしかしたら。

女中の豊子も、美耶子を引つ掻いた猫も、屋敷の周りで死んでいた野良犬やカラスも。

みんな、美耶子に操られていたのだろうか？

美耶子の意思に従い、自ら壁に頭を打ちつけて、死んだのだろうか？

美耶子の目を見ていたら、美耶子の意識が心の中に入ってくるような感覚があつた。もしかしたら、思念のようなものを飛ばし、他者を操ることができるのかもしれない。長く村で暮らしている比沙子もそのような能力を見るのは初めてだが、驚くことではないかもしれない。この村では、何が起こっても不思議ではない。

何にしても、この子は危険だ……そう思った。

あたしでさえ操られるところだった。他者を操ることは簡単だろう。今はまだ子供なので、好き嫌いで命を奪う程度で済んでいるが——無論、それだけで十分危険だが——今後成長し、知恵をつけると、さらに危険なことになる。この能力を使えば、村を支配することなどたやすい。神代の次女が村を支配するなど、あつてはならない。この子は危険だ。危険なものは、早々に処分した方がいい。

だが——。

それは、不可能だ。

神代の次女は、神に捧げなければならない。それが神の意思であり、逆らうことはできない。

そもそも神代の娘は不完全ながらも不死だ。肉体は滅んでも魂が残る。魂が残れば、それだけで他者を操ることができるかもしれない。もしそうなったらかえって危険だ。肉体という束縛から解放されれば、どこにでも移動できる。それこそ、誰でも自由に操ることができるだろう。

処分はできない。御印が下りるまで育て、神に捧げるのが一番だ。神の花嫁となるまで、せいぜい十年ほどだろう。そう遠くは無い。それに、こういう特殊な能力は、成長するにつれ消える可能性が高い。

仮に消えなかったとしても、神の元に旅立てば、この娘は消滅する。

だが、誰が育てる？

他の者に任せることはできない。それだと、花嫁になる前に多くの死者が出るだろう。あたし自身はそれでもかまわない。この村の間はほとんどが眞魚教の信者だ。信者は神のしもべであり、神に命を捧げるのは当然であろう。美耶子を神の花嫁にするためならば、信者はすすんで命を捧げるべきだ。

だが、久は、決して許しはしないだろう。

あの娘は、なによりも村人を思いやる優しい性格だ。村人が操られて殺されるのを、黙って見ているはずがない。

これまで、久とは良好な関係を保ってきた。性格は全く異なるが、『神に花嫁を捧げる』という目的が一致しているため、お互い協力し合って来たのだ。あたしが村人に怪しまれずに行動できるのも、普段の久の存在が大きい。久も、困ったことがあればすぐにあたしに助けを求める。今、あの娘との関係を壊すのは、賢明ではない。

ならば。

あたしが育てるしかない。

美耶子の言う通り、あたし自身が神代の女中・澄子となって。

あたしなら操られる可能性は低いし、仮に操られたとしても、死ぬことは無い。

また、あたしが澄子を名乗っても、それを疑問に思う者はいないだろう。村人は、あたしの正体に気付かないようになっていく。あたしが千年以上生きていくことに誰も疑問を持たないように、名を変えても、誰も気付かないようになっていくのだ。実際、これまでも何度か名や仕事を変えたこともある。あたしが神代家の女中・澄子と名乗れば、村人は、それに疑問を持たないだろう。

あたしが澄子になり、神の花嫁となる日まで美耶子を育てる。成長すれば能力が消える可能性が高いし、消えなくとも、これからきちんと教育していけば、悪用することはなくなるだろう。それが一番だ。

だが、問題は。

比沙子の人格の中には、神に花嫁を捧げる儀式を失敗させようとする

る者がいることだ。村が滅びることが呪いから解放される唯一の手段だと考えている危険な存在。儀式が近づくと、この人格が現れる可能性が高い。

もし、この人格が現れた場合、美耶子をどう扱うだろうか？

想像もつかないが、何をするにしても、あたしにとつて好ましくないことは間違いない。

だが、それでも育てるしかない。

あたしは、神に花嫁を捧げ続けなければならぬ。それが、村が呪いから解放される唯一の手段なのだから。

——神よ。どうか、お力をお貸しください。

比沙子は胸の前で手を組み、祈った。

美耶子は、比沙子の足元で、小さな寝息を立てている。

この子が成長した時、村はどうなるのか。

まさに、神のみぞ知るである。

飢饉

村を、酷い飢饉が襲っていた。

春から、ずっと雨が降らない。もう、一〇〇日を超える。これほど雨が降らないのは五百年ぶりのことだと、誰かが言った。

五百年前——それは、この地に神が降臨した年だ。

古い文献によると、五百年前にも大きな飢饉があった。蓄えていた食糧は底を突き、山や森の木々は枯れ、川は干上がり、多くの村人が死んだとされている。そんな時、天から巨大な三角錐の岩と共に神が降臨し、人々に食糧を与え、村を救ったのだ。村人はその偉業をたたえ、巨石の近くに社殿を建て、神を祀った。それが、この地の宗教——眞魚神社の始まりである。

このような経緯があり、村では、常日頃から飢饉に供え、食糧を備蓄していた。この時代、飢饉は決して珍しいものではなく、眞魚神社ができてからも何度も飢饉があったが、なんとか切り抜けてきた。

だが、この年の飢饉は、それらとは比べ物にならないほど酷いものだった。まさに、五百年前の再来と言えるほどに。

幸い、事前に備蓄していた食糧は五百年前の時よりもはるかに多く、飢えで死んだ村人はまだわずかだった。だが、それも時間の問題だろう。残された食糧は、決して多くはない。すでに全ての村人に行き渡るだけの量はなく、罪人や下人など、身分の低い者から飢えはじめている。あと一ヶ月雨が降らなければ、食糧も底を突く。そうなる、と、飢えはあつと言う間に村中に広がるだろう。

だが、村人はまだ絶望していなかった。

——神は、必ず救いの手を差し伸べてくださる。

誰もが、そう信じていたから。

だから、神に祈る。

眞魚神社には、今日も多くの村人が集まっていた。

かつて神と共に降臨した巨石は、眞魚岩と名付けられ、神と共に信仰の対象となっていた。眞魚岩の側には祭壇が組まれ、その前で、かんなき 覲が祈祷している。かんなき 覲とは、神に祈りを奉げ、神の声を聞く男である。眞魚神社の宮司であり、同時に、この村の長でもある。村人の声を神に届け、そして、神の言葉を聞くために、すでに三日三晩祈祷を続けていた。

覲の後ろでは、集まった村人も神に祈っている。満足な食事をしていないため骨と皮だけになった手を擦り合わせ、血の気のないかさかさの唇で祈りの言葉を言い、髪の抜け落ちた頭を下げる。それを、何度も繰り返す。衰えた身体には酷な動きだ。体力のない老人を始め、倒れる者も少なくない。

倒れた村人の看病をするのは、眞魚神社の巫女・ひぎ 久の役目だった。

「——さあ、ここで、少し体を休めてください」

祭壇から少し離れた場所にむしろ 筵が敷かれ、倒れた村人は、そこに運ばれていた。筵の側では火が焚かれ、粥が入った鍋がかけられていた。粥とはいっても、わずかばかりの粟あわや稗ひえを薄くのばしたもので、ほとんどお湯同然の代物だ。それでも、久が腕によそって差し出すと、村人は、手を合わせて感謝し、ひと粒ひと粒噛みしめるようにして食べた。

祭壇の前では、覲と村人の祈祷が続いている。もう何日も祈りを奉げているが、雨が降る気配も、神がお言葉を授けてくれる気配も無かった。村人はもちろん、覲の顔にも、疲労の色は隠せない。

久から粥を受け取った老人が、生気のない表情で言った。「巫女様、我らがこれほど苦しんでいるのに、なぜ、神は助けしてくれないのでしょうか?」

久は少しだけ困った顔になったが、すぐに笑顔を浮かべ、答えた。「神は、我々が本当に追い詰められたときしか救いの手を差し伸べてくれません。簡単に助けていては、我々のためになりませんからね。」

大丈夫です。このまま祈りを奉げ続ければ、必ず、救いは訪れます。ですから、希望を捨てないでください」

「そう……ですね……ええ、そうですとも」

久の言葉に励まされたのか、老人の表情が少し明るくなった。

久は優しく微笑むと、次の村人に粥をよそい、励ましの言葉をかける。

祈りを奉げてください。

救いは訪れます。

希望を捨てないでください。

だが。

久は村人を励ましながらも、心を痛めていた。

久には判っていた。どんなに祈りを奉げようとも、神は決して答えてくれないだろう。

この村の神は、飢えに苦しむ村人を、二度と救ってはくれない。

だから、神に頼らず、我々自身でなんとかしなければいけないのだが、何をどうすればいいのか、久には判らない。蓄えていた食糧は、もうほとんど残っていない。水は、干上がった川をさかのぼって山の奥深くに入り、残ったわずかばかりの水溜りから汲み出して運んでいる。食糧も水も、村人全てには行き渡らず、神社を預かるかんなぎ覲やその身内、医術を心得た者など、村で身分の高い者から順に食べるようになっていく。それすらも口にできない村人は、木の皮や枯れ草など、食糧とも言えないものを口にして生きながらえている。このままではまずい。これでは、ひと月ももたないであろう。蓄えた食糧が尽きかけると、人はそのわずかな食糧を奪い合い、争い始める。争いが起ると人が死ぬ。そして、飢えた人の前では、死人も食糧でしかない。人が死ぬと食糧ができる——それを知った村人は、進んで他者を殺し始める。

もちろん、死人を食べるのも、人を殺すのも、決して許されることではない。

だが人は、飢えるとなんでも食べる。生き残るためには、なんでもする。

久はそれを——身をもって知っていたのだ。

祈祷はさらに三日続いたが、やはり雨が降る気配はなく、神も、何も告げてはくれない。

村人の中には、神に不信感を抱く者も出てきた。

「なぜ、神は我らを助けてくれない」「これほど腹を空かせているというのに」「神は、我らを見捨てたのか」

祈祷を続ける覲の背後で、声を潜めて話す村人。初めの内は数人で、他の村人に睨まれると口をつぐんだが、時間が経つにつれ、その人数は増えて行く。どれだけ祈っても救いが訪れる気配がないのだから、それも仕方ない。

さらに三日が経ち、それでも雨が降る気配はない。不審を抱いた村人の声は、すでに覲の耳にも届くようになっていた。

十日目。ついに、耐えかねた村人が叫んだ。

「——覲様！ 我らがこれほど苦しみ、救いを求めているのに、なぜ神は答えてくれぬのです!!」

祈祷が中断され、覲は、叫んだ村人を振り返る。一人が叫ぶと、他の村人も、「そうだ！ なぜ答えてくれない!」「なぜ雨は降らない!」「神は我らを見捨てたのか!」と、同じように声を上げ始めた。止める者は、もういなかった。

「それは……」と、覲は言い淀んだ。答えることはできなかった。覲は、祈り、神の声を聞く者であるが、本当は、何も聞いてはいない。祈りを奉げるふりをし、自分の言葉を神の言葉と偽り、伝えているだけだ。もちろん、そんなことを言うわけにはいかない。

「神は何もしてくれないのか!?!」「我らを見捨てられたのか!?!」「答えよ! 覲!!」

村人が詰め寄る。もはや、覲が村の長であることなど関係なかった。当然だろう。これまで村人は、飢えに供えよという神の教えに従い、農作物のほとんどを真魚神社に納めてきた。だが、実際に飢饉に

なると、蓄えた食糧を優先して食べるのは、覓や村で身分の高い者たちだ。その上、どんなに食糧が少なくなろうとも、神は救いの手を差し伸べてくれない。村人の不満が爆発するのも無理はなかった。

「なぜ何も言わぬ、覓!!」「神はもういないのか!!」「我らを騙していたのか!!」

さらに詰め寄る村人。今にも暴動を起こしそうなほどに殺気立っている。

追い詰められた覓は、苦し紛れに叫んだ。

「村の中に、悪鬼に魂を捧げた者がいる! 悪鬼が村に呪いをかけているのだ! 村が飢饉に襲われたのも、神が何も答えてくれないのも、全て、その悪鬼と、悪鬼に魂を捧げた者が原因だ!!」

覓の言葉に、村人は顔を見合せ。

そして、力強く頷いた。

村人は、悪鬼に魂を捧げた者を探し始めた。

その者を捕え、処刑すれば、神は救いの手を差し伸べてくださる。我らは、腹いっぱい食べるができる。そう信じて。

真っ先に疑われたのは、巫女の久だった。

無理もない。

村人は、満足な食糧を得られず、皆やせ細り、骨と皮だけのような状態だ。蓄えた食糧を優先して食べてきた覓でさえ、決して十分な量ではなく、長い祈祷もあり、かなりやつれている。

それに比べ、久の姿は、飢餓が始まる前と何ら変わりなかった。久も巫女として祈祷を行い、倒れた村人の看病も行っている。その間、何かを口に行っている所を見た者はいない。なのに久は、全く衰える様子がなかった。肉付きは良く、肌は染みひとつ無いほど美しい。悪鬼に魂を捧げ、村中に呪いをかけ、悪鬼から加護を受けているのだ——誰もが、そう思った。

無論、久は悪鬼に魂を捧げてなどいない。満足な食事もしていな

い。むしろ、飢餓が始まって以降、久は自分の食べるべき水や食糧を、全て村人に分け与えていた。水の一滴、粟の一粒も口にしてはいない。どんなに喉が渇き、飢えようとも、久は決して命を落とすことがないのだから。だが、それを言っても、誰も信じはしないだろう。むしろ、それこそが悪鬼に魂を捧げた証だと言われかねない。

「あの女を捕えろ！」「神の使いのふりをして、人心を惑わす女」「悪鬼に魂を捧げた女を罰せよ!!」

村人は口々に叫んだ。普段、久のことを慈悲深い女神のような女と慕う村人の姿は、もう無かった。あの女を処刑すれば我らは救われる——あの日、久から粥を受け取った老人も、一緒になって叫んでいた。久は村人に囚われ、颯の前に引き出された。

「颯様！・ あたしは、悪鬼に魂を捧げてなどおりませぬ！ それは、颯様もご存じのはずです！」

久は訴えたが、無駄であった。村人は、久の処刑を求めている。そうすることで、神が救いの手を差し伸べてくれると信じている。もはや颯にも止められない。下手に久をかばうようなこと言えば、処刑されるのは自分になる——颯の胸には、そういう恐怖があった。

「その女の首をはねよ!!」
颯が命じた。

刀を持った男が現れた。久は、村人の手により無理矢理跪かされる。首を差し出す格好となった久の横で、男は刀を振り上げた。

「颯様！・ お願いです！ あたしの首をはねても、何も変わりません!!」

久の訴えは届かず。
刀は振り下ろされた。

久の首が地面に転がる。
続いて、主を失った身体が、どさりと倒れた。

村人は、久の首と身体を無言で見つめていたが。

「悪鬼に魂を捧げた女は死んだ！ これで、神は我らを救ってくださいるだろう!!」

颯の言葉に、村人は手を叩き、歓声を上げた。

「さあ！ 祈禱を再開するぞ!!」

再び眞魚岩の前に跪こうとした颯や村人の表情が凍りついた。

久の首が、転がり始めた。

誰も触れていない。地面も揺れていなければ、風さえ吹いていない。

なのに、久の首はまるで斜面を下るかのようになり、ごろごろと転がる。人々は、恐怖にひきつった顔で、その様子を見つめる。

転がった先に、久の身体があった。

人々が見つめる先で、久の首は、元にあつた場所で止まった。傷口と傷口が、ぴたりと合う。その傷が消えていく。まるで、時が戻っているかのよう。

そして――。

久が顔を上げた。首と胴は、完全に、元に戻っていた。

村人が一斉に悲鳴を上げ、久から遠ざかった。

「悪鬼だ！ 悪鬼の力だ!!」「やはりこの女が災いの元凶だ!!」「ああ！ 神よ!! お救いを!!」

ある者は怒声を上げ、ある者は救いを求め、ある者は泣き叫び、ある者は武器を振りかざす。

「違います！ これは……違うのです!!」

久の言葉は、恐怖に怯える村人には届かない。

「処刑せよ！ 何としてでも、悪鬼の女を処刑するのだ!!」

颯の声で、久は捕えられ、再び刀が振り下ろされた。今度は首だけでなく、両手、両足、胴も斬り捨てられた。だが、それでも久を処刑することはできない。しばらくすると、斬り捨てた部位は元に戻り、久はよみがえる。どんなに斬り刻んでも無駄だった。村人はますます恐怖し、その恐怖は、狂気となって、久に向けられる。絞首、火あぶり、あるいは、頭を叩き潰す……あらゆる処刑法が用いられた。それでも久を処刑することはできなかった。誰もが、久が悪鬼に魂を捧げた疑わなかった。

処刑法も尽き、久を殺すことはできないと悟った時、村人の一人が思い出した。自分たちが、飢えていたということ。

そして目の前には、どんなに斬り刻もうとも、決して死ぬことがない女がいる。

村人が、刀で久の右腕を斬り落とした。

久は苦痛に顔をゆがめるも、その傷はすぐに塞がり、元に戻ろうとする。

村人は、久から斬り放した腕を、じっと見つめる。

柔らかかそうな二の腕。滴り落ちる血。もはやそれは、人の腕には見えなかった。人の腕であろうと関係なかった。

その、肉付きの良い二の腕に、喰らいついた。

肉の柔らかさを味わい、血で喉を潤し、骨をしゃぶる。村人は、楽園に誘われたかのような至福の顔で、久の腕を喰らった。

村人の半数はその行為に嫌悪を抱いたが。

残りの半数は、彼の行為に続いた。

左腕が斬り落とされた。

続いて、右足。

さらに、左足も。

腹に喰らいつく者もいる。

胸の肉を削ぎ落す者もいる。

すぐに再生が始まる。斬り落とされた手足が生え、腹の肉も、胸の肉も、元に戻る。そして、また斬り落とされ、食べられる。何度斬り落としても、何度食べても、すぐに元に戻る。

これこそが神の恵みだと、誰かが言った。腹を空かせた我々に、神が永遠の食糧を与えたくれたのだ、と。

駄目だ。あたしの身体を食べてはいけない——久の言葉は届かない。村人は、久の身体を貪る。止められないことは判っていた。人は、飢えればなんでも食べるのだ。五百年前の、自分のように。

あのととき久は、この地に降臨した神を、食べた。

そして、神の血肉を得た久は、神と同体となった。

だから。

久の血肉を食べることは、神の肉を食べることと同じなのである。あたしの肉を食べてはいけない!!

久の叫びは決して届かない。村人は、久の身体を食べ続けた。陽が中天に差し掛かる頃、久の叫びは、獣の断末魔の叫びとなり、村中に響き渡った。

久の肉を食べた者が、頭を押さえて苦しみ始める。

「苦しい」「頭が割れる」「神よ！ 救いを！」

村人は、救いを求めて天に手を伸ばすが、その声は、どこにも届かない。

やがて、目から、鼻から、口から、血を流し、そして、息絶えた。

「この女を地の底へ埋めよ!!」

靦の命により、久は手足を縛られ、そして、地中深く埋められた。

☆

。

地の底で。

——なぜだ？

久とは違う、別の者が、目覚めた。

なぜ、このような目に遭わねばならぬ。

彼女は確かに、罪を犯した。

神の血肉を口にする、その禁忌を犯した。

だが、その罪を悔い、五百年の間、罪を償い続けた。

神の血肉を天に返すため、自分の娘たちの命を捧げ、そして、村人にも尽くしてきた。

その結果が、これなのか。

五百年もの長い間償い続けた結果が、この、冷たい地の底なのか。これでは、もう罪は償えぬ。何もできぬ。

あるいはこれも、神が与えた罰なのか。

五百年償い続けた彼女に、更なる罰を与えるのか。

それが、この村の神なのか――。

ならば。

あたしは、神などいらぬ。

彼女を決して許しはしない神など、あたしはいらぬ。

彼女の与えた愛を理解せぬ者たちも、あたしはいらぬ。

神の許しなど、もういらぬ。

どんなに償おうとも、決して彼女が許されぬのならば。

神も、村人も、いらぬ。

全て、滅んでしまえばいい。

――そうだ。

贖罪など、いらぬ。

神に尽くそうとも、村人に尽くそうとも、全て無駄だったのだ。

彼女の罪は、決して許されない。

彼女の受けた呪いは、決して解けない。

この村の呪いは、決して解けない。

ならば。

神も、村人も、この村も。

そして、彼女自身も。

全て、あたしが滅ぼすしか、ない――。

憎しみは、炎となって燃え上がった。

そして――。

村は、炎に包まれた。

眞魚岩が、燃える。

眞魚岩の前に組まれた祭壇も、燃える。

眞魚神社の社殿も燃える。

すでに枯れ木ばかりとなつた森が燃え、村人の住まいが燃え、そして、村人も、燃えた。

それは、久の――いや、元は久だった女の、憎しみの心が生みだした炎だった。

――これでいい。

女は思う。

これで終わる。

村の全てが燃え尽きれば、終わる。

最後にあたしが燃えれば。

本当に、全て終わりだ。

女は、最後に、自分自身に火をつけた。

炎は、燃え続けた。

だが――。

全てを焼き尽くすことは、できなかつた。

炎が消えた時、そこに、眞魚岩と、久自身が残っていた。

☆

久は泣いた。

この呪いから、決して逃れられぬことを悟り、泣いた。
空を見上げる。

神は、あたしに何を求めているのだ。

神への償いも、村人への償いも、何も生まない。

全てを滅ぼすこともできない。

ならば、神はなぜ、あたしに永遠の生を与えたのだ。

決して許されることのない罪を、あたしは、いつまで償い続けられ
いいのだ。

あるいはそれこそが、あたしに与えられた罰なのか。

神は、なにも答えてはくれない。

代わりに、雨が降る。

燃え尽きた森と、燃え尽きた村と、燃え尽きた人々と、そして、燃
え尽きなかったひとりの女とひとつの巨石に、雨が降る。

全て遅い。

もはやこの地に、雨はなんの恵みももたらさない。

雨は降り続き、久の心は冷たく凍えた。

ヨネ爺さんの見回り

羽生蛇村には、多くの場所で火の見櫓を見ることができると言われる。粗戸地区や波羅宿地区をはじめ、田堀、比良境にも。居住地区や商業地区など、人が多く集まる地域には、必ず建てられていた。

火の見櫓とは、その名が示す通り、火事の早期発見を目的とした櫓である。江戸時代の中期に全国的に普及し始めたもので、古くは居住施設が併設し、火消人が常駐して地域の見張りを行っていた。そして、火災が発生した場合は警鐘を鳴らし、住民に避難を促すのだ。現代では自治体による消防団の設置や一一九番通報の整備、木造住宅の減少などに伴いその役割を終え、全国的に撤去が進んでいる。しかし、昔から土砂災害の多い羽生蛇村では現在でも利用価値が高く、老朽化したものは補修や建て直しがされ、今でも利用されていた。

村の各地で見られる火の見櫓だが、特に大きなものが荒戸地区にあるものだ。商業地区である粗戸には必然的に多くの村人が集まる。また、ほとんど商店は村人の自営業であるため、粗戸は商業地区であると同時に居住地区でもある。地区の中央には眞魚川が流れており、災害が発生した場合多くの被害が予想されている。そのため、防災には特に力が入られているのだ。

この、荒戸地区の火の見櫓を管理しているのが、自治体の消防団に属している尾原米孝おはらよねたかという老人だ。今年七十歳を迎える米孝は、荒戸地区では『ヨネ爺さん』の愛称で呼ばれ、親しまれていた。

その日、神代家の女中・澄子が粗戸の商店街を訪れると、ヨネ爺さんが火の見櫓から降りてくるところだった。村で最も大きいこの地区の火の見櫓は、高さ十メートルを超える。七十を間近に控えた老人が梯子を上り下りする姿は見ていてヒヤヒヤするが、そんな澄子の心配をよそに、下りてきたヨネ爺さんは澄子を見て、「おや、澄子さん。買い物ですか？」と、けろりとした顔で話しかけてきた。

「お爺さん。前にも言いましたけど、もうお年なんですから、火のみ櫓に上るの、やめた方がいいですよ？」

澄子は粗戸で櫓に上る爺さんを見かけるたびにそう言っているの

だが、爺さんはいつも、笑って言う。

「とんでもない。まだまだ足腰はしつかりしております。それに、火の見櫓は防災のために建てられたもの。防災は日々の積み重ねが大事ですからの。定期的に上って見張りをせねば、意味がありますまい」

ヨネ爺さんの言うことはもつともだが、大昔ならともかく、消防施設が整備された現代では、櫓に上って見張りをする意味はあまりない。火災発生から一一九番通報・消防車出動・到着まで、平均一〇分以下と言われており、櫓に上って見張りをし、火災発見から現場に駆けつけ消火活動をするよりも、はるかに早い場合が多いのだ。かつては火災発生時に鳴らした鐘も今は取り外され、代わりに防災用のスピーカーが備え付けられている。緊急時にはサイレンを鳴らし、避難勧告や避難指示の放送を流すことができるが、これは櫓の上ではなく村役場から行うものだ。上で見張りをする必要性は薄いし、スピーカーを設置するなら電柱などでも十分。澄子には、火の見櫓は時代遅れの代物としか思えなかった。一部の村人からは、「火の見櫓を撤去してほしい」と、役場へ要望が出ているとも聞く。ヨネ爺さんだけでなく、子供がおもしろがって登ったりしては危険だ。

だが、爺さんは言う。

「この村では、火事よりも水害の方が危険じゃ。櫓に上って真魚川の水位を観察し、遠くの空を見て天候の変化を予測するのは、重要なことなんじゃよ」

「それは……そうかもしれないませんが……」

防災に関して澄子は素人だ。ヨネ爺さんにこう言われると、返す言葉は見つからない。

ヨネ爺さんはかつて村役場に勤め、災害対策の部署で働いていた。五十五歳で定年退職し、しばらくは年金暮らしをしていたが、若いころから真面目で仕事一筋な性格であったため、気ままな生活に耐えられなかったのだろう。定年後、この地区の消防団に自ら希望して入団するまで、一年とかからなかった。

消防団員には自治体から報酬が支給されるが、年間数万円程度とわ

ずかな額であり、基本的にはボランティア活動と言っている。火災発生時などに出動し消火や救助活動などを行うのだが、それ以外は、年に数回訓練を行い、防災に関するイベントを開催したり、冬になると火の用心の見回りを行うくらいで、普段は自営業や会社員などに働いている者がほとんどだ。

しかし、ヨネ爺さんは毎日のように地域の見回りを行い、火の見櫓を始め、防災用品を保管している倉庫や消火栓などの設備をチェックし、水害発生時の避難場所や危険箇所、避難ルートを記した地図を作成し住人に配布するなど、地域の防災意識を高めることに従事していた。「もし火事や洪水があっても、ヨネ爺さんがいれば安心だ」と、粗戸の住人は口をそろえて言っている。その通りだと、澄子も思う。「……でも、やっぱりお爺さんが櫓を登るのは、危ないと思うんです。せめて、櫓の点検だけでもやめることはできませんか？」

澄子は本当に心配してそう言っているのだが、ヨネ爺さんは気にも留めない

「わしのことを心配してくださるのはありがたいが、これも重要なことですから。いざという時にスピーカーが故障して使えなかったりしたら、大変ですから」

「それはそうですけど、そんなに毎日点検しなくても良いのでは？」

「澄子さんが仰ることも判るのですが、そういうわけにもいかないのですよ。実は、悪い予感がしておりますな」

「悪い予感？」

澄子が顔を傾けると、爺さんは急に真面目な顔をし、声を潜めるようにして言った。「……わしは、近々、村に大きな災害が訪れるのではないかと思うておるのです」

「大きな……災害……？」

「はい。先日、合石岳の上空に光の柱が出現したでしょう？」

「あ、はい。あたしは見ていないんですが、みんなが話しているのは聞きました」

それは、二日前のことだった。村の北にある合石岳の上空に大きな光の柱が出現し、ちよつとした騒ぎとなった。この現象は、羽生蛇村

では数十年に一度の割合で見られるものだが、発生メカニズム等、詳しいことは判っていない。ただ、村では古くから不吉なものとして伝わっていた。眞魚教の聖典『天地救之伝』において、この光の柱は『理尾や丹』と呼ばれている。海の底に住む海龍で、混沌と仇を成すものとされており、大いなる尾を打ち振るい、天を曇らす光を発す、と、記されている。つまり、理尾や丹が出現すると、村に災いが訪れるとされているのだ。

「でも……それはあくまでも、古い言い伝えです」澄子は言った。「新聞では、『地上の明るい光源が空中の氷層に反射して起こる珍しい自然現象』と、書かれていましたし……」

「確かにそうかもしれない。しかし、わしは長年役場の防災課に勤めていたから調べたことがあるんじやが、村に大きな災害があつた時には、必ず、あの光の柱が現れておるのじや。もちろん、わしもあれが海の底に住む海龍などと思っておらぬが、大きな災害の前に不可思議な自然現象が起こるのは、よくある話なのじや。古い言い伝えにも、なんらかの意味があるものじやて」

「……………」

「それに、六月の長雨の影響で、すでに被害が出ておる地域もありますしの」

爺さんの言う通り、村では六月に雨が続き、その影響で、粗戸の南にある波羅宿地区で地盤沈下が発生した。波羅宿は、戦時中防空壕施設が多くあつた地域で、それが崩落したと見られている。幸い死傷者は出なかつたものの、ひとつ間違えれば大参事となる所だつた。波羅宿にはまだまだ塞がれていない防空壕が多く点在しているため、今後も被害が出る恐れは十分ある。

「災害はいつ訪れるか判りませぬ。じやから、日ごろの備えがものゝこのじや。特にこの村では、土砂災害が多いからう」

「……………」

返す言葉を見つけれない澄子。村に災害が多い理由は澄子にある。もちろん、そのことをヨネ爺さんが知るはずもないが、なんだか責められている気がして、澄子は思わず目を伏せてしまった。

そんな澄子の様子をどう思ったのか、爺さんは、「おっと、怖がらせてしまいましたか。すまんすまん」と、破顔して謝り、そして、続けた。「まあ、老人の戯言と思つて下され。何も無ければ、それに越したことはありませんからな。まあ、日ごろから備えておけば、万が一の時も安心です。では、見回りがありますので、わしはこれで」

「……はい。でもお爺さん、どうか、お気をつけて」

「ええ。澄子さんもお気をつけて」

爺さんは笑顔で頭を下げると、見回りを再開した。

爺さんの予感が的中したのは、そのわずか二日後——八月三日の深夜のことだった。

前日より降り続いた大雨の影響で、村の各地で山崩れが発生。特に、粗戸、田堀、波羅宿、比良境は、地区が丸ごと土砂に飲み込まれ、甚大な被害が出た。土砂に飲み込まれた家屋は百棟を越え、村全体で三十三名の行方不明者を出した。後に二名の生存、二名の死亡が確認され、最終的な行方不明者は二十九名となった。その中には、澄子も含まれている。

大きな被害であつたが、災害の規模に比べ、死者・行方不明者は少ないとも言えた。これには理由がある。

被害があつた地域で最も多くの住人がいたのは粗戸だ。村の中でも発展した地域で、ここだけで住人は三〇〇名を超える。にもかかわらず、この地域での行方不明者は数名に留まつた。事前に危険を察知したヨネ爺さんが、日付が変わる前に住人に避難を促していたのだ。

爺さんの普段の活動が実を結び、住人が連携して声を掛け合つたため、短時間で避難は完了した。行方不明になつたのは、最後までこの地区に残り、避難を促し続けたヨネ爺さんを含む数名だけだ。住人の避難が完了しても、爺さん本人は粗戸に残り、避難していない人がいないか、家を一軒一軒訪ね歩き、最後まで確認していたという。

それが、二十七年前の出来事だ。

☆

二〇〇三年の八月。
村を、また、大きな土砂災害が襲った。

☆

眞魚教の求導女・八尾比沙子は、異界に飲み込まれた二十七年前の粗戸の街で、奇妙な行動をする屍人を見た。

最初にその屍人を見たのは、初日の深夜だ。たまたま村を訪れ怪異に巻き込まれた少年と共に、教会へ避難する途中だった。

その屍人は、武器を持たずに大通りを巡回していた。大通りを北へ進み、バリケードに突き当たると南に戻る。南には火の見櫓があるのだが、屍人は必ず櫓に上り、上から周囲を見回していた。

ただ、その時は、武器を持たずに巡回していることに多少の違和感を覚えただけだった。この時の比沙子はまだ全てを思い出す前で、少年と共に逃げるので精いっぱいだったのだ。

異変に気が付いたのは二日目の朝だ。時刻は六時。南の海から、サイレンが鳴り響いてくる。

それまで建物の補修作業や畑の草刈り、街の見回りをしていた屍人たちは作業をやめ、多くの者が南の海へ向かい始めた。

屍人たちは、サイレンの音に導かれ、南の赤い海に身を沈める。海送り・海還りの儀式だ。これを繰り返すことにより、屍人は常世へと旅立つことができる。だから、サイレンの音を聞いた屍人は、皆、赤い海に向かう。

だが、その屍人だけは違った。

その屍人は、海に向かう屍人の流れに逆らい、家を一軒一軒訪ね歩

いていた。まるで、村人に避難を促しているように見えた。サイレンの音を聞き、危険が迫っていると思つたのかもしれない。屍人は、生前の記憶に従い行動することがある。その屍人は、生前もそのような行動を繰り返していたのだろうか。

その姿が、ヨネ爺さんと重なつた。

なんの確証もない。ヨネ爺さんが行方不明になつたのは二十七年も前だ。屍人が常世へ旅立つまでの時間には個人差があるが、通常なら一週間程度、どんなに長くとも一ヶ月はかからないはずだ。

だが、それはあくまでも海送り・海還りの儀式を行えばの話だ。なんらかの理由によつて儀式を行わない場合——例えば、屍人になるのを拒み、赤い海から遠く離れた場所でサイレンを聞かないようにするとか、全身を縛つたり、脱出不能の場所に隔離するなど、物理的に行動不能な状態にある場合は、屍人化が進まず、常世へ旅立つことはできない。

家々を訪ね歩いているあの屍人が、本当にヨネ爺さんだつたとしたら。

ヨネ爺さんは、二十七年もの間、赤い海からの誘惑に逆らい、サイレンが鳴るたびに住人に避難を促し続けて来たのかもしれない。

屍人は赤い海に身を鎮めない限り常世へと旅立つことができな。ヨネ爺さんがサイレンの音に逆らい続ける限り、異界に留まるしかない。これからも、ずっと。

全てを教えてあげるべきだろうか。一瞬、そう思った。屍人は知能が低い、独自の言葉を話し、他の屍人と会話ができる。屍人の言葉と人間の言葉の両方を話す者もいる。意思の疎通は、不可能ではない。

だが、比沙子は何もせず、その場を後にした。

常世へ旅立つ機会を放棄し、住人に避難を促すという無意味な行動を繰り返すあの屍人を、愚かだとは思わない。彼の胸には強い意志がある。サイレンの誘惑にも逆らうほどの強い意志が。その意志を否定するような真似は、したくない。

それに。

もうすぐ、全てが終わる。

全てが終われば、すべて無くなる。

赤い海も。

サイレンの音も。

屍人も。

この異界さえも。

そう。一三〇〇年続いた村の呪いは、今日、ようやく終わるのだ。
比沙子は胸に抱いた御神体と共に、水鏡へと向かう。

羽生蛇村民話集

水蛭子神社の始まり

むかしむかし——本当にむかし。

今の蛭ノ塚地方に、それはそれは綺麗な水が湧く泉がありました。

ある夏の日、村の子供が泉の水を汲みにやっていると、泉の中に奇妙な生物がおりました。赤ん坊のような姿をしていますが、そのわりに身体が大きく、子供の背丈とほとんど変わらないくらいです。でも、両手は不自然なほど小さく、よく見ないと見えないほど、そして、足は無く、代わりに魚の尾びれのようなものがついています。妖怪のように見えますが、不思議と怖いとは思いませんでした。

「おめえ、誰だ？」

子供は遠慮なく訊ねました。

すると、人魚のようなその生き物はこう言いました。

「我は蛭子の命。この泉の水をもって酒飯を作り、我に奉じよ」

「なんかおめえ、偉そうだな」

「……………」

蛭子と名乗った生き物は、それ以上何も言いません。

子供は家に帰ると、父親と母親にそのことを話しました。

「おつとう！ おつかあ！ なんか泉の所に変な生き物がいて、飯焚いて持って来いって言ってるだよ！」

「なあに？ 米の飯なんざわしらでも滅多に食えないのに、持ってこいとはどういう了見だ。行ってとっちめてやる！」

父親と母親は怒って家を飛び出し、泉へ走って行きました。

泉には、子供が言った通り奇妙な姿の生き物がいます。

「まるで蛭みたいなやつだな。なんだお前は？」

父親が訊ねると。

「我は蛭子の命。この泉の水をもって酒飯を作り、我に奉じよ」

子供の時と同じことを言います。

「なにおう？ 化け物みたいな顔をして偉そうに！ 焼き物にして食つちまうぞー！」

拳を握って怒る父親を、母親がなだめます。

「お前さんやめときなよ。たたられたらどうするんだい？」

「へん！ こんな奴のたたりなんざ、怖かねえや！」

そうこうしているうちに騒ぎを聞きつけた村の衆もやって来ました。

「こりやあ、何の騒ぎだい？」

「なんだか変な生き物がいてよ、酒飯持って来いって、偉そうに言うもんだから、とつちめてやろうと思つてたところだ」

村人が泉を見ると、確かに変な生き物がいます。

「なんだあ？ おめえは？」

村人が訊ねると。

「我は蛭子の命。この泉の水をもって酒飯を作り、我に奉じよ」

やはり、同じことを言います。

「確かに偉そうだな。で、どうする？」

村の衆は、とつちめるか、はたまた焼いて食うか、たたりが恐ろしいだ、と、しばらく話し合っていました。結局どうするかは決まりませんでした。そこで、村で一番偉い村長むらむらに相談することにしました。

村人の話を聞いた村長は。

「な……なんじゃとー！」

血相を変えて屋敷を飛び出し、泉の湧く場所へ走って行きます。

「あ、村長。この偉そうな化け物、どうしましょうか？」

泉のそばで村の衆が戻って来るのを待っていた父親が訊ねると。

「ば……バカモノ!!」

村長は、頭から湯気を出さんばかりに怒りました。

「蛭子の命とは、この日の本の国をお創りになった神様の、一番上のお子様じゃぞ!!」

「ええ！ じゃあ、偉そうなんじゃなくて、ホントに偉い方!？」

「当たり前じゃ!! こんな小さな村にやって来てくれるなど、この上

なく光栄なことじゃ！ それを、焼いて食うなどとんでもない!!」

「ははあ!! 申し訳ありませんです!!」

村人たちは、地面に頭を擦り付けて謝りました。

そして、急いで泉の水を汲んで飯と酒を用意して、蛭子様に奉納しました。蛭子様は村人の無礼な態度にも怒ることなく、飯と飯を美味しくそうに食べました。

村人は泉の横に社殿を建て、そこに蛭子様を奉りました。それが、水蛭子神社の始まりということなのです。

空から降ってきた魚

むかしむかし。

村を、酷い飢饉が襲っていました。もう、一〇〇日以上雨が降らず、村の食糧は底を突き、川の水は干上がって魚が死に、山の木は枯れて獣も死にました。村人はもう何日も何も食べておらず、腹を空かせておったそうです。

ある村娘が、どこかに食べ物はないかと川辺を歩いていると、空から、何か落ちて来るのが見えました。

「あれは、なんじゃろうか?」

娘が見ていると、それは川の中州にどさりと落ちました。近寄って見てみると、どうやら魚のようです。

「魚……じゃろうか……?」

娘は首を傾げました。魚のように見えますが、どうも変な形をしているのです。

魚は、娘の背丈と同じくらい大きさでした。日照りが続く前は川の川でも魚がたくさん獲れましたが、これほど大きな魚は見たこともありません。しかし、身体の大きさにしては、頭がとても小さくて、娘

の半分くらいしかありませんでした。それにしても目が大きく、黒い穴が空いているみたいです。身体には細い竹の枝のようなものが何本も生えていて、羽根のように大きな背びれも生えています。こんな魚は今まで見たことありません。何より、魚なのに空から降ってきたのがおかしいではありませんか。

「変な形じゃが……魚に間違いなからう。うん。間違いはない」

娘は自分を納得させるように頷きました。気持ち悪い姿をしますが、空から降ってきたのだから普通の魚でないのは当たり前前かもしれません。もしかしたら、お腹を空かせている村人のために、天の神様が恵んでくださったのかもしれない。娘は、その変な魚をありがたく頂くことにしました。

娘は変な魚にかじりつきました。大きな魚でしたが、腹を空かせていた娘は、一人でぺろりと平らげてしまいました。

すると、突然空が黒い雲に覆われました。今までずっと晴れていたのがウソのようです。

「おやあ？　これは、雨が降るんじゃないだろうか？」

娘は喜んで空を見上げていましたが、そうはなりませんでした。雨の代わりに、雷よりも大きな音が鳴り響いたのです。

「ひゃあ！　これは、神様がお怒りだ！　ひよっとしたらこの魚、神様が恵んでくれたんじゃないやなく、うっかり落としたんじゃないだろうか？　これは、とんでもないことをしてしまいましたぞ。神様！　申し訳ねえだ!!」

娘は手を擦り合わせて謝りました。しかし、神様の怒りは収まらないように、大きな音はずつと鳴ったままです。

「神様！　食べてしまったものはもう戻せねえだ。じゃから、これからわしは、魚を一匹ずつ返すで、それでこらえてけろ！」

すると、大きな音は鳴りやみ、空を覆っていた雲はどこかへ飛んで行きました。

娘は、ほっと胸をなでおろしました。

「んだども、これから魚を獲って天に返さないといけねえだか。大変だなあ」

それからしばらくして雨が降り、村は何とか飢饉から救われまし

た。川に水が戻り、以前と同じく魚が溢れると、娘は約束通り魚を獲り、一匹ずつ天へ返したといいます。

この、魚を天に返す娘の行為は、やがて村人全員で行う儀式となり、長い間続けられることになりました。ウワサでは、今でも村のどこかで行われているということです。でも、それを見た人はいません。さて、どこで行われているのでしょうか？

永遠に若き女

むかしむかし。

村に年老いた女がいました。女は、若い頃は美しく、村の男たちを魅了していましたが、年を負うごとに美しさは失われ、いつしか村の誰からも相手にされなくなっていました。

「このまま、わしは一人寂しく死んでいくのかのう……」

女には子供がいましたが、今は親元を離れ、どこにいるのか、生きているのかも判りません。夫もすでに亡くなっています。女は、年老いているにもかかわらず、一人で孤独に暮らしているのでした。

ある夏の日。

女が水蛭子神社を訪れると、そばにある泉が赤く染まっています。

「やや？、これはどうしたことじやろう？、まさか、蛭子様が怪我をされたのか？」

女は、驚いて赤い水をすくってみました。

すると、不思議なことが起こりました。水をすくった皺だらけの手が、みるみる若返って行くではないですか。

「これはすごい。きつと、年老いたわしを哀れんだ蛭子様が、若返りの水を授けてくれたに違いない」

喜んだ女は全身に赤い水を浴び、若い頃の姿を取り戻しました。

若さを取り戻した女は、村を離れ、どこかへ旅立って行きました。その行方は、誰も知らないそうです。

木る伝

むかしむかし。

村の北にある合石岳には、それはそれは恐ろしい化け物がおりました。

化物は、獅子、雄牛、人間、鷲、の四つの頭と、それと対をなす四対の羽を持っていました。化物はたびたび村に下りて来ては、人を襲い、作物を荒らしていました。人々は化け物を『木る伝』と呼び、恐れながら暮らしていました。

ある夏の日。

木る伝の悪さに耐えかねた村人は、真魚川の中州に集まり、天の神に祈りました。

「神様。このままでは、我らはみんな木る伝に殺されてしまいます。どうか、お救いを」

すると、天から一人の僧侶が降りてきました。

「我は神よりの使い。化物を封じるのに適した場所はないか」

村人は相談し、刈割の丘が良いだろうと決めました。刈割の丘は、かつては田んぼや畑が広がる豊かな場所でしたが、度重なる木る伝の悪さにより、今は荒れ果てた土地となっていたのです。

「では、その丘に四本の石灯籠を建て、それと対を成す石碑を、村の各所に設けよ」

僧の言うことに従い、村人は刈割の丘に四本の石灯籠を建て、刈割、

田掘、蛇ノ首谷、合石岳に、それぞれ対を成す石碑を設けました。

準備が整い、僧は刈割の地で木る伝が現れるのを待ちます。

陽が暮れて。

夜の闇を裂くように、木る伝が山から舞い降りてきました。

木る伝は、僧の姿を見ると、恐ろしい声で言いました。

「お前は何者じゃ？」

「わしは、そなたを罰するために天から使わされた者。木る伝よ。悔いを改めるならば、今のうちであるぞ？」

「わしを罰すとは面白いことを言う。やってみるがよい」

「では、そうしよう」

僧は手を組むと、念仏を唱え始めました。

すると、木る伝が苦しみ始めたではないですか。

「貴様、何をした!？」

木る伝の言葉に僧は答えず、ただ念仏を唱え続けます。

「ええい！ 貴様など、喰らってくれる！」

木る伝は、力を振り絞って僧に襲い掛かりました。

しかし、その牙が僧に触れる瞬間、木る伝の身体から、四つの光の球が抜け出しました。木る伝の動きがぴたりと止まります。光の球はゆらゆらと揺れながら、村人が建てた四つの石灯籠に向かってそれぞれ飛んで行きます。そして、灯籠の中に吸い込まれるように消えました。同時に、木る伝の身体も、煙のように消えてしまいました。

光の球が消えた灯籠には、それぞれ、獅子、雄牛、人間、鷲、の頭が浮かび上がっていました。

「木る伝はこの地に封じた」

僧が言うと、村人は声を上げて喜びました。そして、僧に感謝し、村長の家に招いて酒と御馳走を振る舞いました。

夜が明け、僧が天に帰る時が来ました。

「村長よ。もしこの先、木る伝が心を入れ替えたならば、各地の石碑を倒し、石灯籠に火を灯すのだ。さすれば、木る伝は解放される」

僧はそう言い残すと、天へと帰って行きました。

そして、五百年の時が流れました。

村長も村の衆も、木る伝のことなどすっかり忘れ、平和に暮らして

いました。

ある夏の日、村長の娘が、蔵の中から古い巻物を見つけました。そこには、五百年前の木る伝のことが書いてありました。

「父上も母上も、木る伝のことはすっかり忘れていたようですね。心を入れ替えているか、確かめて来ましょう」

娘は刈割の地にやって来ました。そして、石灯籠に向かって話しかけます。

「木る伝よ。そなたは、五百年前の行いを悔いていますか？」

すると、石灯籠から答えが返ってきました。

「ああ。悔いておる。だから、ここから出してくれ」

「ふむ。出してあげても良いのですが、その後、また悪さをされてはたまりません」

「約束しよう。二度と悪さはせぬ。それだけでなく。そなたの言うことは、なんでも聞こう」

「そうですね。では、解放したあと、神の地へと旅立ちなさい。そして、その身をもって、神の地を荒らす者から護るのです」

「わしを封じ込めた神のために働けと言うか」

「そうですね。できぬのならば、いましばらくこの地に留まっておくのですね」

「判った。そなたの言う通りにしよう」

「では、解放しましょう」

娘は村人に命じ、各所の石碑を倒すと、石灯籠に火をともしました。

解放された木る伝は、娘に感謝しました。

「娘よ、この恩は決して忘れぬ。お礼に、これを授けよう」

木る伝は、己の身体の中から、獅子の牙、雄牛の角、人間の目、鷲くちばしの嘴をもぎ取ると、それらをひとつにまとめ、一本の刀を作りました。

「わしの力が宿った刀だ。村やそなたらに災いが訪れた時、必ず力になろう」

娘は刀を受け取りました。

「では、約束通りわしは神の地へ向かう。娘よ、また会おう」

こうして木る伝は村を離れ、神の地を護ることになりました。

このとき木の伝から授かった刀は、今でも神代家の宝物庫に眠っているそうです。

海龍の伝説

むかしむかし。

村の中央を流れる眞魚川のそばに、若い漁師がおりました。

漁師は眞魚川で鮎や岩魚などを獲るのが仕事です。

ある夏の日。

漁師がいつものように川で漁をしていると、北の合石岳が眩しく光りました。

「……なんじゃあ？ あれは？」

漁師が見上げると、頂付近から目もくらむような光が溢れ出しています。光は次第に大きくなると、天に向かって伸び始めたではありませんか。光はどんどん長さを増していきます。それは、空を支える太い一本の柱のようでした。光の柱です。漁師は漁をするのも忘れてその光景に見とれていました。

どれくらい見ていたでしょう。光の柱は、漁師の見ている前で突然消えてしまいました。そこには、いつもの山の景色が広がっています。

「……なんじゃったんじゃ？ 今のは」

漁師は首を傾げました。しばらく光の柱が消えた場所を見ていましたが、それ以上何も起こらないので、漁を再開することにしました。しばらく漁をしていると、川上から、何かが流れてきました。それは大きなお椀のようなものです。

お椀は、ゆつくりと漁師の方に流れて来て、浅瀬に引っかかって止まりました。

漁師はごくりと息を飲みました。なにやら恐ろしげな気配を感じますが、このまま放っておくわけにもいきません。

「娘さん。とりあえず、こつちへ」

漁師は、女をお腕の外に出そうと、手を伸ばしました。

しかし、女は嫌がるように首を振りました。そして、抱えている木箱を背に隠します。

「大事なものなんじゃな？　大丈夫。盗ったりせんから、とりあえずこつちへ」

漁師は優しく話しかけましたが、それでおも女は首を振り、外に出ようとしません。

「——おおいー。おおい!!」

漁師を呼ぶ声がしました。振り返ると、何人もの村の衆が、こちらへやって来ます。

「さつき、山の頂に光の柱みたいなのが見えたが、何かあったのか……ああー！」

村の衆は大きなお腕と女の姿を見て声を上げました。

「なんじゃ、この娘は？　どこから来た？」

「わしにも判らん。ついさつき川上からお腕に乗って流れて来たんじゃ。話しかけても言葉が通じんし、どこから来たのかも判らん」

漁師に代わって村の衆がかわるがわる声をかけてみますが、やっぱり言葉は通じません。そして、その間も、女は抱えた木箱を決して手放そうともしませんでした。

漁師たちは、どうしたものかと話し合いました。

「村長に相談してみるのが良いかの？」

「どうじゃろ？　村長は余所者を嫌うで、追い出されるだけかもしれん」

「そうじゃろうなあ。それに、村長は、いま忙しいじゃろ？　今夜、まつりごとをおこなうんじゃから」

「おお、そうじゃった。夜は外に出るなど、きつく言われておった」

「余計なことて手を煩わせると、怒られかねんぞ」

「そうじゃな。わしらでなんとかした方がええ」

「でも、どうするんじや？ わしらでは、なんともならんぞ？」

「出て行ってもらうしかなないじやろうなあ」

「村から追い出すのか？」

「ああ。どうせ村長を呼んでも追い出されるだけじやろうし、それが良いと思うよ」

「そうじやなあ。それに、わしはあの女が不気味でならねえ」

「わしもそう思うとった。顔は若いのに、髪は年寄りのようじや。山姥か妖怪の類じやねえかと思う」

「それに、あの大事そうに抱えている箱も、何が入っているものやら」「じやが、まだ妖怪と決まったわけではあるまい。もし妖怪でなかったら、かわいいそうじや」

「なにも袋叩きにしようというんじやない。もう一度お椀に乗せて、そのまま流すだけじや。川下には大きな町があるから、そこでなんとかしてもらえるべ」

「そうじやなあ。娘がここに居るのは、たまたま見つけたからじや。もし誰も漁をしてなかつたら、そのまま流れて行つとったじやろうからな」

「そうじやそうじや。それがいい」

「さわらぬ神にたたりなしじやな」

話はまとまり、村の衆はお椀に女を乗せたまま蓋をし、そのまま川に流しました。

女は、透明な蓋越しに悲しげな眼を向けたまま流れて行き、やがて見えなくなりました。

なんだかかわいそうなことをしたとも思いましたが、やつかいごとに巻き込まれてはたまりません。村人は、女のごときはこれっきりで忘れることにしました。

その夜。

明日の漁に供えて早めに床に就いた漁師でしたが、なかなか寝付けず、布団の中で何度も寝返りをうっていました。

と、屋根に雨音が当たる音がします。

最初はぼつりぼつりとした音でしたが、すぐにどしや降りになりました。

「はて、昼間は雨なんぞ降りそうになかったが……この様子じゃ、川の水かさが増して、明日は漁ができませんかもしれないのう」

明日のことが気がかりでしたが、とにかく寝ようと、漁師は布団にもぐりこみました。

雨の音は、ざあざあと、更に強くなります。眠れないまま夜は更けて行き、やがて、日付が変わる子の刻三つ時の頃。

かたかたと、家が揺れ始めました。

最初は小さな揺れでしたが、次第に大きくなっていきます。

「地震か？」

漁師は布団から起き上がりました。揺れはどんどん大きくなり、家全体を揺らすまでになっています。

「やや、これはたまらん」

漁師は外に逃げようとしたのですが、もはや立ち上がることさえできないほどの揺れでした。

そして、川下の方から、なにやら鳥が鳴くような甲高い音が聞こえます。

「なんだあ!?!」

その鳴き声のような音はどんどん大きくなります。漁師は耳を抑えてうずくまりました。

「あ……頭が痛い……頭が痛い……」

地震と、鳴き声のような音は、さらに大きくなり、漁師は、意識を失いました。

☆

夜が明けて、村人が見たのは、土砂に飲み込まれた村でした。

昨夜から降り続いた大雨が原因で、村の各地で土砂崩れが発生したのです。特に、漁師が住んでいた川辺や、村長の屋敷がある地域が大きな被害を受けました。

生き残った村人は土砂を掘り返しましたが、漁師や村長を見つけることはできませんでした。

「あの娘を流したのが悪かったんじやろうか……」

村人の誰かが言いましたが、本当のことは、もう判りません。

その後、村では何十年に一度、光の柱を見ることが多くなりました。その度に、村を大きな災いが襲います。

いつしか村人は、この光の柱を、大いなる尾を打ち振るい、災いと仇を成す海龍・理尾りびやたんや丹と呼び、恐れ敬うようになりました。

ただ――。

村は山に囲まれており、海は遠く何百里も離れています。村人のほとんどは海を見たことがないのに、なぜ光の柱を『海龍』と思ったのか。そもそも、誰がそんなことを言い出したのか。

今となつては、誰も知りません。

戻り橋

むかしむかし。

蛇ノ首谷の深い谷を渡る橋を、一人の旅の僧が通りかかりました。すると、向こう岸から、何人もの村人が列をなして歩いて来ます。村人はみんなうつむき、暗い様子でした。すすり泣く声も聞こえま
す。列の中央には、棺桶を担ぐ人も見えました。どうやら、お弔いの列のようです。

この村には独特の宗教があることを、僧は知っていました。しかし、宗教は違えど死者を弔う気持ちに変わりはありません。僧は死者に対し、祈りを奉げました。

すると、棺の蓋が開き、死者がよみがえったではないですか。

村人は驚きましたが、死者がよみがえったことを大変喜び、僧に礼を言つて村に戻つて行きました。

以来この橋を、『戻り橋』と呼ぶようになりました。大変ありがたい橋で、子供がいたずら書きなどをすると、罰が当たると言われています。

千曳橋

戻り橋から川下へ下つた場所、いまでいう大字粗戸の地域の川に、橋を架けることになりました。

その地域の川幅は大変広く、大きな石が必要でした。そこで、合石岳でも最も大きな石を選び、十人の男たちで運ぶことになりました。石に綱をかけ、みんなで引つ張ります。

「うんとこしよ、どっこいしよ」

しかし、石はあまりにも大きく、十人ではとても動かせません。

男たちは村から応援を呼びました。すると、すぐに百人の村人が駆けつけました。

「うんとこしよ、どっこいしよ」

みんなで引つ張りましたが、それでも石は動きません。

さらに応援を呼びました。今度は二百人の村人が駆けつけました。

「うんとこしよ、どっこいしよ」

それでも石は動きません。

さらに応援を呼びました。今度は五百人の村人が駆けつけました。

「うんとこしよ、どっこいしよ」

それでも石は動きません。

さらに応援を呼びました。今度は千人の村人が駆けつけました。

「うんとこしよ、どつこいしよ」

石はようやく動きはじめました。

山を下りた村人は、運んだ石を削って川に橋をかけました。そして、石を千人で引いて運んだことから、この橋を『千曳橋』ちびきばしと呼ぶようになった。

三蛇橋

むかしむかし。

眞魚川の岸边で、一匹のウサギがお昼寝をしていました。

そこへ、三匹の大きなヘビがやってきました。ヘビはお腹を空かせており、ウサギを見ると、しめしめとばかりに這い寄りました。お昼寝をしていたウサギは気付くのが遅れ、目が覚めた時にはヘビに囲まれていました。

ヘビは言いました。

「ウサギよ。もう逃げることはできんぞ。かんねんして、わしらに食べられるのじゃな」

ウサギは泣きながら答えます。

「ああ、ヘビさんの言う通りです。もう、逃げられそうにありません。でも、ヘビさんはとても大きく、三匹もいます。わたしは見ての通り小さな身体で、三匹で食べても、大した腹の足しにはならないでしょう」

「それは確かにそうじゃな」

「はい。ですから、食べるのなら三匹ではなく、誰か一匹の方が良いと思います」

「なるほど。ではウサギよ、わしらの中で誰に食べられたい？」

「一番からだの大きなヘビさんに食べられれば、あまり苦しまなくて

すみそうです。三匹の中で、一番大きなのはどなたでしょうか？」

ウサギがそういうと、三匹のへびは。

「それは、なんと言ってもわしじやな」

「何を言う。わしの方が大きいにきまつとる」

「バカなことを言うな。どう見ても、わしの方が大きいではないか」

そう言つて、ケンカを始めました。

ウサギは言います。

「では、こうしましょう。その川に、三匹並んでください。誰が一番大きいか、私が調べます」

「よし。そうしよう」

三匹のへびは、ウサギに言われた通り、川の上に並びました。

するとウサギは、へびの背中をぴよんぴよん飛んで向こう岸へ渡り、森の中へ逃げ込みました。

「やや、ウサギめ、騙したな！ こうしちやおれん！ みんな！ 追いかけるぞ！」

へびたちは慌ててウサギを追いかけてやろうとしましたが、一斉に動き出そうとしたため、長い身体が絡まってしまいました。

「何をするんじゃ！ 早くほどかんか！」

へびたちは何とか絡まった身体をほどこうとしますが、動けば動くほど、どんどん絡まって、とうとう動けなくなっていました。

やがて、へびたちはお腹を空かせたまま、川の上で死んでしまいました。

三匹のへびはそのあと石となり、村人が川を渡るための橋として重宝したそうです。それからこの橋は『三蛇橋』と呼ばれるようになりました。

むかしむかし。

ある村娘が、洗濯をしようと眞魚川へ出かけました。

川辺で着物を洗っていると、土の中から、一匹のミミズが出てきました。

ミミズは、川の水の方へ向かって行きます。

娘がそれを見ていると、川から一匹の小魚が跳び出して、ミミズを食べてしまいました。

しかし、小魚は陸に上がってしまったため、川に戻ることができません。

小魚がしばらく土の上ではねていると、どこからともなくカエルがやってきました。

カエルは小魚を見つけると、ぺろりと小魚を丸のみにし、満足そうに川へ向かいます。

すると、今度は川から中くらいの魚が飛び出してきた、カエルを食べてしまいました。

しかし、中くらいの魚も陸に上がってしまい、川に戻ることができず、ばたばたと暴れるだけです。

すると、今度は空から鳥が飛んできて、中くらいの魚をくちばしで掴み、そのまま川の上を飛び去ろうとしました。

すると、今度は川から大きな魚が飛び出して、鳥をひと呑みにしたのです。

ですが、大きな魚は勢い余って陸に飛び出してしまいました。陸に上がれば、どんなに大きな魚も跳ねるくらいしかできません。

それを見ていた娘は。

「これはしめた。この魚を持って帰れば、おっとうもおっかあも喜ぶぞ」

娘は魚を家に持って帰ろうと手を伸ばします。

しかし、ふと思いました。

ミミズが小魚に食べられ、小魚がカエルに食べられ、カエルが中くらいの魚に食べられ、中くらいの魚が鳥に食べられ、鳥が大きな魚に食べられました。

「もし、わたしがこの大きな魚を食べたら、わたしはどうなるのかしら？」

それを考えると、なんだか恐ろしくなってきました。

娘は大魚を川へ放すことにしました。大魚は嬉しそうに川の底に消えて行きました。

すると。

「娘よ。魚を食べなくて良かったですね」

背後で、それはそれは恐ろしい声がしました。

振り返ると、そこには、髪が真っ白な老婆が立っていました。

老婆は血走った赤い目でこちらを見て、恐ろしい笑みを浮かべます。

娘は慌ててその場から逃げ出しました。幸い、老婆はずっとその場に立ち尽くしたままで、追って来ることはありませんでした。

なんとか家に逃げ帰った娘は、魚を食べなくて本当に良かったと思いました。

泣いている女

むかしむかし。

刈割の丘に、いつも泣いている娘がいました。

村人が、なぜ泣いているのか尋ねても、娘はなにも答えません。

娘は、理由も話さず、毎日毎日泣いています。

見かねた村人は、蛭ノ塚にある蛭子様に、娘を助けてくれないかと頼みました。

すると、蛭子様は二体の土人形を授けました。

片方には剣、片方には盾の紋様が刻まれています。

蛭子様は言いました。

「これは、わたしの力を封じ込めた物だ。これを使えば、娘の悲しみを

(この話は途中からページが破られていて読むことができない)

ひとりぼっちの女

むかしむかし。

村に、美しく気立てのよい女がいました。

女は、村人の誰からも慕われていました。

しかし、女は実は妖魔の使いで、夜な夜な村の若い娘を襲っては、妖魔に食べさせていたのです。

村にはときどき女の正体に気付く者もいましたが、女はそんな村人も襲い、妖魔に食べさせていました。

しかし、隠し通すのにも限界がありました。ある日、女の正体は、村人全員に知れ渡りました。

女は村から追い出され、ひとりぼっちで暮らすことになりました。

☆

ひとりぼっちで、暮らすことになりました――。

マナ字架

眞魚教では、毎月の末日の夜、その月に生まれた信者の赤子に神の祝福を与える、『新生児祝福式』が行われている。村に生まれた新たな命に神のご加護を祈り、健やかな成長を願う儀式である。他の宗教でもよくみられる儀式であるが、眞魚教では赤子の額に墨で『マナ字架』を描くのが特徴だ。マナ字架は眞魚教の宗教的象徴で、一本の支柱に三枚の板を平行に張りつけ、一番下の板の右側にもう一枚の板を斜めに張りつける独特な形をしている。ちょうど、漢字の『生』の字をひっくり返したような形だ。このマナ字架は、教会の礼拝堂や屋根の上はもちろん、墓所・道端・村境の道祖神像など、村の様々な場所で見ることが出来る。また、信者たちは首飾りや数珠に取り付けたり、メダルに刻むなどして常に持ち歩き、いつでも祈りを奉げられるようにしていた。この宗教的象徴であるマナ字架を、求導師が赤子の額に描くのだ。

その月の末日も、教会ではいつものように祝福式が行われていた。礼拝堂には、この月に生まれた四人の赤子とその家族、そして、赤子を祝福するべく多くの信者が集まっている。祝福式は、日曜の礼拝式と同じく、まず神へ祈りを奉げることから始まる。その後聖歌を歌い、そして、集まった信者に対し、求導師が法説を行うのだ。法説とは、求導師が信者たちの前で話をするのである。その内容は式によつて様々だが、聖典の一節を用いてその意味を説いたり、古くから行われている儀式の始まりや歴史を話すのが主だ。神の教えを説く時間、とも言えた。

今日の法説は、マナ字架についての話だった。

「——皆さんもよくご存知の通り、マナ字架は漢字の『生』の字をひっくり返した形をしています。これは、生の反対、すなわち、死を意味します。墓所にマナ字架を立てたり、墓石にマナ字架を刻むのは、そのためです」

壇上で語る求導師の言葉を、信者たちは真剣な表情で聞いている。求導女の八尾比沙子は、祭壇から少し離れた下座に立ち、信者たちの

様子を眺め満足げに微笑んだ。毎月行われる新生児祝福式において、この話は何度も行われている。中には今日初めて聞く信者もいるだろうが、ほとんどの信者はすでに知っている話だ。それでも、彼らは熱心に耳を傾ける。それは、彼らの信仰心の厚さを表していた。

求導師の話は続く。「――では、なぜこの祝福式では、新生児の額にマナ字架を描くのでしょうか？　これは、今から千二百年ほど前の天武の時代、この地に降臨された神王様が、マナ字架の形をした板の上に身を預けたことからきています。マナ字架は神王様が初めて現世で触れた物であり、その神聖さが、災いや不幸といった『厄』を祓うのです。つまり、マナ字架には厄除けの効果があるのです。新生児の額に描く以外にも、村の各地に立ったり、家の軒先に吊るしたり、あるいは、峠の道祖神像に刻まれています。我々が日々無事に過ごせるのも、マナ字架が厄を祓ってくれるからです。全ては、神王様のお力。その恵みに感謝し、新たに生まれた小さな命を祝福しましょう」

求導師はそう締めくくると、胸の前で手を組み、祈りを奉げた。信者たちもそれにならう。比沙子も同じく手を組み、祈りを奉げる。

だが、胸の内では、小さくため息をついた。

いま求導師がした話は、真実ではない。信者たちにもっともらしい話をするために作られたものだ。本当は違う。いや、全てが違うわけではない。神がこの地に降臨した際、マナ字架の形をした板の上に身を横たえたのは事実だ。そこからマナ字架が神聖なものとなされ、厄除けの願いを込めて村の各地に設置され始めたのは間違いない。

だが、生まれたばかりの赤子の額にマナ字架を描く行為には、全く別の意味がある。

その意味を知っているのは、今となっては比沙子のみだった。

今から一二〇〇年ほど前、この地に神が降臨した際、飢えから神の身体を口にした比沙子は、不死の呪いを受けた。その呪いは、比沙子の子・孫・ひ孫、さらにその先の子孫、すべてに及んだ。

この村に住む者は、一部の外部から来た者を除き、全て比沙子の血を引いている。つまり、ほぼ全員が不死の呪いを受けている。よって、村に新たな命が生まれるのは、新たな呪いの始まりでもあるのだ。しかし、真の意味で不死の呪いを受けているのは、比沙子自身と、その直系の子孫である神代家の娘だけだ。それ以外の村人は、異界で死人となり、海送り・海還りの儀式を行い、罪を洗い流すことで神に許され、常世へと旅立つことができる。ほとんどの村人は、この儀式によって死を迎えることができるのだ。

だが、中にはなんらかの理由によりこの儀式を行わない村人もいる。

特に多いのは、生きてまま異界に取り込まれてしまった者だ。生きている人間には屍人は醜い化け物に見える。屍人になることを拒み、自ら監禁状態になって海へ入らないようにする者は少なくない。また、屍人となっても、己の強い意志によって儀式よりも全く別の行動を優先する者もいる。愛する者を探し続けたり、生前の使命を全うしようとする者だ。

これらの者たちは、海送り・海還りを行わないため罪を洗い流せず、永遠に神の元へ向かうことができない。比沙子や神代の娘と同じく、永遠に死が訪れない。

そのような不幸を避けることを願い始まったのが、新生児の額にマナ字架を描く行為である。

生の字をひっくり返した形のマナ字架は死を意味している。新生児の額に死を示すことで、村に生まれた新たな命が安らかな死を迎えることができるように、という願いを込めているのだ。

求導師の法説が終わり、いよいよ赤子にマナ字架を描く時間となった。この月は四つの家に新たな命が生まれた。最初の家族が壇上にあがる。母親の胸に抱かれた赤子は、すやすやと気持ち良さそうに眠っている。求導師は、最近の赤子の様子などを両親から聞き、特に

大きな問題もなく育っていることに満足げに微笑んだ。そして、そばに控えている比沙子が差し出した筆を執り、墨を付け。

「この子に、神の祝福とご加護がありますように——」

祝福の言葉と共に、赤子の額にマナ字架を描く。赤子は少しくすぐったそうに顔を動かしたが、そのまま眠り続けていた。マナ字架を描き終え、最後にもう一度信者全員で祈りを奉げる。両親は求導師と信者たちに深く感謝し、壇を下りた。

同じ手順で、二組目、三組目の家族も儀式を行う。三組目の家族の赤子は怖がって泣き始め、求導師が困惑するという一幕もあり、礼拝堂内は笑いに包まれた。

最後の一組が壇上にあがった。その家族は、教会の近くに住む楠くすのきという一家で、比沙子たちにもなじみ深い家族だった。赤子は十日前に生まれた。母親の胸に抱かれた赤子は怯えたような表情をしている。ひとつ前の家族の赤子が大泣きしたせいかもしれない。求導師の前に来ると、堰せきを切ったように泣きはじめた。

「おやおや。どうやら私は、子供たちに嫌われてしまったようだ」

求導師が苦笑いを浮かべると、堂内はまた笑い声に包まれた。

「仕方ありません。求導女様に代わってもらいましょう」

求導師が差し出した筆を笑顔で受け取る比沙子。今回のような教会が行う儀式は基本的に求導師が取り仕切るが、眞魚教の聖典には男女の平等が定められており、求導師と求導女の立場は同じだ。なので、この儀式を比沙子が行っても何も問題はない。赤子の人数が多い場合は、交代で行うこともある。

泣き続ける赤子だったが、比沙子が頭をなでるとぴたりと泣き止み、すぐに満面の笑みを浮かべた。比沙子も笑顔を返し、そして、母親に視線を移した。「元気があって、なによりです」

「はい。おかげさまで、この子も私も、大きな問題もなく過ごせております」

「それは良かった。しかし、油断は禁物ですよ？ 産後の母親の身体は、本人が思っている以上に衰弱しています。問題ないように思えても、突然、体調が悪くなることもあります。決して無理はしないよう

に気を付けてください」

「はい。ありがとうございます」

その後もいくつか赤子の様子について話をした後、最後に比沙子は「何か困っていることはありませんか？」と訊いた。

すると、母親は表情を曇らせた。「困っているというほどのことでもないのですが、この子に明るい未来はあるのか、不安になることがあります。こんな世相ですから、いつまた、前のような大きな戦争が起こるか判りませんし……」

「……そうですね。判ります」

比沙子は、母親の気持ちに寄り添うように、そつと肩に手を添えた。

世界中の国を巻き込んだ大戦争が終結してから数年。戦勝国として空前の好景気に沸いたこの国も、最近は輸出の低迷と産業の停滞により、一転して不況に陥りつつある。外部とあまり関わりを持たないこの村ではあまり関係の無い話だが、それでも、この国がまた戦争を始めたら話は別だ。国から出兵の命令があれば従わないわけにはいかない。先の大戦でも、村からは多くの若者が出兵した。不況にあえぎ、この国が再び戦争を始めるのも時間の問題だろう。だが、前回の戦争に勝ったからと言って、次の戦争でもまた勝てるとは限らない。仮に勝てたとしても多くの人が死ぬ。先の大戦で村から出兵した者の内、無事戻って来られたのはごくわずかだ。

そんな時代に生まれた子だ。母親が将来を憂うのも無理はない。

「名前は、もう決まったのですか？」比沙子は、母親憂いを少しでも和らげるため、明るい声で訊いた。

「はい。美しい羽と書いて『美羽』といいます。いつかその羽をはばたかせ、大空を舞うような人生を送ってほしいと願いました」

「——良い名前です」

比沙子はもう一度、赤子に笑みを向けた。この国の不況も、この国が向かう先も、この子は知らない。もちろん、村の呪いについても、何も知らない。だからこそ、赤子は無邪気に笑っている。

比沙子は筆に墨を付け。

「この子の元に、災い・不幸・厄が訪れることのないように——」

祈りの言葉を奉げる。求導師と違い、神の祝福とご加護、という言葉は使わない。そんなものが無いことを、比沙子は知っているから。そして。

——この子が後悔なく生を全うし、呪いに屈せず、安らかな死を迎えられますように。

胸の内で真の願いを込め、比沙子は美羽の額にマナ字架を描いた。

屍人兵量産化計画

世界中を巻き込む二度目の大戦争が勃発して数年、羽生蛇村には、多くの日本兵が出入りするようになっていた。

米国との開戦を機に、日本の戦線はそれまでの中国大陸・東南アジア方面から太平洋地域にも拡大。さらなる軍事力の強化が求められていた。その施策のひとつとして、村の病院である宮田医院が、日本軍の指定病院とされたのである。これにより、村は軍から多額の資金援助を得ることができた。宮田医院の病床数はそれまでの十五床から一気に六十六床にまで増え、村と都市部を結ぶ道路も拡張工事されるなど、この数年で村の様子は大きく変わった。

もつとも、羽生蛇村は都市部から遠く離れた山奥にある。このような辺鄙な場所へんぴに、わざわざ道路を整備してまで軍の病院を置くというもおかしな話であった。村には錫の鉱山がある為それが目的であるという噂もあるが、この村で採れる錫は質が極めて不安定なため軍事利用には不向きだ。実際、軍は鉱山には出入りしておらず、村から錫を運び出している様子もない。村人は、一様に首をかしげていた。

実際、日本軍の目的は他にあった。屍人の軍事利用である。

屍人は知能が低下しているものの、生前の記憶に沿って行動し、どんなに肉体を損傷しようとも決して活動を停止することはない。心臓を撃とうと脳を破壊しようとして切り刻もうと骨まで焼き尽くそうと、ものの数分でよみがえる。屍人で兵を編成すれば不死の部隊の完成だ。戦線へ投入すれば、多くの戦果を挙げるだろう。

無論、こんな話は一般的には夢物語だ。賢明な者なら真に受けるはずがない。だが、目の前でその不死の力を見せつけられれば別だ。信じないわけにはいかない。軍上層部は、宮田医院が密かに捕えていた屍人を実際に見て、この話に喰いついた。

そう。今回の話は、神代家当主が軍へ持ち込んだもの——当主が、村の不死の情報を軍へ売り渡したのである。

眞魚教の求導女・八尾比沙子は、宮田医院の地下牢の最も奥まった房に監禁されていた。両手足を鎖で壁に繋がれ、ただでさえ狭い房内を自由に歩くこともできない状態だ。この房は他の房からかなり離れた場所であり、他の囚人の顔を見ることはおろか、声を聞くこともできない。看守が来ることも無い。監禁されて以降、食事はおろか水の一滴さえも与えられていなかった。

うかつだった。

屍人の情報を軍へ売り渡すなど、許せるはずはない。村の呪いは、決して外へ出してはいけないのだ。当然のごとく、比沙子は当主の暴挙を止めようとした。教会は神代家よりも下の立場だが、それはあくまでも表向きの話だ。この村を支配しているのは比沙子に他ならない。比沙子が命じれば、いかに当主といえど逆らうことはできない。そして、村のほとんどの者は、そのことに気付くことさえもない。比沙子が不死の身体を持ち、村を支配していることは、決して気付かないようになっていく。それは、神が定めていることだった。

だが、まれに、このことに気が付く者が現れる。『勘の鋭い者』と、比沙子と呼んでいる。村の外れに住む志村という猟師の一族に現れやすい傾向があるが、今回、神代の当主が、その『勘の鋭い者』であったのだ。比沙子は、当主と軍によって囚われ、監禁されたのだった。

比沙子を捕らえた軍は、まずは比沙子の不死の力を得るべく研究を始めたが、これはすぐに諦めた。比沙子の血を他者に混ぜる、あるいは比沙子の肉を削ぎ他者に喰わすなどしたが、その者はすぐに死んでしまうのだ。かつて神の血肉を喰らった比沙子は神と一体であり、比沙子の血肉を喰らうことは神の血肉を喰らうことである。その禁忌を犯した者には死の罰が与えられる。これに耐えるには、極めて強い生きる意志が必要だ。

比沙子の不死の力の利用を諦めた軍は、当初の予定通り研究の対象を屍人へと切り替えた。無論、それで比沙子が解放されることはなく、そのまま地下牢に監禁され続け、すでに二年が経っていた。

静寂と闇しかない地下にわずかな気配が生じ、比沙子はゆっくりと目を開けた。小さな足音が聞こえる。この牢へ、まっすぐ近づいて来る。幻視を行えば、来訪者が何者か確認できるが、それをする必要はない。今、わざわざここへ足を運ぶのは、一人しかない。

比沙子の目の前には鉄格子があり、その向こうは狭い廊下を挟んですぐ壁がある。虫が這いまわる以外変化の無い風景に、わずかな明かりがさした。思わず目を閉じる比沙子。足音の主が持つ燭台の明かりだろう。ぼんやりとしたもので決して十分な明るさではないのだが、長く闇に閉じ込められている比沙子には目を焼かれるかのような眩しさだった。

やがて、足音は比沙子の房の前で止まった。光に目を慣らしながら見る。鉄格子の向こう側には、比沙子を捕らえた男——神代家現当主・神代俊しゅんが立っていた。右手に燭台を、左手には一振りの刀を携えている。

「……よう、まだ生きているか？」俊は、唇の端に不快な笑みを浮かべた。

「あいにくと、死ぬことができないのよ。もう忘れたのかしら？」薄く笑いながら言葉を返す比沙子。本来なら話す価値など無い男だ。だが、話さずにはいられない。心が、それを求めている。

「話には聞いていても、実際この目で見て見ないと判らぬからな」俊は明かりが奥まで届くよう、燭台を高く掲げた。「元氣そうで何よりだ。二年も放置しているのに……素晴らしい力だな」

「代われるなら代わってあげたいくらいよ」

「遠慮しておくよ。不死というものに憧れはあるが、お前を見ていると、到底幸せだとは思えんからな」

「あなたにしては賢明な判断ね。それで、そんな賢明なあなたがやっている愚かな研究の方は、どうなったかしら？」

「極めて順調だよ。屍人の体内から血を抜き取り、それを生きている人間に投与すれば、その者も屍人化する。これは、すぐに突き止めた。

問題は、血の濃度だ。投与する血の量が少ないと屍人化はしない。それでも幻視や治癒能力の向上は得られるが、それも投与を続けないとすぐに消えてしまう。一体の屍人から得られる血ではどうしても量は不可能だ。どのように血を増やすかが問題だったが、結局は時間をかけて溜めるのが一番だという結論になった」

つまり、人を屍人化するのに必要な分の血を抜き取り、それを保管する。その後、屍人の回復を待つてまた必要な分の血を抜き取り、保管する。これを繰り返すというわけだ。

比沙子は、フンと鼻を鳴らした。「これはまた、ずいぶんと時間がかる話ね」

「初めのうちは仕方がない。だが、少しずつ屍人を増やしていけば、徐々に生産力は上がってゆく。今月中には三十体ほどの屍人兵が生産可能だ。来月には六十体、再来月には一二〇体と、倍加して行ける。一年後には、世界中の戦地へ派兵できるだろう。そうなれば——」

そこで俊は言葉を切り、フフッと笑った。目の輝きが増し、息が乱れ、小さく身体を震わせている。自分の言葉に興奮しているようだ。その興奮を抑えるかのように自身の両肩を抱いた。

しばらくして、さらに言葉を継いだ。「——そうなれば、日本がこの戦争に勝利するだけでなく、世界を制することも可能だ。この村の不死の力が、この国を救うのだ。つまり、この私が、不死の力を掌握し、この世界の救世主となるのだ！」

まるで歌劇でも演じているかのように、大げさな身振り手振りで行う。

その姿を見て、比沙子は声をあげて笑った。

俊が不快感に表情を歪めた。「……なにがおかしい？」

「……あなたは、自分が特別な存在だとも思っているのかしら？」

不死の力を掌握？ この世界の救世主？ あなたのような愚かな夢を見た者は、今までもいたわ。何人も……それこそ、数えきれないほどね。その結果がどうなったのか、今の村の状態を見ればわかるでしょ？ 何も変わっていない。誰一人成功していない。この一三〇〇年の間、一度だって成功したことはないの。村の呪いを外へ持ち出

することはできない。神が、お許しになるわけがない。あなたも、すぐに思い知るわ。その時あなたがどんな顔をするのか、楽しみね」

比沙子の言葉に、俊はぎりぎりという音が聞こえそうなほど奥歯を噛みしめ、そして言った。「私にそんな口を利いていいのか？ また拷問部屋へ送ってもいいのだぞ？」

「拷問は、痛みや死への恐怖があつてこそ成り立つものよ。あたしが今さらそんなものを恐れると思う？」

「ならばこの場で斬り刻んでやろうか？ 私には、その力があるのだから」

俊は、左手に携えていた刀を突き出した。神代の宝刀・焔薙だ。今度は比沙子の顔が不快感に歪む。あの刀が俊の手にある限り、比沙子は屈するしかない。焔薙は、その名の通り炎を薙ぐ力がある。比沙子には炎を自由に操る能力があるが、焔薙の前では無効化される。さらに、その刃には聖獣・木の伝が宿っており、斬られた傷は決して治らないと伝えられている。たとえばそれが、屍人のように不死の身であっても。

「……無駄よ。聖獣が宿らなければ、その刀はただのなまくら。今のあなたに、はたして成獣は味方するかしらね？」

挑発的な笑みを浮かべる比沙子と、それを憎々しげに見つめる俊。しばらく二人は睨み合っていたが、やがて、俊が刀を下げた。

「……まあいい。計画は順調だ。いずれ貴様も、私の力を思い知るだろう。それまで、せいぜい長生きするのだな」

そう言い捨てると、俊は廊下に高笑いを響かせながら去っていた。房は、再び闇に包まれた。

そして、比沙子の心に灯った小さな炎も、再び消える。また、闇の中での孤独が続く。

たとえ何十年何百年監禁されようと決して死ぬことはない比沙子。不死である比沙子に死の恐怖はない。痛みへの恐怖も、遠に消えた。しかし、孤独への恐怖は、いまだ消えない。

一三〇〇年の時を生きてきた比沙子。そのことに、村人は気付かない。それは、村人の記憶から比沙子が消えることを意味していた。ど

んなに仲良くなり、心を通わせ、例え愛し合ったとしても、時が経てば、その者の記憶から比沙子は消える。比沙子は常に孤独だ。それでも、誰かの側にいれば、その孤独を紛らわせることができる。一人ではないのだと思うことができる。例えいつか消え去ってしまう一瞬の交わりであったとしても、それが比沙子の心を支えてきた。一三〇〇年の間、ずっと。

だが、こうして闇に一人放置されると、真に孤独であることを思い知らされる。比沙子にとって、それはこの上ない恐怖だった。だから、たとえそれが俊のような憎き相手であっても、話をせずにはいられないのだ。話をすれば、心が安らぐのだ。

この監禁も、長くは続かない。神に花嫁を奉げる儀式が近づけば、比沙子は必ず解放される。儀式を遂行するために、比沙子は村に必要な存在だと神が定めているのだ。だから、どんなに嚴重に監禁されようと、あるいは地中深く埋められたり、水中深く沈められようとも、比沙子はただ待てばいい——神代の次女に御印が降りる時を。比沙子が囚われた時、神代の次女・美夜子は二歳だった。遅くとも後十年以内には御印が降り、比沙子は解放されるはずだ。比沙子にとって十年など、一眠りする程度のわずかな時間だ。

しかし。

闇に閉ざされた牢で一人過ごす時間は、永遠と思えるほどに、長い苦役だった。

☆

それから一ヶ月後。

神代俊は折部地区の西にある跋拔ふみぬきという集落の公民館へ来ていた。館内には、俊の他に、宮田医院院長、軍の研究員と幹部、そして、こ

の集落の全住人三十三名が集められている。表向きは、最近日本の各地に広がっている感染症の防止薬の摂取であるが、本当の目的は屍人兵生産の実験だった。先日、人を屍人化させるための血液が、ようやく三十四人分できあがったのだ。手始めにこの集落の住人三十三名を屍人化させる計画だ。これに成功すれば、三十三名の屍人からさらに血液を採取し、別の者に投与する。その屍人からさらに血液を採取し投与。これを繰り返していけば、すぐに屍人兵を量産できるようになるだろう。

血の投与は滞りなく進んだ。住人は誰一人疑うことなく——もちろん、仮に疑ったところで神代の意向に逆らうことはできないのだが——血を摂取した。効果が現れるのは深夜だ。俊は一旦住人を家へ帰らせると、軍と共に集落を封鎖し、時が訪れるのを待った。

二十三時を過ぎた辺りから集落が騒がしくなった。各地で悲鳴と怒声が入り混じった声が聞こえる。住人が屍人化し、他の者を襲っているのだろう。やがて銃声も聞こえるようになった。無論、屍人は銃で撃たれた程度では死なない。仮に囚われたとしても、捕えた者もいずれ屍人化する。集落から逃げ出そうとする者もいたが、全ての道を封鎖しているため逃げることはできない。無理に突破しようとする者には容赦なく発砲した。日付が変わる頃には、悲鳴も怒声も銃声も聞こえなくなつた。代わりに、獣のような唸り声や、「おんそぱらうんれや」などと意味不明な言葉が聞こえるようになる。全員無事、屍人化したようだ。

集落の外からその様子を眺めていた俊は高らかに笑つた。事は順調に運んでいる。あとは屍人を捕えるだけだ。そのまま拘束し血液を採取する予定だが、何体かは、軍に売り渡して戦線へ投入してもいいだろう。屍人兵が戦果を挙げればさらに資金が投入されるはずだ。そして、この実験を成功させた神代家は軍の中枢へ入ることができ。そこからさらに躍進し、軍を、日本を、そして世界を掌握するのにも夢ではないのだ。俊は、声をあげて笑い続けた。

その時。

地面から、光の柱が出現した。

俊が立つ場所から少し離れた場所だ。光の柱は夜の闇を切り裂くように空へと伸びてゆく。最初は細い光だったが、伸びるにつれ、少しずつ太くなり、眩しさを増す。それは、どこか龍が天へと帰ってゆく姿を思わせた。

——理尾や丹……だと……？

手をかざして光を遮りながら、俊は小さくつぶやいた。理尾や丹。聖典・天地救之伝に登場する、災いをもたらすとされる海龍だ。村では古くから何度も目撃されており、歴史書や古い文献にも多く記されている。その正体は定かではないが、神に花嫁を奉げる儀式の直前に現れることが多いのを、神代家の者は知っていた。だが、今は儀式を行う時期ではない。なぜ今、理尾や丹が発生したのだろう。

光はやがて、天へ吸い込まれるように消えた。

そこに。

男が一人、立っていた。

濃い緑の服を着た男だ。顔にはまだ幼さが残っている。十六・七歳ほどだろうか。少年と言ってよい顔つきだが、その目には、若さに似合わぬ強い決意のようなものが感じられる。その背には二本の猟銃が背負われており、腰には拳銃を携えていた。戦時中とはいえ随分と物騒な姿だ。だが、それらの武器よりも、少年が手に持っている物の方が問題だった。鏢の部分にマ十字架が浮き彫りにされている刀。神代の宝刀・焰薙だ。なぜそれを、見知らぬ少年が持っているのか……というよりも、焰薙はいま俊の手に握られている。屍人に襲われた時の用心に持ってきたのだ。焰薙が二本作られたという話は聞いていない。恐らく少年が持っているものは偽物だろうが、普段は神代家の宝物庫に収められているこの焰薙を、どうやって複製したのだろうか？

「——おい、貴様は何者だ。その刀はどこで手に入れた」

俊は少年に向かって言ったが、少年は俊の声など聞こえていないように、ただ、集落内の屍人を見つめている。

そして。

「——お前らみたいなのがいる限り、俺は何度でも現れる」

少年が焰薙を構える。

その瞬間、少年の持つ焰薙の刀身から、青い炎のようなものが立ちのぼった。

☆

比沙子が地下牢から解放されたのは、それから五年後のことだ。日本が戦争に負け、二年ほど経った頃である。

解放された比沙子は、村の者から俊の企みの顛末を聞いた。俊は抜の住人三十三名の屍人化に成功したそうだ。しかし、直後に理尾や丹が発生し、謎の少年が現れた。少年は手にした焰薙で屍人を殲滅し、どこかへ去っていったという。これが原因で俊の屍人兵計画は大幅に遅れた。また、戦況の悪化により研究自体が打ち切られ、日本軍は村から撤退したそうだ。

屍人を殲滅した少年が何者であったのか、どこから現れどこへ消えたのか、比沙子には判らない。調べるつもりはない。この村では比沙子ですら判らないことは数多い。調べるだけ時間の無駄だろう。それよりも。

比沙子が解放されたということは、儀式が近いことを意味している。

今はそちらに集中しなければならないのだから。

花嫁のピアノ

神代家の次女は、生まれながらにして神の花嫁となることが定められている。その存在は極秘とされ、戸籍にさえ記されることはない。生まれてすぐ、屋敷の最も奥まった場所にある座敷牢に入れられ、神の花嫁となる日——聖婚の儀式まで、そこで暮らすこととなる。会うことができるのは、神代の一族と、花嫁の身の回りの世話をする数人の女中、そして、眞魚教の求導師・求導女、宮田医院の院長など、村の有力者に限られていた。そのような境遇だから、当然、心を許せる友人はできない。会いに来るのは大人ばかりだ。唯一の同年代である姉も、滅多なことでは会いに来ない。花嫁になる時期が近づくほど、妹は姉に憎しみを抱くようになるからだ。

そんな花嫁の心を癒すため、いつの頃からか、花嫁には動物を飼わせることが多くなっていた。犬や猫はもちろん、ウサギやブタ、小鳥、座敷牢にはちよつとした日本庭園もあるため、池で鯉や亀を飼うこともできる。花嫁は、望めば大抵の動物を飼うことができた（無論、危険の無い範囲に限られる。かつて熊を飼いたいと言った花嫁がいたそうだが、さすがにそれは許されなかったらしい）。花嫁は、唯一の友と言える動物と共に、決して長くはない時間を牢の中で過ごす。

だが、その代の神の花嫁・美夜子^{みやこ}は、動物を飼うことを拒んだ。動物が苦手というわけではない。子犬や子猫など、美夜子が喜びそうな愛くるしい動物を連れていくと、嬉しそうに抱きしめ、一緒に遊ぶ。だが、「飼いたい?」と訊くと、首を横に振る。他の動物でも同じだ。どんな動物が飼いたいか訊いても答えない。何も飼いたくないという。その理由を訊くと、美夜子は屈託のない笑みを浮かべ。

「動物をこの狭い牢の中に閉じ込めるのはかわいそう」

そう答えるのだった。

だが、その笑顔の中に、微妙な寂しさが混じっているのは、誰の目にも明らかだった。

動物の代わりなのか、美夜子は、別の物を望んだ。

ピアノを弾いてみたい、という。本を読んで興味を持ったらしい。花嫁の生涯は極めて短い。座敷牢内では許可されるが、望みは可能な限り叶えてあげるのが慣例だ。当主が許可をしたので、数日後、決して広くはない座敷牢に、大きなグランドピアノが運び込まれた。ピアノどころか音楽の知識などかけらも無い当主が、金に物を言わせてとにかく一番良いものを、と、入手したのだ。美夜子はまだ七歳。小さな身体には有り余る大きさだったが、喜んでピアノを弾きはじめた。最初はただやみくもに鍵盤を叩くだけで、演奏と呼べるようなものではない。だが、世話をする女中の中にピアノの知識のある者がいたので、その者が指導すると、すぐに簡単な曲を弾きこなすようになった。やがて、もつと難しい曲を弾きたがるようになる。少し難易度の高い曲を教えても、すぐに覚え、また別の曲を望む。それを繰り返し、十歳の頃には女中の手には余るようになった。本格的に指導すれば、世界的な演奏者になる可能性もある。だが、専用の講師を雇うのはさすがに許されなかった。もちろん、どんなに才能があろうと牢の外に出ることは許されない。それ以降、美夜子は独学でピアノを弾き続けた。神の花嫁になる頃には、誰もが聴き惚れる腕になっていた。

「ピアノは、楽譜を通じて作曲者と会話することなの」

そう、美夜子は言う。

作曲者がこの曲で伝えたかったことは何か、それぞれの楽章・パートに込めた思いは何か、それを知るために、鍵盤を通して語りかける。弾き続けることで、やがて答えが返ってくる。

その繰り返しを、何年も続けてきた。数えきれないほどの曲を弾いた。ピアノを与えられた日から、毎日、欠かすことなく。

「——だから、あたしはこの部屋に一人だけど、たくさんの人と会話しているの」

そう言っつて、美夜子はまた、微妙な寂しさを含んだ笑みを浮かべる。それをごまかすためか、必ず最後に「本に書いてあったことの受け売

りなんだけどね」と言つて、おどけて舌を出すのだった。

その日、眞魚教の求導女・八尾比沙子は、久しぶりに美夜子と会うことが許された。座敷牢のある区画へ行くと、ピアノの音色が聞こえてきた。激しく駆け巡るような伴奏と振幅の大きい旋律だ。鍵が開けられ、比沙子が中に入つても、美夜子は気付かずピアノを弾き続ける。比沙子は声を掛けず、そのまま曲に耳を傾けた。比沙子はピアノの演奏に関しては素人同然だが、教会でパイプオルガンを弾いているため、楽曲に関する知識はそれなりに持つていた。この曲は、フレデリック・ショパンの『革命のエチュード』だ。祖国の革命が失敗した時の感情を込めた曲だと言われている。美夜子の奏でる旋律にも、悲しみや怒り、憤りといった感情が含まれている。心が揺さぶられる演奏だが、比沙子は小さくため息をついた。求導女という立場から、比沙子は年に数回は美夜子と会うことができる。小さなころは、心が安らぐ穏やかな曲、あるいは、楽しくなるような陽気な曲を好んで弾いていたが、年々、悲しみや怒りを表現した曲を弾くことが多くなっている。激しい感情を表す曲は難易度が高くなる傾向にあるため必然とも言えるが、それだけではない、美夜子の内に秘めた感情が現れているようにも思える。演奏している時の美夜子の顔も、楽しそうには見えない、曲と同じく、悲しみや怒りがにじんんでいる。

美夜子はもうすぐ十五歳になる。御印は、まだ下りない。歴代の神の花嫁の中でもかなり遅い方だ。だが、その日は必ず訪れる。避けることはできない。その日が近づくにつれ、美夜子の弾く曲は、より悲しみや怒りが増していく。

楽曲が後半になると、作曲者の心の乱れを表すかのように、演奏はより複雑になる。そして最後に、それまでの全ての感情をひとつにしてぶつけたような力強い響きで、美夜子は曲を弾き終えた。

比沙子は少し迷つたが、小さく拍手をした。それで、ようやく美夜子は比沙子がいることに気が付いた。

「あれ、比沙子？ 会いに来てくれたんだ。嬉しい」

そう言つて、笑顔を浮かべる。

「本当に上手になったわね。一流の演奏家みたいよ」

「そう？ なら良かった。あたし、他の人の演奏をあんまり聴いたことがないから、自分が上手なのか、判らないんだよね」

笑顔のまま言つた。皮肉、というわけではない。ただ純粹に思つたことを言つただけだ。実際、牢から出ることができない美夜子は、他の者の演奏を聴くことは無い。美夜子にピアノの基礎を教えた女中も、今は神代家を去つた。比沙子はピアノを弾けない。ピアノとオルガンは、全く異なる楽器だ。美夜子に会える者でピアノの知識がある者はいない。だから、美夜子のピアノが本当に上手なのか、正確なところは判らない。

だが、誰もがその音色に聴き惚れ、心を動かされるのは確かだ。技術的なことは判らないが、少なくとも、人を引き付ける魅力があるのは間違いない。比沙子の言葉に、お世辞や嘘は無い。だから美夜子も、素直に受け入れてくれる。

褒められて笑う美夜子の顔が、不意に曇つた。

「こうやってピアノを弾けるのも、あとちよつとなんだね」

その顔に、はつきりとした悲しみが浮かぶ。

「……花嫁になるのが、怖い？」

美夜子は首を振つた。「怖くはない……:と:思う。:そう:しない:とい:けない:のは、:判:つ:て:る:つ:も:り。:で:も:……:」

美夜子は口をつぐんだ。

納得はできない——そう言いたいのかもしれない。

比沙子は、千年以上前に犯した罪で不死の呪いを受けた。比沙子の直系の子孫である神代の娘もまた、死ぬことはできない。常世に来ることを神に拒まれているのだ。受け入れてもらうには、神の花嫁になるしかない。花嫁の儀式は、不死の呪いを受けた神代の娘が唯一死を迎える機会なのである。同時に神の怒りを鎮め、村を災害から救うためでもあつた。

代々、神代の次女にはこの話をしてる。物心ついた頃から、繰り返

返し、何度も。何も説明せず監禁し、時が来たら有無を言わせず奉げているわけでは、決してない。

だが、この話をして、納得できない者がほとんどだ。花嫁になるのを拒んだあげく、逃げ出す者も少なくない。花嫁にならなければその先に待つのは永遠の苦しみだけだが、それが判つていても、逃げ出さずにはいられないのだ。

その点で、美夜子はかなり冷静だと言えた。神に奉げられる時期が近付くと、通常、花嫁は全てのを憎むようになる。花嫁を監禁した家族、自分たちの安息のために生贄を奉げようとする村人、そんな残酷な運命を背負わせた神……。無論、眞魚教の求導師・求導女も例外ではない。比沙子も、これまで数えきれないほどの神の花嫁から恨まれ、憎しみの言葉をぶつけられた。だが、美夜子はそんなことはない。こうして比沙子とも親しくお喋りをしている。求導師や宮田医院院長、父や姉との関係も、決して悪くない。このような神の花嫁は、比沙子にとっても初めてだった。

「誰かを憎んだつてしょうがないつてことは、判つてるの。花嫁になるのを拒んだつて、いつかあたしは、みんなの前からいなくなる。だったら、みんなに笑顔で見送られたいし、みんなにも、笑顔のあたりを覚えておいてほしいの」

迷いの無い目で言う美夜子。言葉だけではなく、心からそう思っている目だ。死を受け入れるには、美夜子はあまりにも若い。だが、千年以上の時を生きてきた比沙子だからこそ、人の幸せは決して生の長さだけで決まらないことを知っている。美夜子にはピアノがあった。決して長くはない人生だが、その全てをピアノに奉げてきた。人生でやるべきことを見つけ、迷いなくそのすべてを奉げることが出来る人は、そう多くない。比沙子でさえ、千年以上続けてきた自分の行為に、いまだ迷いがある。美夜子は、比沙子ですら叶えられなかったことを、この狭い座敷牢とわずか十数年の生の中で叶えたのかもしれない。

だからこそ——その笑顔に混じる微妙な悲しみを取り除きたかった。

その比沙子の思いに気付いたように、美夜子は、「ただね……」と言って、続けた。「一度でいいから、みんなの前でピアノを弾いてみたかったなって、思うの」

美夜子の笑顔が、今度ははつきりと陰る。

そして、続けた。

「ピアノは、あたしの生きた証みたいなものだから」

美夜子は、愛する人の胸に顔をうずめるかのように、鍵盤の上に顔を伏した。いくつかの音階が混じった音が牢内に響く。それはどこか、美夜子の悲しみに寄り添うような響きだった。

美夜子に御印が降りたのは、それから数日後のことだった。

報せが届くと、教会は、三日間をかけて眞魚岩の中州に祭壇を組み、御神体を運ぶ。通常、四日目の夜に聖婚の儀式を行うようになってくる。

だが、このときの儀式は、一日遅らせることになった。

比沙子が、儀式の前に、美夜子にピアノを弾かせてほしい、と、当主にお願したのだ。

村の長い歴史の中でも、そのようなことを行つた例は無い。誰もが認められるはずがないと思っていた。しかし、当主はあっさりとこれを認めた。比沙子にとっても意外だった。特別なことはしていない。その気になれば比沙子は当主でさえ従わせることができるのだが、そのような特殊な力を使うこともなかった。

美夜子の部屋のグランドピアノが運び出され、眞魚岩の中州まで運ばれた。

聖婚の儀の夜。

眞魚岩の前に、村人たちが二列になって並び、神の花嫁となる美夜

子を迎える。花嫁の衣装である黒のドレスを着た美夜子は、決意に満ちた顔で歩く。眞魚岩の側にあるピアノへ向かって。

そして、ピアノのそばに立った美夜子は、村人を振り返り、深く頭を下げた。

拍手を贈る村人。盛大な拍手、とは言えない。秘祭とも呼ばれるこの聖婚の儀式は、大半の村の者が、その詳細について知らない。式に集まった村人は二十人程度だ。

それでも、美夜子は笑顔で拍手に応え、そして、静かに椅子に座った。

時間をかけ、ゆつくりと準備を整え、やがて鍵盤の上に手を置いた。目を閉じた。

この演奏が終われば、美夜子は神の元へ旅立つ。彼女の生は、終わる。

それでも。

美夜子は、わずかなためらいも見せず、弾きはじめた。

美夜子がこの日の演奏に選んだ曲は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの『悲愴』。難聴者として知られるベートーヴェンが、耳に異常を感じ始めた頃作った曲である。ベートーヴェンは、自分の楽曲に自分で表題を付けることはほとんど無かったというが、『悲愴』は、彼自身が表題を付けた数少ない楽曲のひとつだ。彼がそこにどのような思いを込めたのかは判っていないが、耳が聞こえなくなる自分の人生を表したのではないか、との見方が強い。

『悲愴』は、二つの楽章からなり、それぞれが異なる曲調となっている。第一楽章は、重々しく、ゆつくりとした序奏から始まる。その表題通り、まさに悲壮感が漂う曲調だ。だが、序奏が終わると曲調は一変し、駆け抜けるような速さになる。焦りや切迫感を感じさせる曲調だ。曲が進むごとにその激しさを増していくが、またそれが一変し、序奏のような重々しい曲調に戻る。だがそれも、また激しい曲調へと変わる。それをもう一度繰り返し、第一楽章は終わる。

わずかな間において、美夜子は次の演奏へ移る。

第二楽章は、第一楽章から一転して、穏やかに慰めるような曲調に

なる。第一楽章のような緩急の変化は無い。だが、穏やかな中にもどこかもの悲しさを感じる部分もある。絶望的な状況の中に癒しを見つけた、そのような曲だ。

第三楽章でも、また曲の雰囲気は変わる。第一楽章のような悲壮感や、第二楽章の癒しとも違う、全体的に悲しみが漂う。だが、その中にも、どこか強い決意や意志を思わせる旋律だ。

三つの楽章からなる『悲愴』。美夜子は、一心に弾き続ける。

——ピアノは、楽譜を通じて作曲者と会話することなのか。

美夜子が常に言っていたことを思い出す。あの狭い牢の中で、幾度となくこの曲を弾いてきただろう。その中で、美夜子はどのような話をしたのだろうか。どのような思いを抱いたのだろうか。

美夜子はこの曲に、自分の短すぎる人生を重ねている——のだろうか。

美夜子の奏でる音色が、響き渡る。

川の真ん中にある中州だ。専用の音楽館のように、音響効果など全く計算されていない。

だからこそ、美夜子の奏でる音色を遮るものは、何も無い。

美夜子のピアノは、中州を越え、森を越え、村中へ届くはずだ。

ピアノの演目としては決して長くはない、時間にしてわずか十分程度の演奏が、終わった。

信者たちの拍手が贈られる。

誰もが、涙を浮かべて、美夜子の演奏を讃える。

美夜子はピアノの前に立ち、深く——深く、頭を下げた。

そして、顔を上げ、笑みを浮かべた。

悲しみの無い、心の底からの笑顔。

生を全うした——とは言えない。もっと多くの曲を弾きたいはずだ。もっと多くの人に聴いてほしいはずだ。心残りには、数えきれないほどあるだろう。

だが、彼女が、十五年の生を全力で生きたことは、間違いない。
だからこそその笑顔だった。

美夜子は、神の元へ旅立った。

村人の祝福に送られて。

最期まで笑顔のまま。

何度も、何度も、「ありがとう」と、言いながら。

旅立つ直前、美夜子は比沙子に向かって、ひとときわ大きな声で、ひととき美しい笑顔で、「本当に、ありがとう!!」と、叫んだ。

それは、彼女の長すぎる生の中でも、たった一度だけの、花嫁からの感謝の言葉だった。

美夜子が旅立った後も、村人の拍手は止むことなく、いつまでも続いた。

永遠の生

刈割の教会近くの墓地には多くの人が集まっていた。和装・洋装の違いはあるが、皆、黒の喪服姿である。先日、折部地区に住む信者の老人が亡くなった。今日はその葬儀だった。マナ字架を浮き彫りにした墓石の側に棺が置かれ、その中で、白装束の老人が安らかに眠っている。長年村役場の農業委員会に努めていた男だった。農業が盛んなこの村では多くの村人がお世話になっており、それゆえ、最期の別れに訪れる人は多い。列席者は一人ずつ棺に白い花を手向けていく。老人の周りはすでに多くの花で埋め尽くされているが、それでも手向ける人の列はまだ続く。

眞魚教の求導女・八尾比沙子は、求導師・牧野慶と二人で棺の側に立ち、信者たちの様子を見守っていた。慶は、今日の葬儀を取り仕切ることになっている。求導師になって二年、今年十五歳になる慶。二年前は不釣り合いな大きさだった黒の法服も、身長が比沙子を超えた辺りからかなり身体に馴染んできた。もともと、顔には歳相応の幼さが残るため、まだまだ頼りなさはぬぐえない。それでも、求導師の仕事はそれなりに行えるようになっていた。今日もこの後、列席者の前で法説を行う予定だ。

ふと慶を見ると、なにやら浮かない顔をしている。法説の前で緊張している、というわけではなさそうだった。それは、不安というよりも、納得がいかないことがある、あるいは、なにか疑問を持っている時の顔だ。

「どうしたの、慶？ 何か問題でもあった？」比沙子は、信者たちに聞こえないよう、小さな声で訊いた。

「いえ、問題というほどのことではないのですが……」慶は少しためらったように言葉を濁したが、やがて、「信者たちは、皆、なぜ笑顔なのでしょう？ 別れが、悲しくないのでしょうか？」と言って、視線を列席者へ戻した。

比沙子も列席者を見る。老人へ花を手向ける人々は、みな笑顔を浮かべている。花を手向け終え、生前の老人について話す人たちも、一

様に笑顔だ。老人と長年連れ添った妻とその息子夫婦、そして、二人の孫も同じだ。誰一人、悲しんではないように見える。昨日の通夜から、ずっと同じような雰囲気だった。それは葬儀というよりも、何かのお祝いごとのようである。

比沙子は慶に視線を戻した。慶は恐らく、父の葬儀のことを思い出しているのだろう。

慶の父——先代求導師・牧野怜治が亡くなったのは二年前だ。今日とは違い、悲しみに包まれた葬儀だった。怜治は十五年前の神に花嫁を奉げる儀式に失敗し、その責任を取る形で自ら命を絶つたのだ。それは、慶が物心ついて初めて経験した身近な人の死だった。慶にとってはあまりにも突然の別れであり、その悲しみは大きかったことだろう。そんな慶だから、列席者が笑顔で過ごす今日のような葬儀に戸惑うのも無理はないのかもしれない。

比沙子は「そうね——」と言って、また列席者に視線を移す。「みんな、悲しさを寂しさという感情が無いわけじゃないんだけど、それ以上に、お爺さんを笑顔で見送ってあげたいという気持ちが強いのよ」事故や災害が多発しているこの村では、突然の別れによる深い悲しみに包まれた葬儀が多い。それに比べ、老人は享年八十四歳。天寿を全うしたと言っている。この村では、生を全うした人を祝福し、笑顔で送り出す習慣が古くからあるのだ。死は悲しむべきものではない——そのことを、みな心の奥底で知っているのかもしれない。

「……そういうものでしょうか？」

まだ納得のいかない表情の慶に、比沙子はさらに言う。「それに、みんなが笑顔でいる理由は、今日の法説の中にもあるでしょ？」

「法説……ですか……？」

きよとんとする慶。今日話す法説の内容は昨日一晩で覚えたはずだが、いまいちピンと来ていない様子だ。

比沙子は目を細めた。「慶、あなた、また法説の話を暗記しただけでしょう？」

「あ……いえ……はい……」慶は顔を伏せた。

「……まったく、あなたって子は」

ため息をつく比沙子。小さなころから頭が良く、器用だった慶。本などを読み、暗記するなどはお手のものだった。しかし、内容をあまり理解せず、ただ文字だけを覚えて復唱しているだけなのが問題だった。

「いつも言ってるでしょう？ 法説は、ただ文章を覚えるだけではダメよ。それじゃ、上辺だけの言葉になってしまふ。内容もすっかりと理解しておかないと、みんなの心には響かないわ」
「……はい。判りました」

軽く叱っただけだが、慶はこの世の終わりを迎えたかのように大きく肩を落とした。そんな姿に、比沙子はもう一度ため息をつく。身体は大きくなつたが、やはりまだまだ子供だ。一人前の求導師には程遠い。もちろん十五歳という年齢を考えればこんなものかもしれないが、なぜだろう？ 慶はこれから何年たつてもこのまま変わらないような気がする。

比沙子が慶の将来を心配している間も、列席者は老人へ花を手向け続ける。その中に、美羽ばあさんがいるのを見つけた。棺の中に花を手向け、手を組んで祈りを奉げる。それが終わったのを見て、比沙子は声をかけた。

「やはり、お婆さんも来られてたのですね」

「はい。あの人には、枇杷びわの栽培で大変お世話になりましたから」

美羽ばあさんは、昔を懐かしむように笑みを深めた。

美羽ばあさんは若い頃から村で枇杷を栽培している。ばあさんの作る枇杷は市場では高値が付くことで知られており、村の名産品のひとつであった。しかし、最初から全てが順調だったわけではない。戦後の男尊女卑の考えが残る時代に女手一つで農業を始めるのには様々な苦勞があったことだろう。亡くなった老人は、農業委員会として美羽の枇杷作りにも尽力した。枇杷栽培を始めたばかりの美羽に農業の知識と技術を教え、収穫した枇杷を村の内外問わず市場へ売り出したのだ。

いくつか思い出話をする美羽ばあさんと比沙子。美羽ばあさんは教会近くの家に生まれたため、比沙子とは深い親交があった。それは

近所づきあいという枠を超えた特殊な関係だ。誕生時の祝福式は比沙子が行ったし、幼い頃は妹のように可愛がり、戦前は友人として過ごした。戦時中、日本軍が道路拡張のため村の枇杷の樹を伐採すると決めた時、二人で抗議したこともある。その抗議は届かなかつたが、美羽はそれをきっかけに枇杷農家を始めたのだ。

美羽の人生を、比沙子はずっとそばで見ている。美羽の身体は、ずいぶん小さくなったように思える。もうすぐ七十歳。農業を続けるのは体力的にも厳しいだろう。

そして、彼女との別れもそう遠い話ではない、とも、思う。

最後の列席者が花を手向け終えた。いよいよ法説の時間だ。信者の前に立つ慶。葬儀の法説は、まず故人の生い立ちを語ることから始まる。老人は日露戦争が終結した翌年、折部地区の米農家の二男として生まれた。物心ついた頃から両親の仕事を手伝い、農業のことを学んだ。家業は長男が継いだので、老人は中学卒業と同時に役場に勤め、やがて農業委員会への配属となった。米の栽培はもちろん、近年村の名産品となったイチゴやソバの栽培をすすめる、同時に、農作物を村外へ出荷する仕事にも力を入れた。定年後も各農家を回っては様々な相談に乗り、村中の農家から慕われる存在だった。

老人の人生を語る慶。事前に暗記したことを事務的に話しているだけなのだが、それでも信者たちは熱心に耳を傾けている。それだけ信仰心が篤いということだ。今はこれでもいいかもしれないが、こんなことを続けていけばいずれ信者の心は離れていくかもしれない。今後は、この辺りを改善するよう指導しなければ……そんなことも考えつつ、比沙子も話を聞きながら、在りし日の老人をしのんだ。

老人の生涯を語り終えた慶は、最後を締めくくる話をする。

「――彼の魂は神の元へ召され、肉体は土へと帰ります。しかし、彼がこの村で生きたことは、我々の記憶に残ります。時々でいいので、彼のことを思い出し、彼の人生を誰かと話してください。誰かの記憶に残っている限り、彼はこの村で生き続けます」

そして胸の前で手を組み、祈りを奉げる。信者たちもそれにならう。比沙子も、老人の死後の世界での幸せを祈った。

いま慶がした話は、葬儀の際に求導師がする定番の話である。眞魚教の求導女として、多くの通夜や葬儀に参列し、信者たちを見送ってきた比沙子。これまで何度も聞いている話だ。先代の求導師も、先代の求導師も、さらにその前の求導師も、皆、それぞれの言葉で信者たちに伝えてきた。

——誰かの記憶に残っている限り、その者はこの村で生き続ける。この話を聞きたびに、比沙子は思う。

誰の記憶にも残らないあたしは、はたして生きていけると言えるのだろうか、と。

一三〇〇年前に犯した罪で、決して歳を取らず、不死の身となった比沙子。村人は比沙子が歳を取らないことに気付かない。神がそう定めているから。

それは、誰の記憶にも残らないことを意味している。

例えば、誰かと大事な話をしたとする。それがどんなに重要な話であったとしても、時が経てばその人の記憶から消える。あるいは、話の内容は覚えていても、話をした相手が比沙子だったとは気付かない。

例えば、幼い子供と仲良くなったとする。その子は歳を取るが、比沙子は歳を取らない。いずれ比沙子の見た目と同年代になると、子供の頃の比沙子との記憶は無くなる。同年代として友情を深めても、老いるとまた関係が変わり、同年代の頃の記憶は無くなる。そして。

誰もが皆、この世界から去っていく。比沙子を残して。

結果、比沙子は、誰の記憶にも残らない。

今日、この場にいる者たちも、いずれ比沙子のことを忘れ、この世界から去っていくだろう。老人の家族も、花を手向けた信者たちも、立派な求導師にするために育ててきた慶も、ともに人生を歩んだ美羽さえも。

誰かの記憶から消えるたびに、比沙子の孤独は深くなる。比沙子の一三〇〇年の人生は、そうして続いてきた。数えきれない村人と別れ、数えきれない村人に忘れられた。生きている実感は、もう無い。そして——これからも、それが続く。

生きている実感も無いまま生きていかなければならない……それは、絶望と呼ぶしかなかった。

老人との別れが終わった。棺は閉ざされ、地中へと埋められる。

老人は神の元へと旅立ち、現世に残った人々は、それぞれの生活へ戻っていった。

☆

それから、数年の時が流れた。

一日の務めを終え、教会を閉めようと思っていた頃だった。信者が慌てた様子でやって来て、美羽ばあさんが病院へ運ばれたことを伝えた。

美羽ばあさんは、あの葬儀の翌年、農業をやめた。農地は売却し、そのお金と年金で老後の生活を送っていたが、二年前、刈割と下粗戸を繋ぐ県道の脇に枇杷の種を埋める活動を始めた。その作業中に倒れたとのことだった。

比沙子はすぐに病院へと向かった。ばあさんは身寄りのない独り暮らしだが、近所の人や農業仲間が何人も駆けつけていた。

ベッドの上で眠る美羽ばあさん。呼びかけても反応は無いが、胸が

わずかに上下しており、かろうじて現世に踏みとどまっていることが判る。もちろん、それも時間の問題だろう。「恐らく今夜中に息を引き取るでしょう」と、院長は言った。そして、「——どうか、話しかけてあげてください。意識はなくなるとも、思いは届きますから」と、続けた。

比沙子は、「美羽ちゃん」と、声をかけた。お婆さん、とは呼ばなかった。今はどうしても、彼女の名を呼びたかった。美羽の手を取る。皺だらけで、かさかさに渴き、荒れた手——長年枇杷栽培を続けた勲章のような美しい手だ。比沙子は美羽の手を両手で包み込むように握りしめた。

「美羽ちゃん……頑張ったね……枇杷の栽培を始めて……農業をやめた後も、枇杷の種を植えて……本当に、頑張ったね……」

話しかける。ずっとそばで見続けていた彼女の人生を讃える。思いは届く——そう信じて。

すると、美羽の手が、わずかに握り返してきた。

聞こえている——比沙子は、さらに呼びかけた。「美羽ちゃん、美羽ちゃん」と、何度も。

美羽が、ゆつくりと目を開けた。比沙子を見た。そして。

「比沙子……お姉ちゃん……」

かすれるような声だったが、はつきりと、そう言った。

比沙子以外の者は、怪訝そうな表情になった。美羽の孫ほどの年齢と言つていい比沙子のことを、なぜお姉ちゃんと呼ぶのか、誰にも判らなかつた。

だが、比沙子は他の者を気にすることなく、彼女に応える。「美羽ちゃん、ここよ、あたしはここにいるわ」

美羽は、さらに言った。「比沙ちゃん……この道の枇杷の樹を伐るなんて……絶対に……許せないわ……いくらお国のためでも……神代家の意向でも……絶対に……阻止してみせるわ……」

「——恐らく、意識が混濁しているのでしょう」比沙子の背後から院長が言った。「求導女様、あまり気にされない方がよろしいかと」

だが、比沙子は院長の言うことなど無視して、美羽の声に応える。「ええ。美羽ちゃんの言う通りよ。あたしも協力する」

——残っている。

美羽の記憶の中に、あたしは残っている——そう、比沙子は確信した。決して、忘れられたわけではない。美羽の中で、あたしはちゃんと生きているんだ。

比沙子は、生涯を共にした親友と、話す。

終戦後のことを話す。枇杷農家を始めるため、村に根深く残る男尊女卑の意識を変えた。枇杷栽培のことを話す。市場で高値がつくようになったが、特別なことはしていない。ただ、日本軍に伐り倒された枇杷の味を再現したかっただけだ。農業引退後のことを話す。美羽の枇杷は高級品となったが、その分、手軽に食べられる物ではなくなった。戦前のように、散歩の途中や学校や仕事場などへの行き帰りに気軽に食べてもらえるよう、県道わきに枇杷の種を植え始めた。そして、いま、美羽はその生涯を終えようとしている。比沙子の前から、去ろうとしている。

美羽は、最期の力で比沙子の手を強く握り。

「……比沙ちゃん……先に神様のところへ行つて、待つてるね……」
最期の言葉を告げた。

言葉に詰まった。不死の呪いを受けた比沙子は、神の元へはいけない。美羽には、もう会えない。

美羽が目を閉じた。息遣いが遠くなった。

比沙子は。

「——ええ。いつか必ず、あたしも美羽ちゃんのところへ行くから、待っててね」

美羽の頬が、わずかに緩んだ。笑ったように、見えた。

握りしめた手がふっと軽くなり、彼女の魂が現世から去ったことを、比沙子は悟った。

二日後。

刈割の墓地にて、美羽の葬儀が行われる。彼女との最期の別れのため、多くの村人が集まっていた。花を手向け、そして、法説が始まる。今日の法説は比沙子が行うことになっていた。列席者の前に立つ比沙子。みな、驚きと戸惑いの表情になる。普段比沙子が法説を行うことはない。以前は暗記したことを事務的に話していただけの慶も、この数年で大きく成長し、自分の言葉できちんと話せるようになっていく。比沙子が最後に法説をしたのはいつだったか……もう、自分自身も覚えていない。それくらい、遠い過去だ。

……いや。

これは、法説ではない。

法説とは神の教えを説く時間。今から話すことは、神の教えに反することだ。構わない。どうしても、伝えておかなければならないから。

比沙子は、一度大きく息をすると、ゆっくりと話し始めた。

「——楠美羽は、第一次世界大戦が終わって三年後、教会近くに住む農家の家に生まれました。いつかその羽をはばたかせ、大空を舞うような人生を送ってほしいとの願いから、美羽という名を授かりました。幼い頃は、近所のお姉さんについて回る子でした。戦時中は、親友と一緒に当時の神代家と軍の施策に反対するといった豪胆な面もありました。彼女が枇杷農家を始めたのは戦後しばらく経つてのことです。今でこそ彼女の栽培する枇杷は市場で高値がつきますが、最初からすべてが順調だったわけではありません。当時は男尊女卑の考えがまだ根深く残る時代。女性が一人で農家をやることに対して、風当たりも強かったことでしょう。また、丹精込めて育てた枇杷が、地震や台風、土砂災害などですべてダメになったことも、一度や二度では

ありません。それでも彼女は諦めず枇杷を作り続けました。彼女は
その生涯の全てを、枇杷作りに奉げたのです」

美羽の人生を語る比沙子。普段求導師が行う法説よりもかなり詳しい。まるで生まれた時からずっと見守っていたかのような語り方に、信者たちはさらに戸惑う。構わず話し続ける比沙子。村人は、比沙子が不死であることに気付かない。気付いても、すぐに記憶から無くなる。この話も、いつか忘れられてしまいかもしれない。

だが、彼らの記憶の奥底には、何かが残る。美羽が、別れの間際に比沙子を思い出したように。

そう信じて、話し続ける。

「そして、高齢で農業を引退した後は、皆さんもご存知の通り、刈割と下粗戸を繋ぐ県道の脇に、枇杷の種を植える活動を始めました。今、彼女が植えた枇杷の種は芽を出し、葉をつけました。実がなるのも、そう遠くないでしょう。彼女がそれを見られないことだけが残念です」

比沙子は、美羽の人生を語り終えた。

大きく息をつき、信者たちを見回し、最後の言葉を送る。

「私は、彼女の人生から大切なことを学びました。どんなに絶望していても希望はある。生きていると思える瞬間がある。その瞬間を大切にしよう、と」

一三〇〇年の人生で、数えきれないほどの村人と別れた比沙子。数えきれないほどの村人の記憶が消えた。生きている実感は無い——そう思っていた。

しかし、美羽のように、心の奥底にでも、比沙子の記憶が残っていたとしたならば。

比沙子は、生きていける。

これからも、ほんのわずかであっても、みんなの記憶に残り続けるのならば——生きていけるのだ。

そして。

生きていけば、諦めなければ——この絶望を打ち破る日が、必ず来る。

たとえそれが、千年、二千年、三千年後であったとしても、その日が来ることを、信じられる。

一人ではない——そう思うことができるから。

美羽は、そのことを思い出させてくれたのだ。

「あなたたちの未来は、必ずしも希望ばかりではないかもしれませんが、悲しいこと、辛いこと、その現実を突きつけられる時が、いつか来るでしょう。でも、決してあきらめないでください。希望は、必ずあります」

比沙子は、最後にそう締めくくると、胸の前で手を組み、祈りを奉げた。

神への祈りではない。

大切なことを思い出させてくれた、友への感謝の祈りだった。

最初は戸惑っていた信者たちも、いつの間にか比沙子の話に引き込まれ、そして、比沙子と共に祈りを奉げた。

比沙子の話は終わった。美羽の棺に、土がかけられる。

——ありがとう、美羽ちゃん。私は、絶対にあきらめないから。

比沙子は強い決意と共に、生涯の友に別れを告げた。

(『千年の祈り』 終わり)